

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(118)

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 — XXIV

(市来IC～薩摩川内都IC間)

ANCHAGAHARA

安茶ヶ原遺跡

(鹿児島県いちき串木野市)

(第 I 分冊)

2007年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



SK15出土遺物（須恵器集積）と「日置厨」銘墨書須恵器



柱穴群と溝状遺構

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道川内道路（市来IC～薩摩川内都IC間）建設に伴って、平成10年度から13年度にかけて実施した、いちき串木野市（旧日置郡市来町）に所在する安茶ヶ原遺跡の発掘調査の記録です。

安茶ヶ原遺跡は、いちき串木野市川上安茶中ほかの八房川に隣接した台地上に位置し、近くには、市来式土器の標識遺跡として有名な川上（市来）貝塚があります。また古代においては、日置郡と薩摩郡の郡境にあたる場所でもあります。

本遺跡は、旧石器時代から近世にわたる複合遺跡です。特に、8世紀後半頃に比定される「日置厨」と墨書された須恵器の出土や、中世の四面廂建物跡をはじめとする多くの建物群が検出されています。これらの遺構・遺物の存在は、古代から中世の日置郡におけるこの地の重要性を証明するとともに、考古学のみならず文献史的にも貴重な資料を提供しました。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた国土交通省鹿児島国道工事事務所、旧市来町教育委員会、並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

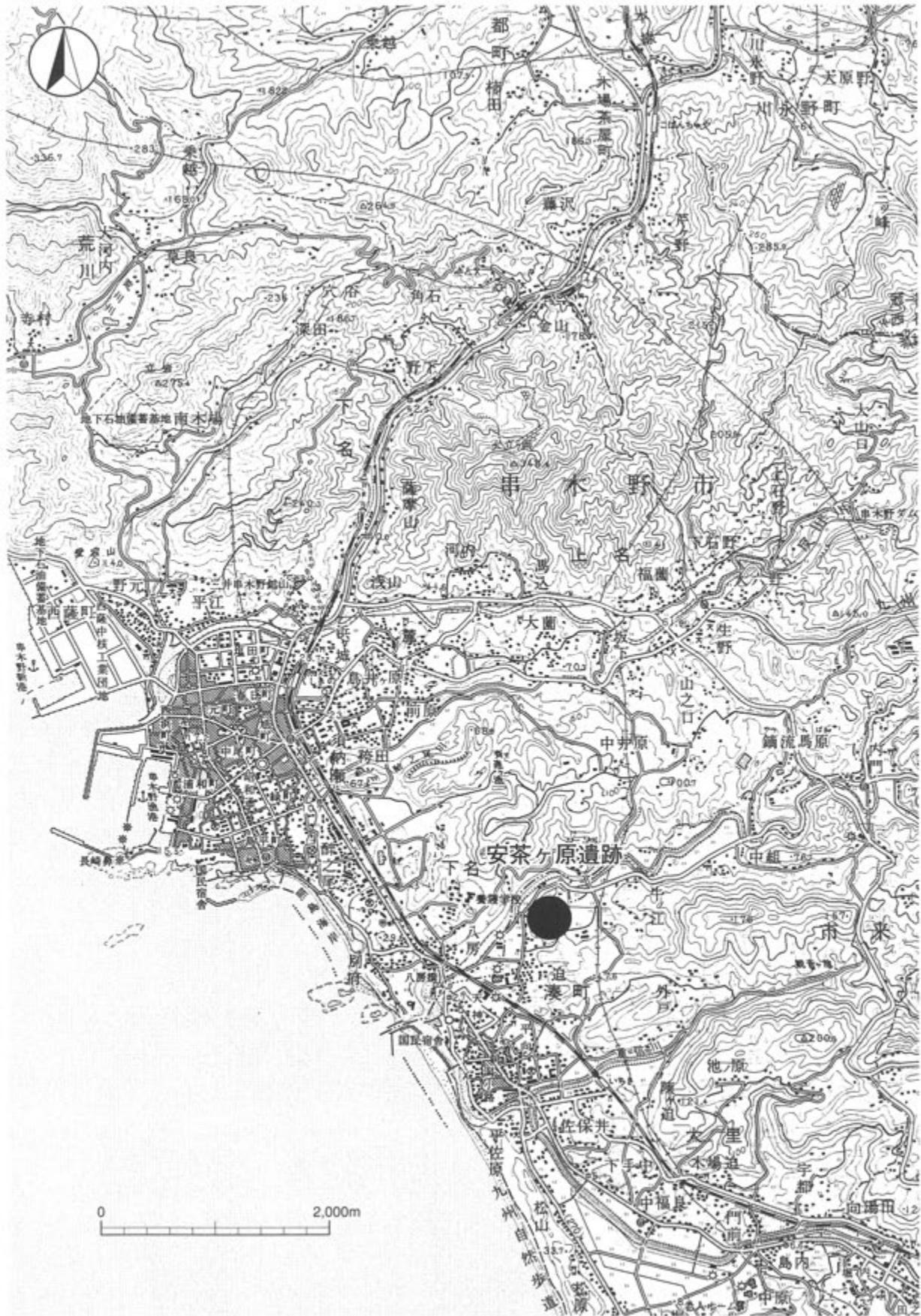
平成19年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 宮 原 景 信

報 告 書 抄 録

ふりがな	あんちゃがはらいせき							
書名	安茶ヶ原遺跡							
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	X X IV							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第118集							
編著者名	平 美典・繁昌正幸・関 明恵							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒 899-4461 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号							
電話番号	TEL 0995-48-5811 ・ FAX 0995-48-5821							
発行年月日	2007年3月31日							
ふりがな	しよざいち	コ ー ド		位 置		調 査	調 査	調 査
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	期 間	面 積	起 因
あんちゃがはら 安茶ヶ原	かごしまけん 鹿児島県 くしきのし いちき串木野市 かわかみあんちゃなか 川上安茶中ほか	463612	28-23	31° 41′ 56″	130° 17′ 56″	確認調査 2000118 本調査 2000118 { 2002129	16,000㎡	南九州西 回り自動 車道川内 道路建設
所収遺跡名	主な時代	主 な 遺 構			主 な 遺 物			
あんちゃがはら 安茶ヶ原	旧石器時代 縄文時代 古墳時代 古代 中世 近世	集石、磨石・敲石集積 腰岳産黒曜石剥片集積 土坑 成川式土器、布留式模倣甕 須恵器廃棄土坑 貝殻廃棄ピット 四面廂付掘立柱建物跡 溝状遺構、古道 土師器埋納遺構 古道			ナイフ形石器、台形石器 志風頭式、加栗山式、中原式、 深浦式、市来式、黒川式 土師甕、須恵器、墨書土器 内黒土器、内赤土器 土師器、須恵器、瓦質土器 貿易陶磁器 薩摩焼、肥前系磁器			
遺跡の概要	安茶ヶ原遺跡からは、旧石器から近世にわたる遺物・遺構が出土している。特に、古代から中世が本遺跡の中心的な時期である。古代では、「日置厨」と墨書された須恵器が出土している。また中世では矩形の溝に囲まれるように四面廂建物跡が検出されている。本遺跡は、古代日置郡と薩摩郡の郡境に立地しており、古代から中世の時期に、この地域において本遺跡が重要な役割を果たしていたことが推測される。							



第1図 安茶ヶ原遺跡位置図

例 言

- 1 本書は、南九州西回り自動車道川内道路（市来IC～薩摩川内都IC間）建設に伴う安茶ヶ原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県いちき串木野市（旧日置郡市来町）川上南安茶ヶ原中ほかに所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、建設省九州地方局鹿児島国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は、平成10年1月18日から平成14年1月29日まで実施し、整理作業・報告書作成は、平成16年度から平成18年度にかけて実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・写真図版の番号は一致する。
- 6 遺構名は記号化し、遺構番号は通し番号とした。各記号の意味は以下の通りである。
SB：掘立柱建物跡，SD：溝状遺構，SF：焼土域・焼土坑，SI：竪穴遺構，SK：土坑，SP：ピット，SR：道跡，SS：集積遺構，SZ：集石，SX：性格不明遺構
- 7 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、建設省九州地方局鹿児島国道事務所が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 9 発掘調査にあたっては、山中敏史氏（奈良文化財研究所遺物調査技術研究室長）、永山修一氏（ラ・サール学園教諭）に現地指導をいただいた。
- 10 発掘調査における図面の作成・写真の撮影は、主として調査担当者が行い、遺構実測の一部を株式会社エーテック・株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託したほか、担当職員の指導のもと臨時職員が行った。空中写真撮影は、有限会社ふじたに委託した。
- 11 遺構実測図のトレースは、平 美典の指導のもと、主として整理作業員が行った。
- 12 周辺地形図・トレンチ配置図等のデジタルトレースは、内村伸光・平が行った。
- 13 遺物の実測は、石丸良輔・木之下悦朗・平の指導のもと、主として整理作業員が行った。
- 14 石器類の実測・トレースは、株式会社埋蔵文化財サポートシステム・大成エンジニアリング株式会社に委託し、監修は石丸・平が行った。
- 15 拓本は、平の指導のもと、整理作業員が行った。
- 16 遺物観察表の作成・データ入力主として木之下・関明恵が行い、平が編集した。
- 17 遺構内から出土した炭化物の樹種同定及び放射性炭素年代測定は株式会社パレオ・ラボに、貝殻・動物歯の放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。埴塼及び赤絵の蛍光X線分析は、森雄二が行った。
- 18 遺物の撮影は吉岡康弘が、遺構空中写真の合成は内村が行った。
- 19 本報告書の執筆は、第Ⅳ章を繁昌正幸が、第Ⅴ章第1節1，第4節1，第5節1，第6節1，付編1-1，付編2-1，第Ⅶ章を繁昌・平が、第Ⅴ章第5節2，第6節2を関が、その他を平が執筆した。編集は平が行った。
- 20 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、安茶ヶ原遺跡の遺物注記の略号はANである。

目 次

[第1分冊]

- 巻頭カラー
- 序 文
- 報告書抄録
- 例 言
- 目 次

[第1分冊]

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 路線内遺跡の概要	1
第Ⅱ章 発掘調査の経過	5
第1節 調査の経過	5
第2節 調査の組織	5
第3節 調査の概要	8
第4節 発掘調査の経過	12
第5節 整理・報告書作成作業の概要	16
第Ⅲ章 遺跡の位置と環境	17
第1節 遺跡の位置と地理的環境	17
第2節 歴史的環境	21
第Ⅳ章 発掘調査の概要	25
第1節 発掘調査の方法	25
第2節 遺跡の層序	30
第Ⅴ章 発掘調査の成果	35
第1節 縄文時代	35
1. 縄文時代の検出遺構	35
2. 縄文時代の出土遺物	51
(1) 縄文時代の土器	51
(2) 縄文時代の石器	105
第2節 弥生時代	171
1. 弥生時代の出土遺物	171
付編1 旧石器時代の調査	176
1. 旧石器時代調査の概要	176
2. 旧石器時代相当遺物	176

■遺跡の残存状況

[第2分冊]

第Ⅴ章 発掘調査の成果	1
第3節 古墳時代	1
1. 古墳時代の検出遺構	1
2. 古墳時代の出土遺物	13

第4節 古 代	40
1. 古代の検出遺構	40
2. 古代の出土遺物	72
第5節 中 世	93
1. 中世の検出遺構	93
2. 中世の出土遺物	165
第6節 近世以降	182
1. 近世以降の検出遺構	182
2. 近世以降の出土遺物	194
第7節 その他	197
1. その他の出土遺物	197
付編2 斜面部の調査	210
1. トレンチ調査の結果	210
2. 斜面部の出土遺物	211

第Ⅵ章 分析・同定	222
1. 安茶ヶ原遺跡出土炭化材の樹種同定	222
2. 安茶ヶ原遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定1	226
3. 安茶ヶ原遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定2	230
4. 安茶ヶ原遺跡出土遺物の元素分析結果について	232

第Ⅶ章 発掘調査のまとめ	234
第1節 旧石器時代	234
第2節 縄文時代	234
第3節 弥生・古墳時代	235
第4節 古代	235
第5節 中近世	235
考察1 「日置厨」 墨書須恵器について	236
考察2 建物の併存関係の検討	237
考察3 溝状遺構と道跡との関係	239
考察4 遺跡の立地と性格	240

[第3分冊]

- 写真図版
- あとがき

挿 図 目 次

[第1分冊]

第1図	安茶ヶ原遺跡位置図		第46図	縄文土器15(Ⅳ類)	74
第2図	南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査位置図	4	第47図	縄文土器16(Ⅴ類)	76
第3図	調査年度ごとの調査位置図(1)	9	第48図	縄文土器17(Ⅵ類)	78
第4図	調査年度ごとの調査位置図(2)	10	第49図	縄文土器18(Ⅵ類)	79
第5図	いちき串木野市周辺地形分類図	18	第50図	縄文土器19(Ⅶ類)	80
第6図	いちき串木野市周辺表層地質図	19	第51図	縄文土器20(Ⅷ類)	82
第7図	周辺遺跡図	24	第52図	縄文土器21(Ⅸa類)	83
第8図	周辺地形図	26	第53図	縄文土器22(Ⅸb類)	84
第9図	グリッド配置図	27	第54図	縄文土器23(Ⅸc類)	85
第10図	トレンチ配置図	28	第55図	縄文土器24(Ⅸd類)	86
第11図	基本土層図	30	第56図	縄文土器25(X類)	87
第12図	土層断面図(1)	31	第57図	縄文土器26(XⅠ類)	88
第13図	土層断面図(2)	32	第58図	縄文土器27(XⅡa類)	89
第14図	土層断面図(3)	33	第59図	縄文土器28(XⅡb類)	90
第15図	土層断面図(4)	34	第60図	縄文土器29(XⅢ類)	91
第16図	縄文時代遺構配置図	36	第61図	縄文土器30(XⅣa類)	92
第17図	S Z 0 1・S Z 0 2	37	第62図	縄文土器31(XⅣb類)	93
第18図	S Z 0 3	38	第63図	縄文土器32(XⅤ類)	94
第19図	S Z 0 3出土遺物	39	第64図	縄文土器33(XⅥ類)	95
第20図	S Z 0 4・S Z 0 5	40	第65図	縄文土器34(XⅦ類)	96
第21図	S K 0 1・S K 0 2	42	第66図	縄文土器35(XⅦ類)	97
第22図	S K 0 3	43	第67図	縄文土器36(XⅧ・XⅨ類)	98
第23図	S K 0 3出土遺物	44	第68図	縄文土器37(XⅩ類)	99
第24図	S S 0 1	45	第69図	縄文土器38(XⅩⅠ類)	100
第25図	S S 0 1出土遺物(1)	46	第70図	縄文土器39(XⅩⅡa類)	101
第26図	S S 0 1出土遺物(2)	47	第71図	縄文土器40(XⅩⅡb・Ⅱc類)	103
第27図	腰岳産黒曜石剥片出土分布図	49	第72図	縄文石器分布図(1)	106
第28図	G・H-30区拡大図(S02)	49	第73図	縄文石器分布図(2)	106
第29図	S S 0 2出土遺物	50	第74図	出土主要石器構成比率	107
第30図	縄文早期土器分布図	52	第75図	黒曜石産地別出土分布図	108
第31図	縄文前～晩期土器分布図	52	第76図	石鏃使用石材内訳	109
第32図	縄文土器1(Ⅰ類)	58	第77図	石鏃使用黒曜石内訳	109
第33図	縄文土器2(Ⅱa類)	59	第78図	石鏃法量散布図	109
第34図	縄文土器3(Ⅱa類)	60	第79図	石鏃1	112
第35図	縄文土器4(Ⅱb類)	61	第80図	石鏃2	113
第36図	縄文土器5(Ⅱc類)	63	第81図	スクレイパー石材内訳	114
第37図	縄文土器6(Ⅲa類)	64	第82図	スクレイパー使用黒曜石内訳	114
第38図	縄文土器7(Ⅲa類)	65	第83図	スクレイパー1	115
第39図	縄文土器8(Ⅲa類)	66	第84図	スクレイパー2	116
第40図	縄文土器9(Ⅲa類)	67	第85図	石匙・石錐・剥片	118
第41図	縄文土器10(Ⅲb類)	69	第86図	磨製石斧石材内訳	119
第42図	縄文土器11(Ⅲb類)	70	第87図	磨製石斧1	120
第43図	縄文土器12(Ⅲc類)	71	第88図	磨製石斧2	121
第44図	縄文土器13(Ⅲd類)	72	第89図	磨製石斧3	122
第45図	縄文土器14(Ⅲe類)	73	第90図	磨製石斧4	124
			第91図	磨製石斧5	125
			第92図	磨製石斧6	126

第93図	磨製石斧 7	127
第94図	打製石斧・局部磨製石斧	128
第95図	独鈷状石器・石錘	129
第96図	磨石石材内訳	130
第97図	磨石 1	131
第98図	磨石 2	132
第99図	磨石 3	133
第100図	磨石 4	134
第101図	磨石 5	136
第102図	磨石 6	137
第103図	磨石 7	138
第104図	凹石 1	139
第105図	凹石石材内訳	139
第106図	凹石 2	141
第107図	凹石 3	142
第108図	凹石 4	144
第109図	凹石 5	145
第110図	凹石 6	146
第111図	敲石石材内訳	147
第112図	敲石 1	148
第113図	敲石 2	149
第114図	敲石 3	150
第115図	敲石 4	152
第116図	敲石 5	153
第117図	ハンマーストーン	154
第118図	礫器 1	155
第119図	礫器 2	156
第120図	礫器 3	157
第121図	軽石 1	158
第122図	軽石 2	159
第123図	石核	160
第124図	石皿 1	161
第125図	石皿 2	162
第126図	石皿 3	163
第127図	石皿 4	164
第128図	石皿 5	165
第129図	石皿 6	166
第130図	石皿 7	167
第131図	石皿 8	168
第132図	石皿 9	169
第133図	石皿10	170
第134図	台石実測図 1	172
第135図	台石実測図 2	173
第136図	弥生土器 1	174
第137図	弥生土器 2	175
第138図	旧石器遺物分布図	177
第139図	層別フレイク・チップ分布図	177
第140図	旧石器時代遺物 1	179
第141図	旧石器時代遺物 2	180
第142図	遺物残存範囲	183

[第 2 分冊]

第143図	古墳時代遺構配置図	2
第144図	SK 0 4・SK 0 5	3
第145図	SK 0 6・SK 0 7	4
第146図	SK 0 8	5
第147図	SK 0 9	6
第148図	SK 1 0・SK 1 1	7
第149図	SK 1 2	8
第150図	SK 1 3	9
第151図	SK 1 4	10
第152図	SS 0 3	11
第153図	SS 0 3 出土遺物	12
第154図	成川式土器分布図	14
第155図	成川式土器 1	16
第156図	成川式土器 2	17
第157図	成川式土器 3	19
第158図	成川式土器 4	20
第159図	成川式土器 5	21
第160図	成川式土器 6	22
第161図	成川式土器 7	24
第162図	成川式土器 8	25
第163図	成川式土器 9	27
第164図	成川式土器10	28
第165図	成川式土器11	29
第166図	成川式土器12	30
第167図	成川式土器13	31
第168図	成川式土器14	32
第169図	成川式土器15	33
第170図	成川式土器16	34
第171図	成川式土器17	36
第172図	成川式土器18	37
第173図	成川式土器19	38
第174図	古代遺構配置図	41
第175図	SK 1 5	42
第176図	SK 1 5 出土遺物	43
第177図	SK 1 6	44
第178図	SK 1 7	45
第179図	SK 1 7 出土遺物	46
第180図	SI 0 1	48
第181図	SK 1 8	49
第182図	SK 1 9	50
第183図	SK 2 0	51
第184図	SK 2 1	52
第185図	SK 2 2・SK 2 3	53
第186図	SK 2 4・SK 2 5・SK 2 6・ SK 2 7・SK 2 8	54
第187図	SK 2 9・SK 3 0	55
第188図	SK 3 1	56
第189図	古代SP 検出位置図	58
第190図	SK P 0 1～0 3	59

第191図	S P 0 1 ~ 1 6	62	第241図	S D 0 2	135
第192図	S P 1 7 ~ 3 3	65	第242図	S D 0 2 出土遺物	136
第193図	S P 3 4 ~ 4 0	67	第243図	S D 0 3 ・ 0 4	137
第194図	古代S P 出土遺物 1	68	第244図	S D 0 5	138
第195図	古代S P 出土遺物 2	69	第245図	S D 0 6 ・ 0 7	140
第196図	S F 0 1 ・ S F 0 2	70	第246図	S R 0 1 ~ 0 3	141
第197図	S F 0 1 出土遺物	71	第247図	S I 0 2	142
第198図	古代遺物分布図	72	第248図	中世S P 検出位置図	144
第199図	土師器甕 1	73	第249図	S K K 0 1 ・ 0 2	145
第200図	土師器甕 2	75	第250図	貝種類別割合	146
第201図	土師器甕 3	76	第251図	科別内訳	146
第202図	土師器甕 4	77	第252図	S K 3 3 ~ 3 8	148
第203図	土師器甕 5	78	第253図	S K 3 9	149
第204図	土師器甕 6	79	第254図	S P 4 2 ~ 5 7	151
第205図	土師器甕 7	81	第255図	S P 5 8 ~ 7 4	153
第206図	土師器 1	82	第256図	S P 7 5 ~ 7 7	155
第207図	土師器 2	84	第257図	中世S P 出土遺物	156
第208図	土師器 3	85	第258図	S S P 0 1	158
第209図	土師器 4	86	第259図	S S P 0 2 ~ 0 8	160
第210図	土師器 5	88	第260図	S S P 0 9 ・ 1 0	161
第211図	須恵器 1	89	第261図	S F 0 2	162
第212図	須恵器 2	91	第262図	S F 0 3	163
第213図	須恵器 3	92	第263図	S X 0 1	164
第214図	中世遺構配置図	94	第264図	中世遺物分布図	165
第215図	S B 0 1	95-96	第265図	土師器 6	166
第216図	S K 3 2	97	第266図	須恵器 4	167
第217図	S K 3 2 出土遺物	98	第267図	須恵器 5	168
第218図	S B 0 2	99-100	第268図	須恵器 6	169
第219図	S B 0 3	102	第269図	瓦質土器	170
第220図	S B 0 4	104	第270図	青磁 1	173
第221図	S B 0 6	106	第271図	青磁 2	174
第222図	S B 0 5	107-108	第272図	青磁 3	175
第223図	S B 0 7	110	第273図	白磁 1	176
第224図	S B 0 8	111	第274図	白磁 2	177
第225図	S B 0 9	113	第275図	陶器 1 ・ 磁器 1	178
第226図	S B 1 0	114	第276図	磁器 2	179
第227図	S B 1 1	116	第277図	磁器 3	180
第228図	S B 1 2	117	第278図	滑石 ・ 北宋銭	181
第229図	S B 1 2 出土遺物	118	第279図	近世遺構配置図	183
第230図	S B 1 3	119	第280図	S D 0 8	184
第231図	S B 1 4	120	第281図	S D 0 9	185
第232図	S B 1 5	121	第282図	S D 1 0 ~ 1 2	186
第233図	S B 1 6	123	第283図	S D 1 3 ~ 1 5	187
第234図	S B 1 7	124	第284図	S D 1 3 出土遺物	188
第235図	S B 1 8	126	第285図	S R 0 4 ~ 0 7	189-190
第236図	S B 1 9	127	第286図	S R 0 8 ・ 0 9	191
第237図	S B 2 0	129	第287図	S K 4 0 ~ 4 2	192
第238図	S D 0 1	131	第288図	S P 7 7 ~ 8 0	193
第239図	S D 0 1 出土遺物 1	132	第289図	陶磁器分布図	194
第240図	S D 0 1 出土遺物 2	133	第290図	陶器 2	195

第291図	陶器 3	196
第292図	釘・寛永通宝	197
第293図	その他1 (カマド・甌・把手)	198
第294図	その他2 (土錘)	199
第295図	その他3 (鍛冶関連遺物)	200
第296図	その他4 (鉄滓1)	201
第297図	その他5 (鉄滓2)	202
第298図	その他6 (鉄滓3)	203
第299図	その他7 (鉄滓4)	204
第300図	その他8 (砥石1)	205
第301図	その他9 (砥石2)	206
第302図	その他10 (砥石3)	207
第303図	その他11 (砥石4)	208

第304図	その他12 (砥石5)	209
第305図	斜面出土成川式土器 1	212
第306図	斜面出土成川式土器 2	213
第307図	斜面出土成川式土器 3	214
第308図	斜面出土成川式土器 4	215
第309図	建物配置図	238
第310図	推定縄文海進域と遺跡の立地	240

表 目 次

[第1分冊]

表1	南九州西回り自動車道建設に伴う 埋蔵文化財調査一覧表	3
表2	周辺遺跡地名表	23
表3	縄文時代遺構内遺物観察表	41
表4	縄文土器観察表 1	175
表5	旧石器・縄文石器観察表	178
表6	縄文土器観察表 2	181
表7	縄文・弥生土器観察表 3	182

[第2分冊]

表8	S B 0 1 建物計測表	93
表9	S B 0 2 建物計測表	101
表10	S B 0 3 建物計測表	103
表11	S B 0 4 建物計測表	105
表12	S B 0 5 建物計測表	105
表13	S B 0 6 建物計測表	109
表14	S B 0 7 建物計測表	109
表15	S B 0 8 建物計測表	112
表16	S B 0 9 建物計測表	112

表17	S B 1 0 建物観察表	115
表18	S B 1 1 建物観察表	115
表19	S B 1 2 建物観察表	118
表20	S B 1 3 建物計測表	118
表21	S B 1 4 建物計測表	122
表22	S B 1 5 建物計測表	122
表23	S B 1 6 建物計測表	125
表24	S B 1 7 建物計測表	125
表25	S B 1 8 建物計測表	128
表26	S B 1 9 建物計測表	128
表27	S B 2 0 建物計測表	130
表28	安茶ヶ原遺跡出土貝種内訳	146
表29	古墳・古代遺物観察表	216
表30	古代・中世遺物観察表	217
表31	中世遺物観察表	218
表32	青磁・白磁観察表	219
表33	白磁・青花・陶器観察表	220
表34	青花・陶器観察表	221
表35	鉄滓観察表	221

写真図版目次

[第3分冊]

巻頭カラー 1	「日置厨」墨書須恵器	
巻頭カラー 2	柱穴群と溝状遺構	
P L 1	いちき串木野市周辺と 安茶ヶ原遺跡 1	
P L 2	遺跡と周辺地形 1・2	2
P L 3	遺跡と周辺地形 3・4	3
P L 4	遺構検出状況全体(合成)	4

P L 5	遺構検出状況空撮 1	5
P L 6	遺構検出状況空撮 2	6
P L 7	遺構検出状況空撮 3	7
P L 8	遺構検出状況空撮 4	8
P L 9	遺跡近・遠景	9
P L 10	調査区の土層 1・2	10
P L 11	S Z 01・02	11
P L 12	S Z 03・04	12

P L 13	S K 0 4	13	P L 63	青磁・白磁	63
P L 14	S S 0 1	14	P L 64	鍛冶関連遺物	64
P L 15	S K 1 5	15	P L 65	敲石・S Z 0 3・S K 0 3石皿	65
P L 16	S K 1 7	16	P L 66	石皿1	66
P L 17	S K K 0 2	17	P L 67	石皿2	67
P L 18	S K P 0 1・0 2	18	P L 68	石皿3	68
P L 19	S K 3 2	19	P L 69	軽石製品・石核	69
P L 20	S I 0 1	20	P L 70	縄文土器 (I・II a・II b類)	70
P L 21	S I 0 2	21	P L 71	縄文土器 (II a・II b・II c類)	71
P L 22	ピット検出状況	22	P L 72	縄文土器 (III a類)	72
P L 23	S B 0 1・0 2検出状況	23	P L 73	縄文土器 (VI・X II類)	73
P L 24	S B 0 1・0 2完掘状況	24	P L 74	縄文土器 (X I X IV a・X VII類)	74
P L 25	S B 0 1半截状況	25	P L 75	縄文土器 (X VII・X X・X X II a c類)	75
P L 26	S B 0 2半截状況	26	P L 76	弥生土器	76
P L 27	S B 1 1・1 2	27	P L 77	成川式土器1	77
P L 28	建物群検出状況	28	P L 78	成川式土器2	78
P L 29	S B 0 5	29	P L 79	成川式土器3	79
P L 30	S B 1 4・1 7・1 8	30	P L 80	斜面出土土器1(成川式土器4)	80
P L 31	S S P 0 1・0 4・0 6・0 7	31	P L 81	斜面出土土器2(成川式土器5)	81
P L 32	S D 0 1	32	P L 82	土師器甕・カマド	82
P L 33	S D 0 4・0 5	33	P L 83	内黒・内赤土師器	83
P L 34	S D 0 7・0 8	34	P L 84	須恵器	84
P L 35	S B 0 8	35	P L 85	中世須恵器・瓦質土器	85
P L 36	S R 0 5	36	P L 86	S K P・S K K出土具の種類	86
P L 37	S R 0 5硬化面	37	P L 87	青花・薩摩焼・メンコ	87
P L 38	S D 1 1・1 2	38	P L 88	炉壁	88
P L 39	S F 0 1	39	P L 89	鉄滓1	89
P L 40	S F 0 2	40	P L 90	鉄滓2	90
P L 41	横転半截状況	41	P L 91	鉄滓3	91
P L 42	下層確認調査	42	P L 92	土錘	92
P L 43	遺物出土状況	43	P L 93	発掘・整理作業員のみなさん	93
P L 44	縄文土器・成川式土器出土状況	44	P L 94	完成した西回り自動車道と 安茶ヶ原遺跡近景	94
P L 45	石皿出土状況	45			
P L 46	磨斧・石錘・滑石・動物骨・炉壁	46			
P L 47	耳皿・土師器・土師器甕・須恵器	47			
P L 48	確認トレンチ作業風景	48			
P L 49	作業風景・委託作業風景	49			
P L 50	旧石器・石匙・剥片	50			
P L 51	石鏃	51			
P L 52	スクレイパー	52			
P L 53	S S 0 2出土遺物	53			
P L 54	磨製石斧1	54			
P L 55	磨製石斧2	55			
P L 56	磨石1	56			
P L 57	磨石2	57			
P L 58	凹石	58			
P L 59	礫器	59			
P L 60	S K P・S K K出土具殻	60			
P L 61	墨書土器	61			
P L 62	S K 3 2出土土師器	62			

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、市来～隈之城間に南九州西回り自動車道川内道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課に照会した。この計画に伴い、文化財課が平成8年8月に市来 I C と薩摩川内都 I C 間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、8ヶ所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化財課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成10年度から平成15年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。

第 2 節 遺跡の概要

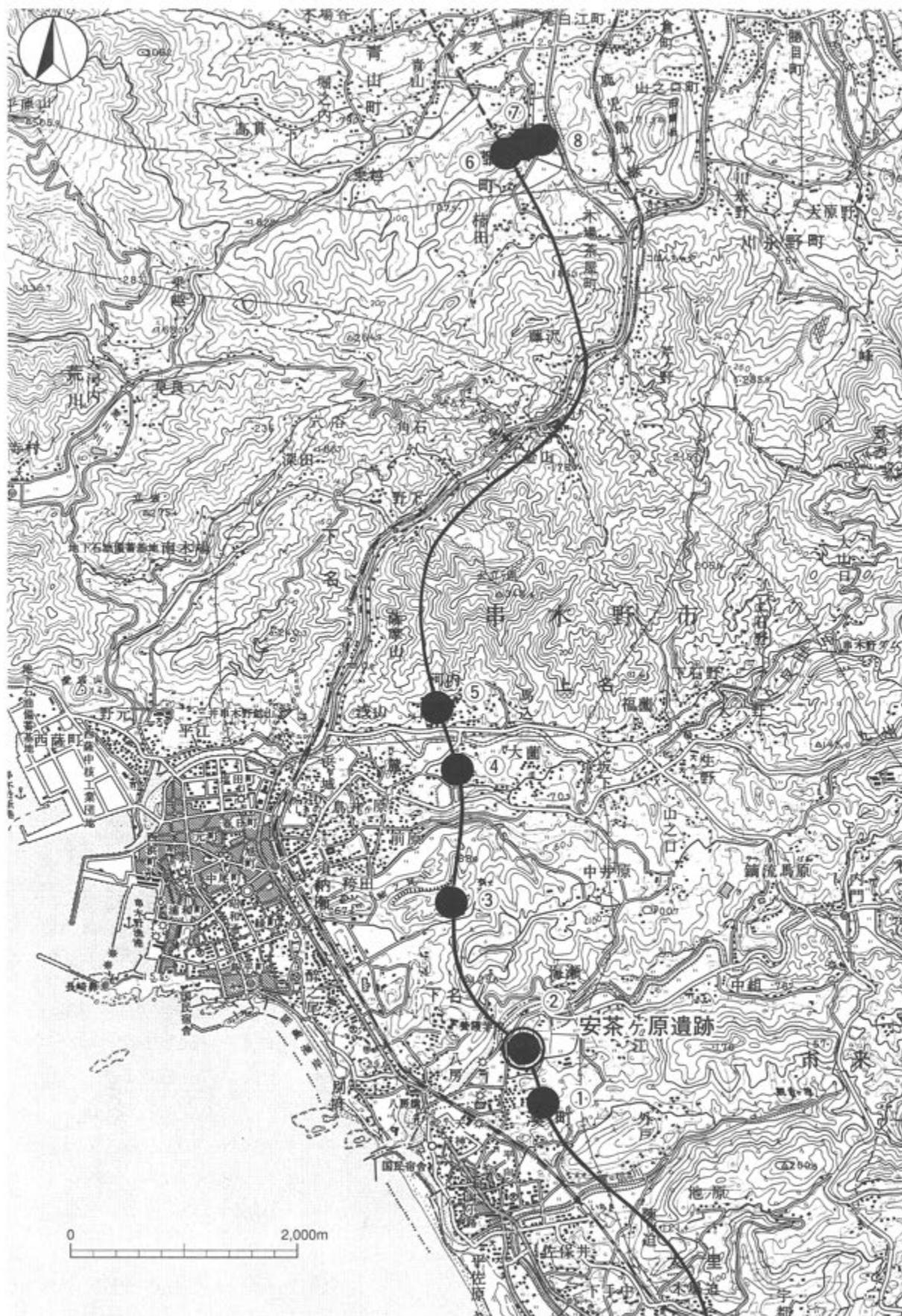
- 1 市堀…………いちき串木野市港町に所在し、標高約40mのシラス台地上に立地する。調査面積は3,040㎡である。縄文～中世、各時代の遺物が出土したが少量であった。縄文時代早期では、集石1基・落とし穴と想定される土坑1基が検出された。遺物は、前平式・貝殻条痕文土器と磨石等が出土した。晩期では入佐式・黒川式土器が、弥生時代中期では黒髪式土器が、古墳時代では成川式土器が出土した。古代～中世にかけてのピットが多数あったほか、溝状遺構1、焼土域2ヶ所、土坑10基が土師器・須恵器・陶磁器と一緒に検出された。また、古墳時代～古代で双孔棒状土錘・管状土錘が出土した。
- 2 安茶ヶ原…………いちき串木野市川上に所在し、標高約25mのシラス台地上に立地する。調査面積は16,000㎡である。縄文時代早期・後期の前平式・石坂式・押型文・深浦式・市来式土器が出土したほか、晩期の層位から佐賀県腰岳産の黒曜石10点が集中して見つかり、交流または交易によってもたらされたものと考えられる。そのほか、古墳時代の成川式土器も出土したが、注目されるのは古代～中世にかけての遺構・遺物である。「日置厨」と墨書された須恵器の坏が土坑内に遺棄された状態で出土したほか、矩形に掘り込まれた溝と、2棟の四面廂建物跡がほぼ南北に並んで検出された。その東側では、北側に廂が取り付く片廂建物跡も見つかり、2間×3間を主とする掘立柱建物跡5棟も確認され、須恵器・土師器・陶磁器・染付等多くの遺物も出土している。このことから本遺跡は、古代末から中世初期の在地領主層の居宅跡と推定される（本報告書）。
- 3 菖蒲掛…………いちき串木野市上名に所在し、標高約70～75mの台地上に位置する。平成11年2月に地形等を考慮して2m×3mのトレンチを4ヶ所、2m×4mのトレンチを設定し

て確認調査を実施した。その結果、表層下位はシラスであり、遺物包含層は残存せず、遺構も検出されなかった。

- 4 梶城跡……いちき串木野市上名に所在し、五反田川中流域沿いの標高約10mの低地部から標高約50mのシラス台地上にかけて立地する。遺跡から東へ約800mのところには坂下城跡が、西へ約500mのところには串木野城跡がある。調査面積は約50,700㎡である。遺跡は台地部・微高地部・低地部の大きく3つで構成される。台地部からは二面廂付掘立柱建物跡2棟のほか、溝状遺構・方形竪穴建物跡・竈・中世墓等が検出された。微高地部からは、石切場跡が検出された。これは鹿児島県で初の調査事例となった。低地部からは近世墓167基・良福寺住職の墓石が検出された。また中世ではカムイヤキ・東播磨系須恵器・樺番丈・青磁・白磁など中世の外来系土器が多数出土したほか、古代では墨書・刻書土器も出土した。これらのことから、遺跡は大きく城関連の遺構・石切場・寺院関連の遺構で構成され、古代以降において重要な場所であったことが推定される。
- 5 今熊……いちき串木野市上名に所在し、標高約24～26mの西傾斜面に立地する。平成11年10月に地形等を考慮して2m×3mのトレンチを5ヶ所設定して確認調査を実施した。その結果、表層下位はすぐに岩盤またはその風化した礫及び粘質化した土壌となっており、遺構・遺物は発見されなかった。
- 6 霜月田……薩摩川内市都町に所在し、標高約49mのシラス台地上に立地する。調査面積は11,000㎡である。旧石器時代、縄文時代、古代～中世、近世の遺構・遺物が発見された。旧石器時代ではブロック1ヶ所が検出され、細石刃・剥片等が出土した。縄文時代では早期・晩期に各3基の集石が検出され、前平式・塞ノ神式・押型文土器や石鏃・石斧・石皿・磨石などが出土した。古代～中世が本遺跡の主となるところで、掘立柱建物跡6棟・竪穴建物跡4基・落とし穴3基・ピット群・焼土域3ヶ所が検出され、遺物も土師器・須恵器・陶磁器などが出土した。近世では溝跡や道跡とともに陶磁器が見つかった。
- 7 都原……薩摩川内市都町に所在し、標高約50mのシラス台地上に立地する。調査面積は4,000㎡である。主に縄文時代早期や古代～中世の遺構・遺物が発見された。縄文時代早期では集石1基、土坑3基が検出され、石坂式・手向山式・塞ノ神式土器や石鏃・石斧・磨石・石皿が出土した。古代では蔵骨器と考えられる9世紀の須恵器壺が埋納の状態で検出された。口径10cm・器高20cmを測る。中世では方形竪穴状遺構・溝状遺構が検出された。方形遺構は内部に炭化材と焼土域が見られた。溝には土師器・青磁・白磁片が出土した。これらは成枝氏居城の都城跡との関連も考えられる。
- 8 玉前……薩摩川内市都町に所在し、標高約18mの河岸段丘上に立地する。平成18年10月に工事区域センター杭を基準にして、5ヶ所のトレンチを設定し確認調査を実施した。その結果、表土中にローリングを受けた土師器の小片が見られたが、表層下位はシラス及びシラスの二次堆積であり、遺構・遺物ともに発見されなかった。

表1 南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査遺跡一覧表(市来IC～薩摩川内都IC)

番号	遺跡名	所在地	(㎡)	調査面積 調査期間	調査員	時代	概要
1	市堀	いちき串木野市湊町	3,040	確認 H13.12 全面 H14.5 ～H14.7	繁昌 宮田(洋) 石丸・相美	縄文 古墳 古代 中世	条痕文土器 黒色磨研土器 成川式土器 土師器甕・双孔状土鍾 青磁 ※鹿埋セ報告書(117)2007年刊行
2	安茶ヶ原	いちき串木野市川上	16,000	確認 H11.1 全面 H11.1 ～H11.3 H11.5 ～H11.10 H12.5 ～H12.8 H13.5 ～H14.1	繁昌・栗林 繁昌・栗林 繁昌・野邊 繁昌・元田 繁昌・石丸	旧石器 縄文 古墳 古代 中世 近世	ナツ形石器・台形石器 前平式・加栗山式・深浦・中原式・市来式土器 成川式土器 土師器・須恵器・墨書土器・黒色・赤色土器 掘立柱建物跡・竪穴遺構・溝状遺構・土師器・貿易陶磁器・常滑焼 道路状遺構・薩摩焼・染付 ※鹿埋セ報告書(118)本報告書
3	梶城跡	いちき串木野市上名	50,700	確認 H11.10 全面 H12.11 ～H13.1 H13.5 ～H14.3 H14.5 ～H15.3 H15.7 ～H16.3	前迫・森田 繁昌・森田 平木場・三垣・石丸・西・松元 森田・抜水・吉岡・菅牟田 星野・石丸・平相美 森田・抜水 吉岡・星野・平	旧石器 縄文 古墳 古代 中世 近世	三稜尖頭器・剥片 落し穴・石斧デポ・押型文土器・黒川式土器 成川式土器 土師器甕・須恵器・黒色土器・墨書刻書土器 石切場跡・鍛冶遺構・掘立柱建物跡・中世墓・五輪塔・青白磁・かみヤキ・滑石製品・北宋銭 石切場跡・郷土年寄屋敷跡・近世墓・一字一石経塚・薩摩焼・染付
4	霜月田	薩摩川内市都町	11,000	確認 H12.6 全面 H12.6 ～H12.8 H15.6 ～H16.2	宮田(洋) 三垣 宮田(洋) 三垣 寺原・國師・石原田	旧石器 縄文 中世	細石刃 集石・貝殻条痕文土器・押型土器文・撚糸文土器・石鏃・石斧・石皿 掘立柱建物跡・竪穴遺構・焼土域・土師器・須恵器・鉄製品
5	都原	薩摩川内市都町	5,100	確認 H12.5 全面 H12.5 ～H12.6 H14.8 ～H14.12	宮田(洋) 三垣 宮田(洋) 三垣 星野 菅牟田	縄文 古代 中世	集石・土坑・石坂式・手向山式・貝殻条痕文土器・塞ノ神式・石鏃・石斧・石皿・磨石 蔵骨器埋納遺構・溝状遺構・土師器・須恵器・白磁



第2図 南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査位置図

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 調査の経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により、平成13年1月より国土交通省九州地方整備局）は、市来～隈之城間に南九州西回り自動車道川内道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課に照会した。この計画に伴い、文化財課が平成8年8月に市来ICと薩摩川内都IC間の埋蔵文化財に係わる分布調査を実施したところ、8ヶ所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについては、建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所と文化財課との協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査及び本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成10年度から平成15年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。

当該事業予定地内には安茶ヶ原遺跡ほかが存在することが明らかとなり、この結果に基づき、平成10年1月18日から確認調査を行い、引き続き平成11年1月18日～3月11日（実働34日）、平成11年5月10日～10月29日（実働106日）、平成12年5月8日～8月30日（実働74日）、平成13年5月7日～平成14年1月28日（実働151日）に本調査を実施した。整理作業及び報告書刊行は、平成16～18年度に行った。

第2節 調査の組織

【平成10年度（発掘調査作業）】

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育長庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	尾崎 進
		主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
		調査課長補佐	新東 晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長	池畑 耕一
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	繁昌 正幸
		文化財研究員	栗林 文夫
事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主 査	政倉 孝弘
		主 事	溜池 佳子

【平成11年度（発掘調査作業）】

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育長庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒木 友幸
		主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
		調査課長補佐	新東 晃一
		主任文化財主事兼第三調査係長	青崎 和憲
		主任文化財主事	牛ノ濱 修
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	繁昌 正幸
		文化財主事	野邊 盛雅
事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	有村 貢
		主 査	今村孝一郎

【平成12年度（発掘調査作業）】

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育長庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒木 友幸
		主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
		調査課長補佐	立神 次郎
		主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濱 修
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	繁昌 正幸
		文化財研究員	元田 順子
事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	有村 貢
		主 査	今村孝一郎

【平成13年度（発掘調査作業）】

事業主体者	国土交通省鹿児島国道工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育長庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒木 友幸
		主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
		調査課長補佐	立神 次郎

調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事兼第三調査係長 文化財主事 文化財研究員	牛ノ濱 修 繁昌 正幸 石丸 良輔
事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長 主 査	前田 昭信 今村孝一郎
調査指導者	奈良文化財研究所 ラ・サール学園	遺物調査技術研究室長 教 諭	山中 敏史 永山 修一

【平成16年度（整理作業）】

整理主体者	鹿児島県教育委員会		
整理責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	木原 俊孝
整理企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長 調査課長 調査課長補佐 主任文化財主事兼第三調査係長	賞雅 彰 新東 晃一 立神 次郎 牛ノ濱 修
整理担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	石丸 良輔
事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長 主 査	平野 浩二 脇田 清幸

【平成17年度（整理作業）】

整理主体者	鹿児島県教育委員会		
整理責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	上今 常雄
整理企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長 次長兼調査第一課長 調査第二課長 主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	有川 昭人 新東 晃一 立神 次郎 牛ノ濱 修
整理担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事 文化財主事	繁昌 正幸 木之下悦朗
整理事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主幹兼総務係長 主 査	平野 浩二 寄井田正秀

【平成18年度（報告書作成作業）】

作成主体者	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長（～7月31日） （～8月1日）	上今 常雄 宮原 景信
作成企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長 次 長 調査第二課長 主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長 主任文化財主事	有川 昭人 新東 晃一 立神 次郎 牛ノ濱 修 宮田 栄二
作成担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	平 美典
作成事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長 主 査	寄井田正秀 蒲池 俊一

【報告書作成検討委員会】平成18年12月15日 宮原所長ほか 12名

【報告書作成指導委員会】平成18年12月14日 新東次長ほか 3名

【企画担当】繁昌 正幸・中村 和美

第3節 調査の概要

（1）平成10年度の調査

平成10年度は、平成11年1月18日～3月11日にかけて、実働34日間でトレンチ確認調査500㎡・全面調査2,500㎡の計3,000㎡の調査を行った。

A～I-1～6区：トレンチを7ヶ所設定して確認調査を行った。削平を受けたところが多く、ほとんどのトレンチの表土下はシラス層であったが、D-2、E・F-3区のトレンチでは遺物の出土が確認されたことから、この部分に関してはトレンチを拡張して調査を行った。調査の結果、遺物が出土する土層中に礫が多いことから、これらの遺物は谷間を流れてきた遺物と判断し、遺物の採集を行って調査を終了した。

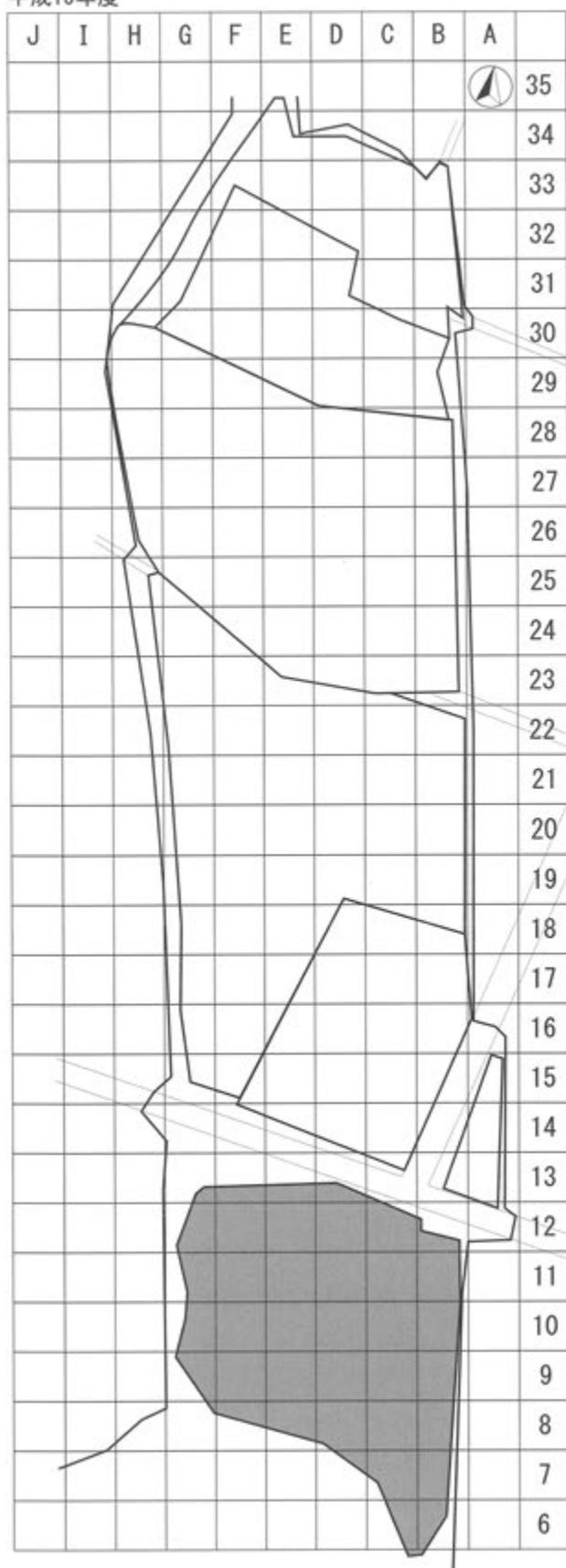
B～G-5～13区：重機によって表土を除去した後、人力により掘り下げを行った。縄文～近世にかけての遺構・遺物を検出した。D-12区の土坑中より8世紀後半～9世紀前半頃と思われる須恵器の碗2点と坏1点が出土し、このうち坏の底部外面に「日置厨」の墨書が記されていた。Ⅲ層の調査終了後、トレンチを10ヶ所設定し、下層の確認調査を行ったが、Ⅲ層以下の層からは遺構・遺物等は確認されなかった。

（2）平成11年度の調査

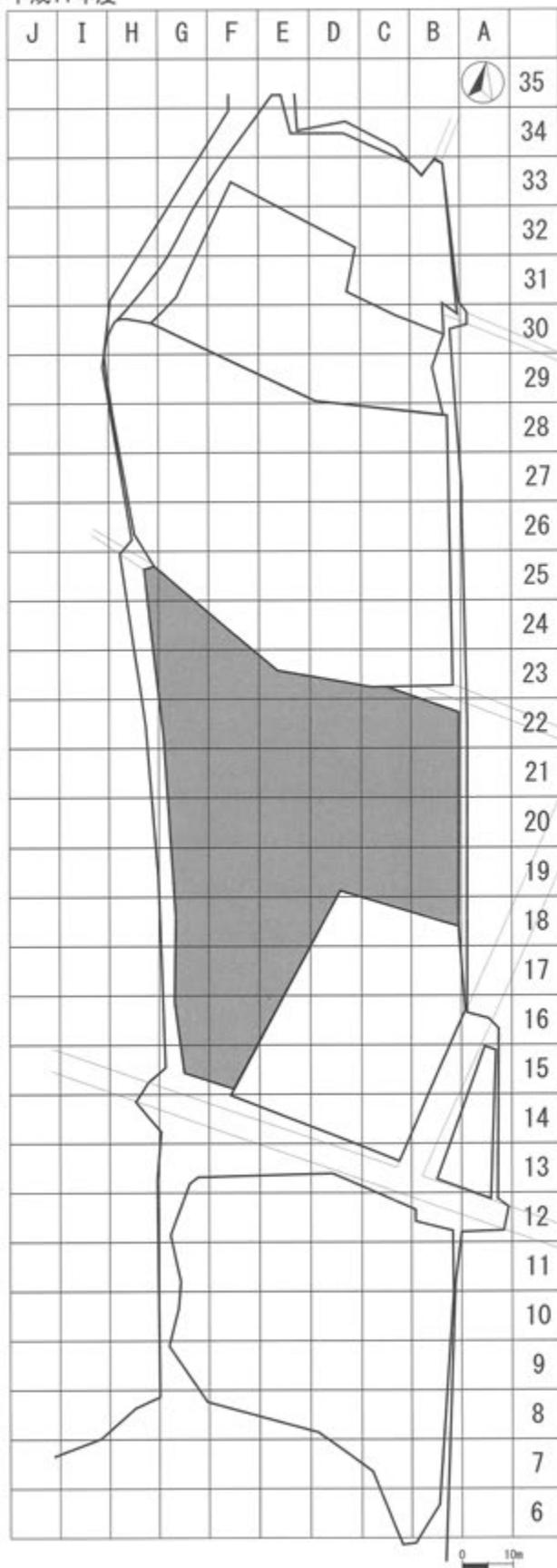
平成11年度は、平成11年5月10日～10月29日にかけて、実働106日間で3,000㎡の全面調査を行った。

D～G-14～17区およびB～H-18～24区の全面の表土を重機を用いて剥ぎ取り、ごく一部に残存す

平成10年度

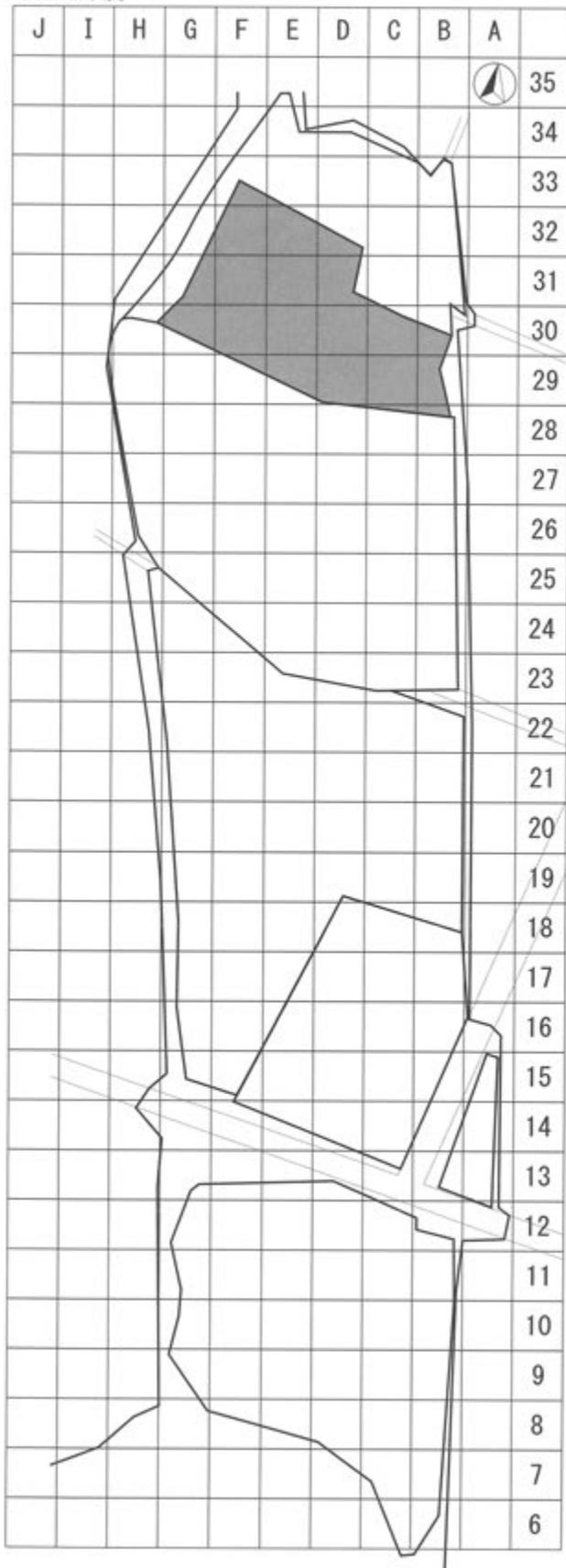


平成11年度

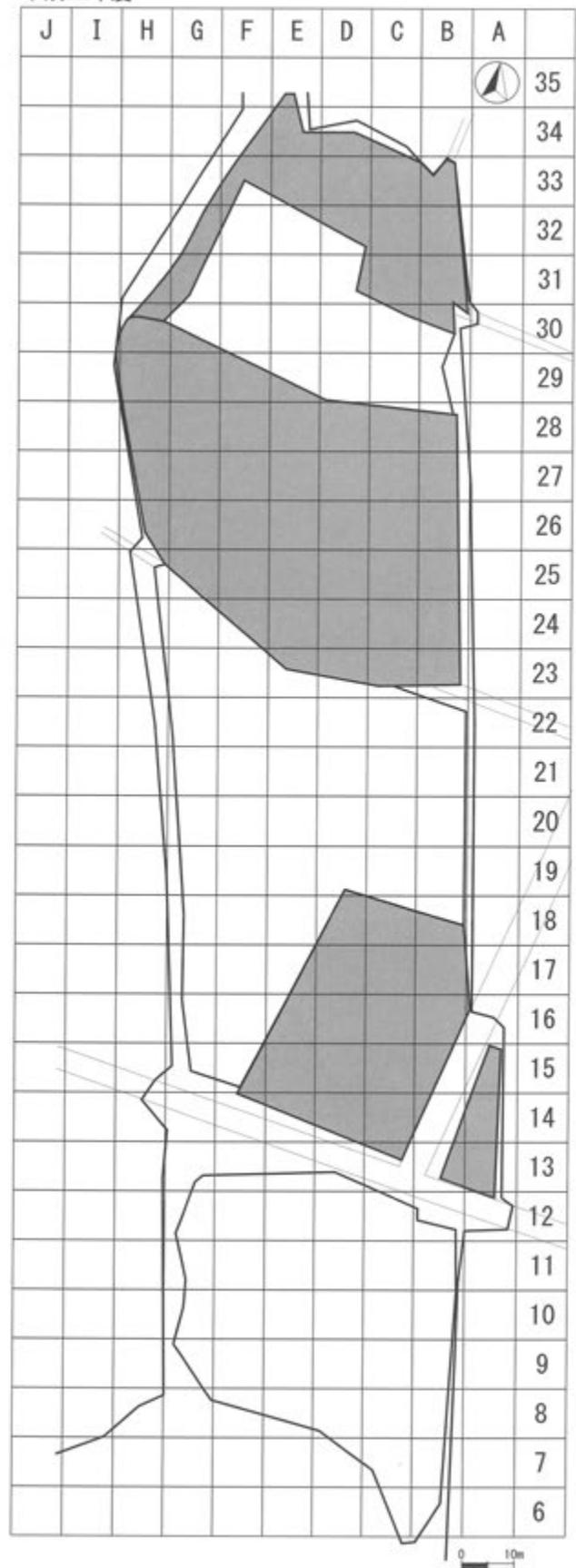


第3図 調査年度ごとの調査地点位置図(1)

平成12年度



平成13年度



第4図 調査年度ごとの調査地点位置図(2)

るⅡ層黒色土の遺物包含層を調査した後、Ⅲ層アカホヤ層上面を清掃し、遺構検出を行った。その結果、多数のピット及び土坑等の遺構が検出された。F-16区から1棟、E-18区から1棟の計2棟の四面廂建物跡が確認された。四面廂建物跡の並び方向は同一である。また、F-15区より掘立柱建物跡1棟、F・G-16・17区より掘立柱建物跡2棟が確認され、その他にF・G-15～17区、B～G-18～21区、E～G-21～23区、B・C-20～22区からそれぞれ溝状遺構が検出された。溝状遺構は四面廂建物跡より時期が若干下ると思われるものの、建物を取り囲むように検出された。

遺物は縄文早期～後期にかけての土器片や磨製石斧、石錘、敲石、磨石等が出土し、古代～近代にかけては、土錘、土師器、青磁、陶磁器等が出土した。遺物取り上げ、遺構実測終了後、トレンチを設定し、Ⅵ～Ⅷ層の下層確認調査を行った。その結果、Ⅴ層より縄文早期の土器片が数点と、黒曜石が数点確認されたため、調査範囲を広げて掘り下げを行った結果、自然流入と思われる黒曜石が数十点出土したものの、土器、石器は出土しなかった。

(3) 平成12年度の調査

平成12年度は、多くの柱穴及び建物跡がある本遺跡の性格と作業効率を考慮し、未買収地を数ヶ所含む昨年度調査区の隣接地を避け、5月8日～8月30日にかけて、実働74日間で2,000㎡の全面調査を行った。

未買地・保安林及び生活道路を除くB～H-27～32区の全面について、表土を重機を用いて除去し、Ⅲ層アカホヤ層上面を精査して遺構検出を行った。その結果、近世から近代のものと思われる古道跡3条、焼土域4ヶ所、土坑を検出し、写真撮影・実測を行った。その後Ⅲ層の掘り下げを行い、古墳時代の成川式土器が多数出土した。Ⅲ層の遺物包含層を調査した後、Ⅲ層下部で揃えて精査したところ、調査区全域にわたって多数の土坑・ピットを検出した。それらを完掘した後、業者に委託して航空撮影・遺構実測を行った。その後トレンチを設定し、下層の確認調査を行った。その結果、縄文時代早期の土器片や磨製石斧・敲石・磨石等を含む包含層が調査区全域に存在することを確認したため、Ⅳ層以下の掘り下げを行い、さらに下層の確認調査を行った。

(4) 平成13年度の調査

平成13年度の調査は、4年度にわたる調査の最終年度にあっていたが、調査箇所が大きく3地点に分断していたうえに、調査開始段階で買収が完全には終了していなかったため、未買収地を避けてたびたび調査地点を変更しなければならず、結果として効率のよくない調査を余儀なくされた。また工事の実施計画の変更などにより、調査が若干遅れ気味となった。

調査は平成13年5月7日～平成14年1月28日にかけて実施し、実働151日間で8,000㎡を調査した。調査の方法としては、調査地点をA・B・Cの3地点に大きく分け、それぞれをさらに調査順序に従ってA-1、A-2というように細分して行った。表土は重機で除去し、それ以後は人力で掘り下げを行った。ジョレンを用いて建物の柱穴や溝などの遺構を精査し、遺構は移植ゴテなどを用いて丁寧に掘り下げ、実測や写真撮影を行った。無遺物となる層まで掘り下げを行い、その後トレンチを設定して下層確認のための調査を行い、旧石器などの遺物がないかの確認を行った。この作業を各地点ごとに繰り返して調査を行った。

検出した遺構としては、古代から中世（一部近世）にかけての柱穴が多数あったほか、それらがまとまった建物として復元しうるものとして、掘立柱建物跡1棟・片廂建物跡1棟・中世と考えられる方形竪穴建物跡1基・中世～近世と思われる溝状遺構2条と古道跡4条が確認された。また、遺物としては、縄文時代早期の前平式・石坂式・吉田式・条痕文系土器などが出土したほか、同時期と考えられる石皿や磨石、局部磨製石斧が出土した。縄文時代晩期には入佐式土器と思われる粗製深鉢や黒曜石製の石鏃、磨製石斧が出土している。そのほか古墳時代のものとして成川式土器、古代の土師器甕・坏・皿のほか、中近世の青磁や染付・陶器・磁器が出土した。下層確認調査の結果、旧石器時代の遺構・遺物は検出されなかった。

第4節 発掘調査の経過

発掘調査の経過は、日誌抄より略述する。

(1) 平成10年度の調査

1月(18～29日)

18日より平成10年度発掘調査開始、表土除去、確認トレンチを7ヶ所設定(1T～7T)、Ⅱ層黒色土は0～8cm程度と薄く、特に東側ではあまりみられない。低地部3トレンチ拡幅、トレンチ配置図作成・遺物取り上げ、南側低地中腹部のトレンチ埋め戻し、市来町・串木野市に作業員追加募集を依頼

来訪者：吉永和人所長(埋文センター)

2月(1～26日)

前半は大雪や霜等により作業が滞る。4日より作業員7名を追加雇用。B～G-9～13区：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ・遺物取り上げ、遺物は台地南端よりも北側へかけて多く出土する。焼土・ピット・溝状遺構検出掘り下げ・平板実測、低地部トレンチ埋め戻し

17日：県文化財保護審議委員河口貞徳先生現地指導

来訪者：河口貞徳氏(県文化財保護審議委員)、尾崎進次長・新東晃一調査課長補佐(埋文センター)、新町正氏・宮司氏(市来町教育委員会)、西村健一氏(別府大学学生)

3月(1～10日)

C～E-10～13区：Ⅲ層掘り下げ・遺物取り上げ・ピット掘り下げ・実測、3日 須恵器集積土坑を検出し、その中に“日置厨”と墨書された坏を発見。その後掘り下げ・写真撮影・実測、2～8T掘り下げ・遺物取り上げ、1～8T土層断面写真撮影・実測、10日 平成10年度発掘調査終了

来訪者：吉永和人所長(埋文センター)、西村健一氏(別府大学学生)、帖佐秀人氏

(2) 平成11年度の調査

5月(10～28日)

10日より平成11年度発掘調査開始、C～G-14～22区：Ⅲ層掘り下げ・遺物集中箇所写真撮影・遺物取り上げ、溝状遺構検出・遺構内遺物取り上げ・平板実測・掘り下げ、B～G-14～18区：ピット検出・検出状況写真撮影・平板実測・掘り下げ、土師皿埋納土坑検出、土坑掘り下げ、掘立柱建物

跡実測

来訪者：黒木友幸次長（埋文センター）

6月（1～30日）

溝状遺構1～3掘り下げ・遺物取り上げ・写真撮影・遺構実測，掘立柱建物跡検出掘り下げ，四面廂建物跡ピット平断面実測，ピット検出作業，成川式土器集中箇所実測，土坑掘り下げ，硬化面検出作業

来訪者：県文化財課長，新町正氏（市来町教育委員会），出口浩氏（鹿児島市教育委員会）

7月（1～27日）

B～G-14～23区：ピット・土坑・溝掘り下げ・実測，貝殻ピット実測，土師器集中箇所，土師器廃棄土坑完掘・写真撮影・実測，Ⅲ層掘り下げ・遺物取り上げ

来訪者：吉永和人所長（埋文センター），中島係長（川内市教育委員会）

8月（2～27日）

B～H-18～24区：ピット・土坑・古道跡検出・掘り下げ・実測，溝状遺構2～5精査，Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ・遺物取り上げ

来訪者：池畑耕一氏（県文化財課），寺迫子供会

9月（1～28日）

C～G-13～20区：Ⅲ層掘り下げ，E～G-14～20区：ピット・土坑精査・掘り下げ・実測，7日 空中写真撮影，コンタ実測，1～13トレンチ掘り下げ・写真撮影・遺物取り上げ，四面廂建物ピット半截

10月（4～27日）

1・3・7・8・13・14トレンチ掘り下げ・遺物取り上げ・トレンチ配置図作成，西側南北拡張区掘り下げ・遺物取り上げ，四面廂建物ピット半截，撤去作業，27日 平成11年度発掘調査終了

（3）平成12年度の調査

5月（8～26日）

8日より平成12年度発掘調査開始，表土剥ぎ，グリッド杭打ち，B～G-29～32区：Ⅲ層掘り下げ・遺物出土状況写真撮影・遺物取り上げ，C～G-30～32区：古道検出・平板実測・掘り下げ・遺構実測，F-32区：石皿実測，D～F-31・32区：ピット検出・平板実測・半截，F-32区：石皿出土状況実測，D～G-30～32区：焼土域写真撮影

来訪者：井上明文所長・立神次郎調査課長補佐（埋文センター），市来町教育委員会社会教育課長・新町正氏・西村氏（市来町教育委員会）

6月（1～28日）

C～G-28・29区：Ⅲ層掘り下げ・遺物取り上げ，B～G-28～32区：コンタ図作成，D-29区：焼土坑掘り下げ・完掘・写真撮影，D～G-30～32区：ピット掘り下げ・ピット実測委託，E・F-30区：焼土域半截，E～G-28・29区：遺構検出作業・遺構実測委託，E～G-28・29区：土坑断面写真撮影，E～G-30区：古道半截・断面実測・完掘・写真撮影，E-30区：焼土坑・黒色埋土土坑掘り下げ・完掘・写真撮影・実測，F・G-29～32区：ピット平・断面実測，C～E-30区・E-28・29区・E～G-30区：土

層断面実測, 27日 空中写真撮影

来訪者: 井上明文所長 (埋文センター), 帖佐秀人氏

7月 (3~28日)

C-29区・F・G-29~32区: IV・V層掘り下げ・遺物取り上げ, E-30区: 焼土写真実測委託, F・G-29・30区: 集石検出・写真撮影・実測, G-29区: 磨石デポ写真撮影・平・断面実測, G-30区: V層以下の下層確認調査, G区北壁土層断面実測, 来年度調査区の確認調査・土層断面実測・完掘状況写真撮影

来訪者: 柴田博子氏 (宮崎産業経営大学), 永山修一氏 (ラ・サール学園), 西久保氏 (市来町保健福祉課)

8月 (1~25日)

B~E-28~32区: IV・V層掘り下げ・遺物取り上げ, D-29区: 石皿出土状況実測, D-30区: 3号集石検出状況写真撮影, E-30区: 2号集石平断面実測, F・G-29・30区: 1号集石平断面実測, 下層確認トレンチ設定 (1T~4T)・掘り下げ・写真撮影・遺物取り上げ・土層断面実測, 来年度調査用杭 (逃げ杭) 設定, 25日 平成12年度発掘調査終了

(4) 平成13年度の調査

5月 (7~28日)

5日より作業開始, B地点道路部分表土除去・III層検出・遺構検出作業・平板実測・掘り下げ, A・B地点グリッド杭・レベル杭設定, C-23~26区: トレンチ設定・掘り下げ・土層断面実測, B・C-22~27区: III~V層掘り下げ・遺物取り上げ, 遺構実測・写真撮影, 横転写真撮影・実測・断ち割り, B-27区: 集石平断面実測・取り上げ, C・D-22・23区: 土坑掘り下げ・写真撮影, 焼土域実測・掘り下げ・写真撮影, 10日 文化財保護審議会委員7名視察, 28日より長期研修講座実習 (日吉町教育委員会馬場学氏)

来訪者: 井上明文所長 (埋文センター), 新町正氏 (市来町教育委員会)

6月 (1~28日)

C-15~17区: I・III層掘り下げ・遺構検出作業, A-1地点: 遺構検出作業・平板実測, 溝状遺構掘り下げ・遺物取り上げ・ベルト断面実測, ピット掘り下げ・実測, コンタ図作成, A-3地点: II・III層掘り下げ・遺物取り上げ, ピット掘り下げ・実測, 土坑・方形堅穴等ベルト設定

長期研修講座実習 (日吉町教育委員会馬場学氏: 8日まで, 川内市教育委員会鮫島氏: 18日から)

来訪者: 新町正氏 (市来町教育委員会)

7月 (2~26日)

A-1地点: III・IV層掘り下げ, ピット実測, D-13区: 貝殻ピット写真撮影・半截, E-13区: 須恵器ピット写真撮影・平断面実測, トレンチ設定・掘り下げ, A-2地点: 表土除去, II・III層掘り下げ・遺物取り上げ, 溝状遺構・ピット掘り下げ, 溝状遺構内遺物写真撮影・遺物取り上げ・断面実測, 全景写真撮影, A-3地点: II・III層遺物取り上げ, 平成11年度調査四面廂建物跡再検出, ピット掘り下げ・実測, 土坑・方形堅穴遺構ミニトレンチ掘り下げ・遺構内遺物取り上げ, コンタ図作成, 12日 空中写真撮影, 長期研修講座実習 (中種子町教育委員会野平氏: 19日から)

来訪者：池畑耕一氏（県文化財課）

8月（1～28日）

A-1地点：Ⅲ層掘り下げ，トレンチ設定・掘り下げ・遺物取り上げ・断面写真撮影・実測，貝殻ピット写真撮影・実測，A-2地点：表土除去，Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ，コンタ図作成，溝状遺構掘り下げ・遺物取り上げ，ピット完掘，道路部分グリッド杭設定，A-3地点：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ・遺物取り上げ，方形竪穴掘り下げ・写真撮影・実測・遺物取り上げ，土坑掘り下げ・写真撮影・実測，貝殻ピット内貝殻取り上げ，ピット掘り下げ・写真撮影・実測，トレンチ設定・掘り下げ・断面写真撮影・実測，1日 奈良文化財研究所山中敏史先生調査指導，10日 ラ・サール学園永山修一先生調査指導

来訪者：山中敏史氏（奈良文化財研究所），永山修一氏（ラ・サール学園），橋口尚武氏

9月（3～26日）

A-2地点：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ・遺物取り上げ，遺構平板実測，掘立柱建物跡写真撮影・実測，方形竪穴写真撮影，土坑遺物取り上げ・平断面実測，ピット完掘・実測，コンタ図作成，トレンチ設定・掘り下げ・遺物取り上げ・土層断面実測・写真撮影，A-3地点：遺物取り上げ，方形竪穴遺構ピット完掘，B・C地点：伐採・表土除去，長期研修講座実習（菱刈町教育委員会原田氏：3日～26日）

10月（1～24日）

A-2地点：トレンチ掘り下げ・写真撮影・土層断面実測，ピット半截，二面廂建物跡ピット検出，掘立柱建物跡写真撮影，土坑完掘・写真撮影，B-2地点：表土除去，Ⅲ層掘り下げ・遺物取り上げ，溝状遺構掘り下げ・写真撮影，土坑掘り下げ，ピット掘り下げ・平板実測，コンタ図作成，C地点：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ・遺物取り上げ，グリッド設定，遺構検出作業，遺構配置図作成，古道検出作業，土坑掘り下げ，ピット掘り下げ，コンタ図作成

来訪者：井上明文所長（埋文センター）

11月（5～26日）

B-2地点：Ⅲ層掘り下げ，C地点：グリッド杭設定，Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ・遺物取り上げ，石皿デポ実測，土坑実測，トレンチ設定・掘り下げ・遺物取り上げ・写真撮影・断面実測，ピット内遺物取り上げ

来訪者：中元監察官（国土交通省鹿児島国道事務所）

12月（3～26日）

B-2地点：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ・遺物取り上げ・遺構検出作業，土坑掘り下げ・完掘，ピット半截・完掘，コンタ図作成，溝状遺構掘り下げ・断面写真撮影・完掘，遺構平板実測，平成11年度調査四面廂建物跡再検出，20日 空中写真撮影

1月（7～29日）

B-2地点：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ・遺物取り上げ，トレンチ設定・掘り下げ・写真撮影・土層断面実測，C-2地点：表土除去，Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ・遺構検出作業・遺構平板実測，平成11年度調査四面廂建物跡南北方向断ち割り・断面写真撮影・断面実測，作業道具等撤収作業，埋め戻し，29日 安茶ヶ原遺跡発掘調査完了

第5節 整理・報告書作成事業の概要

安茶ヶ原遺跡の報告書作成事業に伴う整理作業については、平成10～13年度の発掘調査時においても遺物の洗浄・注記等の作業を行っていたが、本格的な作業は平成16～18年度にかけて実施した。各年度の作業の内容は以下の通りである。

(1) 平成16年度の整理作業

遺物の洗浄・注記，遺物の分類・接合・補強，図面整理・遺構配置全体図の作成，遺構図下図作成，石材分類，一部石器の実測委託

(2) 平成17年度の整理作業

遺物の分類・接合・補強，実測遺物の選別・遺物実測，石材分類，石器分類

(3) 平成18年度の整理・報告書作成作業

遺物実測，石器実測委託，遺物トレース・遺構トレース，拓本・拓本貼り，遺物出土状況デジタル入力，遺物出土状況座標データ・遺物分類データ入力，遺物復元・色塗り，写真撮影，レイアウト，文章執筆

なお，報告書作成にあたって以下の方々に指導・助言をいただいた。

池畑耕一・板倉有大・内村光伸・黒川忠広・相美伊久雄・中村耕治・東 和幸・前迫亮一・三垣 恵一



開通した西回り自動車道と遺跡近景

第三章 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

1-1 安茶ヶ原遺跡といちき串木野市の位置

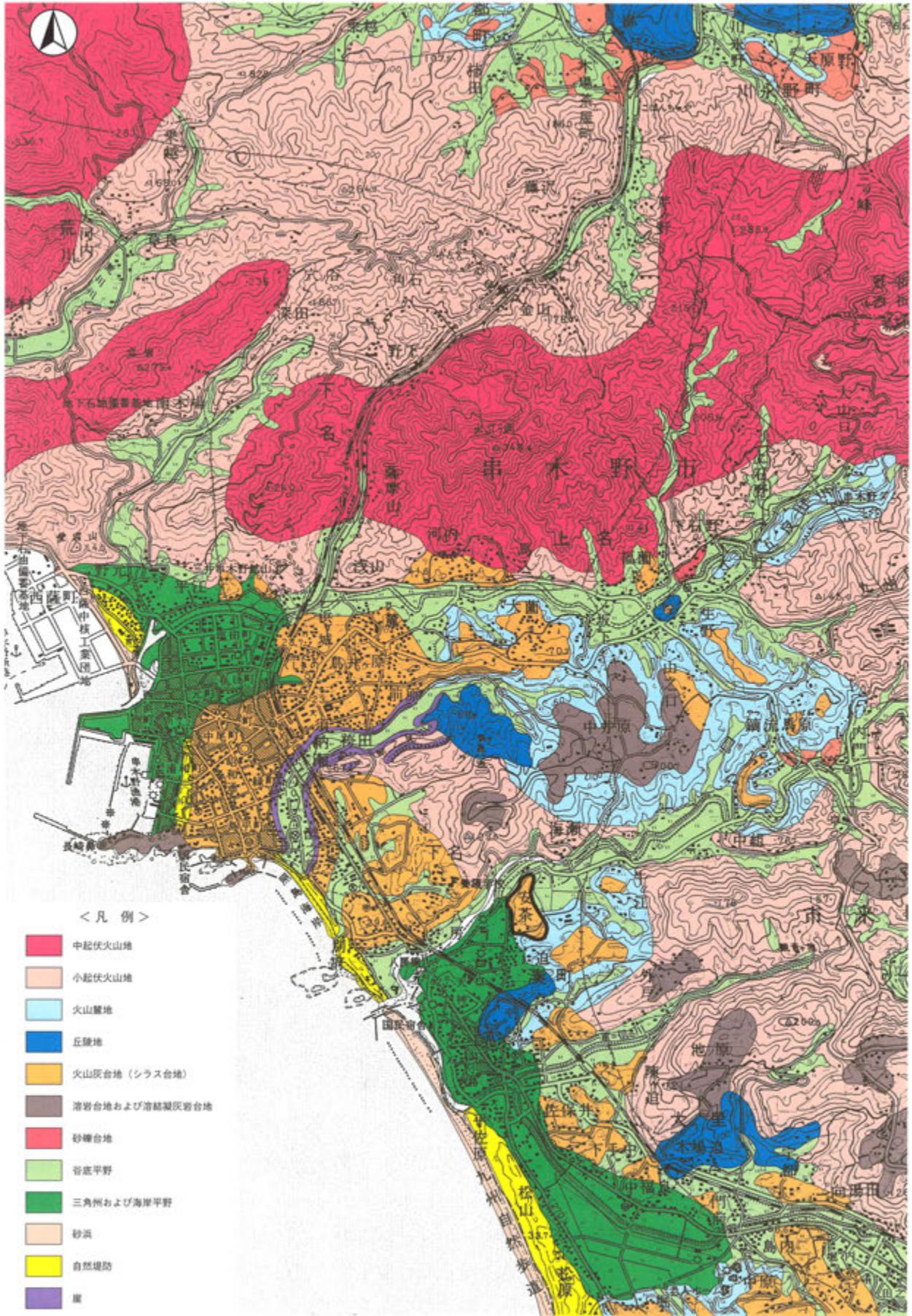
安茶ヶ原遺跡は、鹿児島県いちき串木野市川上安茶中ほか（北緯31° 41′ 56″，東経130° 17′ 56″）に所在する。いちき串木野市は薩摩半島西北西端に位置し、111.88km²の行政区域をもつ。北は八重山山塊によって薩摩川内市と境を接し、東は同じく薩摩川内市と、南東を日置市、西は東シナ海に面している。安茶ヶ原遺跡は八房川を3kmほど遡った南岸沿いの河岸段丘上に立地する。上流1kmほどのところに、市来式土器の標識遺跡として著名な川上（市来貝塚）がある。またこの地は、古代日置郡と薩摩郡の郡境にあたる場所でもある。

1-2 いちき串木野市の地形・地質の概要

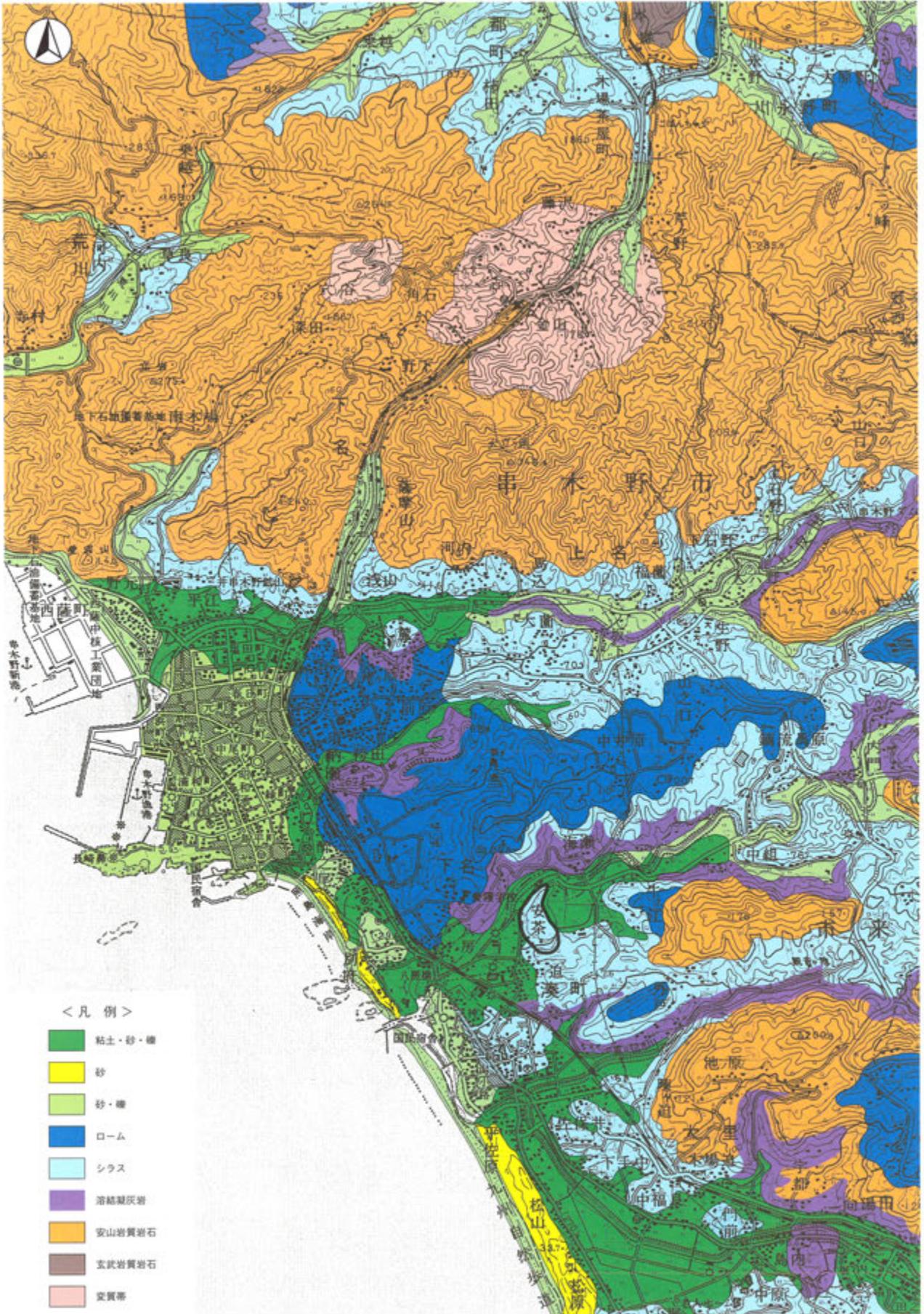
いちき串木野市域は、平成の大合併前の行政区域境となる八房川によって、北部地区（旧串木野市域）と南部地区（旧市来町域）に二分される。八房川の主流は矢岳の北東斜面にその源を発し、旧市来町域に入って川上地区の中央を西へ貫流し東シナ海に注いでいる。二級河川で、主流の全長は約20kmである。支流を含めると、八房川の市内における流路合計は約22.8kmとなる。これらの川は流域に狭い谷底低地を形成し、八房川主流の下流では広い三角洲の低地を形成している。北部は標高519mの弁財天山をはじめ、平原山・冠岳など500m前後の山地が東西に連なり、中薩・北薩の分水界をなす。南部は、北東の川上地区と日置市と境を接する東側に山地が多く、西側の八房川下流と南西の大里川下流に低地が開けている。市域は、全般的に火山性岩類からなり、安山岩を主とする火山岩が分布する山岳地帯と、これを取り囲んだかたちのシラス台地とが大部分を占める。いちき串木野市域の山地は、以下のように区分される。

- ①平原火山地：薩摩川内市の平原山(505.9m)主峰とする火山地で、中心部が中起伏、周辺部が小起伏となる。
- ②冠岳火山地：いちき串木野市の冠岳(516.6m)を中心とする中起伏火山地で、東北東方向に走る断層に支配された急斜面が多く存在する。
- ③矢岳火山地：いちき串木野市と日置市の境にある矢岳(410.2m)を中心とする中起伏火山地。

北部は八重山山塊に属する冠岳・弁財天等の旧期火山群から成る。南部は、山地では旧串木野市域境に位置する行司ヶ塚(418.6m)と矢岳が最も高く、これらは矢岳火山地に含まれる。矢岳火山地を四分して、八房川およびその支流の広野川と福ヶ野川が流れている。この3つの河川は矢岳火山地を浸食して深い谷を作り、その流域は30度以上の急傾斜となっている。矢岳火山地の縁辺に、標高200mほどの小起伏の市来火山地が広がる。この地域は、第三紀後半（約3000万年前）から第四紀更新世にかけて激しい火山活動があり、ローム・二次シラス・シラス・溶結凝灰岩・安山岩などの火山性岩石が分布している。ロームは沖積層を除き全域を薄く覆って分布している。溶結凝灰岩は河谷を埋めて分布するほか、南部ではシラスの下部に普遍的に見られる。外観および生成時期の異なった少なくとも4つ以上の溶結凝灰岩が存在するが、同じ溶結凝灰岩でも岩相が変化し一定し



第5図 いちき串木野市周辺地形分類図



第6図 いちき串木野市周辺表層地質図

ていない。比較的低い位置に広範囲にわたって分布するため、土地の垣根石・土台石などとして利用されている。安山岩は最も広く分布している。

北部では、角閃石安山岩よりなる凝灰角礫岩が分布しているが、五反田川右岸部では熱水変質を受け粘土化・珪化・変色が進んでいる。南部では輝石安山岩が分布する。これらの山地には、熱水変質を受け、金・銀の鉱脈を胚胎するところがあり、古くから産金地として知られている。北部の芹ヶ野地区には、輝石安山岩中の裂力を充填した浅熱水性の含金銀石英方解石脈の金属鉱床が広がり、近年まで串木野鉱山が操業されていた。

台地は、溶岩台地・シラス台地・砂礫台地がある。溶岩台地は、北部の平原火山地に多く見られる。シラスは五反田川・八房川流域を中心に台地をつくってかなり広く分布するが、河川の浸食を受け、狭長な台地面として存在することが多い。北部では南西部に低いシラス台地が広がり、南部では市来火山地の縁辺にシラス台地が散在する。砂礫台地は段丘として現れることが多く、二次シラスより成る低い台地が多いのが特徴である。これらの台地は「原(はい)」と呼ばれ、畑地として利用されている。

低地は、東シナ海に面して存在し、各河川の縁辺に谷底平野にあたる小低地が散在している。北部では五反田川下流域に低地が広がり、南部では、八房川および大里川・重信川の下流に三角洲として発達した低地が広がる。このほか、八房川・大里川の主流とその支流および重信川の流域に谷底低地がある。五反田川・八房川河口部では、浸食された溶結凝灰岩上に段丘砂礫層が重なり、それぞれ旧串木野市・旧市来町の市街地がその上に広がっている。五反田川・八房川・大里川その他の中小河川流域に粘土・砂などの未固結堆積物が分布する。東シナ海に面した海岸域には、砂が砂丘を構成して分布する。この砂丘は、日本三大砂丘の一つに数えられる吹上浜砂丘の北端部にあたり、大里川下流に発達した三角洲の西側は、吹上砂丘の北端として砂地の自然堤防を形成し、その外縁は東シナ海に接している。なお、いちき串木野市域では固結堆積物の分布は見られない。

山地・丘陵地の土壌は褐色森林土壌が主で、一部に黒色火山灰の黒ボク土壌が見られる。シラス台地は火山灰に覆われ、黒ボク土が存在し、一部には未熟土も分布している。沖積地帯にはシラスや安山岩等の風化物を母材とする灰色低地土やグライ土壌が広く分布し、一部には泥炭土の分布も認められる。また海岸部には、吹上浜砂丘から続いた砂丘未熟土も見られる。

【参考文献】

- 米谷静二 1974 「地形分類」『鹿児島地域開発地域土地分類基本調査 川内』 鹿児島県
露木利貞ほか 1974 「表層地質」『鹿児島地域開発地域土地分類基本調査 川内』 鹿児島県
市来町郷土史編纂委員会編 1982 『市来町郷土史』 市来町
中原尚文 1982 「市来町」「串木野市」『鹿児島県風土記』 鹿児島県書店組合

第2節 歴史的環境

いちき串木野市では、これまで大規模な事業がなかったために、本格的な発掘調査はあまり行われてこなかった。しかし、南九州西回り自動車道が本市を通過することに伴う調査によって、近年大規模な調査が行われるようになり、少しずつではあるが、この地域の様相が明らかになりつつある。

旧石器時代の調査は多くはないが、大里の松尾平遺跡で台形石器やナイフ形石器が出土し、これらはAT堆積以降のものと考えられている。また、北部上名の椿城跡から三稜尖頭器が出土したほか、本遺跡からも明確な包含層は確認されなかったものの、狸谷型のナイフ形石器をはじめ、台形石器・三稜尖頭器等が出土しており、旧石器時代の遺跡が存在したことが伺われる。

縄文時代では、川上の瀧ノ段遺跡で草創期の土器とともに細石刃や舟形配石炉、石鏃等が出土しており、初期定住の様相を知る上で貴重な遺跡である。特に石鏃は41本と、この時期としては群を抜いて多く注目される。川上の中組・八房川沿いの河口から約4kmほどの台地上には川上（市来）貝塚がある。川上（市来）貝塚は古くからその存在が知られており、大正10年（1921）に山崎五十磨氏、昭和36年（1961）には河口貞徳氏により調査が行われている。36年の発掘調査では人骨が3体出土したほか、多数の土器・石器・骨角器等が出土した。出土した土器は市来式土器として型式設定され、縄文後期に位置付けられた。平成6年に県指定文化財に指定されている。

弥生時代の遺跡はほとんど確認されていない。しかし、市ノ原遺跡で、弥生早期～前期の遺物や住居跡等が検出され、本遺跡からも少数ながら突帯文土器や前期の丹塗磨研壺が出土していることから、この地域に弥生早期～前期を中心とした集落跡が点在していた可能性が推測される。古墳時代も明確な遺構は確認されていないが、安茶ヶ原遺跡では多数の成川式土器が出土している。また大里田圃遺跡からは、成川式土器の壺等多数の遺物が採集されており、大里川の流域にも古墳時代の集落跡が存在した可能性がある。

古代になると市来院が設置されるが、おおよそ現在の市南部域（旧市来町）と日置市東市来町にまたがる範囲であったと推定されている。市ノ原遺跡第1地点では、多数の墨書土器や掘立柱建物跡が出土しており、公的施設が存在した可能性が想定されている。また伝承では、奈良時代後期（770年代）に大蔵正房が市来院の院司となり、大里の鍋ヶ城を中心に西薩に権勢をふるったと言われる。平安時代になると『延喜式』に駅名として「市来」の名が登場する。しかし、これは具体的位置が現在のところ不明である。また、古代の官道の想定ルートからも、市来地域に想定することは難しいとされる。

鎌倉時代の寛元二年（1244年）、院司である大蔵氏の道阿弥陀仏が、孫の惟宗政家に市来院の院司職を譲って以降は、惟宗姓市来氏が市来院の領主として代々相続するようになった。大里の鍋ヶ城の真向かいに、市来氏の菩提寺として建立されたと推定されている来迎寺跡があり、三代時家、四代氏家、五代忠家、六代家親の墓塔群が確認されている。来迎寺は市来氏の保護のもと隆盛を極めるが、室町時代の寛正三年（1462年）に七代市来久家が島津立久に滅ぼされると、来迎寺領水田三町歩等が召し上げられ、来迎寺はその後荒廃していった。市来地頭であった市来氏が滅亡した後は島津の直轄地となり、島津配下のものが地頭となり治めるようになった。

中世の市来院においては、郡司職の市来氏のほかに河上名を領した河上氏も勢力を持っていた。

また、南北朝期には南朝方の市来氏と北朝方の島津氏との攻防が続き、建武四年（1337年）には、南朝方に呼応して市来時家が市来鶴丸城にたてこもり、島津貞久方の軍勢と激しい攻防戦を展開している。文和四年（1355年）には、時家の子の氏家が櫛木野城を攻めるなど、戦国期まで院内の各地で戦闘が繰り返された。市来貝塚の東には河上城があるが、北にひと山越えれば中・近世の串木野の中心部となる上名麓へ至り、戦略的に重要な位置を占めている。河上城の北の八房川を挟んだ場所には河上氏の墓地跡がある。大里には、市来鶴丸城に移る前の市来氏の居城であった鍋ヶ城と、その西に鍋ヶ城の防御のためと思われる、上城・詰城などの城跡がある。また丹後局の伝説に関する旧跡も多く存在する。丹後局は、鎌倉時代のはじめ、源頼朝の子と伝えられる島津家初代忠久を産んだといわれる。この丹後局は鍋ヶ城に住んだといわれ、大里の南の台地上にある来迎寺跡に墓といわれるものがある。

冠岳をはじめとして、この地域では修験道の修行の場が多く存在する。外戸の岩屋観音は、巨大な岩盤の組み合わさった場所で、岩境信仰の対象としての原始的、古代的霊場に観音彌陀落浄土という仏教的見方が習合したことにより、修験道山伏ないし、礼拝祈祷の行われた場所であると推測されている。中世の遺跡からは、貿易陶磁器の出土がみられる。川上貝塚から青・白磁が出土したほか、本遺跡からも青・白磁・中国磁器が多く出土している。また柵城跡からは中国産・東南アジア産などの海外貿易陶磁器をはじめとして、東播磨系須恵器や備前焼・常滑焼・徳之島産のカムイヤキなどの国内産が多く出土しており、なかでもカムイヤキは、現在のところ出土した遺跡の北限にあたる。これらの外来系遺物の存在は、五反田川・八房川を舞台とした活発な交易活動があったことを裏付けている。

近世の藩政時代には、交通の要地として市域の北部（旧串木野市域）と南部（旧市来町域）のそれぞれに御仮屋がおかれた。北部の御仮屋は串木野城跡に設置され、南部は、現在の市来支所敷地内にあった。北部の五反田川流域近くに所在する柵城跡からは、中世～近世を中心に採掘されたとされる溶結凝灰岩の石切場跡が検出されるなど、この地域は、かつて採石・石材業が盛んであった。特に旧串木野市の石工は技術的にも名高く、鉄道の敷設工事の拡張に伴い全国で活躍したという。一方、南部は西薩一の湊町として繁栄したほか、明治になって御仮屋跡に郡治所がおかれ、一時は日置・阿多・薩摩・出水・甌島各郡を統治する西薩行政の中心ともなった。しかし、明治22年国道が開通し、大正3年鹿児島本線（川内線）の開通等が相次ぐ一方、汽船時代には、河口港という弱点に加えて隣接串木野港の建設がはじまり、西薩の結節点としての地位を失って、急速に衰退していった。

【参考文献】

- 市来町郷土史編纂委員会編 1982 『市来町郷土史』 市来町
- 中原尚文 1982 「市来町」「串木野市」『鹿児島県風土記』 鹿児島県書店組合
- 新東晃一・堂込秀人編 1991 『川上（市来）貝塚』 市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
- 新町 正編 1999 『落シ平遺跡・瀧之段遺跡・才野ヶ原遺跡』 市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）
- 元田 順子編 2003 『市ノ原遺跡第1地点』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）

表2 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物・遺構	備考
1	浜ヶ城跡	いちき串木野市上名字	山麓	中世・近世	山城・一字一石経塚	
2	並松	いちき串木野市上名字並松	台地	縄文・古墳・中世・近世	黒曜石・縄文土器・成川式土器・陶磁器	
3	串木野城跡	いちき串木野市上名字麓	山麓	中世・近世	中世山城・御仮屋跡	
4	向井原	いちき串木野市上名字向井原	台地	縄文	縄文土器	
5	平石原	いちき串木野市上名字平石原	台地	縄文	黒曜石剥片・陶器	
6	椿城跡	いちき串木野市上名字門前ほか	台地 低地	旧石器～近世	石切場跡・鍛冶遺構・墨書刻書土器・土師器等	平成12～15年度調査
7	六目木	いちき串木野市上名字六目木	台地	縄文	石核・黒曜石剥片	
8	大六野	いちき串木野市上名字大六野	台地	縄文・歴史	石核・黒曜石剥片・土師器	
9	芋野原	いちき串木野市上名字芋野原	台地	中世・近世	土師器・陶器	
10	八郎堀	いちき串木野市上名字八郎堀	台地	縄文	黒曜石剥片	
11	休左右衛門堀	いちき串木野市上名字休左右衛門堀	台地	縄文	黒曜石剥片・甌式土器	
12	丘左右衛門堀	いちき串木野市上名字丘左右衛門堀	台地	縄文・歴史	黒曜石剥片・土師器	
13	東中之藪堀	いちき串木野市上名字東中之藪堀	台地	近世	陶器	
14	寺堀B	いちき串木野市上名字寺堀	台地	縄文・歴史・近世	黒曜石・土師器・陶器	
15	段ノ山	いちき串木野市下名字段ノ山	丘陵	縄文	黒曜石残核・剥片	
16	牛ノ江原	いちき串木野市川上牛ノ江原	丘陵	古墳・中世・近世	成川式土器・土師器・青磁	
17	川上(市来)貝塚	いちき串木野市川上中組	丘陵	縄文	市来式土器・指宿式土器・骨角器	平成2・4年度確認調査
18	川上中組墓塔群	いちき串木野市川上中組	山麓	中世	墓塔	
19	川上城跡	いちき串木野市川上中組	丘陵	中世	堀切・土塁	別称「椿城」
20	岩屋観音	いちき串木野市湊町外戸	山麓	不明	石像	平成8年度確認調査
21	外戸	いちき串木野市湊町外戸ほか	迫頭	弥生・中世・近世	弥生土器・土師器・青磁・陶器	平成14年度本調査
22	北ノ原	いちき串木野市湊北原	丘陵	古墳・中世	土師器・青磁・磁器	
23	市堀	いちき串木野市湊市堀	丘陵	古墳・中世・近世	成川式土器・土師器・土錘・陶器	
24	上平山	いちき串木野市大里上平山	段丘	弥生・古墳	弥生土器・成川式土器	
25	安茶ヶ原	いちき串木野市川上安茶中ほか	台地	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	旧石器・縄文土器・成川式土器・墨書土器・青白磁・陶磁器・鍛冶関連遺物	
26	中海瀬	いちき串木野市下名中海瀬	丘陵	縄文	黒曜石残核・剥片	
27	川口番所跡	いちき串木野市湊町天神	平地	近世	—	道路
28	町門の跡	いちき串木野市湊町天神	平地	近世	—	宅地
29	御仮屋跡	いちき串木野市湊町祇園	平地	近世	石垣	現市来支所
30	小原	いちき串木野市湊町小原	段丘	弥生	弥生土器	
31	草り田平	いちき串木野市湊町草り田平	段丘	中世・近世	土師器・陶器	
32	外戸山口	いちき串木野市湊町外戸山口	段丘	弥生・古墳・中世	弥生土器・成川式土器・土師器	
33	池原前	いちき串木野市大里池原前ほか	丘陵	古墳・中世・近世	成川式土器・土師器・陶器	平成7年度確認調査
34	重信城跡	いちき串木野市大里重信上城	台地	中世		表面採集
35	船着場跡	いちき串木野市大里駅前	平地	不明	樹木(ハマヒサカキ)	
36	佐保井東原	いちき串木野市大里佐保東原	台地	中世	土師器・青磁	
37	中尾東原	いちき串木野市大里中尾東原ほか	台地	中世・近世	土師器・青磁・陶磁器	
38	原ノ園原	いちき串木野市大里原ノ園原ほか	台地	弥生・古墳・中世・近世	弥生土器・土師器・陶器	
39	上城跡	いちき串木野市大里上城ほか	台地	旧石器・縄文・弥生・中世	台形石器・縄文土器・青磁・白磁	平成7～9年度本調査
40	詰城跡	いちき串木野市大里詰城ほか	台地	旧石器・縄文・弥生・中世	土塁・台形石器・縄文土器・青磁・白磁	
41	鍋ヶ城跡	いちき串木野市大里木場迫	台地	縄文・平安・中世	縄文土器・須恵器・青磁・白磁	平成7～9年度本調査
42	本寺屋敷	いちき串木野市大里本寺屋敷	微高地	古墳・中世・近世	成川式土器・土師器・陶器	平成6年度本調査
43	松尾平	いちき串木野市大里松尾平	丘陵	古墳・中世・近世	成川式土器・土師器・陶器	平成4年度本調査

第Ⅳ章 発掘調査の概要

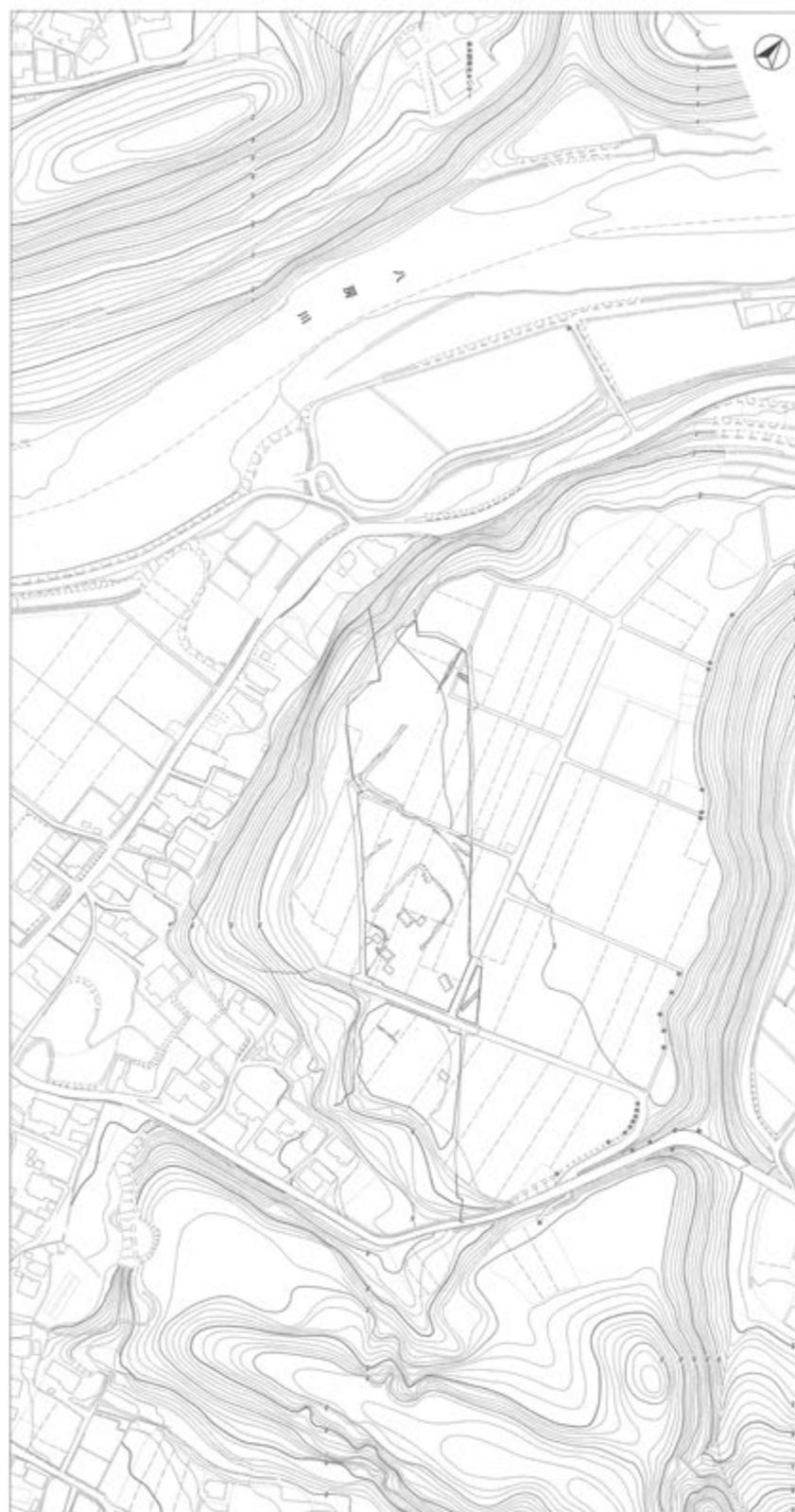
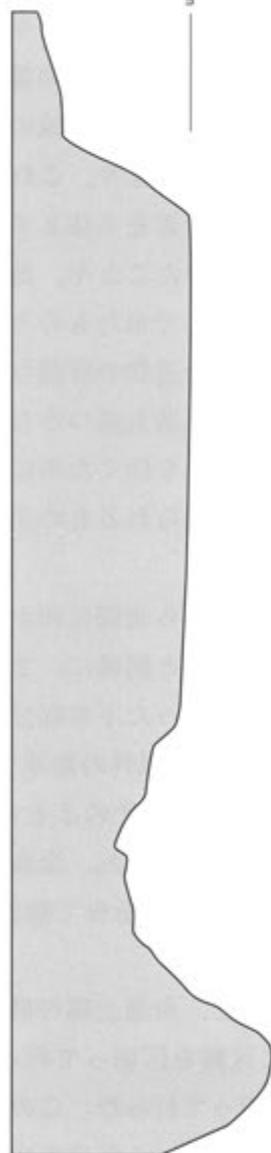
第1節 発掘調査の方法

平成10年度末の平成11年1月18日から同年3月11日まで、安茶ヶ原遺跡の確認調査を行うこととなり、台地南側の傾斜面の確認調査から始めることとした。これは、傾斜面には遺跡は所在しない可能性が大きいと考えたため、調査により本調査から除外できる面積を稼ぐことで調査面積の軽減を図ろうとしたためである。

調査は、地形を考慮して2m×5mを基本としたトレンチを5本設定し、山楯によって掘り下げを行った。その結果、斜面上部の傾斜の急な部分は、表土の下はすぐに2次シラス層となり、遺構・遺物は確認されなかった。一方、斜面下部の西側へ緩やかに傾斜した部分では、Ⅲ層の黄色土層（アカホヤの2次堆積層）中から古墳時代の土器が多量に出土した。そのため、この地域の2か所のトレンチを繋ぐとともに、幅を広げて全体的に拡張して調査を行った。調査により、これらのトレンチから出土した遺物は、成川式土器と呼ばれる在地性の強い古墳時代の土器を主体とするものの、礫やシラスに起因すると考えられる小粒の軽石が割合に多量に含まれていたことや、地形的に小さな迫状を呈していたことから、これらの遺物は南東側の台地から流れ込んで来たものと判断した。そのため、それ以上の拡張は行わず、この拡張したトレンチから出土した遺物の詳細な記録をもって、斜面部の調査を終了することとした。なお、土坑や溝などの遺構は1基も見つからなかった。調査時点でも、少量の雨でも地表を水が流れる様子が観察されたが、これを防ぐために住家の周囲には小さな溝を掘り、細い竹を溝の中に並べて埋めて作った「暗渠」と見られるものがあったことを付記しておきたい。

次に、台地上部の調査に取りかかった。調査期間から考えて、台地の縁辺部から北側に向かった台地上の最初の道までの部分を対象として調査を行うこととした。ここも斜面部と同様に、2m×5mを基本としたトレンチを8本設定し、掘り下げを行った。その結果、段になった下の部分の表土下はすぐに2次シラス層となり、遺構・遺物は確認されなかった。しかし、それ以外の地域では、ほぼ全面に道跡や溝状遺構・ピットなどが検出され、一部からは遺物も出土した。そのことから、段の上の部分にはほぼ全面に遺構、場合によっては遺物が広がっていることが想定され、全面調査を行うことが相当との結論に達した。台地の縁辺部から最初の道までの部分の表土を全て除去し、層位的に掘り下げを行った。

グリッドは台地縁辺付近にあった道路の計画幅のほぼ中央部のKE3-2杭と、台地上部の最初の道と2番目の道の間にあったNo.145杭とを結ぶ線を主軸とし、10m毎に区画を区切って行った。次に、KE3-2杭を基準として直角に振り、そこからも10m毎に区画を区切って行った。このKE3-2杭をグリッド設定の基準杭とすることとして、南北方向は、傾斜面に接している町道の南の端を1区とし、北へ向かって2、3、…として13区までを付け、東西方向は東の端をA区とし、B、C、…としてJ区までを付け、E-8区などと呼称することとした。調査によって掘立柱建物跡2棟や多数のピット、2条の溝状遺構、3本の道跡などが検出されたほか、土坑から「日置厨」と墨書された須恵器など数点も出土した。



L=25m



第8图 周边地形图



第9図 グリッド配置図



第10図 トレンチ配置図

翌平成11年度からは、平成14年度まで年次的に計画的に調査を行った。多年次にわたったのは、調査区に数ヶ所の未買収地があったため、最終的に4ヶ年度にわたる調査となった。確認調査は平成10年度に行い、その結論として調査区域全体にわたって遺構・遺物が広がることが明確となっていたため、調査は当該年度の調査区域全体の表土剥ぎを重機で行った後に、掘り下げを行った。グリッドは平成10年度に設定したものを北側に延長する形で設定していった。調査時に未買収地であった部分については、その区域を避けて調査を行い、建設省鹿児島国道工事事務所（現国土交通省鹿児島国道事務所）から買収済みの通知を受けた後に調査を行った。そのため、南側から計画的に済ませていくという当初の目論見通りには行かず、結果的に、進みつつも引き返すことを余儀なくされた。そのようにして4年次にわたる本調査の結果、縄文時代から近世までの遺構・遺物が調査区域全体から検出・出土した。

調査終了後は、大まかに埋め戻しを行った後に、鹿児島国道事務所へ引き渡しを行って発掘調査の全てを終了した。



作業風景

第2節 遺跡の層序

本遺跡は独立した台地であり、調査開始時はすべて畑として耕作が行われていたことから、安定した層序が考えられたが、実際に調査を行ってみると、全体としては安定しているものの、部分的にはⅡ層を中心として欠落している状況が見られた。これは、現在は平坦となつてはいるものの、旧地形としてある程度起伏があったものが、後世の畑地造成によって現在のような状況となったものと想定される。この造成の段階で、層の欠損という事態が起きたものであろう。

なお、土層断面図を作成するための調査区域全体を通したベルトの設定は行っていない。その理由は、最終年次を除く数年にわたる調査時点で未買収地が散在しており、その範囲が広く、そこへの立ち入りを禁止されていたため、各年次毎に調査区域内でベルトを設定せざるを得なかったためである。また、Ⅵ層以下の下層確認も任意に設定して掘り下げを行った。

本遺跡の基本的な土層は以下の通りである。

I 層 灰褐色土層。表土，耕作土

耕作等によりⅡ層以下の包含層が破壊されたことにより、遺物が見られる。

成川式土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・薩摩焼・染付・鉄製品・韃羽口・石器等

II 層 黒色土層（古代～中・近世の遺物包含層）

B～G-5～13区ではほとんど残らない。

土師器・須恵器・染付・鉄製品・韃羽口・陶器・磁器・青磁・白磁・滑石製石鍋等

III 層 黄色土層（アカホヤ火山灰の2次堆積層）

（縄文晩期～古墳時代の遺物包含層）

黒川式土器・刻目突帯文土器・磨製石斧・磨石・敲石・石鏃・黒曜石剥片・成川式土器等

IV 層 暗茶褐色土層（縄文早期～後期の遺物包含層）

前平式土器・三万田式土器・打製石斧・磨石・敲石・石鏃・石皿・黒曜石原石等

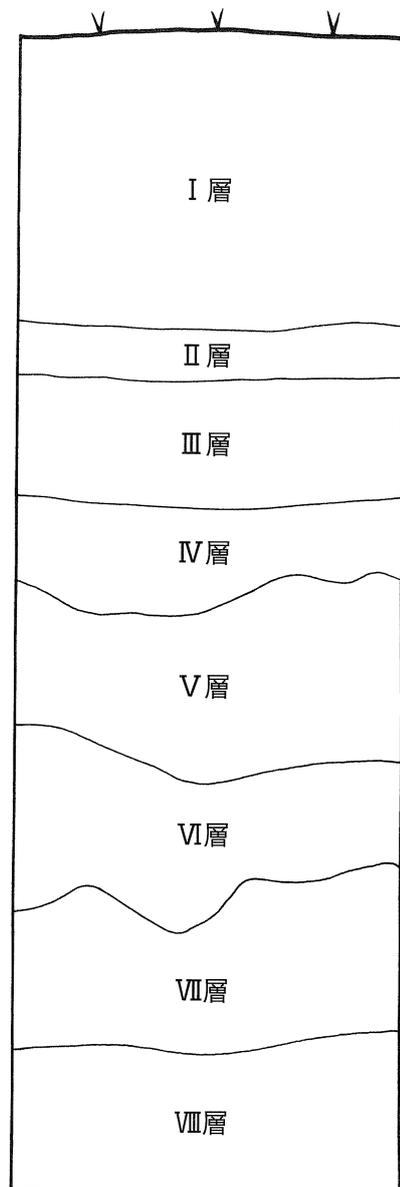
V 層 暗茶褐色粘質土層（チョココ層）

VI 層 黄色砂礫層（深さ約4 m。多量の礫含む）

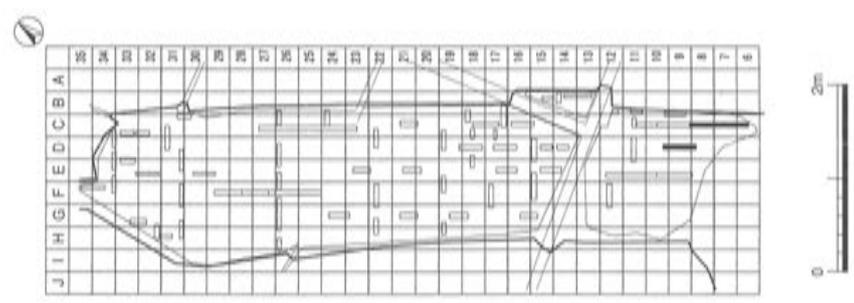
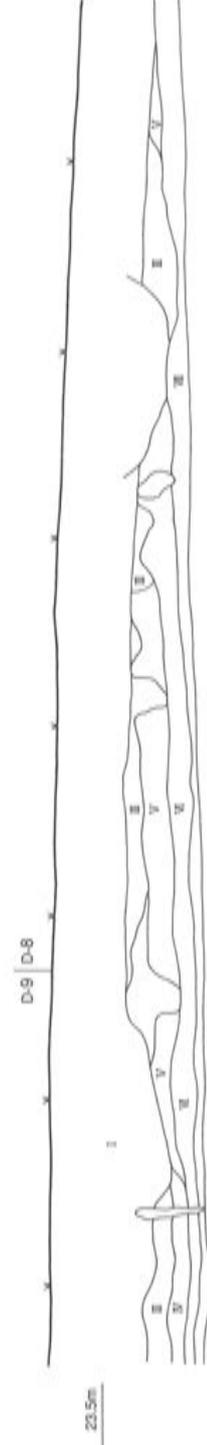
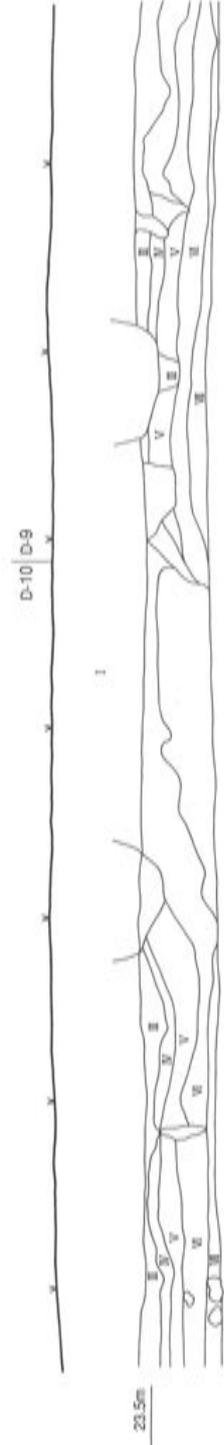
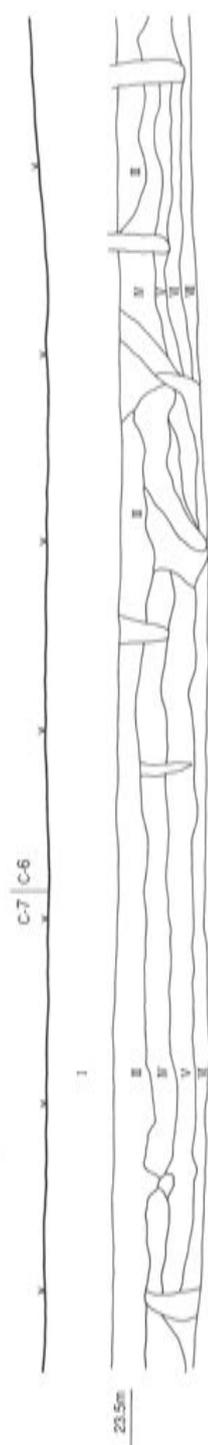
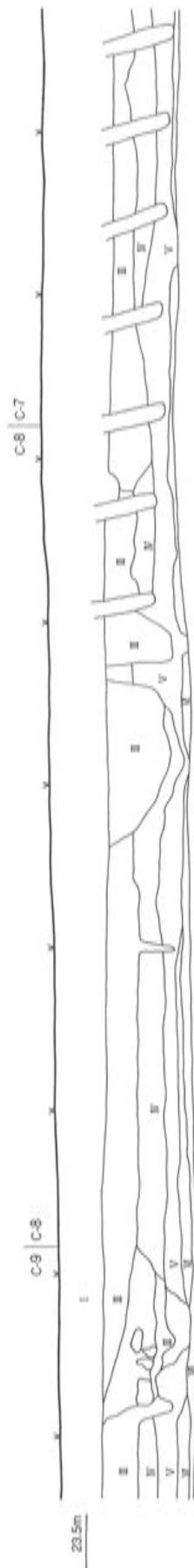
この層はシラス堆積後早期の八房川の暴れによってもたらされたと考えられる。黒曜石が出土するものの、人為的なものではなく、上流に平木場という黒曜石の原産地があることから、そこからの転石であろう。

VII 層 淡桃～淡黄，白色砂質層（2次シラス）

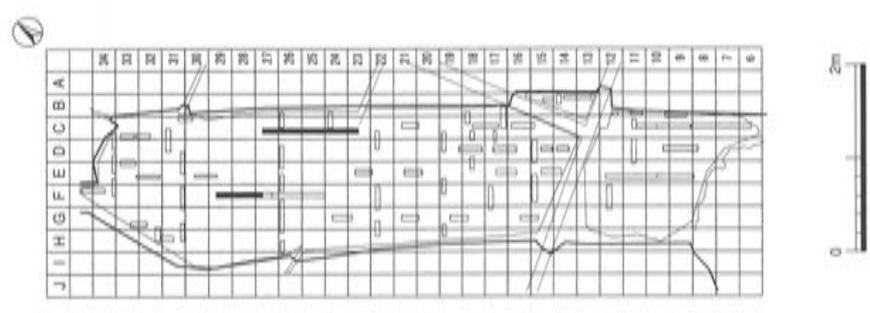
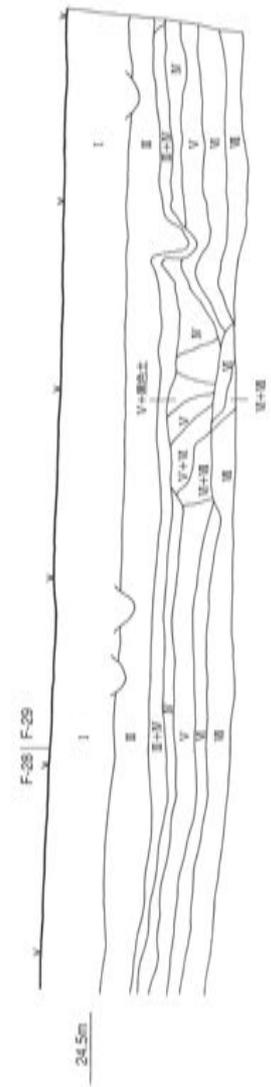
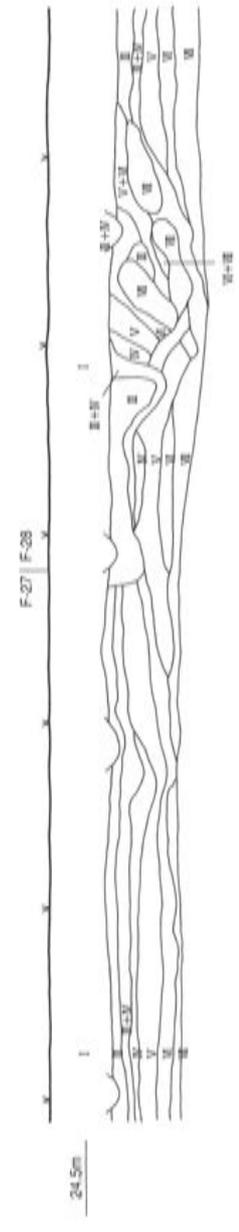
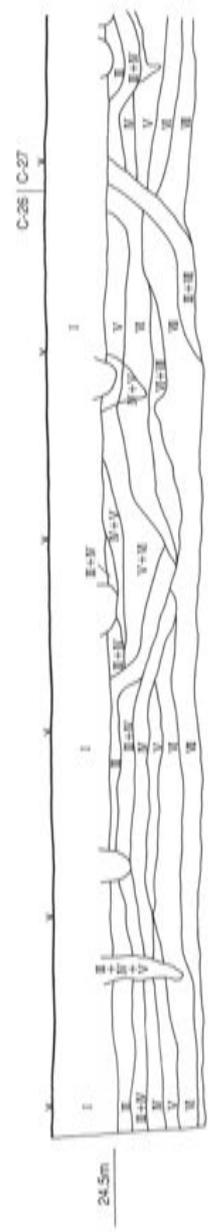
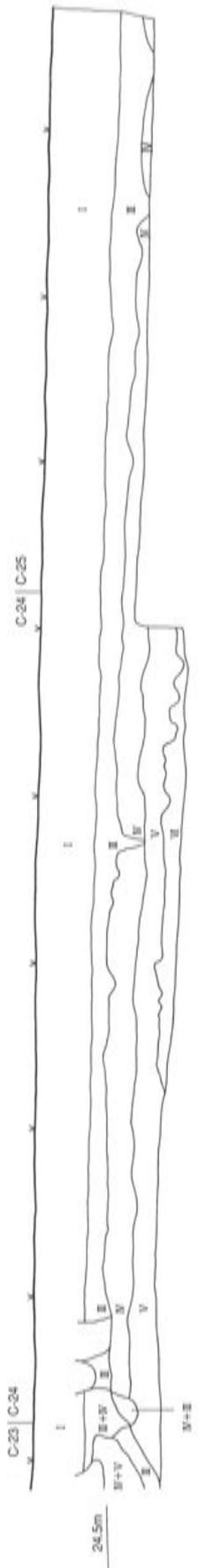
VIII 層 黄色砂礫層



第11図 基本土層図



第12图 土层断面图(1)



第14図 土層断面図(3)

第V章 発掘調査の成果

第1節 縄文時代の調査

縄文時代の遺構・遺物は、Ⅲ層～Ⅴ層にかけて確認された。Ⅲ層はアカホヤ火山灰の2次堆積層、Ⅳ層は暗茶褐色土層、Ⅴ層は暗茶褐色粘質土層（通称チョコ層）である。ただし、安茶ヶ原遺跡は状地形が河岸段丘状を呈しており、場所によっては旧石器時代の遺物がⅢ層やⅤ層などから出土するなど、原位置を留めないものも多い。よって、層位的には必ずしも安定したものではなく、時期ごとに明確に分層することは不可能である。また、中世に相当するⅡ層が、削平を受けてほとんど残存していないため、Ⅲ層からは縄文時代以降の遺物も出土している状況も見られる。

縄文時代の遺構は集石・土坑・集積が検出された。なお、集積は、いずれも掘り込み等は確認されておらず、またSS02は遺物の出土層位も異なっており、遺構と認定するか否かに検討の余地を残しているが、遺物の集中度が比較的高いことと、調査担当者の当時の判断を尊重し、遺構として扱った。

1-1：縄文時代の検出遺構

①集石

【SZ01集石】（第17図）

SZ01はF・G-29区で検出され、82個の礫で構成されている。この1基のみ明確な掘り込みをもつものである。土坑の平面形は、長径119cm、短径91cmの楕円形で、検出面からの深さ約10cmである。この浅い土坑内に、111cm×52cmの範囲にわたって、北側に偏ったような状態で礫が広がっている。検出された礫の高低差は約10cmである。

【SZ02集石】（第17図）

SZ02はE-30区で検出され、50cm×40cmの範囲に広がっており、24個の礫で構成されている。礫の高低差は約18cmであり、レベル的にはまとまっていると言える。また平面的にもある程度のまとまりと言えなくもないが、2ヶ所ほどで礫のない部分が見られることから、抜き取りを示しているとも考えられる。安山岩と凝灰岩で構成されており、円礫と角礫とが相半ばしていると言える。赤化しているものが約3分の1で、赤化していないものも多い。

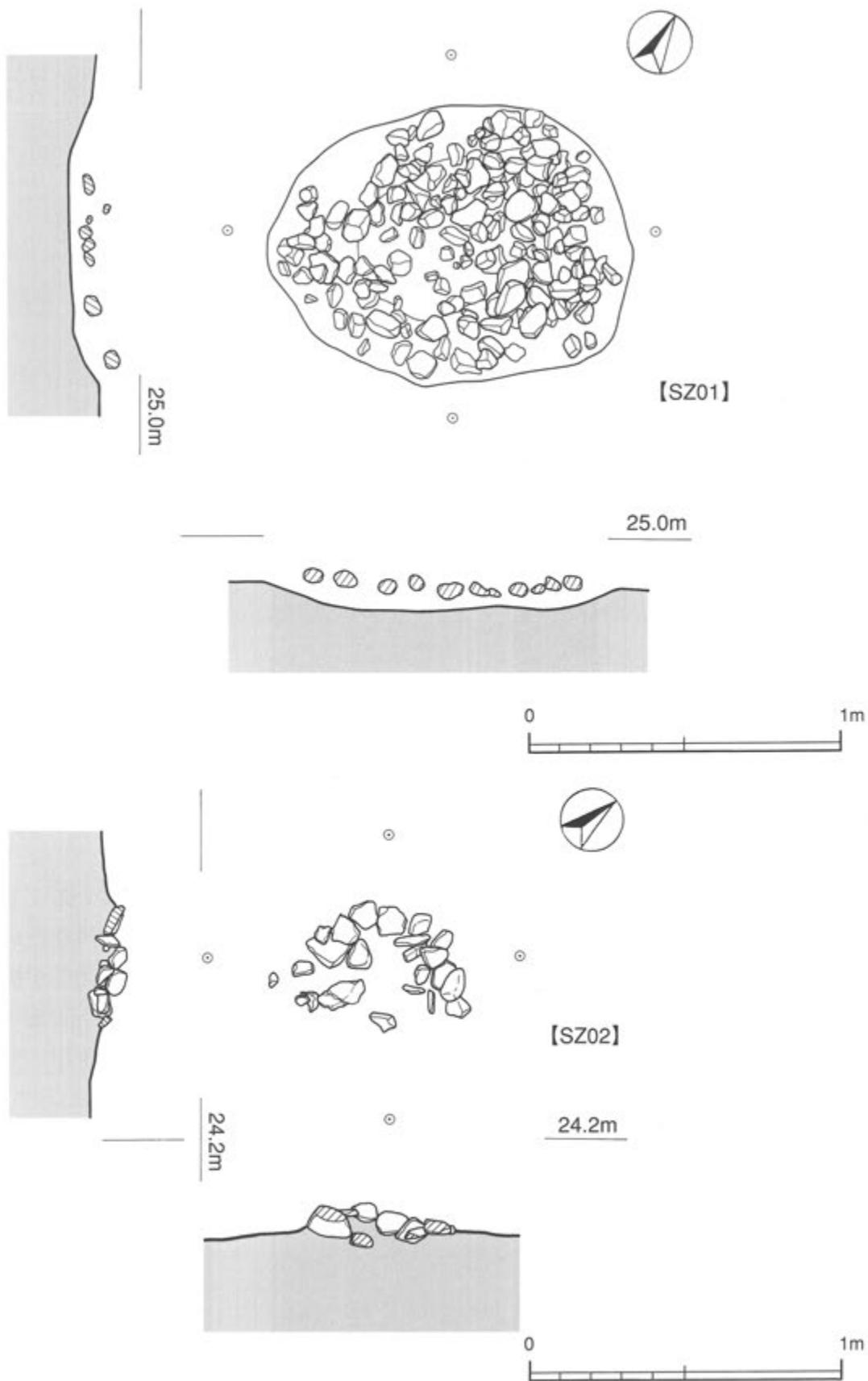
【SZ03集石】（第18図）

SZ03はC-30区のⅤ層で検出され、200cm×118cmの範囲に広がっており、30個の礫で構成されている。礫の高低差は約18cmであり、レベル的にはまとまっているものの、平面的にはばらけている。石皿1点と土器片数点を含んでおり、そのことから一般的な意味での集石とは趣が異なっていることは否めない。散在している状況から考えても石蒸しの場としては考えられず、遺棄または使用のために仮置きしている状態とも考えられる。

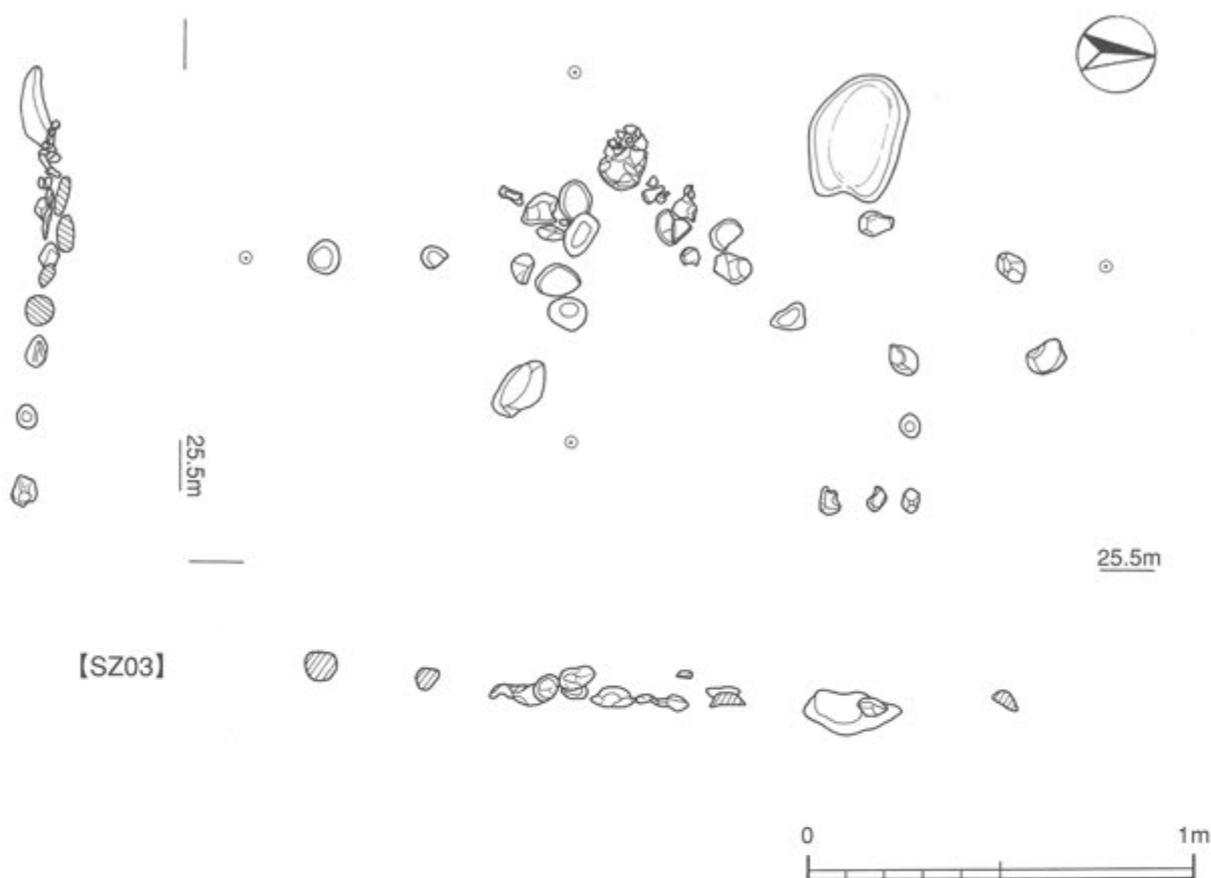
1はSZ03から出土した石皿である。安山岩製で、最大長30.4cm・最大幅23.6cm・重量が約8.5kgある。磨面が顕著で、使用によって大きく凹んでいる。また側面上部にノミ状の痕跡が4ヶ所ほど認められる。1つの箇所にも4～6条の痕跡が認められるが、石皿の成形時の痕跡なのか、後世のキズ



第16図 縄文時代遺構配置図



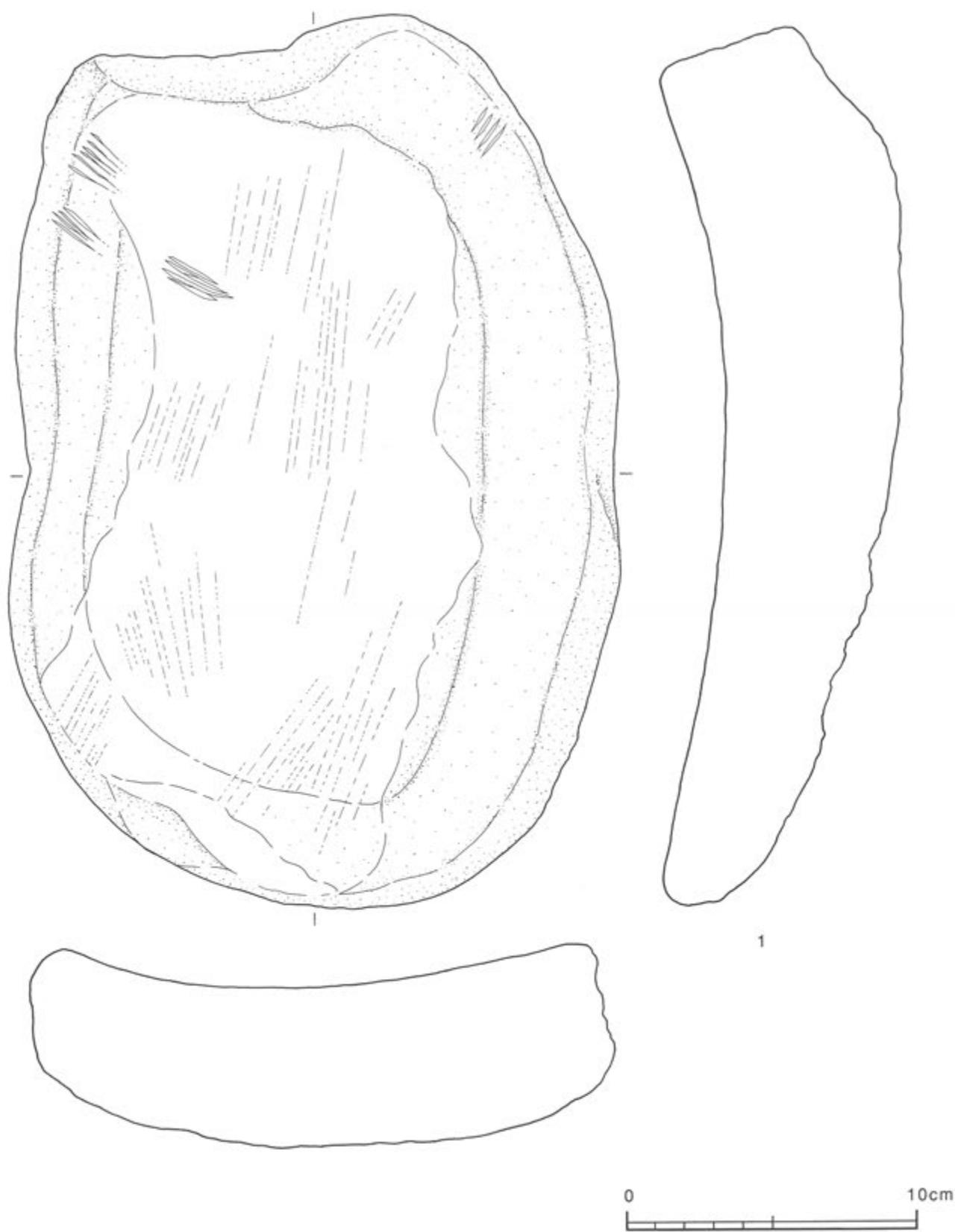
第17図 SZ01・SZ02



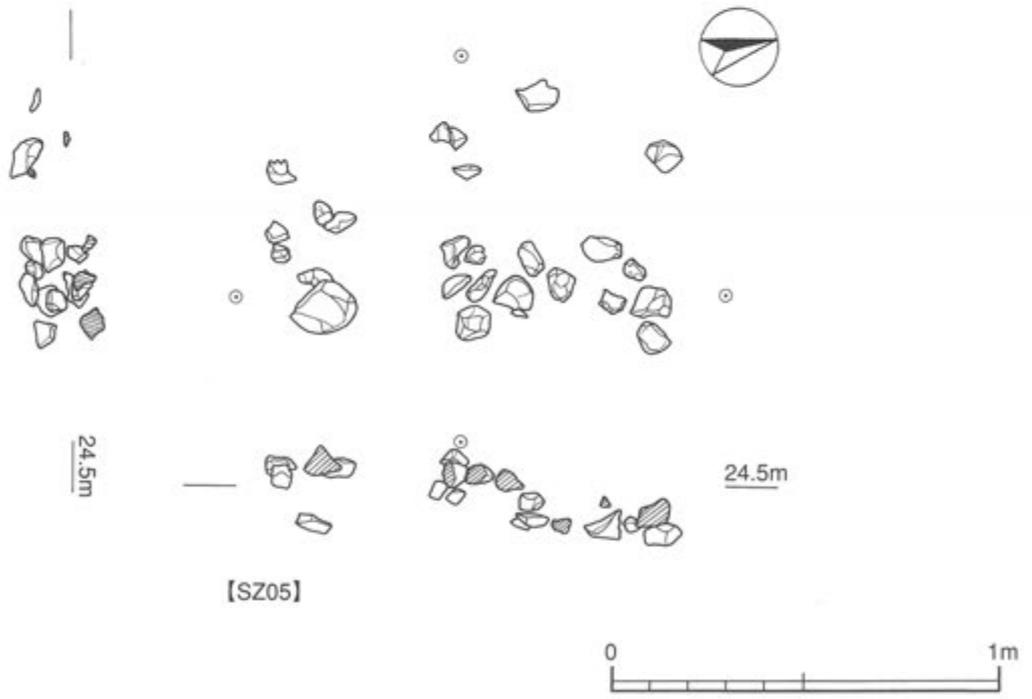
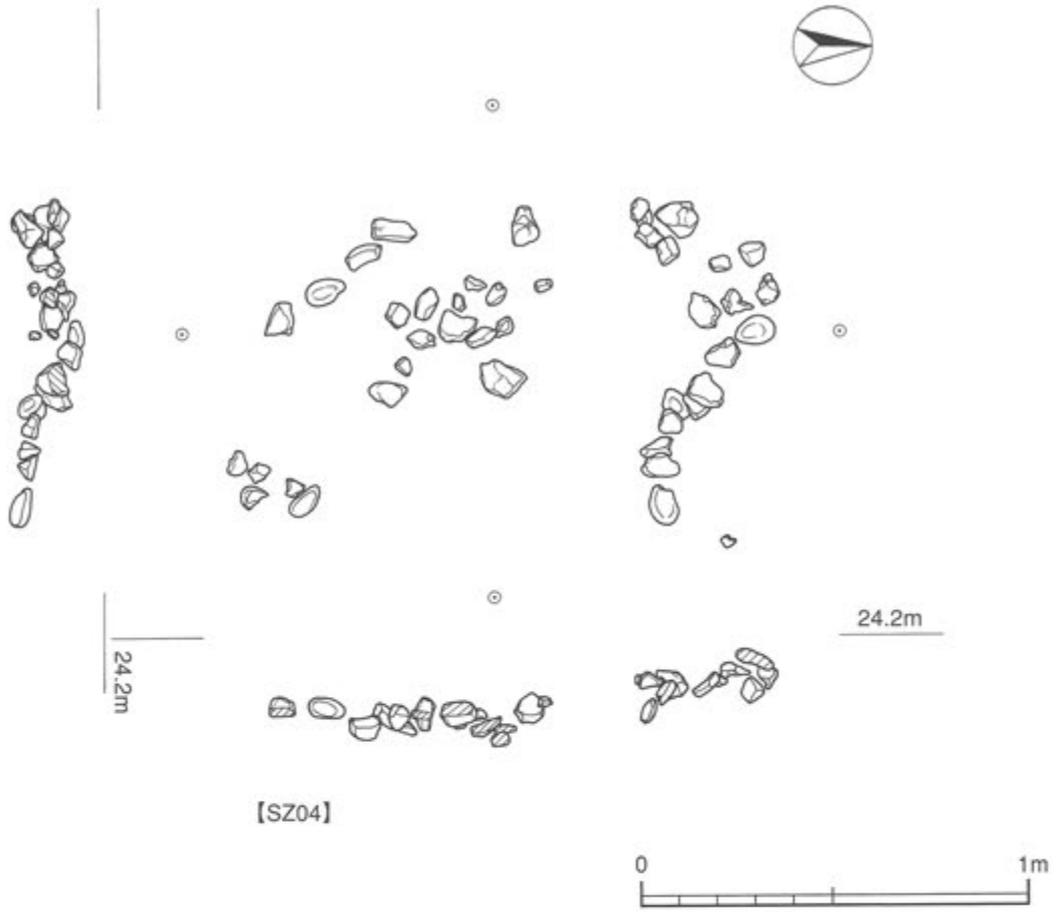
第18図 SZ03

なのかは不明である。この石皿で特徴的なのは、片方の端を突起状に作出していることである。この意味については、装飾的な意味合いと磨り潰したものの受け口となっていた可能性が想定されており、万之瀬川下流域の遺跡群や山ノ中遺跡など、後期前半の遺跡における共通性が指摘されている（東編2006）。安茶ヶ原遺跡出土のものはIV層から出土している。IV層は早期～後期に比定されており、これ以上の時期特定はできないが、形状的には万之瀬川下流域の遺跡群や山ノ中遺跡のものと類似していることから、安茶ヶ原遺跡のものも後期前半頃の可能性がある。

東 和幸編 2006 『山ノ中遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（103）



第19図 SZ03 出土遺物



第20図 SZ04・SZ05

【SZ04集石】（第20図）

SZ04はF-32区で検出され、145cm×95cmの範囲に広がっており、43個の礫で構成されている。礫の高低差は25cmであり、レベル的にも平面的にもまとまっていると言える。石材は安山岩と砂岩で構成されており、一部に角礫を含むものの、円礫や扁平礫が多い。中には磨石と考えられるものが1点含まれている。礫は約半数が赤化している。

【SZ05集石】（第20図）

SZ05はB・C-27区で検出され、115cm×84cmの範囲に広がっており、28個の礫で構成されている。礫の高低差は27cmであり、レベル的にも平面的にもある程度まとまっていると言える。角礫が大部分を占めている。

②土坑

【SK01土坑】（第21図）

SK01はF-25区で検出された。長径110cm、短径60cm、深さ約37cmの不整形を呈する。内部にはピット状の部分が2ヶ所認められる。埋土中より吉田式土器の口縁部と胴部小片が2点出土している。出土遺物より早期の土坑と考えられる。

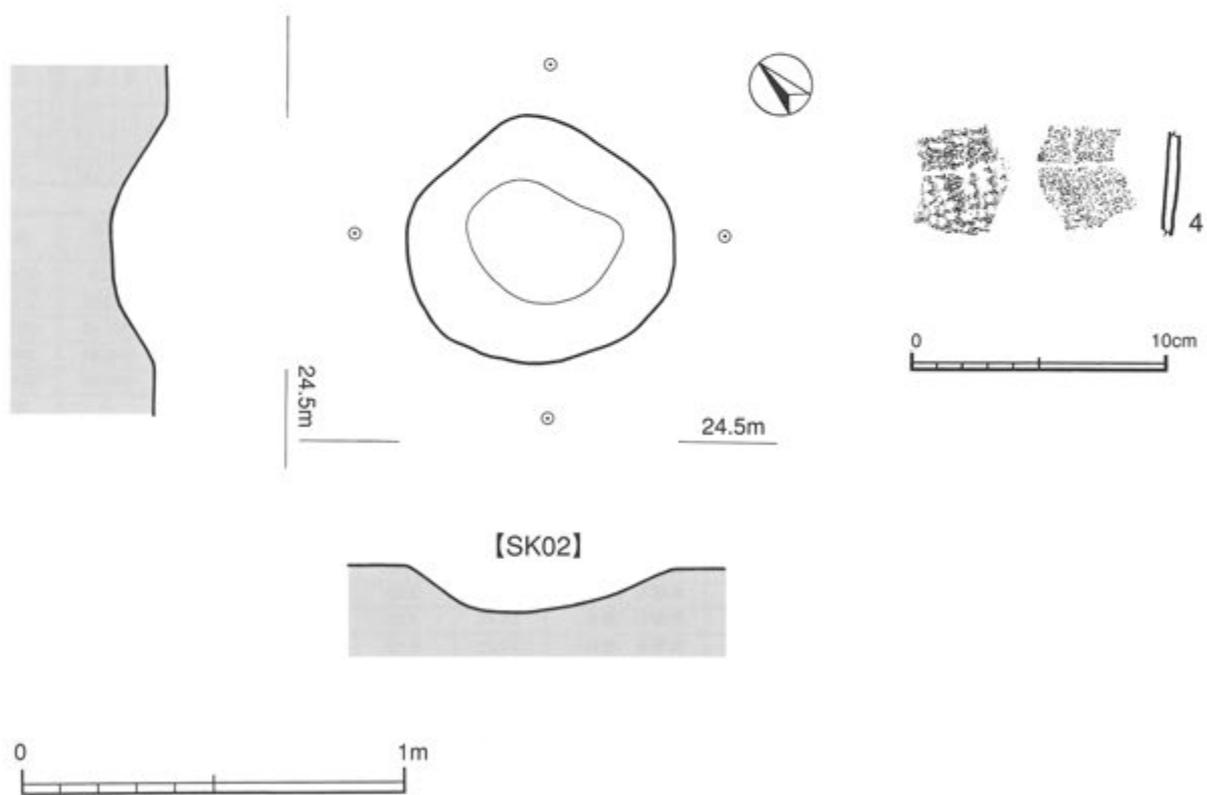
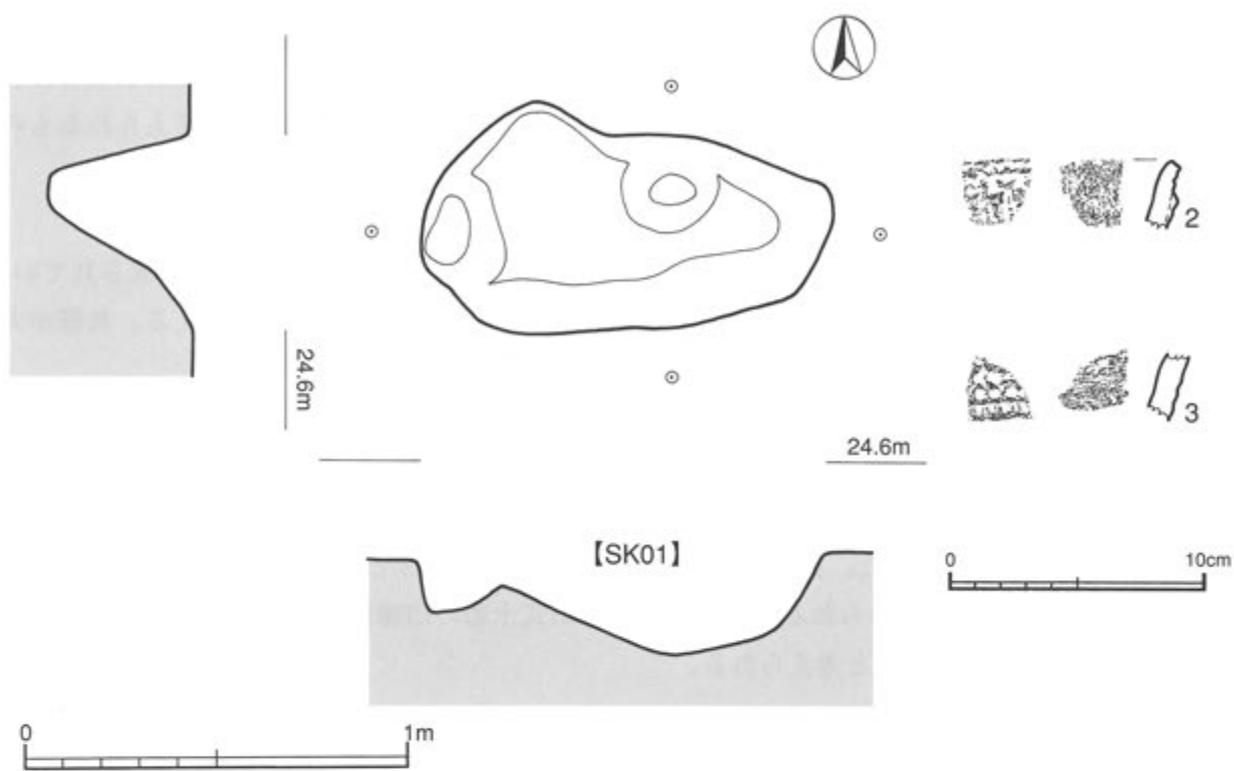
【SK02土坑】（第21図）

SK02はG-26区で検出された。長径70cm、短径65cm、深さ約15cmの小形で浅い土坑である。埋土中より吉田式土器の胴部片が1点出土している。早期の土坑と考えられる。

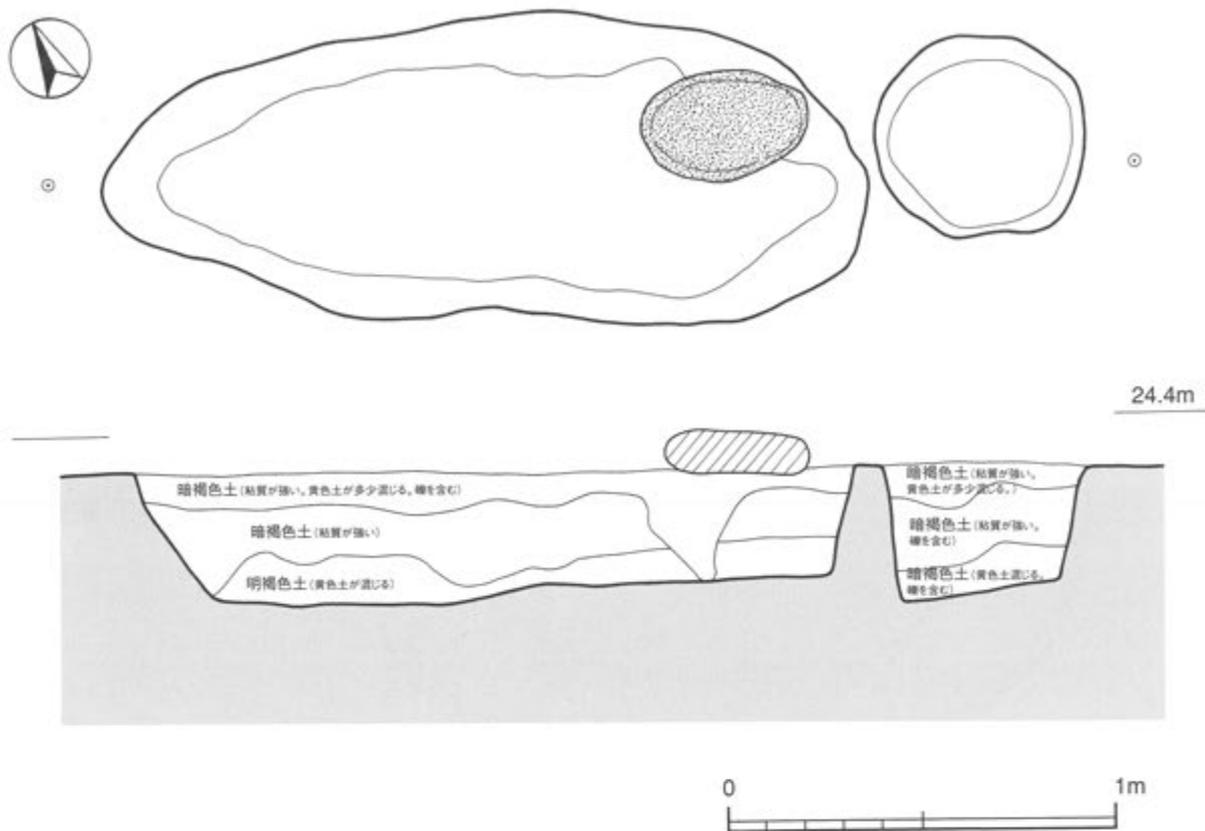
表3 縄文時代遺構内遺物観察表

挿図 番号	報告 番号	出土区/層	遺構	器種	部位	焼成	色 調		調 整		石 英	長 石	角 閃 石	輝 石	そ の 他
							(外面)	(内面)	(外面)	(内面)					
21	2	F-25/埋土	SK01	深鉢	口縁	不良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻腹縁文	ナデ	○	○	○	○	○
	3	F-25/埋土	SK01	深鉢	胴	不良	にぶい黄橙	にぶい黄褐	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○
	4	G-26/埋土	SK02	深鉢	胴	不良	にぶい橙	浅黄橙	貝殻刺突文	ナデ		○		○	

挿図 番号	報告 番号	取上 番号	出土区/層	遺構	器種	石材	標高 (m)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
19	1	13651	C-30/Ⅲ	SZ03	石皿	安山岩	24.12	30.4	23.6	10.7	8530	完形品
23	5	14765	F-32/埋土	SK03	石皿	安山岩	24.27	37.5	29.5	10.9	17200	完形品
25	6	372	G-29/Ⅲ	SS01	磨石	安山岩	23.38	9.9	8.0	5.4	625.40	完形品
	7	373	G-29/Ⅲ	SS01	磨石	安山岩	23.42	10.4	9.0	5.0	699.80	完形品
26	8	3711	G-29/Ⅲ	SS01	磨石	安山岩	24.30	10.1	8.8	4.4	586.90	完形品
	9	—	G-29/Ⅲ	SS01	敲石	凝灰岩	—	(7.5)	(8.0)	5.5	—	欠損
29	10	12752	G-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	24.21	5.40	5.90	1.35	36.20	—
	11	12743	G-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	24.25	4.60	5.20	1.05	18.60	—
	12	12746	G-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	24.20	4.55	6.20	1.50	39.50	—
	13	12745	G-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	24.26	2.85	3.20	1.30	13.80	—
	14	12749	G-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	24.13	4.60	5.25	1.20	25.10	—
	15	13152	G-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	23.97	4.50	3.90	1.30	17.20	—
	16	13399	G-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	23.87	3.90	5.40	1.10	16.40	—
	17	13161	H-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	23.97	3.55	3.70	1.05	8.50	—
	18	12751	G-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	24.21	5.10	4.80	1.30	20.20	—
	19	13397	G-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	23.88	5.65	4.30	1.20	25.60	—
	20	13400	G-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	23.87	4.80	3.90	1.10	22.80	—
21	12747	G-30/Ⅲ	SS02	剥片	黒曜石(腰岳)	24.08	3.90	3.50	1.00	7.10	—	



第21図 SK01・SK02

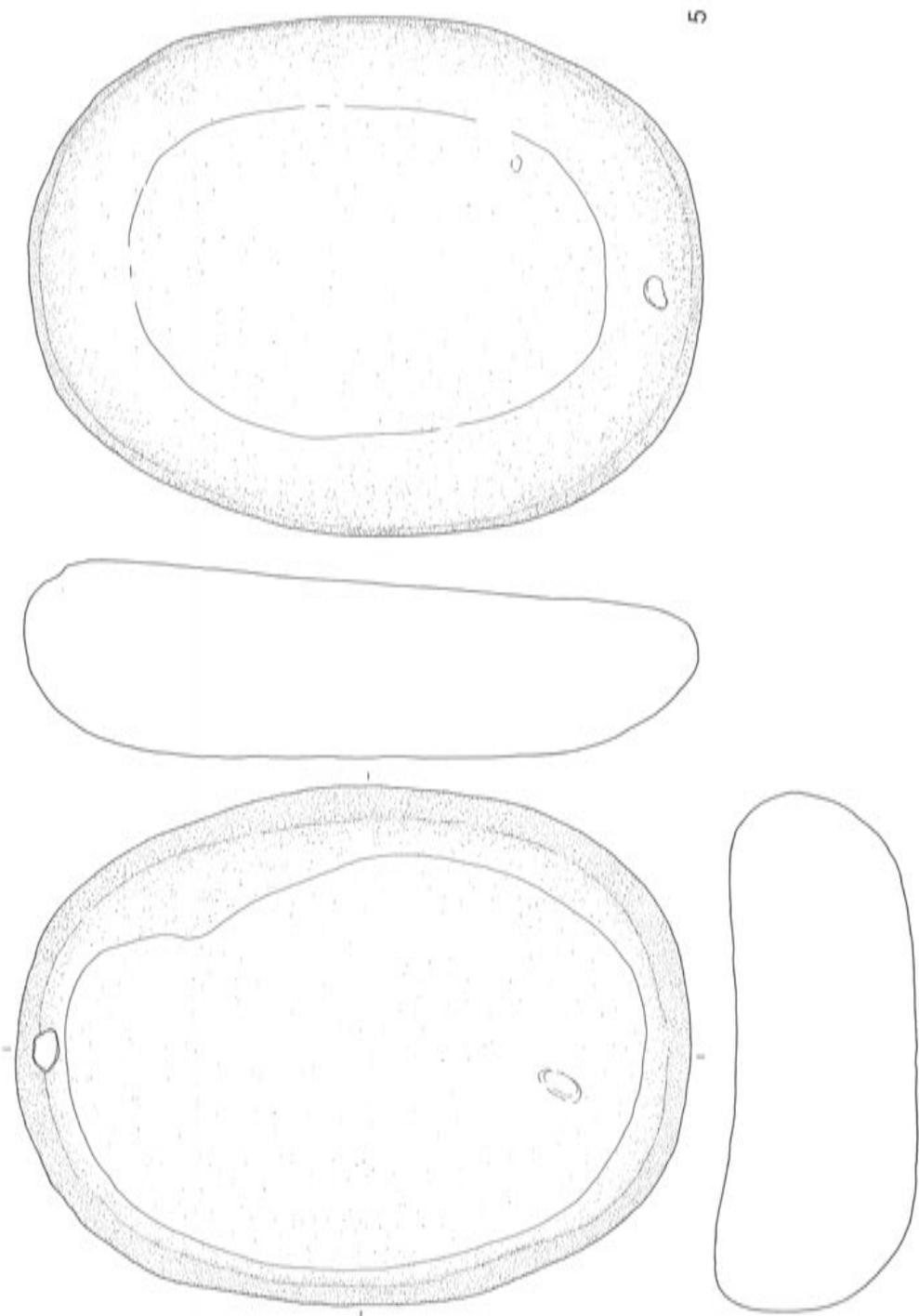


第22図 SK03

【SK03土坑】(第22・23図)

SK03はF-32区で検出された。Ⅲ層の掘り下げが終わった段階のⅣ層面で確認したことから、縄文時代後期か晩期頃のものとして推定している。Ⅳ層の掘り下げを行っている最中に石皿が出土し、周囲の確認を行っている段階で長楕円形の土坑のプランを検出した。この土坑に隣接して軸を同じくするように円形の土坑が検出されたことから、連穴土坑の可能性もあると考えて調査を進めていったが、連穴土坑のブリッジに当たる部分がトンネル状になっていなかったことから、その可能性は否定された。結局、2基の土坑が並ぶように作られ、そのうちの長楕円形のものに東側に置かれた石皿であることが判明した。

次に長軸方向に主軸を定めて南側半分を丁寧に掘り下げていった。その結果として、この土坑の埋土は3層に分層され、最上の層に石皿があるということが判明した。この最上部の埋土は石皿のある辺りから底面にかけて部分的に沈んだ状態で確認された。このことは、この石皿が土坑に伴うものであるのかどうか、必ずしも明確ではないことを意味している。つまり、以下の2つの考えが想定される。



第23図 SK03 出土遺物

①石皿は土坑に伴うものである

土坑が掘られ、それを埋める段階で下の2層を埋めた後に、最上部の3層目を埋め、その途中の上部、あるいは最上部に石皿を置いたとする考え方。

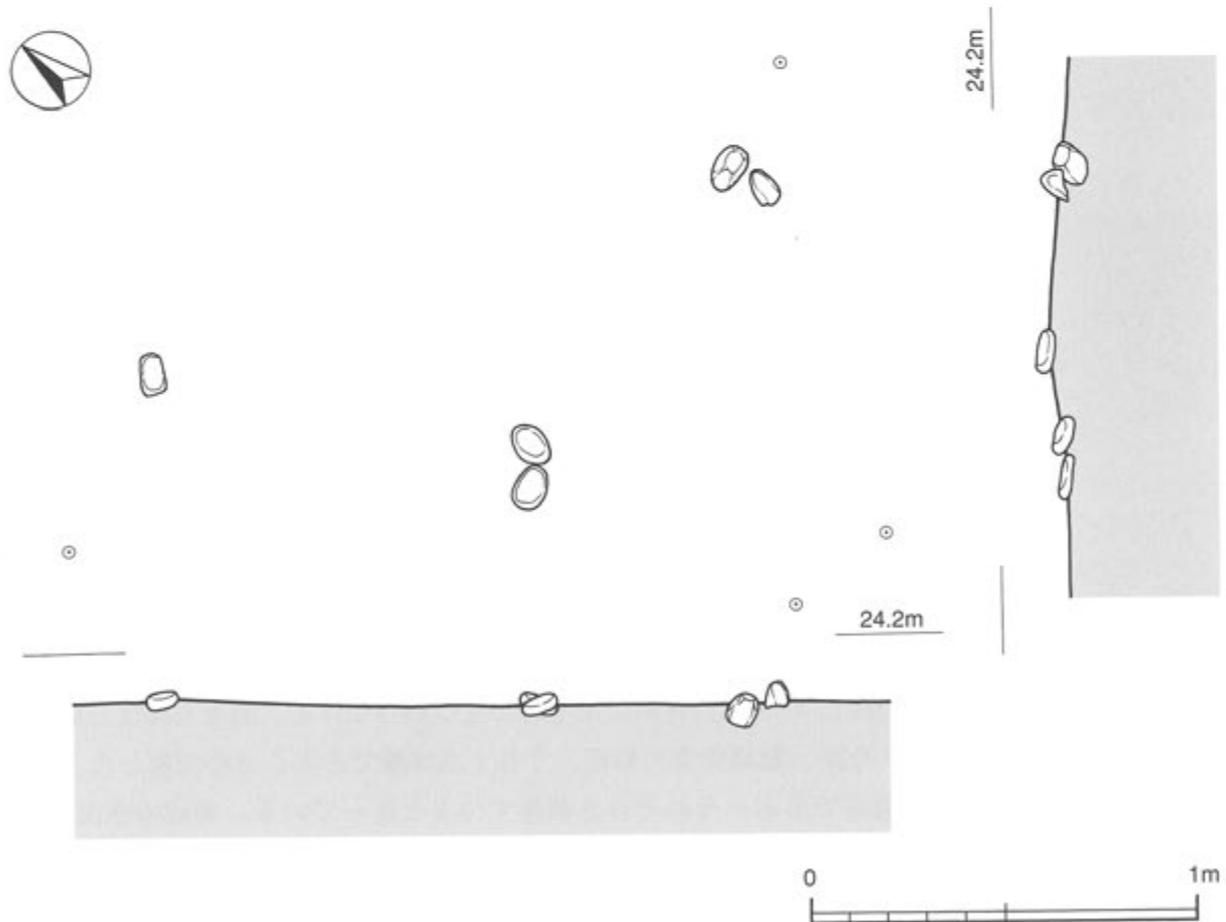
②石皿は土坑とは無関係なものである

土坑が掘られ、3層目まで埋められた後に、その上に石皿を置いたとする考え方。

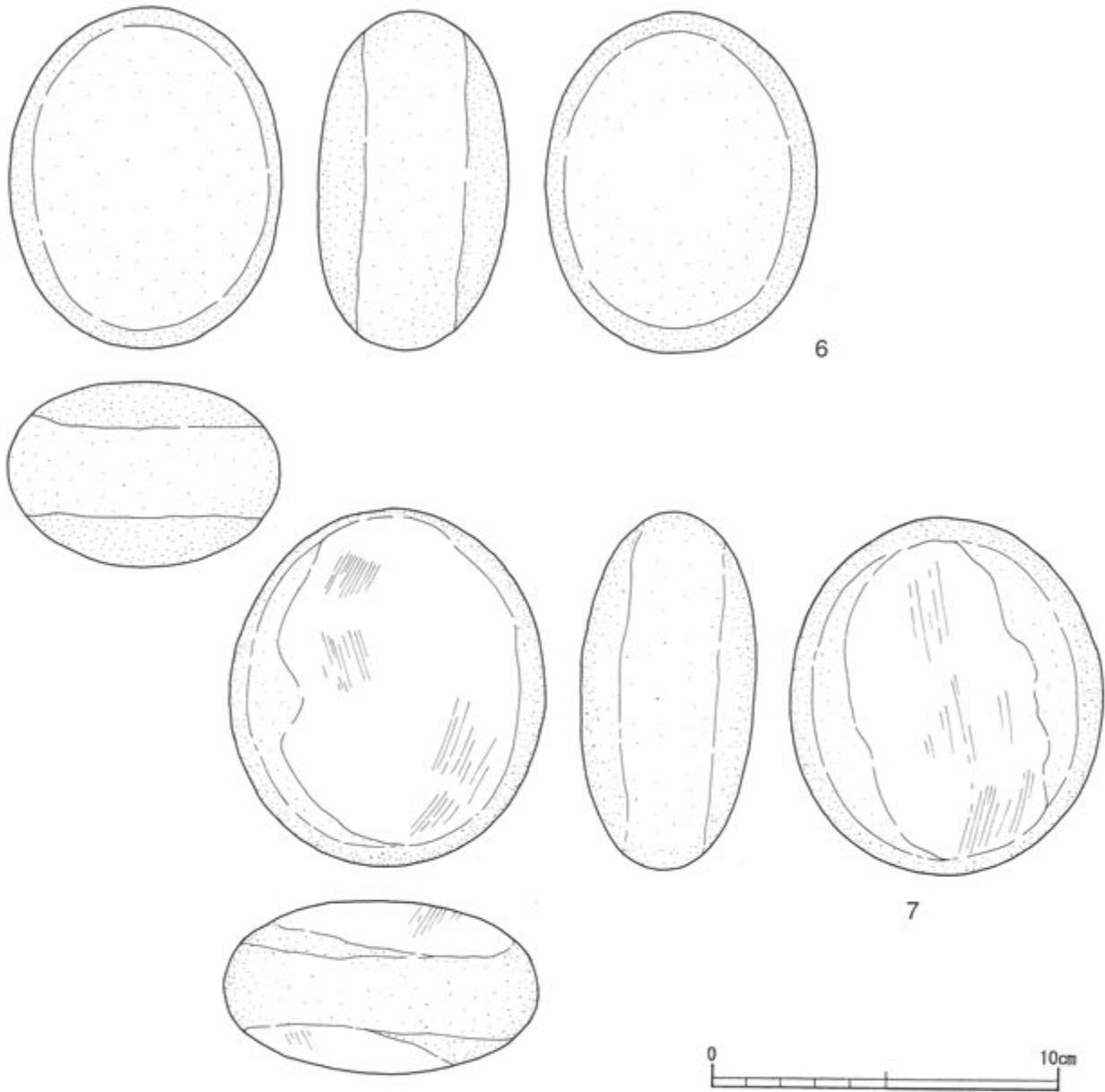
ここではそれを決定する要因は確認できなかったが、石皿が最上部の3層の中に埋まっている状況から推定して、①の考え方、つまり、土坑に伴うものであると考えておきたい。

石皿が土坑に伴うと考えた場合、その土坑が墓である可能性が浮上してくる。つまり、墓、特に女性の墓にその女性が用いた道具である石皿を供えた可能性が考えられるが、埋土中からは人骨、あるいは粉状の白いものなどは検出できなかった。ただ、このことが、即、墓であることを否定するものではないことはもちろんである。

出土した石皿は、安山岩の円盤を用いて製作されており、長さは37.5cm、幅は30cm、厚さは10.5cmである。中央部が若干窪むもので、完形である。



第24図 SS01



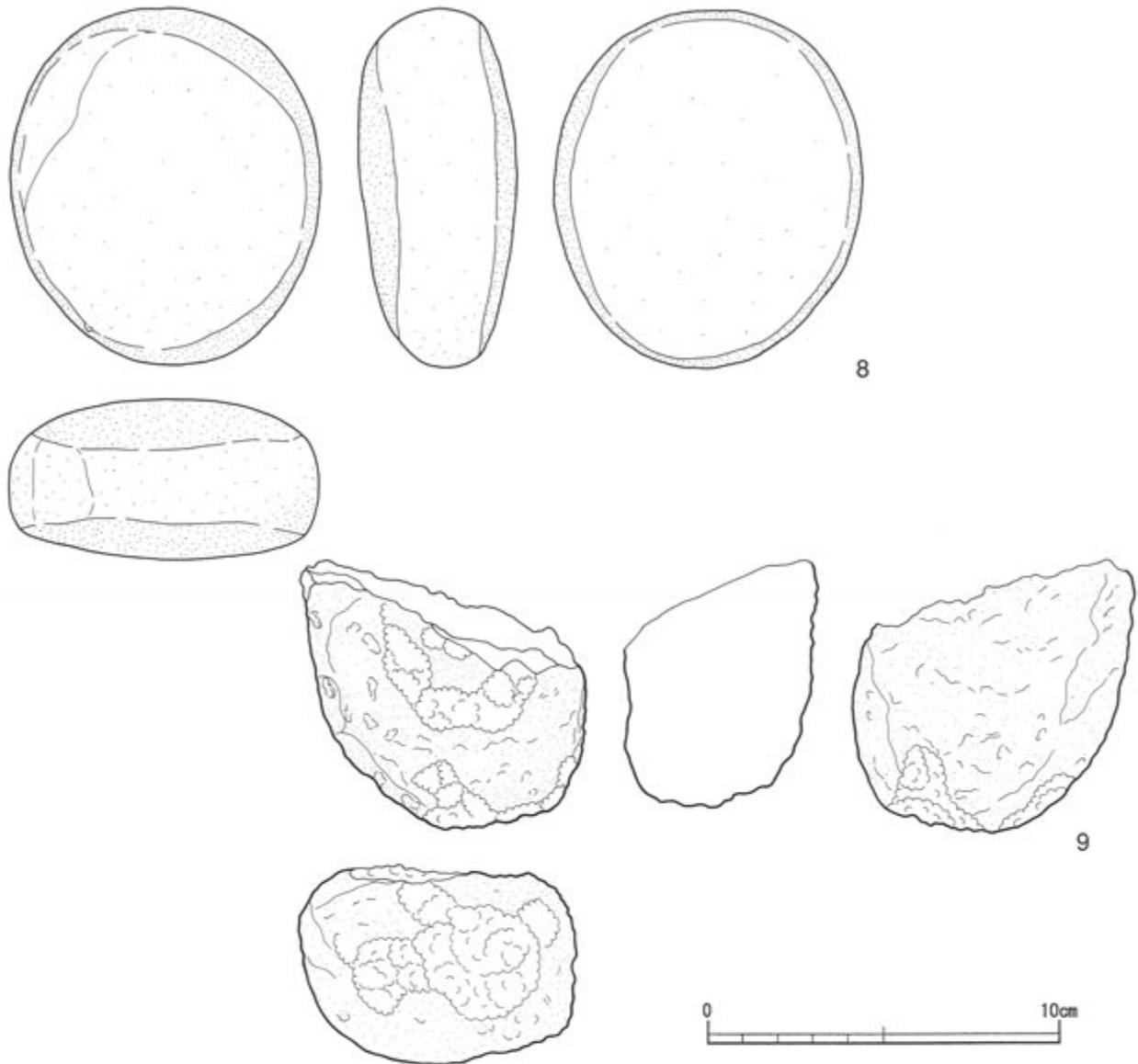
第25図 SS01出土遺物(1)

③集積

【SS01集積】(第24・25・26図)

G-29区で検出された。約180cm×80cmの範囲に集中的に見つっている。調査当時は石器5点から構成されていると考えられたが、整理作業の結果、うち1点は礫であることが判明した。4点のうち3点は磨石で、1点は敲石である。それぞれ2個体ずつまとまっている。周辺の状態からは、時期を特定できる遺物は見られなかった。

上述したように、1点は礫であることが判明したため、5点のうち4点を図化した。6～8は石材が安山岩で、楕円形を呈しており、広い両面が主に磨られているほか、側面も磨られている。長



第26図 SS01出土遺物(2)

さが10cm程度、幅は8～9cmで、厚さも4.5～5.5cmと、ある程度大きさが揃っていると言える。7は広い面に擦痕が顕著に見られる。8は側面が部分的に面取りされているように見えるものである。これらに対して、9は敲石である。石材として凝灰岩が用いられており、また、形状も角の取れた四角形をしている。長軸方向が欠損しているため本来の長さは不明であるが、残存長が7.5cm、幅は8cm、厚さは5.5cmを測る。敲打面は広い面の片方と、長軸方向の最低1面が用いられているが、長軸の対極方向にもそれが見られる可能性がある。

【SS02集積】(第27～29図)

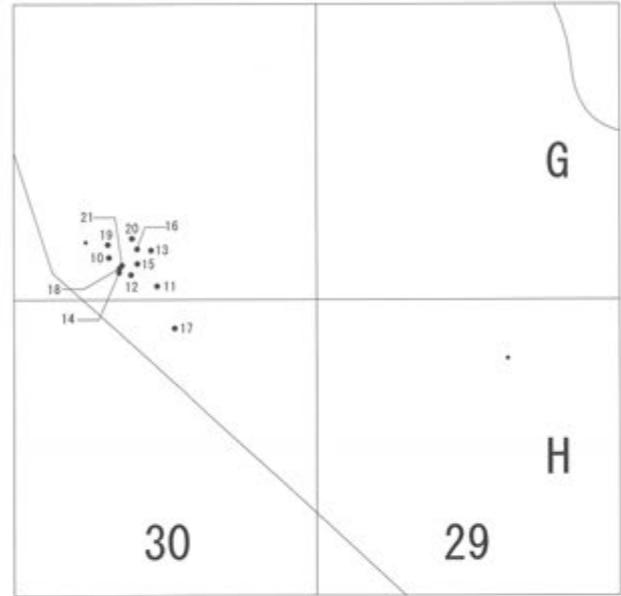
G・H-30区から検出されたもので、範囲は約4m×2mの広さに12点が比較的集中して出土した。腰岳産黒曜石は調査区内から散在的に出土しているが、G・H-30区のみやや集中的に出土している。

どのような状態で出土したかについては、調査の段階でしっかりと確認していなかったために明確ではない。これは、調査当時、未買収地が解決した直後であったために調査が広域に及んでおり、そのため巡視が手薄となってしまい、調査の指示が遅れたことに最大の原因があると考えている。最初の1点が出土した段階での確な指示がなされていれば、微妙ではあっても掘り込みのラインが見えていたかも知れず、後悔するばかりである。県外産と一目でわかる良質の黒曜石がまとまって出土している状況を確認した後は、周辺を丁寧に清掃し、移植ゴテによって何度も何度も薄く削って掘り下げて行ったにもかかわらず、最終的にプランは確認できなかった。また、レベル的には50cmほどの範囲から出土しており、出土層もⅢ～Ⅴ層にわたっている。ただこの事実によって、単純に時期が異なると判断することは難しい。本遺跡は河岸段丘状という地形的特徴をもつ台地上に立地しており、旧石器時代の遺物がⅢ～Ⅷ層にわたって出土するなど特異な出土をすることがある。特に台地縁辺部周辺でその傾向が顕著であり、SS02はG・H-30という、まさに台地縁辺部付近に位置することから、このような出土をしている可能性がある。また腰岳産という県外産の黒曜石であること、ある程度大きさ的にまとまっていることを考慮すると、同一時期の所産である可能性が高い。Ⅲ～Ⅴ層にわたって出土していることから時期の特定は難しいが、周辺からは黒川式と思われる晩期の土器片や蛤刃状の磨製石斧が出土している。

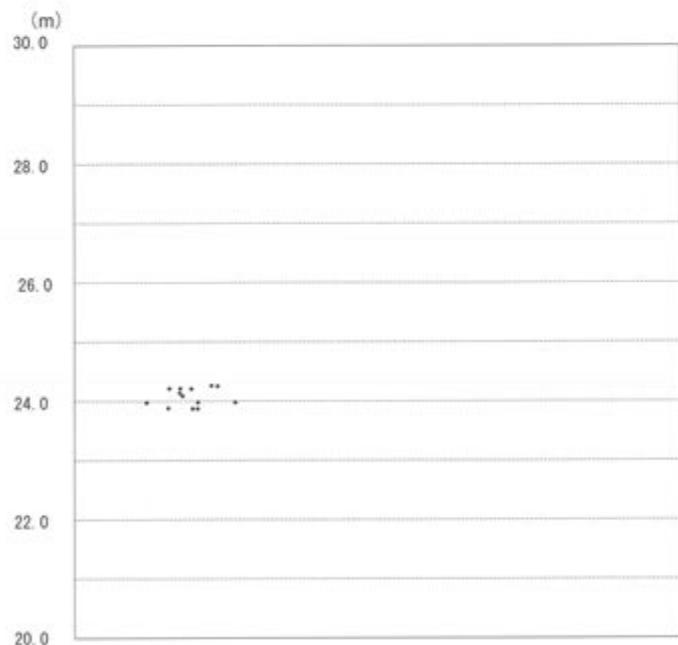
10～21は、腰岳産黒曜石の剥片である。12点を図化した。10は横長剥片である。礫皮面を打面にしており、上下両方向からの剥離が見られる。11は横長剥片で、平坦な自然礫皮面が打面である。12は横長剥片で、表面は横方向からの剥離、背面は上方向からの剥離が見られる。13は縦長剥片で、表裏面とも上方向からの剥離である。14は横長剥片で、礫皮面を打面にしており、上側縁と右側縁部に礫皮面を残す。表裏面とも上方向からの剥離が行われている。15は縦長剥片で、背面は上方向からの剥離であるが、表面は上下左右方向から剥離が行われている。16は横長剥片で、礫皮面を打面にしており、表面は下方向からの剥離、背面は上方向からの剥離が行われている。17は横長剥片で、礫皮面を打面にしており、背面は上方向からの剥離が行われている。18は横長剥片で、下位側縁部に礫皮面を残す。表面は横方向からの剥離、背面は上方向からの剥離が認められる。19は縦長剥片で礫皮面を打面にしており、表面の下側縁、背面の上側縁に礫皮面を残す。表裏面とも上方向からの剥離である。20は縦長剥片で礫皮面を打面にしており、側縁部に礫皮面を残す。表面は上下左方向からの剥離が見られ、背面は上方向からの剥離が見られる。21は縦長の剥片で、礫皮面を打面にしており、背面上側縁部に礫皮面を残す。表面は上方向と右方向からの剥離が認められ、背面は上方向からの剥離である。



第27图 腰岳産黒曜剥片出土分布图

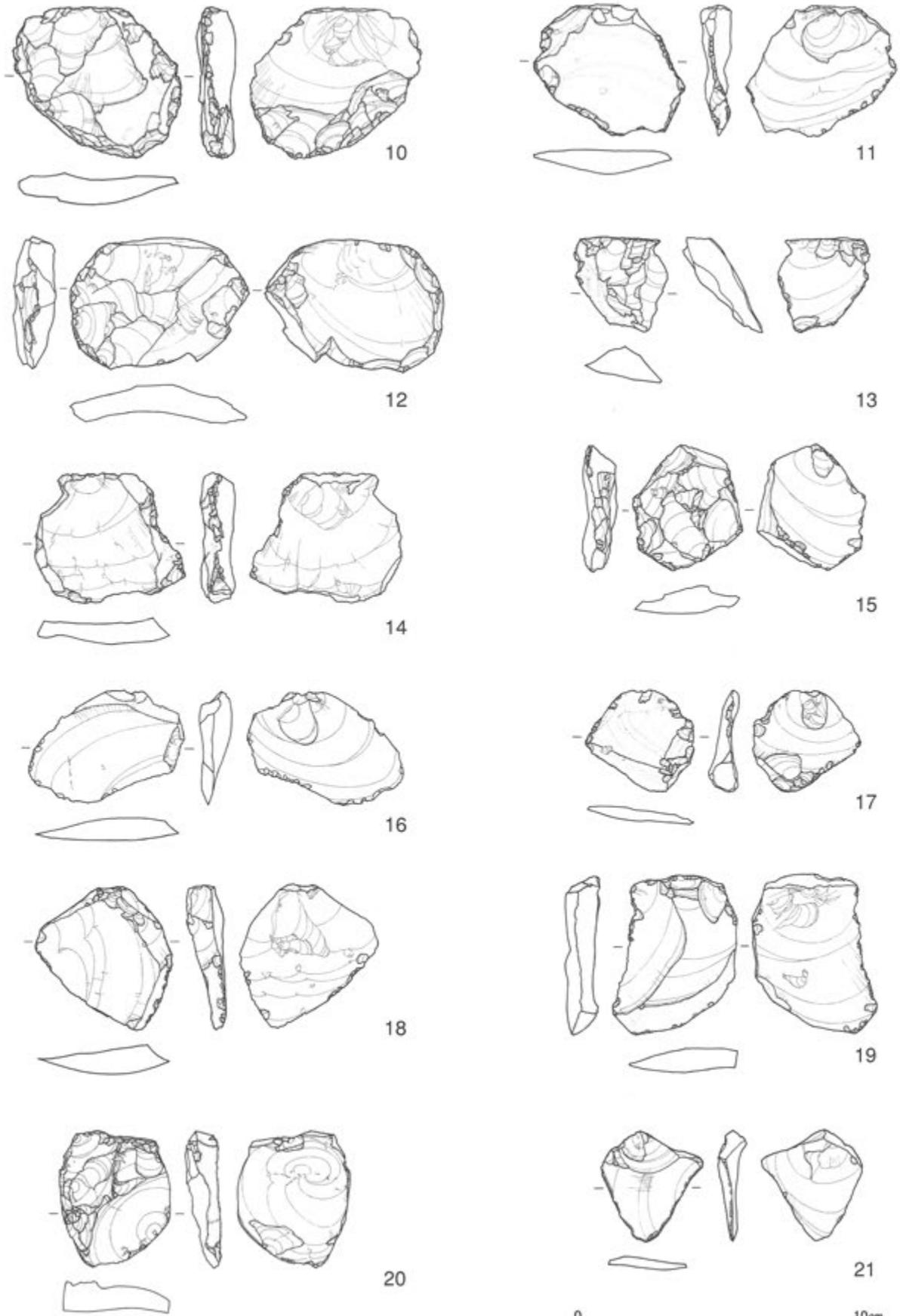


平面分布图



垂直分布图

第28图 G・H-30区拡大图 (SS02)



第29図 SS02 出土遺物

1-2：縄文時代の出土遺物

(1) 縄文土器

縄文土器はほぼ調査区全域から出土した。これを時代別に見てみると1つの傾向が伺える。それは、縄文時代早期の土器が北側3分の1にあたる、B～F-25～33区に集中していることである。縄文時代の遺構がすべてこのあたりに集中していること、黒曜石や石器の出土状況もこのあたりに集中していることなどを踏まえると、本遺跡における縄文時代の生活の中心地域はこのあたりであった可能性が高いのではないかと思われる。

本遺跡出土の縄文土器はⅢ～Ⅴ層を中心に出土しており、器形・文様・調整等から判断して、大別12類に分類した。各類の特徴は以下の通りである。

【Ⅰ類土器】

口縁部・胴部ともにほぼ直線的に立ち上がり円筒形を呈し、底部は平底である。外面は基本的に斜位の貝殻条痕、内面はケズリかケズリのちナデ調整で、口縁部に縦位の貝殻腹縁刺突文が巡る。

型式：前平式土器

【Ⅱa類土器】

平底の底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がり円筒形を呈する。口縁部は平坦なものが主であるが、山形の波頂部を呈するものもある。

口縁部には、主に横位の貝殻腹縁刺突文が2段ないし3段巡るが、縦位のものもまれにある。口唇部が平坦なものの中に刻みが施されるものもある。胴部には縦位の沈線文が流水文状に施され、底部にかけては縦位の貝殻条痕文が施される。

外面は斜位または横位の貝殻条痕が主であるが、ナデ調整のものもみられる。内面はケズリ、もしくはケズリのちナデ調整である。

型式：志風頭式土器

【Ⅱb類土器】

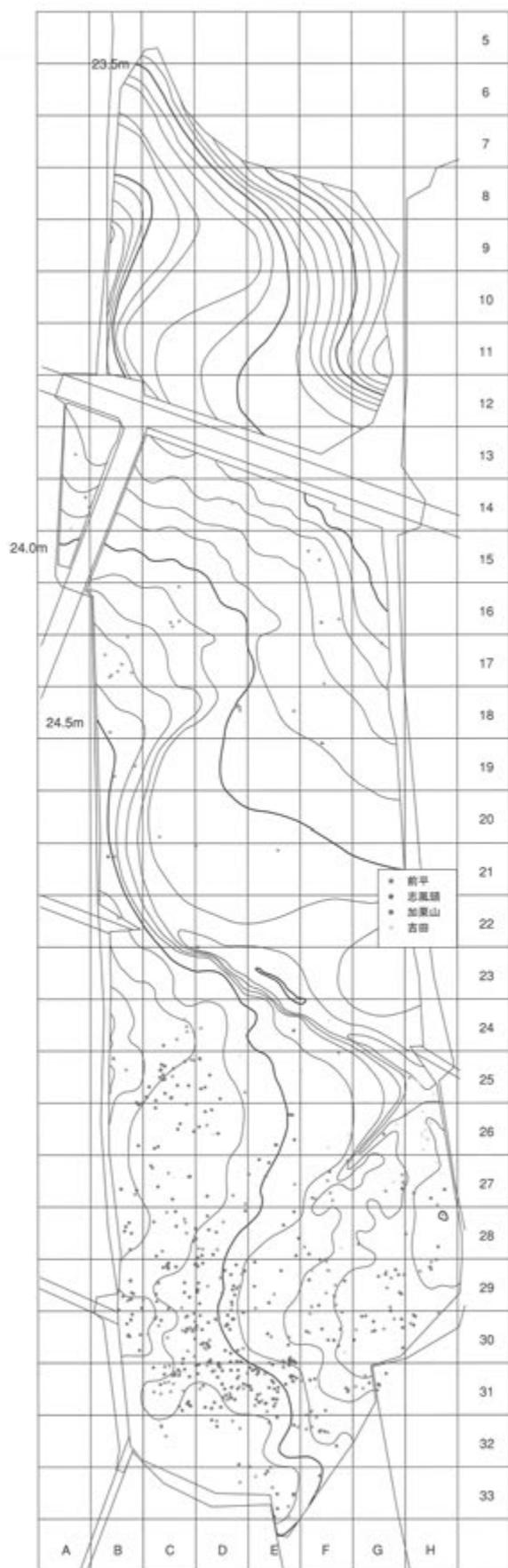
器形・調整等はⅡa類と同様であるが、Ⅱa類とは文様パターンに差異が見られる。Ⅱa類が、胴部に縦位の沈線文を流水文状に描くのに対し、胴部に縦位の列状刺突文を施す点に特徴がある。

型式：志風頭式土器

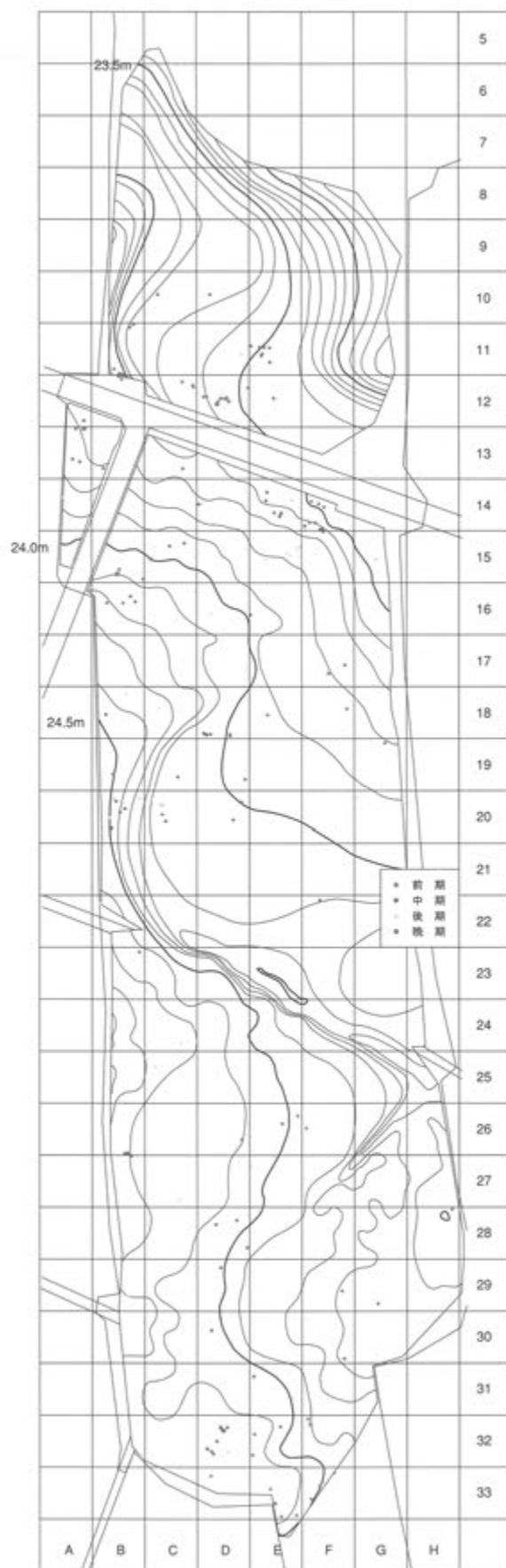
【Ⅱc類土器】

器形・調整等はⅡa類・Ⅱb類と同様である。文様はⅡa類とⅡb類の文様パターンを組み合わせたもので、胴部に縦位の沈線文を流水文状に描き、間に縦位の列状刺突文を交互に巡らせる。

型式：志風頭式土器



第30図 縄文時代早期土器分布図



第31図 縄文前～晩期土器分布図

【Ⅲ a 類土器】

口縁部・胴部ともに直線的に立ち上がる。口縁部は平坦なものが主であるが、波頂部を呈するものもある。円筒形、角筒形の器形を有する。

文様は胴部に縦位の貝殻腹縁刺突線文とX字状の貝殻腹縁刺突線文とを組み合わせる。

外面は斜位または横位の貝殻条痕が主で、内面はケズリ、もしくはケズリのちナデ調整である。

型式：加栗山式土器

【Ⅲ b 類土器】

器形・調整等はⅢ a 類と同様で、縦位の貝殻腹縁刺突線文のみで構成される。ただし、Ⅲ b 類は胴部片のみで文様パターンの一部でしかないため、一部にⅢ a 類が含まれている可能性もある。

型式：加栗山式土器

【Ⅲ c 類土器】

器形・調整等はⅢ a・Ⅲ b 類と同様で、1列の縦位の貝殻腹縁刺突線文のみで構成される。

型式：加栗山式土器

【Ⅲ d 類土器】

器形・調整等はⅢ a～Ⅲ c 類と同様で、2列1単位の縦位の貝殻腹縁刺突線文で構成される。

型式：加栗山式土器

【Ⅲ e 類土器】

器形・調整等はⅢ a～Ⅲ d 類と同様で、円筒形・角筒形がありレモン形もある。口縁部が波頂部を呈するものもある。

口縁下に3～4段の横位の貝殻腹縁刺突文によって口縁部文様帯が構成されており、口縁部文様帯下には楔形突帯が貼付される。楔形突帯間には貝殻腹縁刺突線文が、Ⅲ a～Ⅲ d 類の文様パターンで施文される。

型式：加栗山式土器

【Ⅳ類土器】

器形：円筒形を呈し、口縁部が緩やかに外反する。口唇部を四角くおさめ、連続した浅いキザミ目が施されるものがある。胴部は貝殻腹縁による縦位と横位の貝殻刺突文によって文様帯が構成される。

型式：小牧3 Aタイプ

【Ⅴ類土器】

器形：ほぼ真っ直ぐに立ち上がり、円筒形を呈する。口唇部を四角くおさめ、連続したキザミ目が施される。外面は貝殻条痕によって綾杉状に施文される。内面調整にはナデ調整と貝殻条痕調整とがある。

型式：鎌石橋式土器

【Ⅵ類土器】

厚手で底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がり円筒形を呈する。底部は平底である。口縁部から胴部上位の範囲に貝殻腹縁による横位の条線文が施されるものが主である。その他に、縦施文と横施文の組み合わせだったもの、口縁直下に貝殻腹縁による押引文が見られるものがある。丁寧なナデ調整が施される。

型式：政所式土器・中原式土器

【Ⅶ類土器】

縄文時代早期に帰属すると思われる条痕文の胴部片をまとめた。

【Ⅷ類土器】

縄文時代早期に帰属すると思われる土器で、型式認定が明確でない土器群をまとめた。

【Ⅸ a 類土器】

Ⅸ類は、縄文時代早期に属すると思われる底部片をまとめた。Ⅸ a 類は貝殻腹縁による細かい縦位の貝殻条痕が施されている。

【Ⅸ b 類土器】

縄文時代早期に属すると思われる底部片で、貝殻腹縁による太めの貝殻条痕が縦位に施されているもの。

【Ⅸ c 類土器】

縄文時代早期に属すると思われる底部片で、貝殻腹縁による横位の貝殻条痕が施されているもの。

【Ⅸ d 類土器】

縄文時代早期に属すると思われる底部片で、尖底のもの。内外面ともに貝殻条痕が施されるのが主である。

【Ⅹ類土器】

縄文時代早期から前期に帰属すると考えられる土器で、型式認定が難しいものや個数の少ないものを一括した。

【Ⅹ I 類土器】

口縁部がやや外傾する単純な深鉢形に、刻目突帯文やみみずばれ状突帯文が貼付されるものや、沈線文が施されるものがある。また口唇部に施文されるものもある。

調整は内外面ともに貝殻条痕が施される。貝殻条痕には粗いものと目の細かいものの2種類見られる。

型式：轟式土器

【XⅡ a類土器】

口縁部が外反し、胴部がわずかに張る器形を呈する。文様は微隆起突帯文と相交弧文が組み合わせて施される。調整は、内外面ともナデ調整が主である。

型式：深浦式土器

【XⅡ b類土器】

主として刻目突帯文を有し、連点文や沈線文が付加される。口縁部内面に横位の連点文が施されるものもある。内外面ともナデ調整が主である。

型式：深浦式土器

【XⅢ類土器】

口縁端部が内側に屈曲するものや口縁部が外傾するもの、胴部は括れを呈するものや外傾する器形が見られる。文様は刺突連点文や突帯文が見られ、貝殻条痕かナデ調整が行われる。

型式：春日式土器

【XⅣ a類土器】

胴部が屈曲する器形を呈し、胴部最大径に刻目突帯文が貼付される。内外面ともに貝殻条痕が施される。

型式：西川津式土器

【XⅣ b類土器】

内外面ともに貝殻腹縁による条痕文が施されるものをまとめた。

【XⅤ類土器】

地文に縄文を施すもの。内面はナデ調整である。

型式：船元式土器

【XⅥ類土器】

内外面ともに条痕調整が行われているもの。通常の貝殻条痕と異なり、細かい条線が見られるものもある。

【XⅦ類土器】

器形は頸部で括れるものや胴部がふくらむものがある。内外面ともに条痕が施されているが、X

Ⅵ類が調整を意識したと思われるのに対し、外面は文様効果を意識した条痕文が施される。

【XⅧ類土器】

太めの凹線文が施されるもの。

【XⅨ類土器】

色調・胎土ともにXⅧ類土器と類似するが、内外面ともにナデ調整で無文のもの。

【XX類土器】

縄文時代後期に帰属すると思われる土器を一括した。

型式：南福寺式土器・市来式土器

【XXⅠ類土器】

縄文時代後期に帰属すると思われる土器の底部を一括した。

【XXⅡ a類土器】

XXⅡ類は縄文時代晩期に帰属すると思われる土器を一括したもので、XXⅡ a類は深鉢形土器である。

器形は胴部上位から頸部にかけて外反しながら内傾し、口縁部で再び屈曲して口縁部文様帯をもつものと、素口縁でやや外傾するものがあり、口縁部文様帯に3～4条の細い凹線文が入るものと無文のものがある。ミガキもしくはナデ調整が施される。

型式：上加世田式土器・入佐式土器

【XXⅡ b類土器】

XXⅡ類のうち、浅鉢形土器をまとめた。

器形は胴部上位から頸部にかけて外反しながら内傾するものと、口縁部で再び短く屈曲して口縁部文様帯を作出するものがある。胴部最大径は頸部くびれ付近と非常に上位にある。無文のものが多いが、1条程度の凹線文が施される場合もある。内外面ともにミガキが行われている。

型式：上加世田式土器・入佐式土器

【XXⅡ c類土器】

縄文時代晩期に帰属すると思われる土器の底部を一括した。

<参考文献>

- 東 和幸 1991 「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』5 南九州縄文研究会
木崎康弘 1996 「縄文時代早期土器群の編年学的研究－中原式土器の設定－」『蒲生・上の原遺跡』
熊本県文化財調査報告第158集
宮下貴浩ほか編 1998 『上水流遺跡－第1次調査－』 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）
下大川司・前迫亮一編 2000 『大中原遺跡』 根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）
黒川忠広編 2002 『南九州貝殻文系土器Ⅰ－鹿児島県－』 南九州縄文研究会
上杉彰紀・深野信之 2004 「前平式および志風頭式土器の検討」『南九州縄文通信』15 南九州縄文研究会
深野信之ほか編 2005 『建昌城跡』 始良町埋蔵文化財発掘調査報告書第10集

I 類土器（第32図）

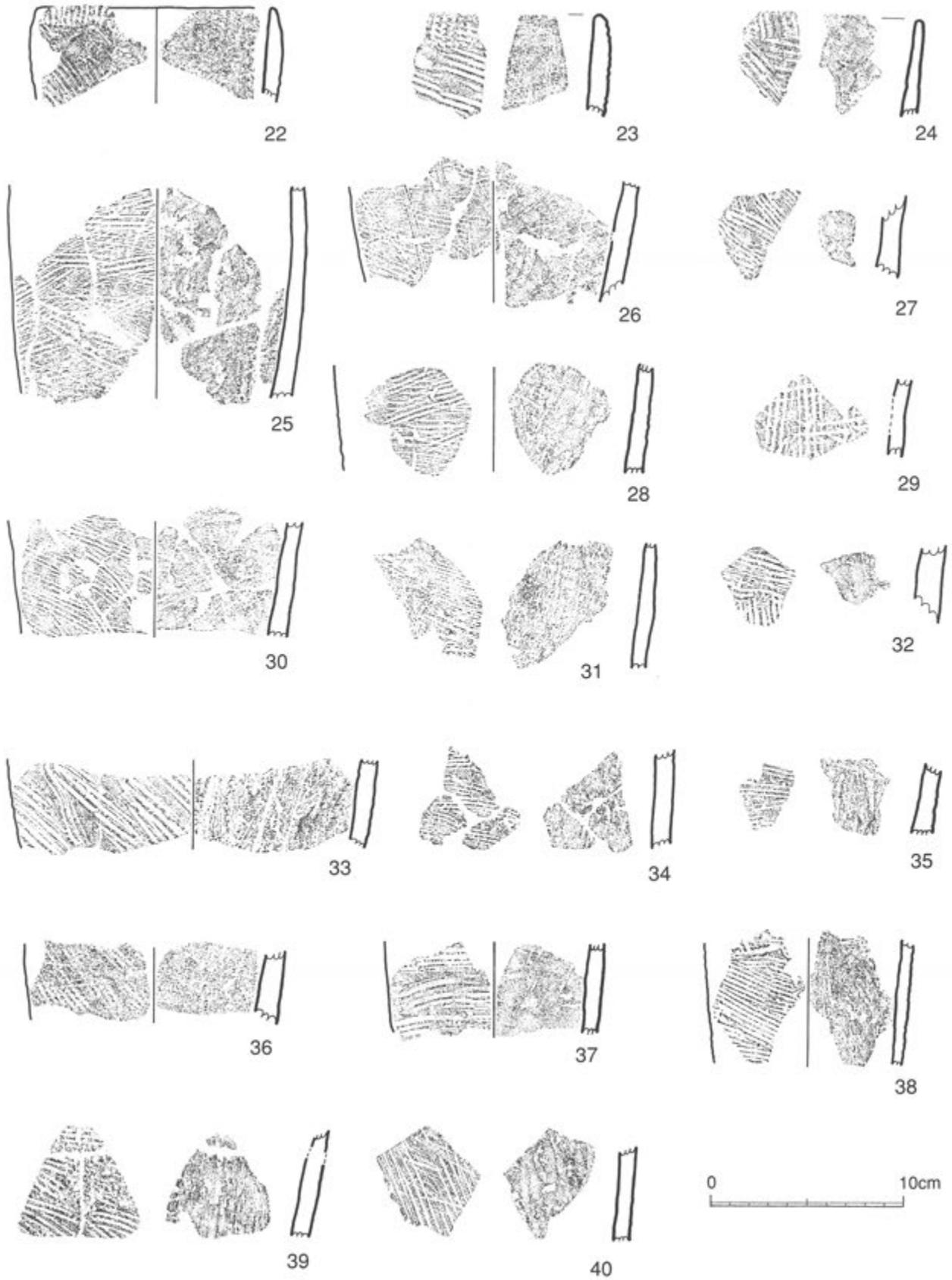
22～24は口縁部片である。口縁端部を丸くおさめ、斜位の貝殻条痕上に縦位の貝殻腹縁刺突文が巡る。内面調整はケズリだが、部分的にナデ調整が行われている。22は小形で、復元口径12cm程度のものである。24は外面の貝殻条痕に切り合いが見られる。

25～40は胴部片である。外面には貝殻条痕が施され、内面はケズリもしくはケズリのちナデ調整である。25は残存部での復元胴部径15.4cmで、貝殻条痕の条線の太いものと細いものが見られる。26は残存部での復元胴部径15cmである。ほぼ横位に近い貝殻条痕の上に、さらに細かく密な貝殻条痕が斜位に長く走る。28は貝殻条痕上に爪形の刺突文のようなものが見られる。29・32・40は貝殻条痕が特徴的で、ヘラのような印象を与えるものである。34・35・37は横位の貝殻条痕である。38は胴部片に含めたが、ほぼ口縁部に近いものである。上位には、貝殻条痕上に口縁部文様である縦位の貝殻刺突文が認められる。他の胴部片の貝殻条痕が雑な印象を与えるのに対し、38は斜位の貝殻条痕が丁寧に施されている。

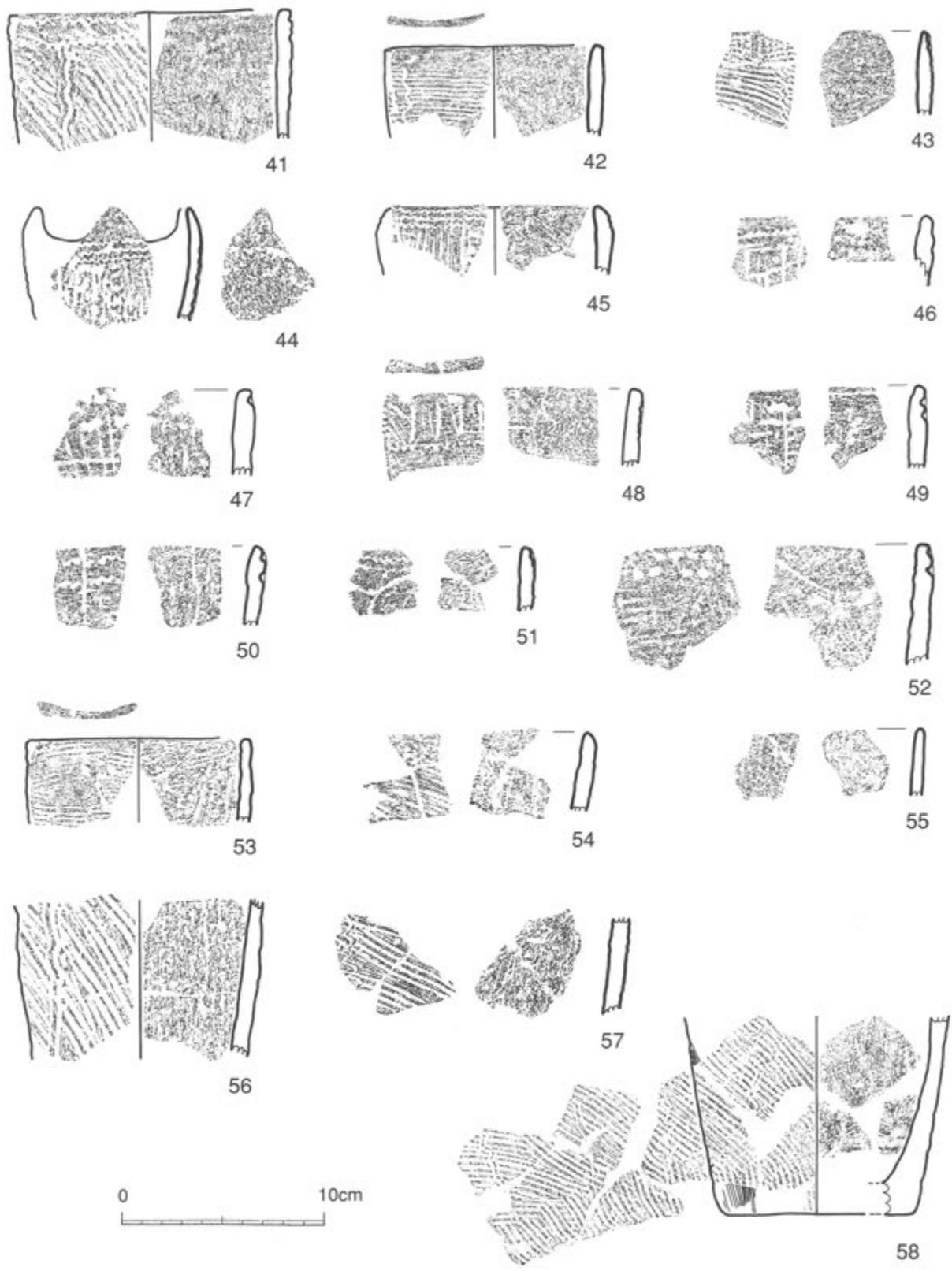
II a 類土器（第33・34図）

41～54は口縁部片である。丸くおさめるものが主であるが、平坦なものもある。41は横位の貝殻腹縁刺突文が2段に施され、その下に縦位の列状流水文が施される。復元口径14cmである。42は口縁下の貝殻腹縁刺突文が見られず、復元口径11cmと小形である。43・54・55は口縁下の貝殻腹縁刺突文が縦位に施される。44は口縁部が山形に立ち上がり、波頂部を呈するものである。口縁下には横位の貝殻腹縁刺突文が3段巡る。45は口縁部が若干内傾するものである。外面にはヘラ状の工具によってキザミ状に、縦位に長く施される。46も外面は45と同様である。47・49・52は、口縁下に横位の刺突文が2段巡っているが、他よりも大形で四角い刺突である。52は横位の貝殻条痕である。48は口縁部を四角におさめ、端部にキザミ目を施している。口縁下の貝殻腹縁刺突文は43・54と同様に縦位であるが、縦位の刺突文の下に横位の貝殻刺突文が1段施されている。53も48と同様に、口縁部を四角におさめ、端部に連続したキザミ目が施されているが、口縁下の貝殻腹縁刺突文が見られない。復元口径11cmと小形である。

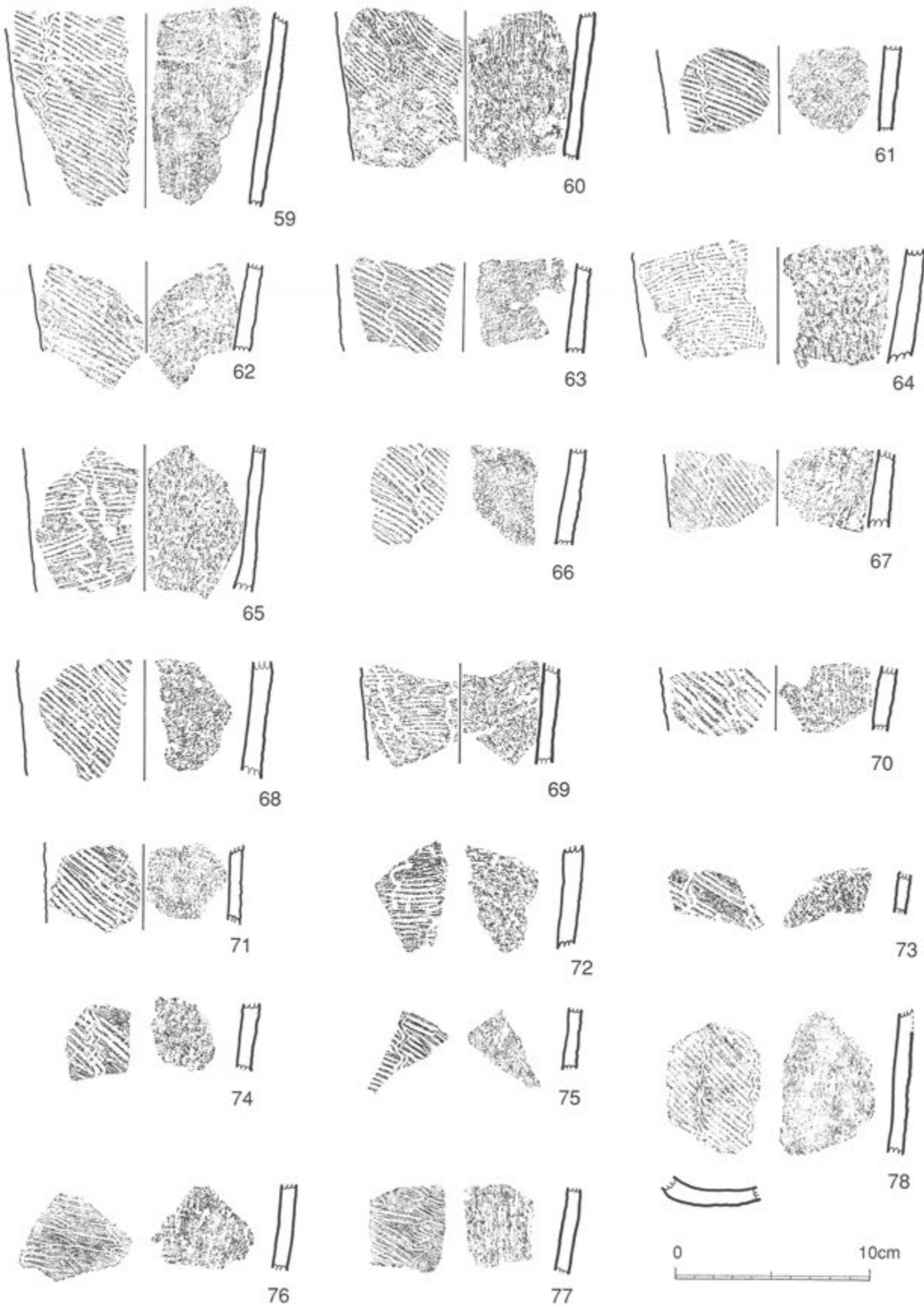
56～77は胴部片である。56は肋の太い貝殻によって条痕が施され、その後縦位の貝殻条痕文が流



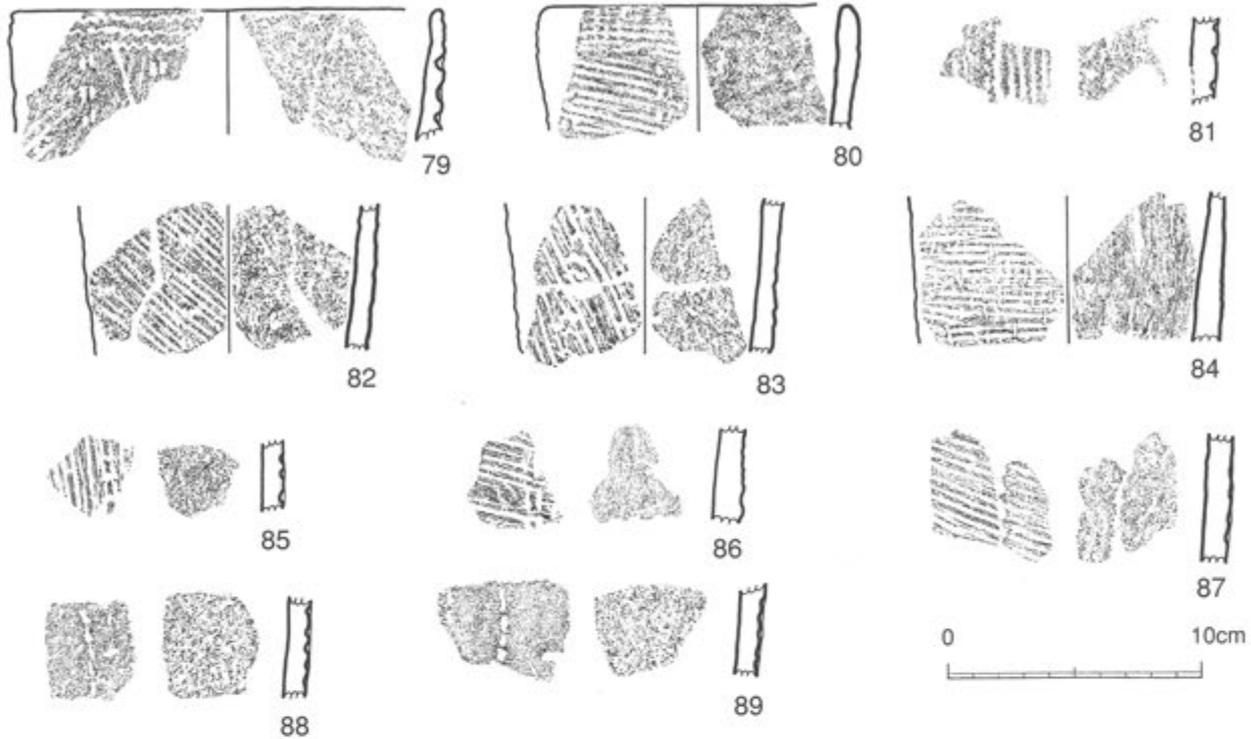
第32図 縄文土器1 (I類)



第33図 縄文土器2 (II a類)



第34図 縄文土器 3 (Ⅱ a類)



第35図 縄文土器 4 (II b類)

水状に描かれる。57は逆に細い貝殻条痕である。58は底部まで残っているもので、列状流水文が、等間隔に巡っているのがわかる。胴部は斜位の貝殻条痕であるが、底部のあたりは縦位の貝殻条痕で、文様として意識されていることがわかる。59・60・78は列状流水文が縦位に2列描かれるものである。外面の貝殻条痕は規則的に斜位に施されており、丁寧な印象を与える。61・75も調整等が丁寧であるとともに、類似した印象を与える。同一個体の可能性もある。62・63・68・72は列状流水文が1列のものである。64は2列の列状流水文が大きく描かれている。65も2列の列状流水文であるが、それぞれが平行しておらず、別々に施されている。67は貝殻条痕が細かい。69は列状流水文が、斜位に2列施される。73は、ナデ調整ののちに貝殻条痕を行っている。外面は貝殻条痕を全面的に施するのが一般的であるが、73は間隔をあけて条痕を施している。76・77は、細かい条痕の上に同じく細かい列状流水文が2列施されるものである。調整・施文に利用した工具の違いと思われるが、他とはやや異なった印象を与える。同一個体の可能性もある。

II b類土器 (第35図)

79・80は口縁部片である。79は口縁下に横位の貝殻腹縁刺突文を3段に巡らせ、その下に縦位の列状刺突文を2列1単位で巡らせている。80は口縁下の文様帯が縦位の貝殻腹縁刺突文で構成される。

81~89は胴部片である。81・87は縦位の貝殻条痕の上に縦位の列状刺突文を1列1単位で巡らせるものである。82・86は斜位の貝殻条痕の上に縦位の列状刺突文を2列1単位で巡らせる。

は1列1単位の列状刺突文である。竹管状の工具によって施文されているが、それぞれの刺突文自体は横位であり、それを縦に並べることで縦位の列状刺突文を構成している。84はヘラ状工具によって刺突文が施文されている。刺突文自体は縦位であるが、それぞれが独立してランダムに施文されており、列状の刺突文を構成していない。88・89は外面が貝殻条痕ではなくナデ調整である。縦位の列状刺突文が1列1単位で巡っている。

Ⅱ c 類土器 (第36図)

90～93は口縁部片である。いずれも口唇部に連続したキザミ目が施されている。90は復元口径20cmである。91は口縁下に縦位の貝殻刺突文が施される。92・93は復元口径がそれぞれ15cm・14cmと小形のものである。口縁下に横位の貝殻刺突文が施される。

94～100は胴部片である。94は横位の貝殻条痕の上に、大きくゆったりとした波状文が列状に描かれている。一部に、貝殻条痕のちナデが施される。95・96は調整・施文方法が類似しており、同一個体の可能性が高い。2列の細かい列状刺突文が施される。97は94と同様に大きくゆったりとした波状文が描かれ、一部に、貝殻条痕のちナデが施されている。列状刺突文は2列で、ヘラ状工具によって施文されている。98・99・100は、施文パターンは2列ずつの列状刺突文・波状文と同様であるが、98が横位の貝殻条痕、99が斜位の貝殻条痕、100がナデ調整となっている。

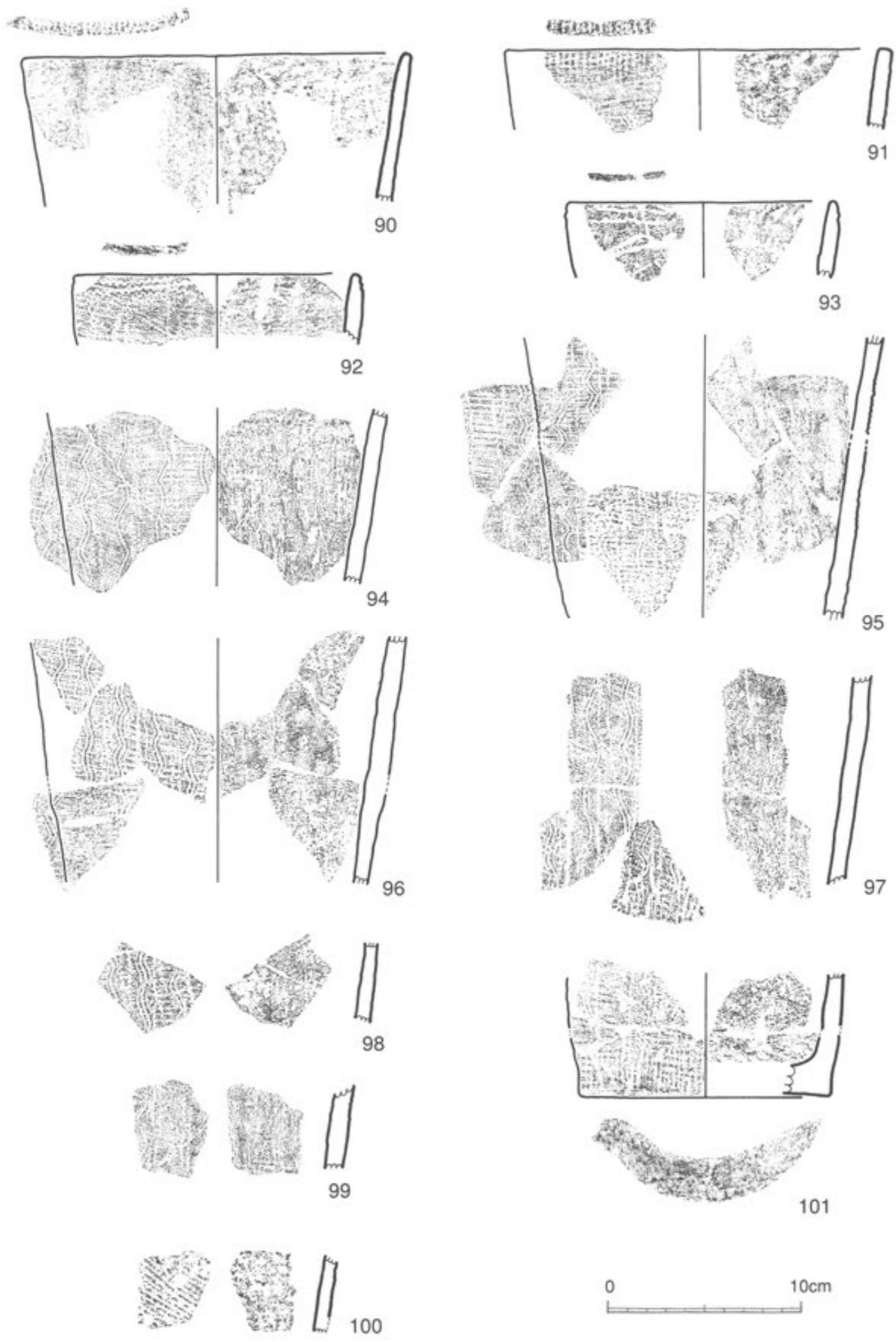
101は胴部～底部である。円筒形で平底を呈する。胴部は横位の貝殻条痕であるが、底部付近は縦位の貝殻条痕で、文様パターンとして意識されていることが分かる。

Ⅲ a 類土器 (第37～40図)

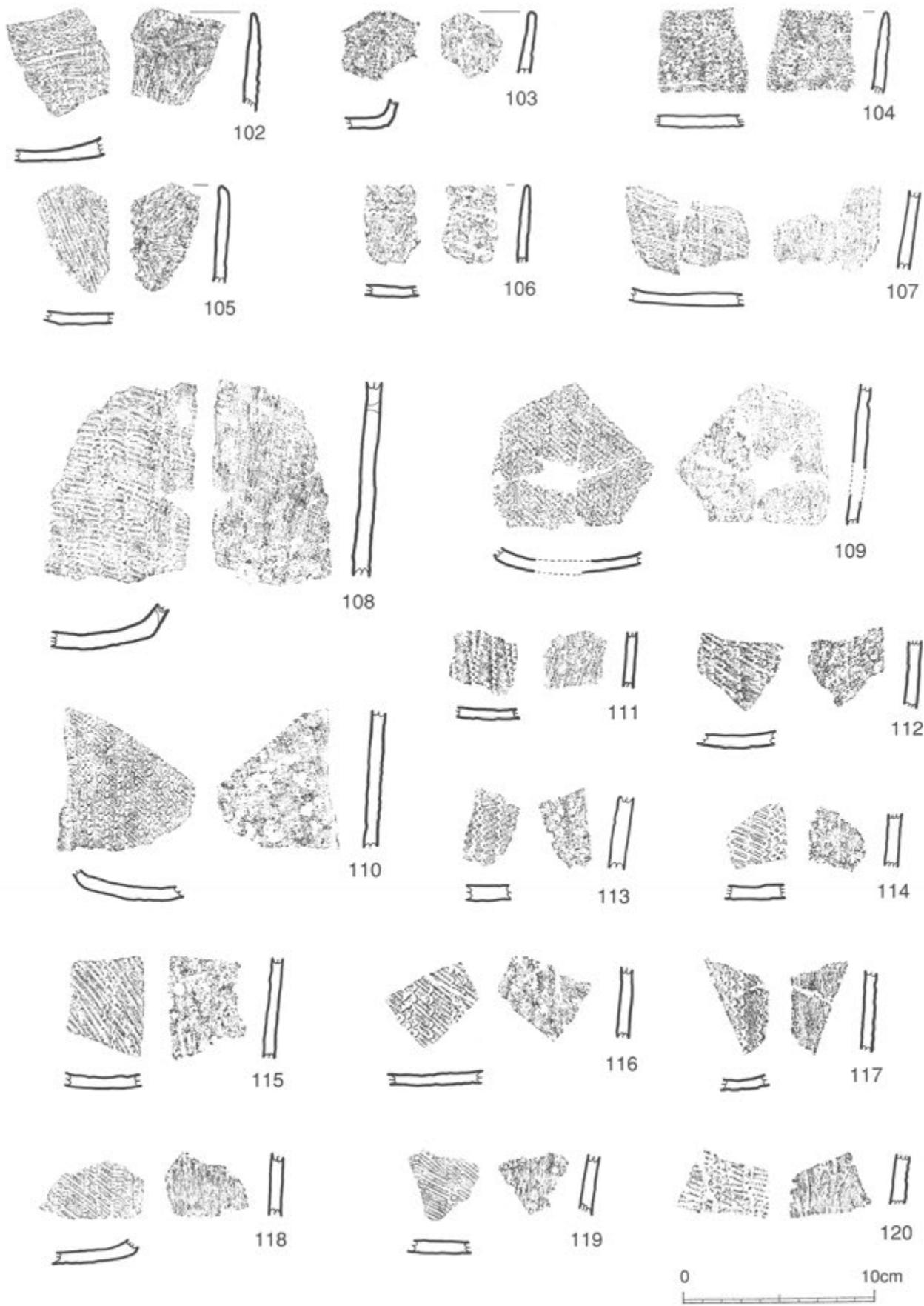
102～155は角筒土器である。うち102～106は口縁部片である。胴部から口縁端部へ向かってやや先細る感じで立ち上がる。102～105は口縁部が山形に立ち上がり、波頂部を呈する。口縁部下には斜位の貝殻腹縁刺突文が3段に施され、胴部には、縦位の貝殻腹縁刺突線文とX字状の貝殻腹縁刺突線文とを組み合わせたパターンの文様が巡る。106は口縁部が水平である。

107～155は胴部片である。107・110・118・119は斜位の貝殻条痕の上に、縦位の刺突線文とX字状の刺突線文とを組み合わせた文様が施される。1つ1つの刺突文は四角い形状を呈する。これらは小片であるが、それぞれ調整や刺突線文の形状等が類似しており、同一個体の可能性が考えられる。108は一部に角筒土器のコーナー部分が遺存している。横位の貝殻条痕の上に施文されている。109は残存状態が悪い。斜位の貝殻条痕の上に施文されている。111・113・117は外面調整がナデである。121・127は一部に角筒土器のコーナー部分が残存する。121は比較的よく接合され、大形の胴部片となった。残存部で器高20cmである。胴部には斜位の貝殻条痕が丁寧に施されている。122は角筒土器のコーナー部分である。一部に斜位の貝殻腹縁刺突線文が認められるが、縦位の貝殻腹縁刺突線文の方が多い。124は残存状態が良くない。126は丁寧な斜位の貝殻条項の上に文様が施され、121と類似した印象を与える。127は角筒土器のコーナー部分である。横位の貝殻条痕の上に細めの刺突線文が施される。129は胴部～底部付近である。縦位の貝殻腹縁刺突線文が密に施され、底部付近には縦位の貝殻条痕が施される。

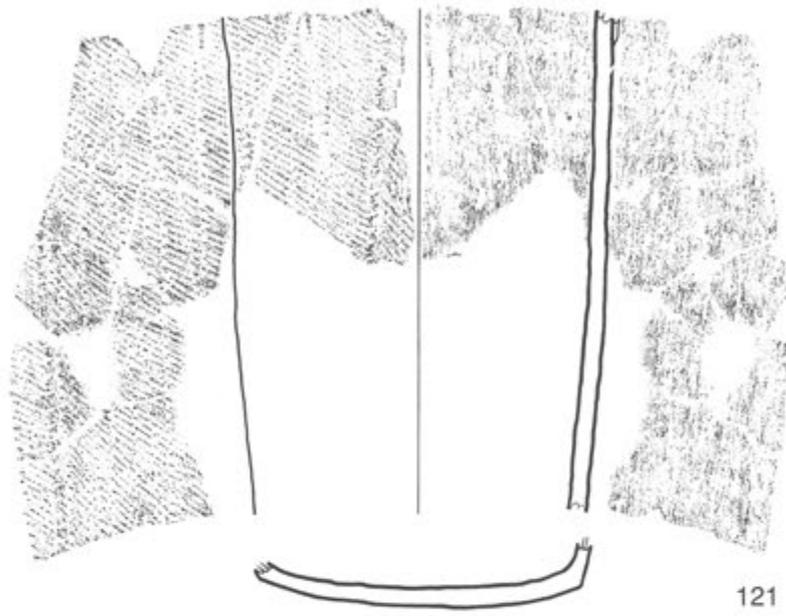
130～157は円筒土器である。130～140は口縁部片である。130は口縁端部を四角くおさめ、その上



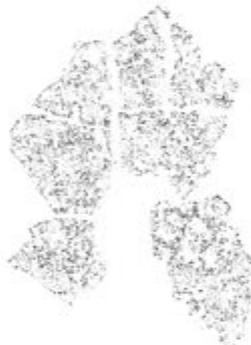
第36図 縄文土器5 (IIc類)



第37図 縄文土器6 (Ⅲ a類)



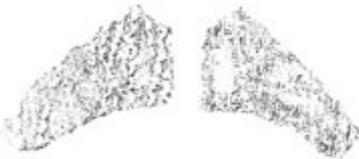
121



122



123



124



125



126



127



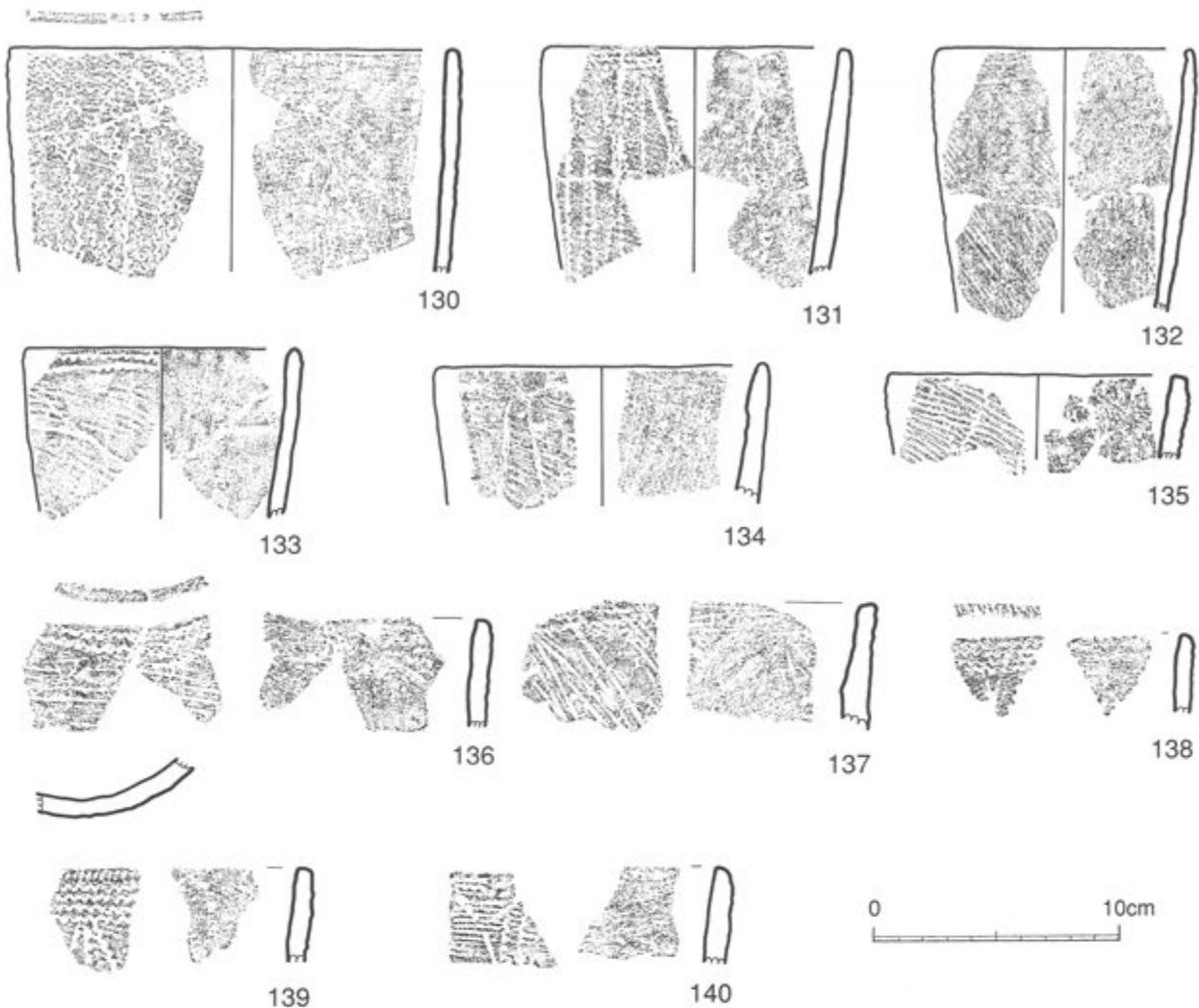
128



129



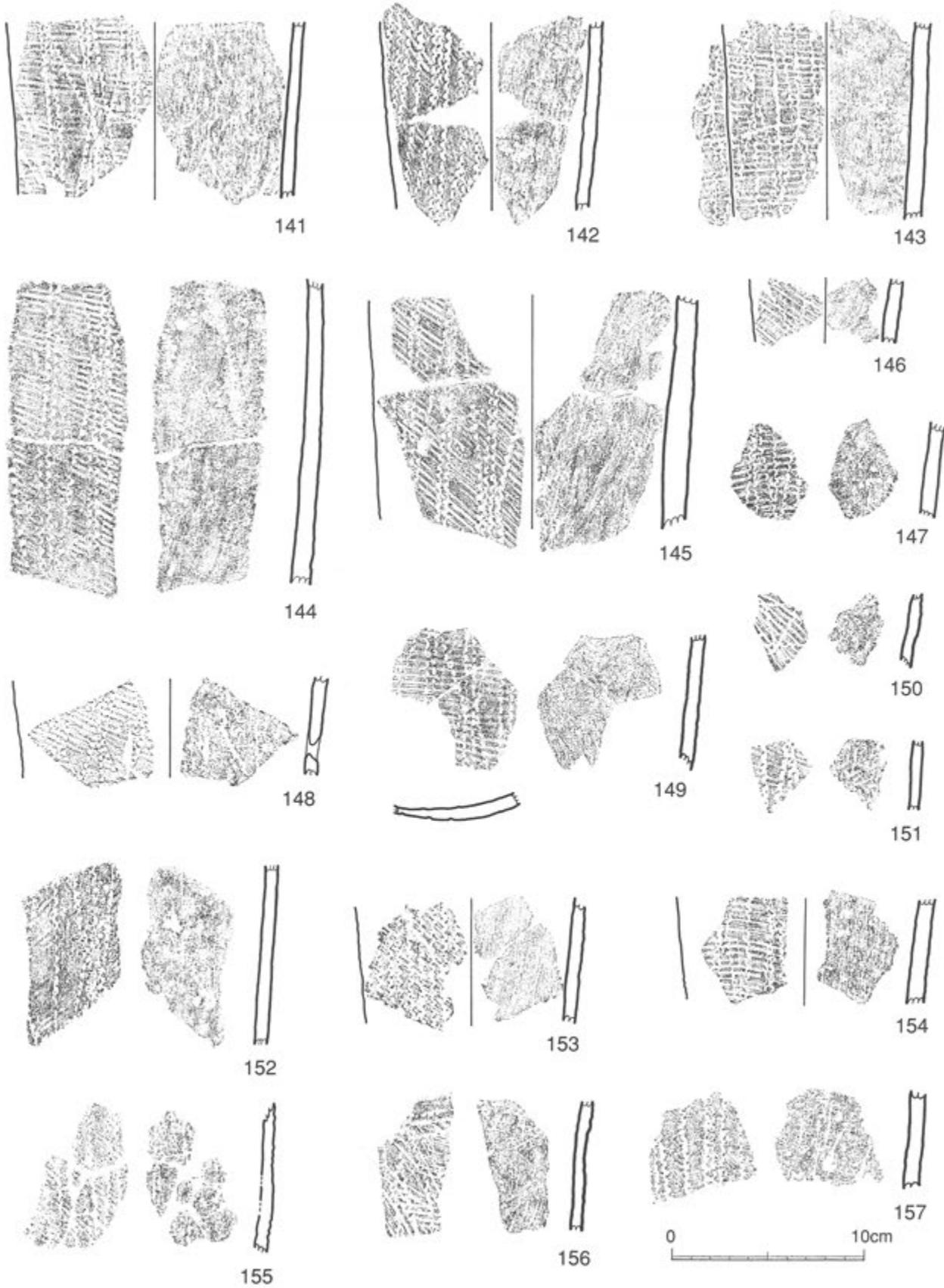
第38図 縄文土器7 (Ⅲ a類)



第39図 縄文土器8 (Ⅲa類)

に連続したキザミ目を施している。口縁下には横位の貝殻腹縁刺突文が3段巡り、胴部には、縦位とX字状の貝殻腹縁刺突線文を組み合わせたパターンの文様が施される。復元口径18cmを測る。131～135は口縁部がやや外に開く形状を呈する。復元口径はそれぞれ12cm, 10.5cm, 11cm, 13cm, 12cmである。133は文様の間隔が粗である。136は口縁部が山形に立ち上がり、波頂部を呈するものである。口縁下の横位の貝殻腹縁刺突文は、形状にあわせて立ち上がっている。2段施文されている。一方、胴部の文様は、施文工具である貝殻が薄く、あまりはっきりとはしない。137は、外面は貝殻条痕が雑に入れられている。内面は口縁部付近が大きく削られており、半分程度の厚みになっている。138・139は口唇部に連続したキザミ目が施されている。140は口縁下に横位の貝殻腹縁刺突文が2段巡る。

141～157は胴部片である。141・143は横位貝殻条痕の上に縦位とX字状の貝殻腹縁刺突線を組み合わせたパターンの文様が施される。組み合わせは、縦列とX字状がきれいに交差せず雑である。142は縦位の貝殻腹縁刺突線文が密に施されている。144～149は縦位の貝殻腹縁刺突線文とX字状の



第40図 縄文土器9 (Ⅲ a類)

貝殻腹縁刺突線文とがきれいに組み合っている。152・155は残存状態が不良である。153・154は縦位の貝殻腹縁刺突線文が密に施されている。

Ⅲ b 類土器 (第41・42図)

158～206は胴部片である。158は斜位の貝殻条痕の上に縦位に貝殻腹縁刺突線文が密に施されている。159は縦位の貝殻腹縁刺突線文が3列1単位でまとまっている。残存部における復元胴部径が9cmと非常に小形である。162・164～167は縦位の貝殻腹縁刺突線文が密に施されている。163は全体的に貝殻腹縁刺突線文の方向がやや斜位である。168は胴部上位の貝殻腹縁刺突線文がやや開いており、別類の可能性もある。169は一定の間隔を空けて貝殻腹縁刺突線文が施されている点では単位を構成しているといえるが、3列1単位・4列1単位と単位本数がバラバラである。173・174は調整・施文方法とも類似しており、同一個体の可能性もある。176は貝殻腹縁刺突線文があまり明確ではない。177～185は縦位の縦位の貝殻腹縁刺突線文が密に施されている。195は丁寧な貝殻条痕が施されている。196は残存部における復元胴部径が9cmと非常に小形である。198は横位の貝殻条痕である。199・204・205も横位の貝殻条痕であるが、他と比べて非常に丁寧に施されており、かつ縦位の貝殻腹縁刺突線文も等間隔に施文されている。

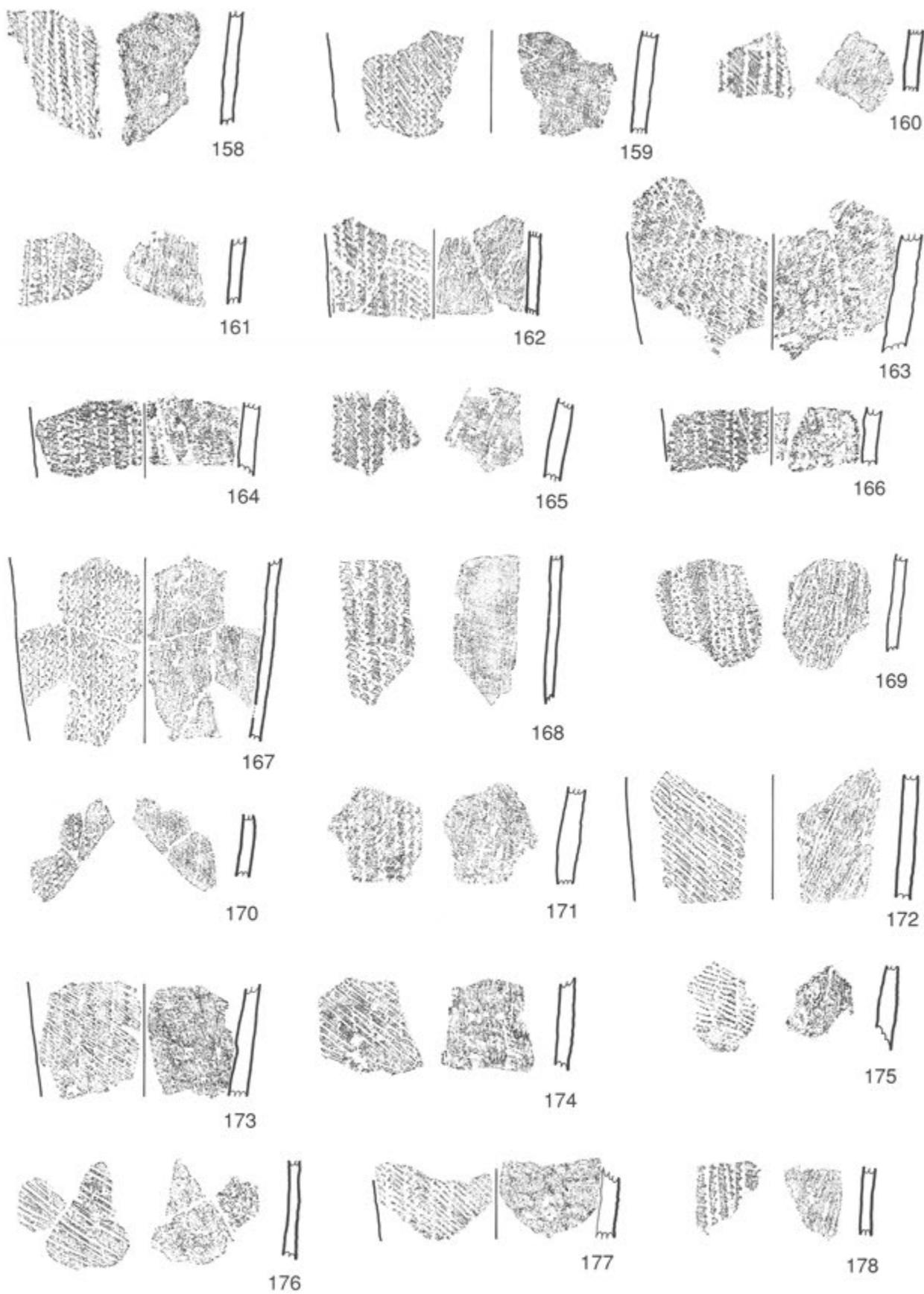
Ⅲ c 類土器 (第43図)

207～212は口縁部片である。207は口縁下に縦位の貝殻腹縁刺突を施し、胴部には1列の縦位の貝殻腹縁刺突線文を巡らす。外面調整はナデである。208は口縁下に横位の貝殻腹縁刺突文が見られず、口縁下から縦位の刺突線文が施される。209も口縁下に横位の貝殻腹縁刺突文が見られず、口縁下から縦位の刺突線文が施される。外面はナデ調整である。211は口縁端部を四角くおさめ、その上に連続したキザミ目が施される。口縁下には横位の貝殻刺突文が3段巡り、胴部は斜位の貝殻条痕の上に縦位の刺突線文が1列ずつ施される。212は平坦な口縁が端の方で立ち上がっており、本来は波頂部を呈すると思われる。

213～222は胴部片である。213～220は斜位の貝殻条痕の上に縦位の貝殻腹縁刺突線文が1列1単位で施される。213は貝殻条痕ののちに、一部ナデ調整が行われている。218は雑な貝殻条痕で、切り合いが激しい。219は調整・施文形態が類似しており、同一個体の可能性がある。220は貝殻条痕が全面に入っておらず、一部にナデが認められる。221・222は胴部～底部である。胴部は横位の貝殻条痕の上に縦位の貝殻腹縁刺突線文が施される。底部付近は縦位の貝殻条痕である。222は円筒形で平底を呈する。

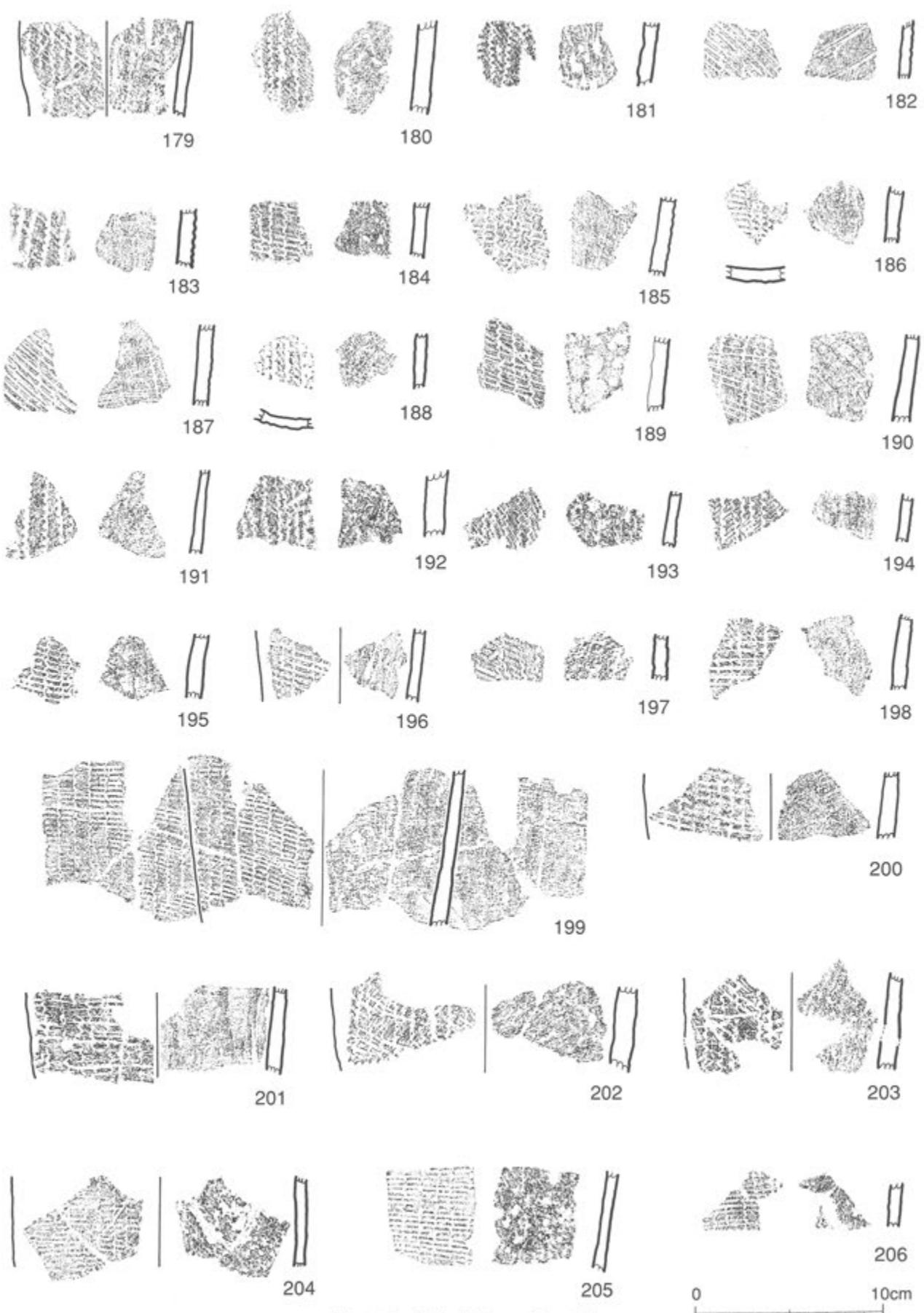
Ⅲ d 類土器 (第44図)

223～234は胴部片である。223は斜位の貝殻条痕の上に2列1単位で貝殻腹縁刺突線文が施される。224は2列1単位の貝殻腹縁刺突線文であるが、列同士がやや間隔がある。227～230・233は2列1単位の貝殻腹縁刺突線文が密に施されている。逆に231は刺突線文の間隔が大きい。232は縦列の貝殻腹縁刺突線文とやや斜位の貝殻条痕が見られる。別類の可能性も考えられる。234は底部付近の胴部片である。底部付近まで2列1単位の貝殻腹縁刺突線文が入り、縦位の貝殻条痕は施されない。

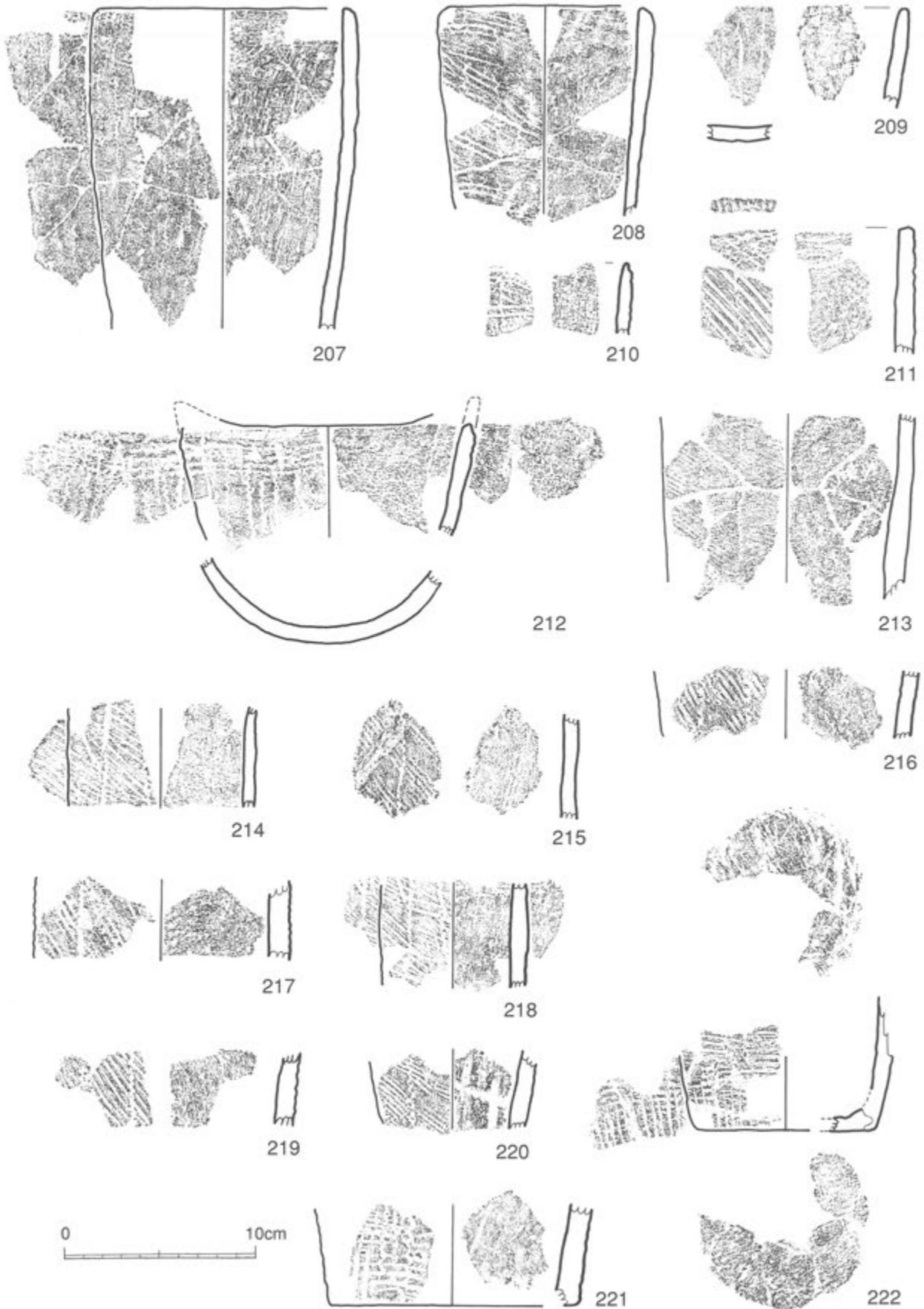


第41図 縄文土器10 (Ⅲb類)

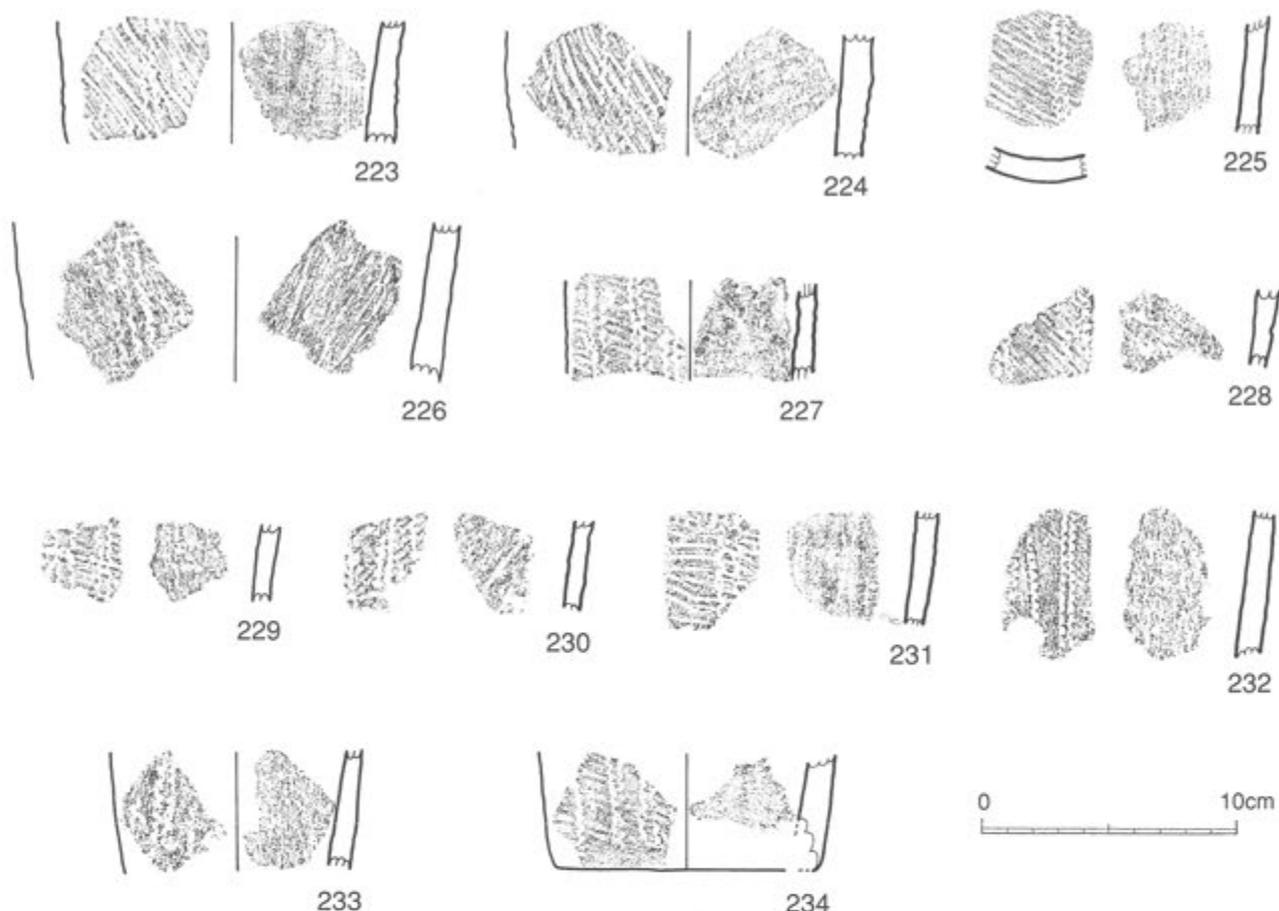
0 10cm



第42図 縄文土器11 (Ⅲ b類)



第43図 縄文土器12 (Ⅲc類)

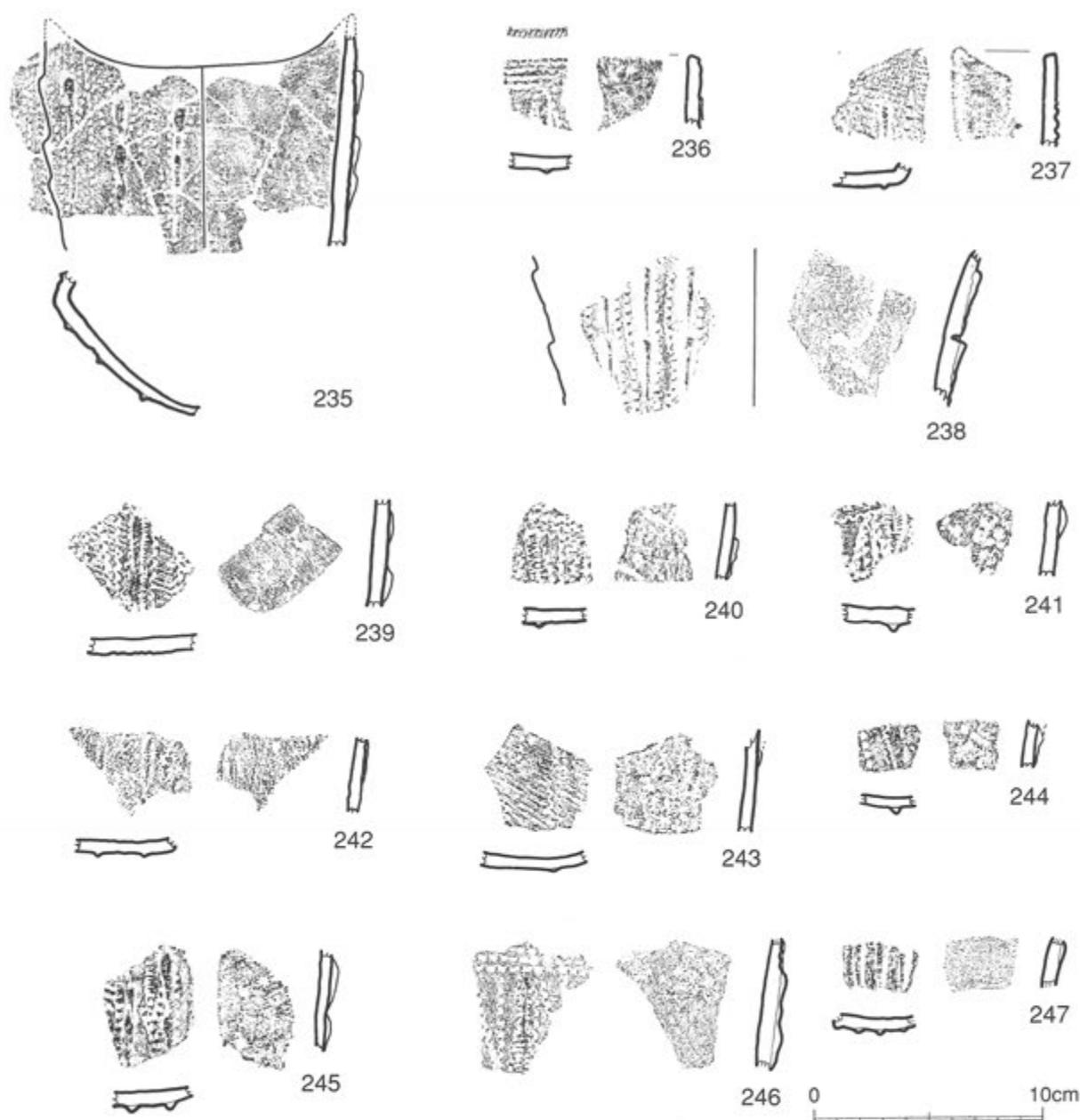


第44図 縄文土器13 (Ⅲd類)

Ⅲe類土器 (第45図)

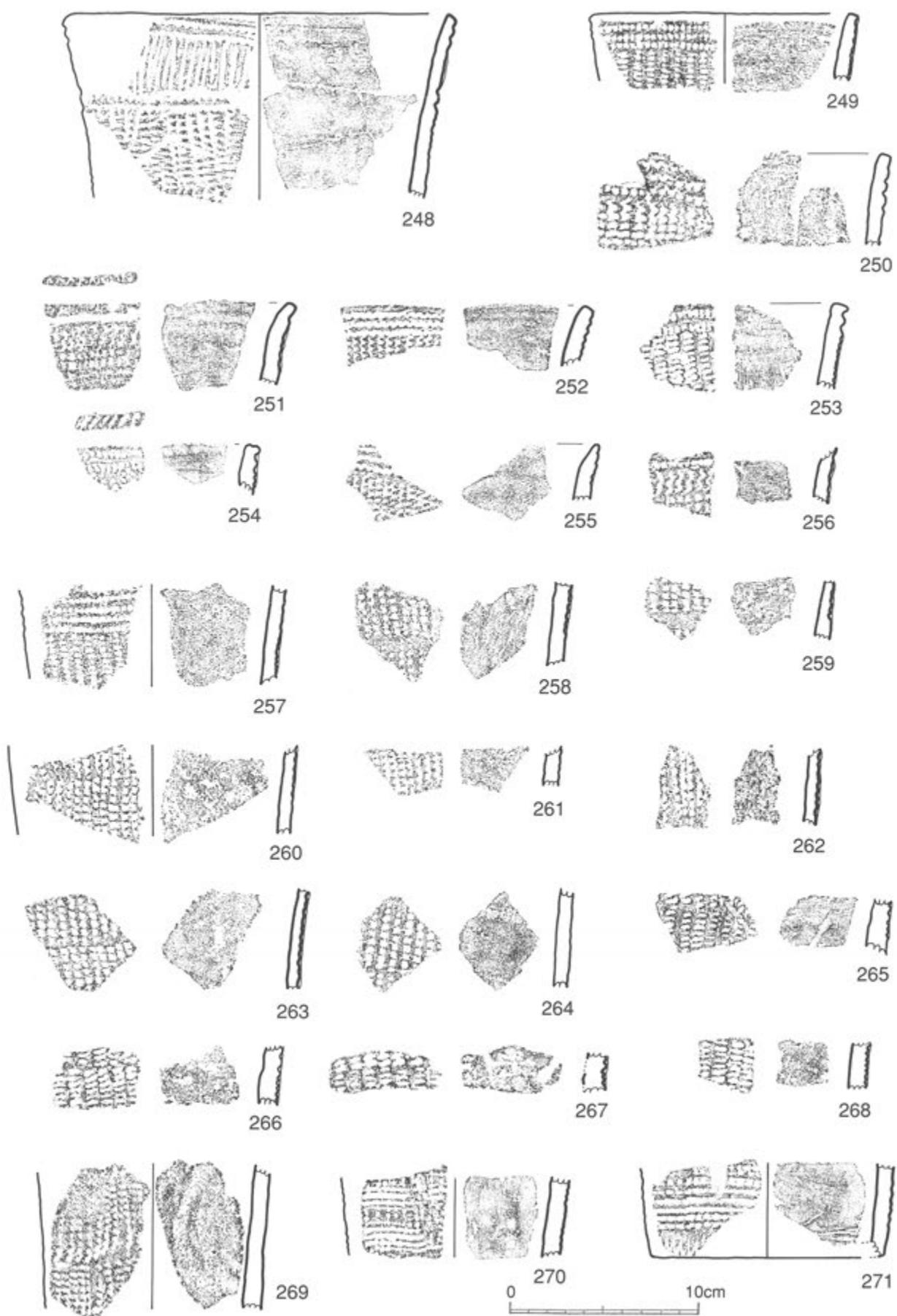
235～237は口縁部片である。235はレモン形の器形を呈する。口縁部は両端が山形に立ち上がっており、少なくとも2つの波頂部を呈すると思われる。復元口径13.6cmである。口縁部には4段の貝殻腹縁刺突文が口縁部の形状に沿って施され、口縁部文様帯が構成されている。その下には楔形突帯が3段貼付されているが、突帯は頂部が摩滅等によって丸味を帯びている。楔形突帯間には貝殻腹縁刺突線文が施文されているが、縦位の貝殻腹縁刺突線文にX字状の貝殻腹縁刺突線文を組みあせた文様パターンである。内面はナデ調整である。236は口縁部が平坦である。端部を四角くおさめ、その上に連続したキザミ目が施される。口縁部には4段の横位の貝殻腹縁刺突文によって口縁部文様帯が構成され、文様帯下には楔形突帯が貼付される。突帯の横には貝殻腹縁刺突線文が施されている。237は角筒もしくはレモン形と思われる。口縁部が山形に立ち上がっており、波頂部を呈すると思われる。貝殻腹縁刺突文が口縁部の形状に沿って施され、口縁部文様帯が構成されている。胴部には貝殻条痕が斜位に施され、楔形突帯が貼付されている。突帯の間には貝殻腹縁刺突線文が施されている。

238～247は胴部片である。238は残存部における復元胴部最大形が19.6cmを測る。楔形突帯が2段



第45図 縄文土器14 (Ⅲ e類)

にわたってやや密に貼付され、突帯を挟み込むように、1列ずつ縦位の貝殻腹縁刺突線文が施されている。突帯間が密なため、刺突線文は一見2列に見える。239・245は斜位の貝殻条痕の上に楔形突帯が2段貼付されている。突帯の側面には連点状に刺突が施されている。240は横位の貝殻腹縁刺突文が3段にわたって施されて文様帯を構成していることから、口縁部付近と思われる。突帯は削られて原形を留めていない。241・246も240と同様に口縁部付近と思われる。突帯の周囲には斜位の貝殻腹縁刺突線文が施されている。242は摩滅等によって突帯が原形を留めておらず、調整・文様等もはっきりとしない。243は突帯がほとんど残存していない。文様帯によって、調整痕にあたる貝殻条痕があまり見えないのが一般的なのに対し、243は広く確認できることから、胴部の下位にあたる



第46図 縄文土器15 (IV類)

と思われる。244は外面がナデ調整である。247は突帯の周囲の刺突が細かくて深く、沈線状に見える。

Ⅳ類土器（第46図）

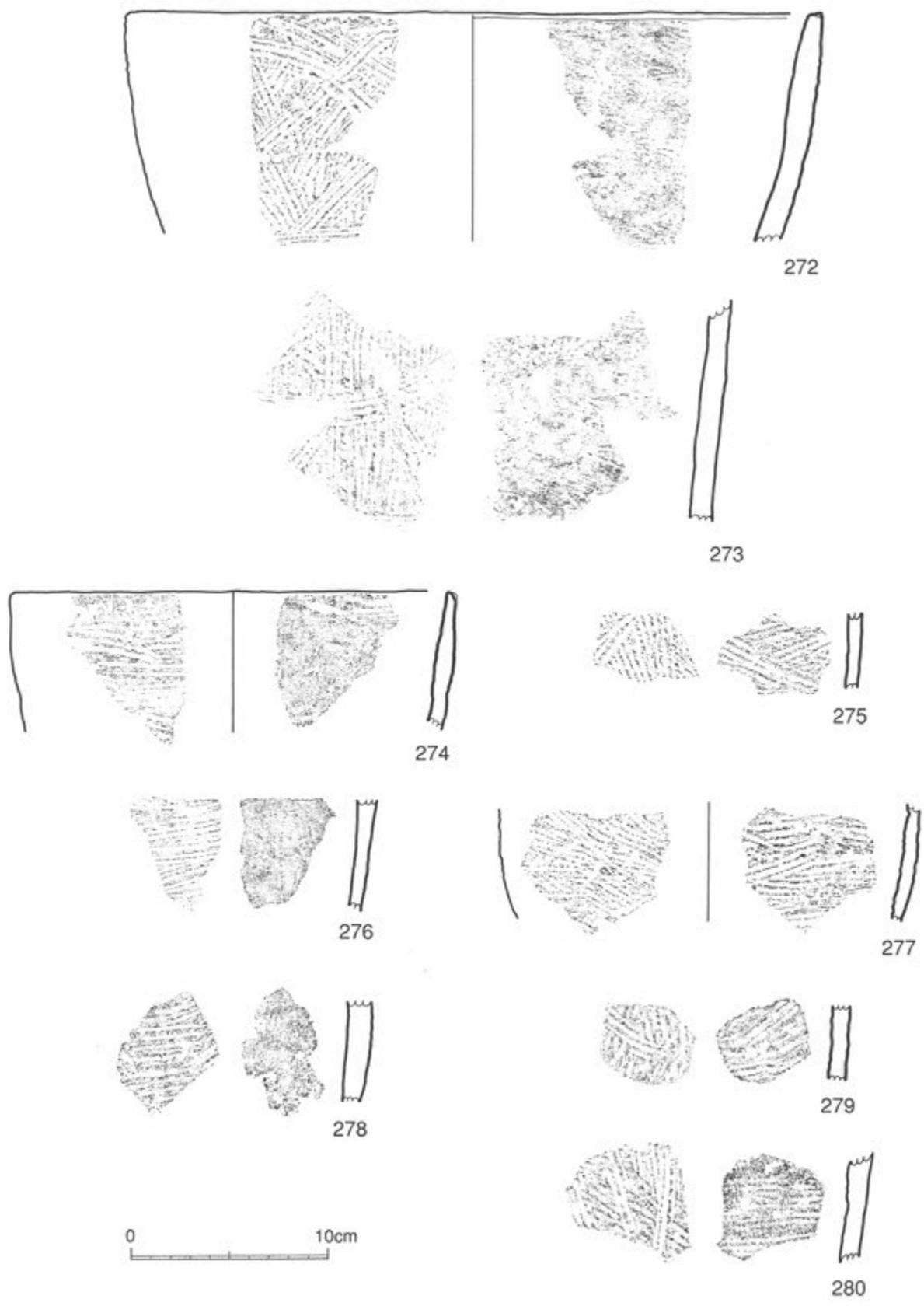
248～255は口縁部片である。口縁部が緩やかに外反し、口縁端部は四角くおさめる。248は復元口径20.4cmを測る。円筒形を呈し、文様は貝殻腹縁によって施文されている。口縁下は横位の貝殻刺突文が2段巡る。その下には貝殻腹縁による縦位の貝殻条痕が施され、再び横位の貝殻刺突文が2段巡っている。その下には縦位の貝殻刺突文が2段にわたって施されている。内面はナデ調整である。249・252は、口縁下に貝殻腹縁によって横位の貝殻刺突文が3段施され、その下には縦位の貝殻刺突文が巡る。249は復元口径14.4cmを測る。250は口縁下に横位の貝殻刺突文が4段施され、その下には縦位の貝殻刺突文が巡っている。251は口縁端部を四角くおさめ、その上に連続したキザミ目が施されている。口縁下には横位の沈線文が1条施され、その下には縦位の貝殻刺突文が、さらにその下には横位の貝殻刺突文が巡っている。253・254は口縁下に横位の貝殻刺突文が2段施され、その下には縦位の貝殻刺突文が巡っている。254は口唇部に連続したキザミ目も施されている。255は口縁下に貝殻腹縁によって横位の貝殻刺突文が3段施され、その下には縦位の貝殻刺突文が巡っている。

256～270は胴部片である。256は横位の貝殻刺突文が1段施され、その下に縦位の貝殻刺突文が巡り、さらにその下には再び横位の貝殻刺突文が施されている。257は横位の貝殻刺突文が5段、その下には縦位の貝殻刺突文が施される。残存部分における復元胴部最大径は14.2cmである。258～260・263は縦位の貝殻刺突文が2段にわたって施されている。261・262・264は縦位の貝殻刺突文が1段施文されている。265～268は刺突文の形状が横長であることから、貝殻腹縁を縦位にやや押し引きながら刺突していると思われる。265～267は2段、268は1段の施文である。269は残存部分における復元胴部最大径が12.4cmを測る。縦位の貝殻刺突文が2段にわたって施されている。270は残存部分における復元胴部最大径が12.4cmを測る。縦位の貝殻刺突文を施文したのち、間隔を開けて2段の横位の貝殻条痕が施されている。271は胴部～底部付近である。復元底径12.4cmを測る。胴部には縦位の貝殻刺突文が2段にわたって施され、底部付近にはヘラ状工具によって沈線文が鋸歯状に施文されている。

Ⅴ類土器（第47図）

272・274は口縁部である。272は胴部からほぼ直線的に立ち上がり、口唇部を四角くおさめる。口唇部には連続したキザミ目が施される。胴部は貝殻腹縁によって綾杉状に条痕文が施される。内面はナデ調整である。復元口径35cmを測る。274も胴部からほぼ直線的に立ち上がり、口唇部を四角くおさめ、連続したキザミ目が施される。胴部には横位の貝殻条痕が施されている。復元口径22.2cmを測る。

273・275～280は胴部片である。273は胴部に縦位の貝殻条痕が施され、その上に斜位の貝殻条痕が綾杉状に施される。内面は工具によるナデ調整である。275は胴部に貝殻腹縁による貝殻条痕が綾杉状に施される。内面は貝殻条痕調整である。276・278は外面が横位による貝殻条痕で、内面は工



第47図 縄文土器16 (V類)

具によるナデ調整である。277・279・280は貝殻条痕が緩杉状に施される。内面は貝殻条痕調整である。

Ⅵ類土器（第48・49図）

281～288は口縁部である。281は口縁部から胴部下位まで接合できたものである。円形で基本的に筒形を呈するが、文様帯の境あたりに胴部最大形をもって若干張りをもつ。復元口径18.4cmを測る。口縁部から胴部最大形にかけて文様帯を構成し、口縁直下から貝殻腹縁による横位の条線文が施されている。調整は内外面ともにナデ調整であるが、内面は板状工具によるナデ調整と思われ、工具痕が確認される。282は口縁部から胴部上位にかけて貝殻腹縁による条線文が施されている。施文パターンは、縦位施文の上に横位施文を組み合わせたものである。調整はナデ調整である。復元口径25cmを測る。283・284・287は口縁直下に少し空間を空けてから貝殻腹縁による横位の条線文が施されている。284は復元口径22.4cmである。285は283・284・287と同様に口縁直下に少し空間を空けてから文様帯が構成されているが、横位の刺突連点文が施されたのち、貝殻腹縁による横位の条線文が施されている。287・288は口縁直下から文様帯が構成され、貝殻腹縁による横位の条線文が施されている。内外面ともに丁寧なナデ調整である。287は復元口径15.8cmを測る。

289・290は胴部片であるが、文様帯部分であるので、口縁部から胴部上位にかけての部分であると推定される。外面はナデ調整ののち、貝殻腹縁による横位の条線文が施されている。内面も丁寧なナデ調整である。

291は底部である。厚手の平底で底径9cmを測る。

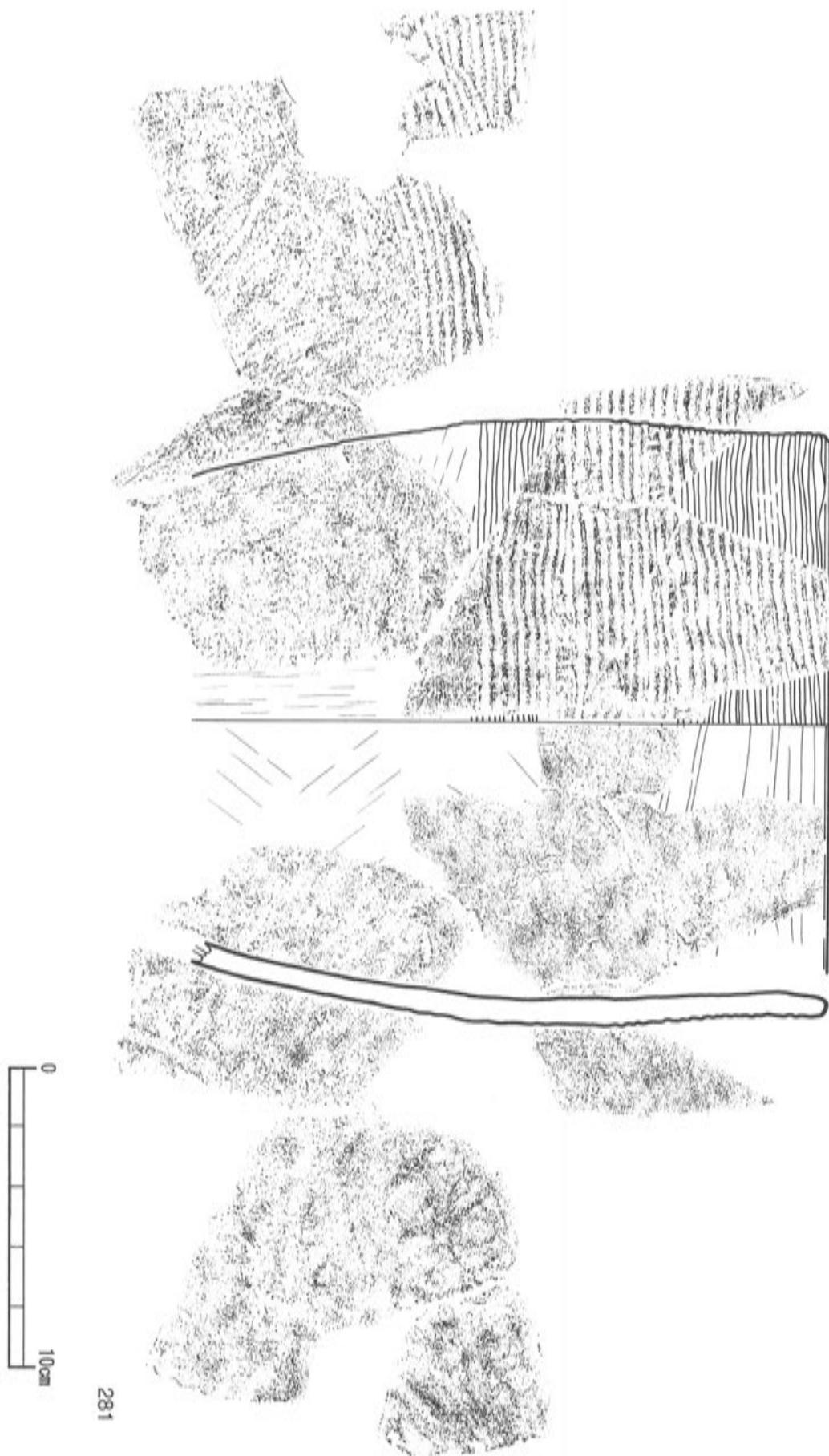
Ⅶ類土器（第50図）

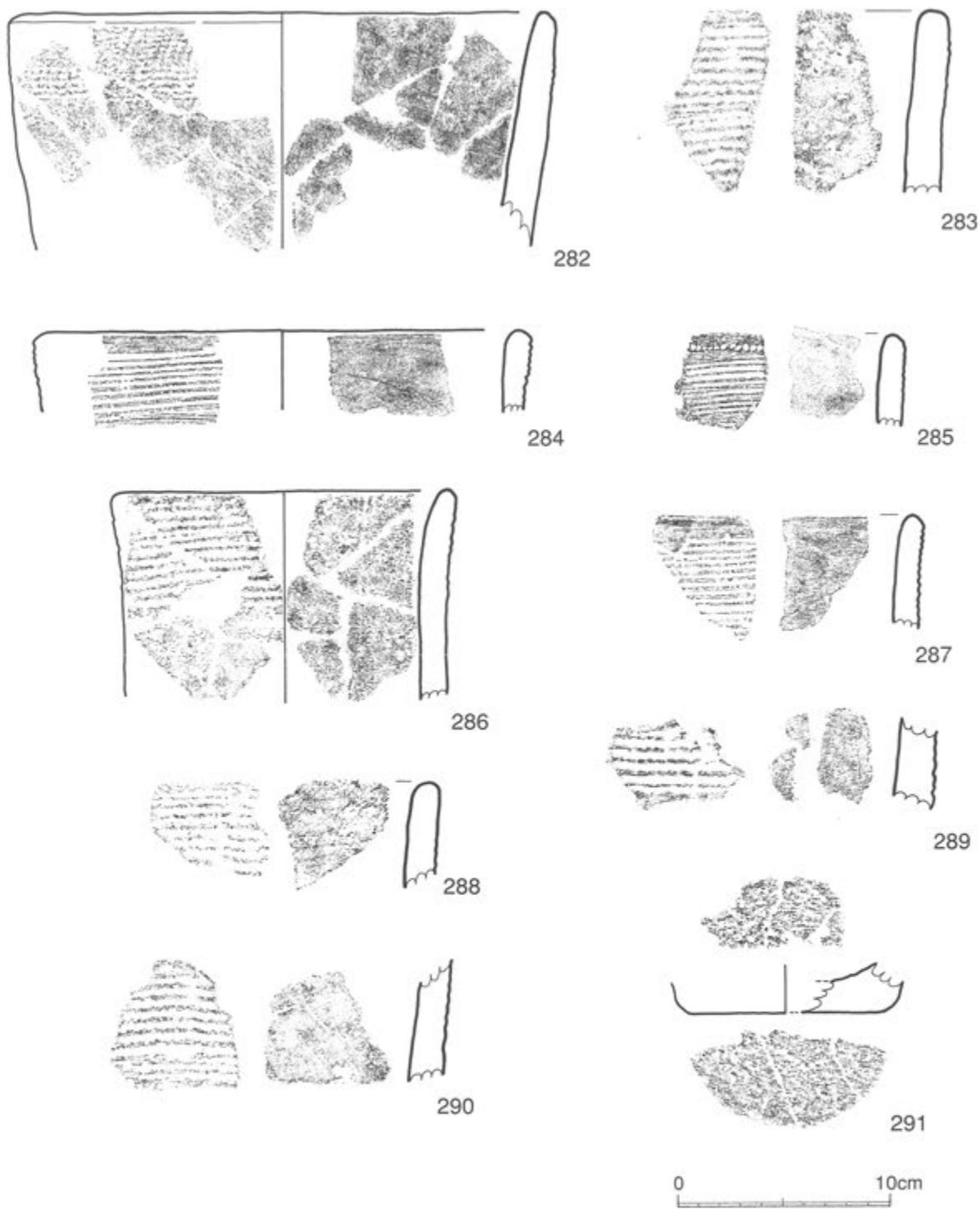
292～308は胴部片である。292・293は、外面は斜位の条痕の上に縦位の条痕が施文されている。内面はケズリである。292は残存部分における復元胴部最大径が15.6cm、293は12.2cmを測る。294は外面に縦位の条痕が施文されている。復元胴部最大径が15.4cmを測る。295は外面に条痕が雑に施されている。内面はケズリである。296・297は、外面は横位の貝殻条痕で、内面はナデ調整である。296は復元胴部最大径が20.4cm、297は14.2cmである。298・299は外面が斜位の貝殻条痕で、内面はケズリのちナデ調整である。298は復元胴部最大径が17.8cm、299は15.2cmである。300～302は外面が斜位の貝殻条痕、内面はケズリである。300は復元胴部最大径が12.6cmと小形である。303は外面が横位の貝殻条痕で、内面はケズリである。304は外面が縦位にちかい斜位の貝殻条痕であるが、貝殻の肋が太いものである。内面はケズリである。復元胴部最大径が13.2cmを測る。305～308は外面が縦位の貝殻条痕、内面はケズリである。306は復元胴部最大径が10.8cmと小形である。

Ⅷ類土器（第51図）

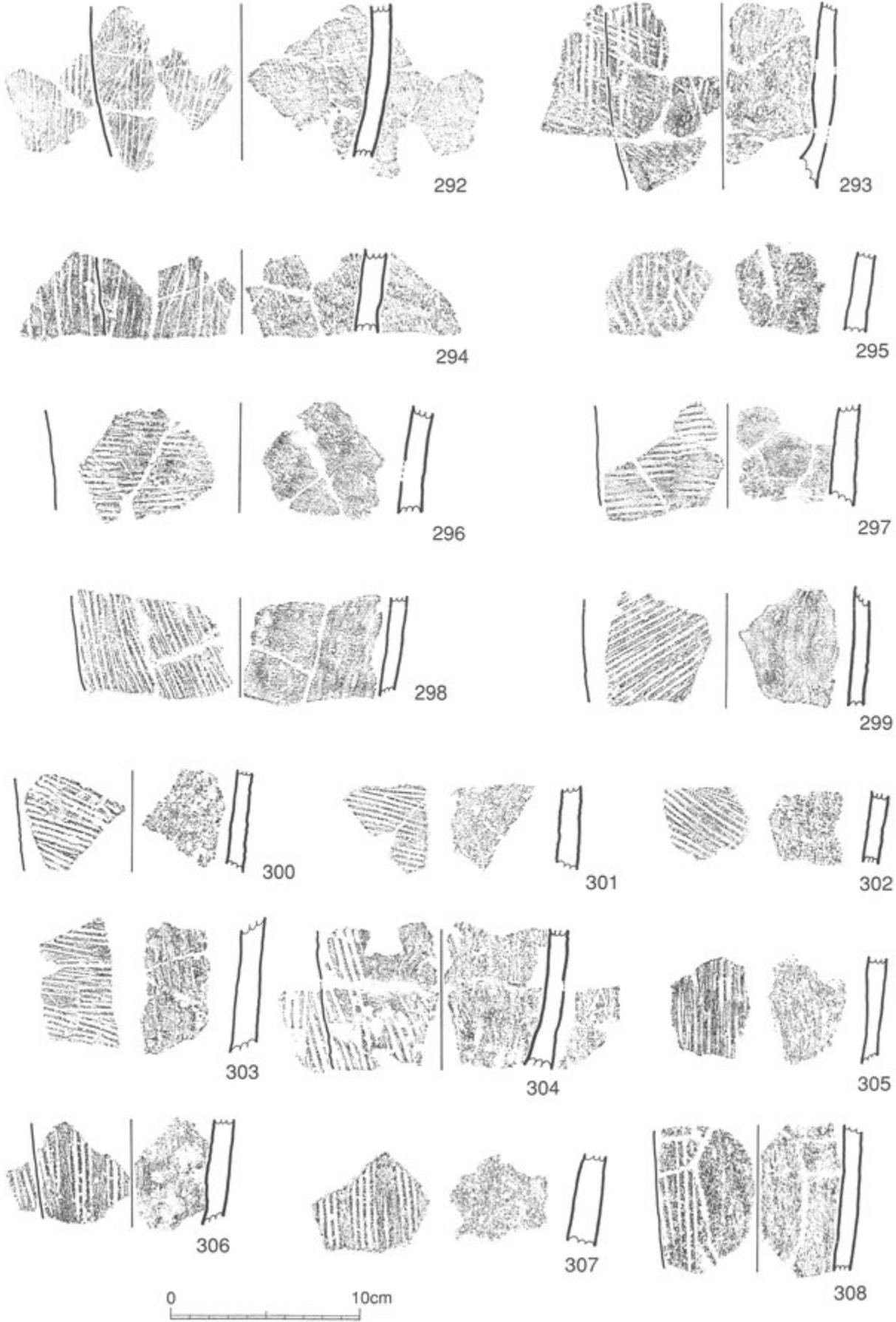
309は胴部片である。やや張りをもち胴部最大径は22.6cmである。沈線文が描かれ、その間には縄文を意識したようなものが施されている。型式的には塞ノ神A b式が最も近いと思われるが、そのものとはいいきれない部分もある。310～313は胴部片で、縦位の沈線文ののちに横位の沈線文が施される。内外面ともにナデ調整である。塞ノ神式に伴ってたまに散見される土器であるが、型式未

第48図 縄文土器17 (VI類)





第49図 縄文土器18 (VI類)



第50図 縄文土器19 (VII類)

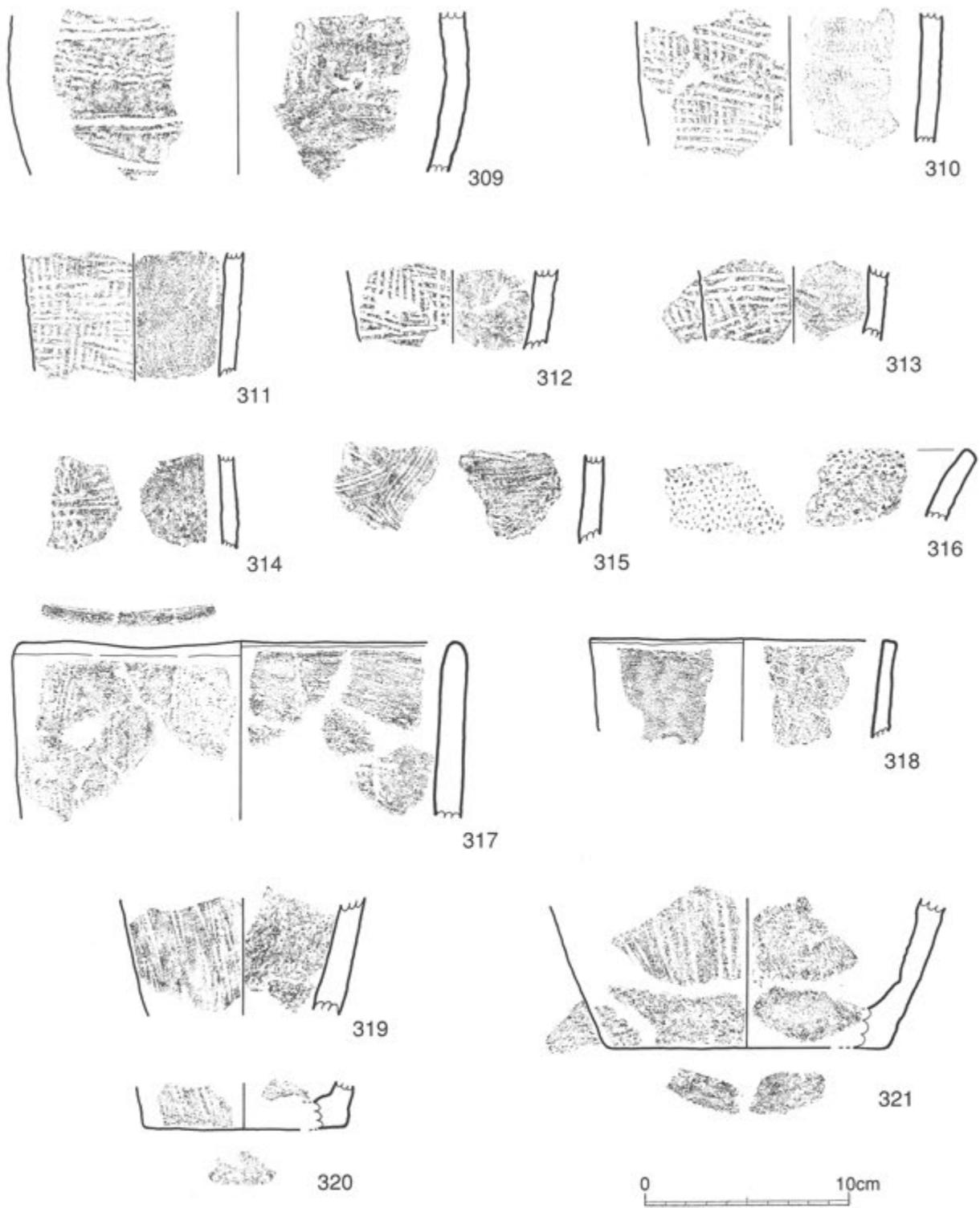
設定の土器である。314は胴部片で、中央に沈線文が描かれ、その上に縦位の撚糸文が施されている。内外面ともにナデ調整である。315は外面はナデ調整のうえに貝殻条痕が流水状に施される。内面は貝殻条痕調整である。316は外反する口縁部で、口唇部を四角くおさめている。内外面・口唇部に楕円押型文が施されているが、外面は縦位方向、内面は横位方向に回転施文されている。317は直立する口縁部で、復元口径21.4cmである。器壁は厚い。外面は縦位の貝殻条痕が施され、指頭圧痕も認められる。内面は丁寧なナデ調整である。318も直立する口縁部で、復元口径15cmである。口縁端部は四角く面取りされる。外面はナデ調整で、内面は逆目板調整が施される。319は胴部片である。器壁は厚く、残存部における胴部径は12cmである。外面は縦位の貝殻条痕のちナデ調整で、内面は逆目板調整が施されている。320は底部で、底径9.8cmを測る。外面は縦位の貝殻条痕のちナデ調整で、内面はナデ調整である。321は胴部～底部で、復元底径13.3cmである。外面はナデのち縦位の貝殻条痕で、内面はヘラナデが行われている。

Ⅸ a 類土器 (第52図)

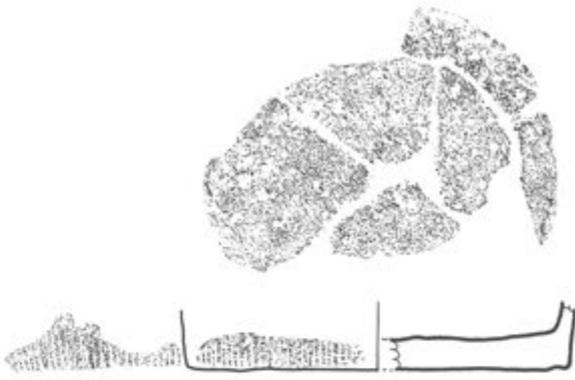
322～328は底部片である。322～326は円形で、縦位の条痕文が施される。底径はそれぞれ、322が15cm、323が17.2cm、324が11.4cm、325が10cm、326が11cmで、324～326は小形である。326は底部にあたる粘土板の側面に粘土紐を密着させて胴部を構成している。327・328は角形である。底径はそれぞれ、327が8.2cm、328が7.4cmと小形である。327は底部付近が縦位の貝殻条痕で、胴部は斜位の貝殻条痕である。328は縦位の貝殻条痕が施されている。

Ⅸ b 類土器 (第53図)

329～345は底部片である。ほぼすべて円形を呈すると推定される。329は復元底径8.2cmと小形のものである。外面は縦位の貝殻条痕が施される。329は底部にあたる粘土板の上端部をやや凹ませ、そこに粘土紐を密着させて積み上げている。331は復元底径13cmである。332は329と同様に、底部にあたる粘土板の上端部をやや凹ませ、そこに粘土紐を密着させて積み上げている。復元底径10cmである。333・334は底部にあたる粘土板の端を丸くおさめて凸状にし、胴部を構成する粘土紐を凹ませて密着している。復元底径はそれぞれ9.2cm・9.6cmである。335は復元底径12.4cmである。336は胴部は斜位の貝殻条痕で、底部付近は縦位の貝殻条痕が施されている。復元底径10.4cmである。337は復元底径13.8cmである。338・339は、復元底径がそれぞれ9cm・10cmと小形である。340は復元底径14cmである。器面調整である横位の貝殻条痕の上に縦位の貝殻条痕が施されている。底部にあたる粘土板の側面に粘土紐を密着させて胴部を構成している。341は復元底径12.8cmである。外面は斜位の貝殻条痕が施される。底部にあたる粘土板の側面に粘土紐を密着させて胴部を構成している。底部と胴部との接合を強固にするためか、底部内面にさらに粘土板が貼り付けられており、厚手の底部となっている。342は復元底径が7.8cmと小形である。343は復元底径14.8cmである。344・345は摩滅が著しい。復元底径はそれぞれ10cm・10.8cmである。



第51図 縄文土器20 (Ⅷ類)



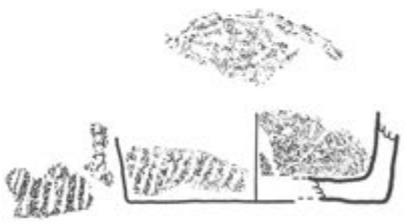
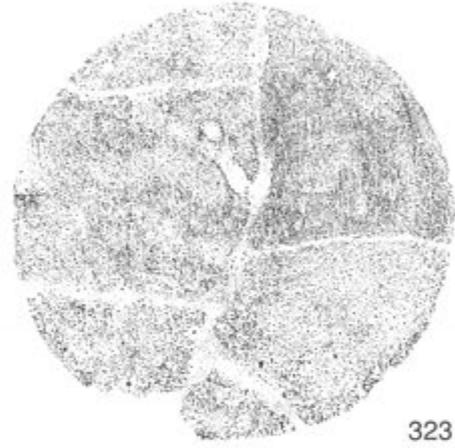
322



323



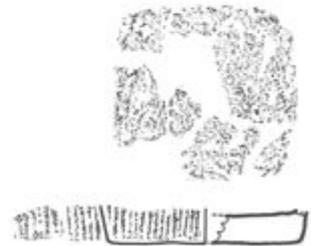
324



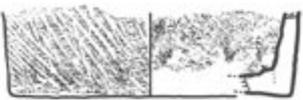
325



327



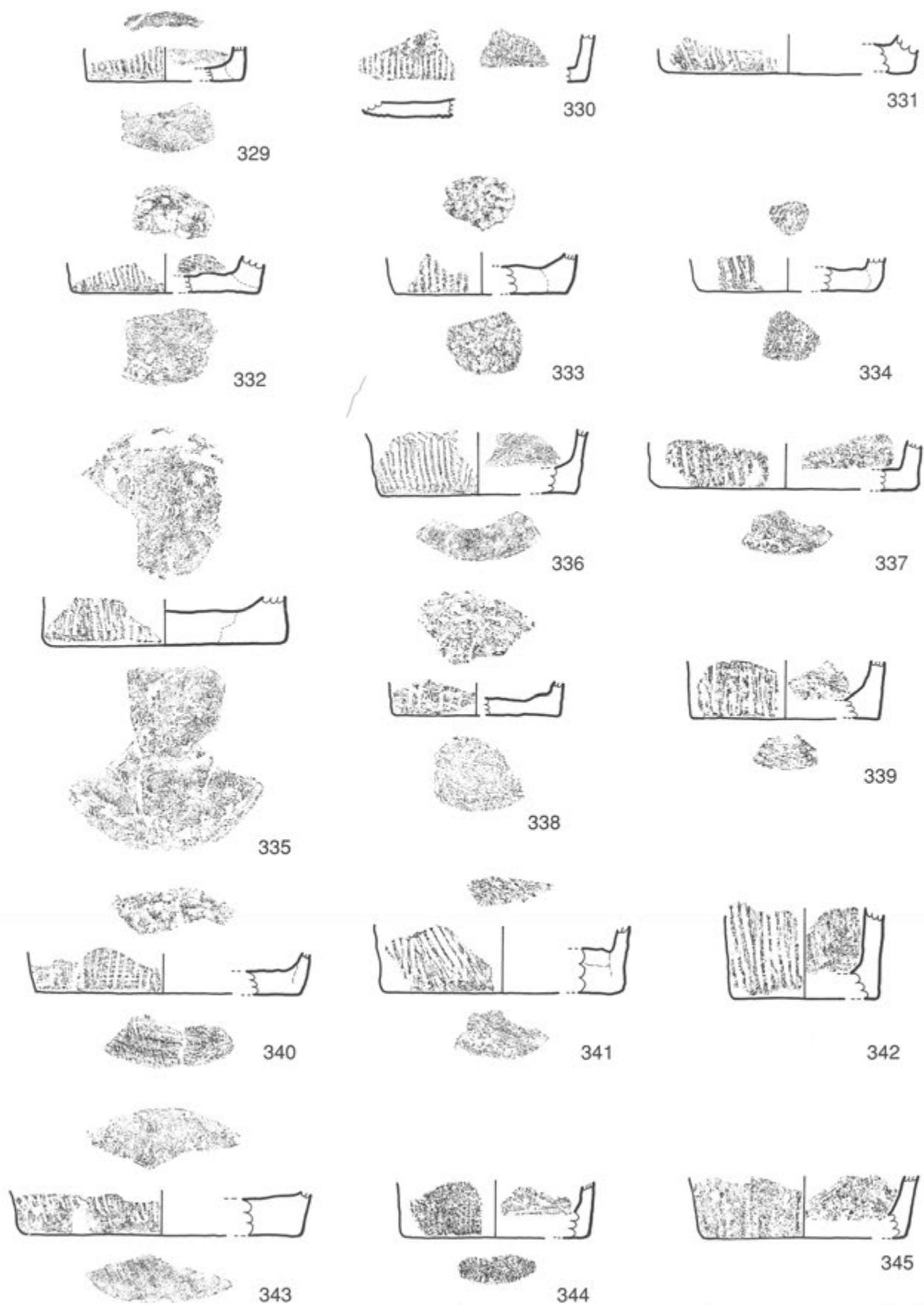
328



326

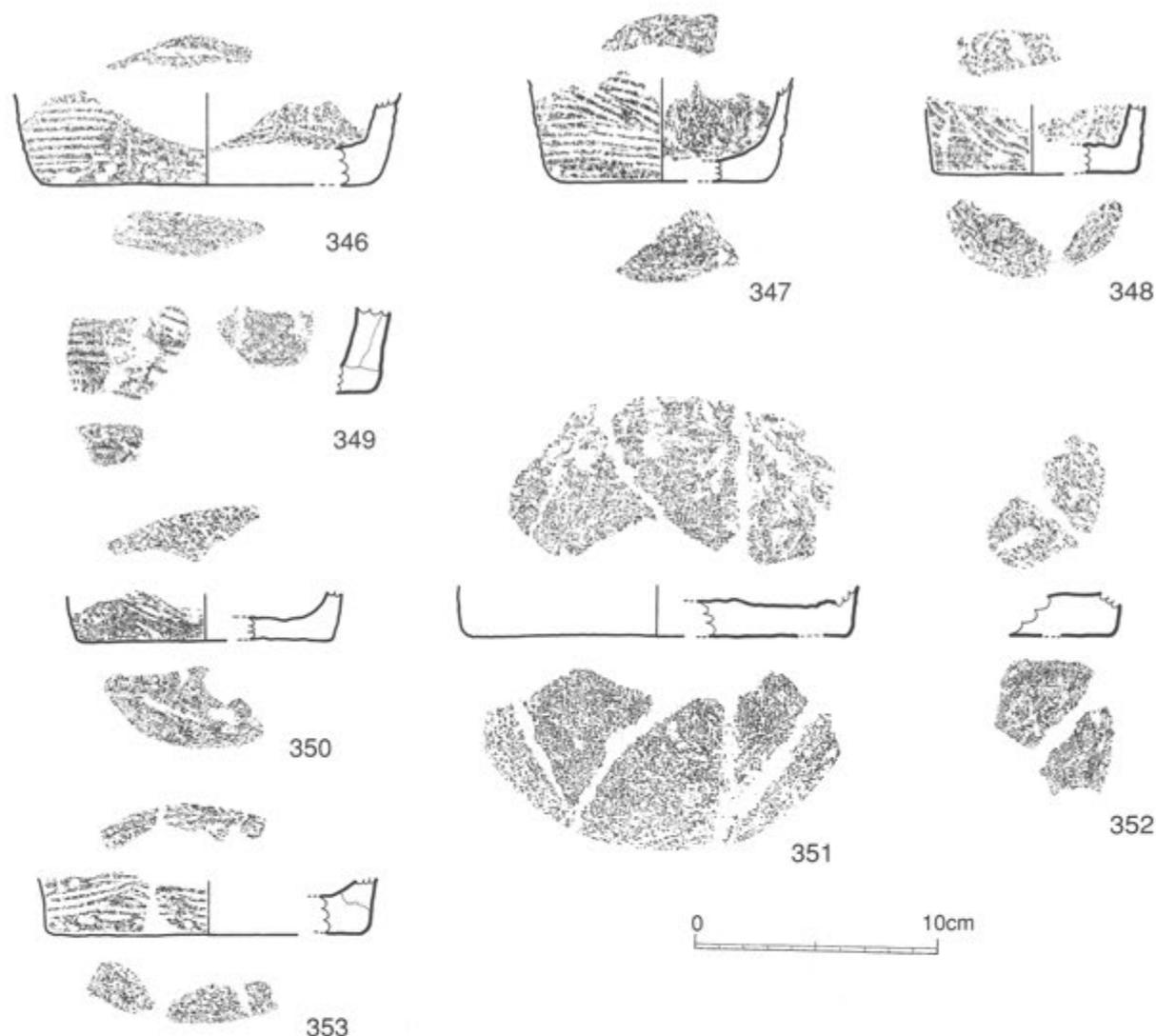


第52図 縄文土器21 (IX a類)



第53図 縄文土器22 (IX b類)

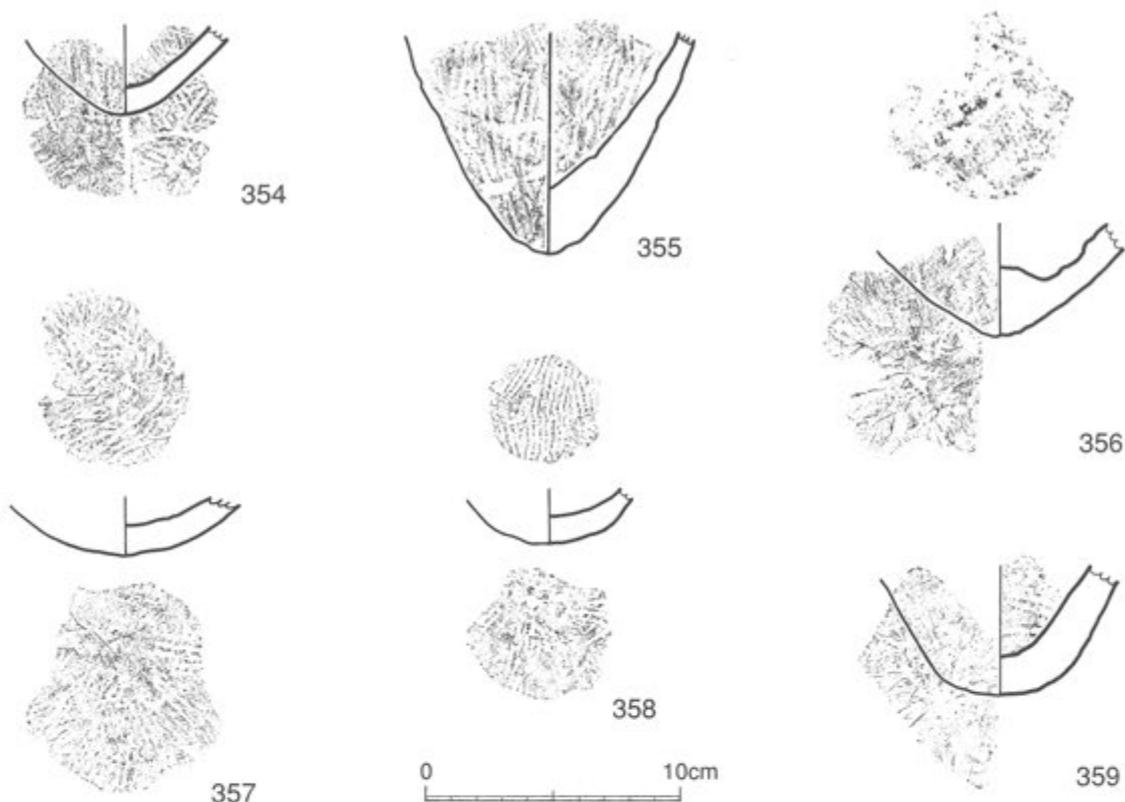




第54図 縄文土器23 (IX c類)

IX c類土器 (第54図)

346～353は底部片である。IX a・b類が底部からほぼ真っ直ぐ立ち上がるのに対し、底部からやや外に開いて立ち上がる。ほとんどが円形と推定される。346は復元底径13.2cmである。貝殻腹縁による横位の貝殻条痕が施される。347・348は復元底径がそれぞれ8.4cm・8.4cmと小形である。底部付近は貝殻腹縁による横位の貝殻条痕で、その上は斜位の貝殻条痕が施されている。349は底部にあたる粘土板の端部に粘土紐を積み上げて胴部を立ち上げ、さらに胴部内面にも粘土紐が貼付されている。350は復元底径が10.2cmと小形である。外面には斜位の貝殻条痕が施されている。351・352は摩滅が著しい。353は復元底径が13cmで、横位の貝殻条痕が切り合うように施されている。



第55図 縄文土器24 (IX d類)

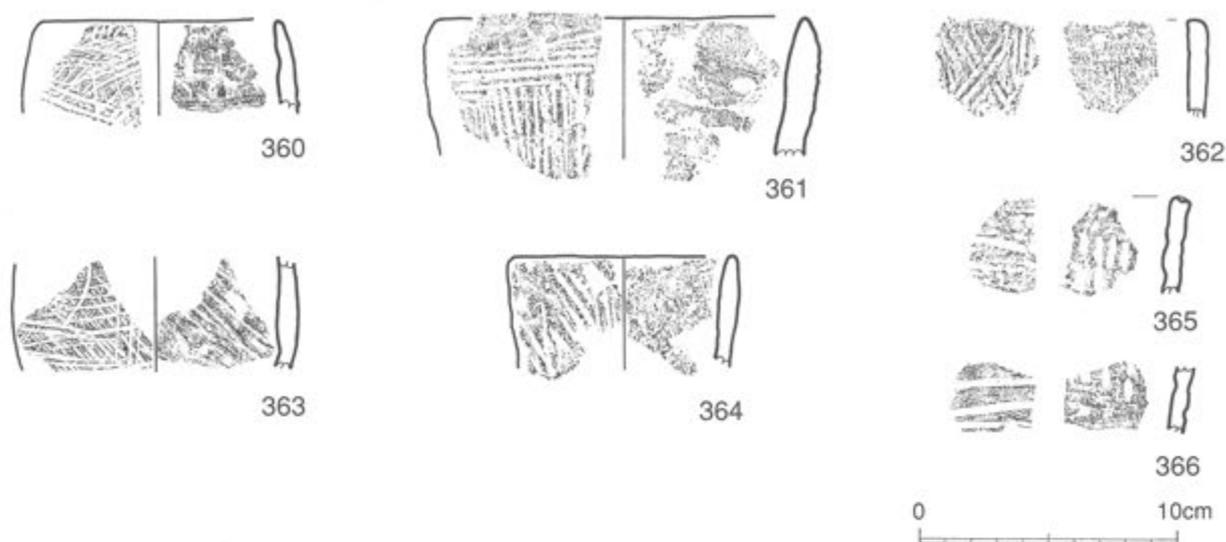
IX d類土器 (第55図)

354～359は底部片である。354・355は深い尖底土器で、内外面ともに貝殻条痕が施されている。356はやや浅い尖底土器である。外面はケズリ状の調整が施され、内面は貝殻条痕である。357・358は浅い尖底土器で、丸底とも呼べるほどである。内外面ともに貝殻条痕が施されている。359は深い丸底土器とも呼べる形状を呈している。外面はケズリ状の調整が施され、内面は貝殻条痕である。

X類土器 (第56図)

X類は縄文時代早期から前期に帰属すると考えられる土器で、型式認定の難しいものや、型式が判明しても個数が少ない土器群を一括してまとめたものである。

360は口縁部片である。復元口径9.2cmと小形のものである。口縁端部にはキザミ目が施され、胴部には左右の斜位の条痕が、そして最後に横位の条痕が施されている。内面はナデ調整である。363は胴部片で、復元胴部径11.2cmである。胴部には左右の斜位の条痕が、そして最後に横位の条痕が施されている。内面は条痕のちナデ調整である。360と同一個体の可能性がある。361は口縁部片である。復元口径14.2cmを測る。外面には縦位の貝殻条痕がなされ、その後口縁端部からやや下がったところに横位の貝殻条痕が施されている。内面はナデ調整である。362は口縁部片である。外面には縦位の貝殻条痕がなされ、その後文様効果をねらってX字状に貝殻条痕が施されている。内面はナデ調整である。364は口縁部で、復元口径9cmである。外面はナデ調整のち斜位の貝殻条痕が施



第56図 縄文土器25 (X類)

される。内面はナデ調整である。365・366は曾畑式土器である。型式は判明したものの、個数が2点のみであったため、本類で扱った。365は口縁部片である。口唇部にキザミ目が施され、外面には横位の沈線文、内面には横位の連点文が2段に施されている。366は胴部片である。外面には横位の沈線文、内面には横位の連点文が施される。

X I 類土器 (第57図)

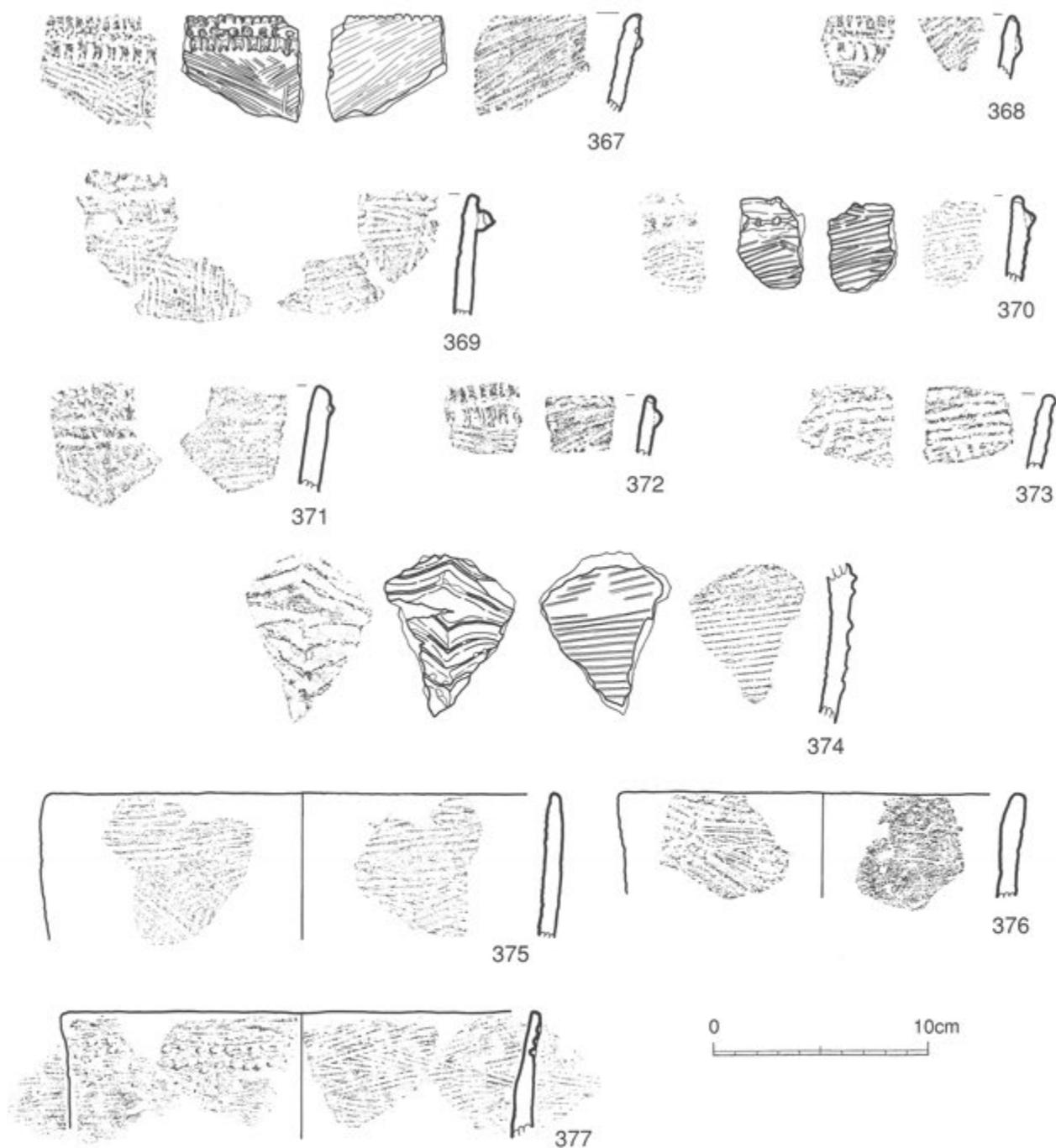
374を除いて全て口縁部片である。367～372は口唇部にキザミ目が施され、口縁下には刻目突帯文が貼付されている。内外面ともに貝殻条痕調整である。367は口唇部キザミ目と刻目突帯文との間に刺突連点文が施されている。374は胴部片で、6条のみみずばれ状突帯が貼付されている。内面は貝殻条痕調整である。375・376は口縁部がほぼ直立する。375は復元口径23.4cmを測る。内外面ともに貝殻条痕調整だが、外面は口縁下が横位、その下が斜位の条痕である。376は復元口径18.8cmである。外面は斜位の貝殻条痕で、内面はナデ調整である。377も口縁部が直立する。内外面ともに貝殻条痕調整で、外面口縁下には3段の刺突連点文が施される。復元口径22cmである。

X II a 類土器 (第58図)

378は口縁部～胴部である。復元口径17cm, 残存部器高17.3cmと小形である。口縁部はやや外反し、胴部がわずかに張る。口縁下には2条、胴部最大径には1条の微隆起突帯が巡る。胴部には相交弧文が2段ずつ巡っているが、文様自体は退化しており、肉眼ではあまり明瞭ではない。内外面ともにナデ調整であるが、内面の胴部最大径周辺のみ横位の貝殻条痕が認められる。

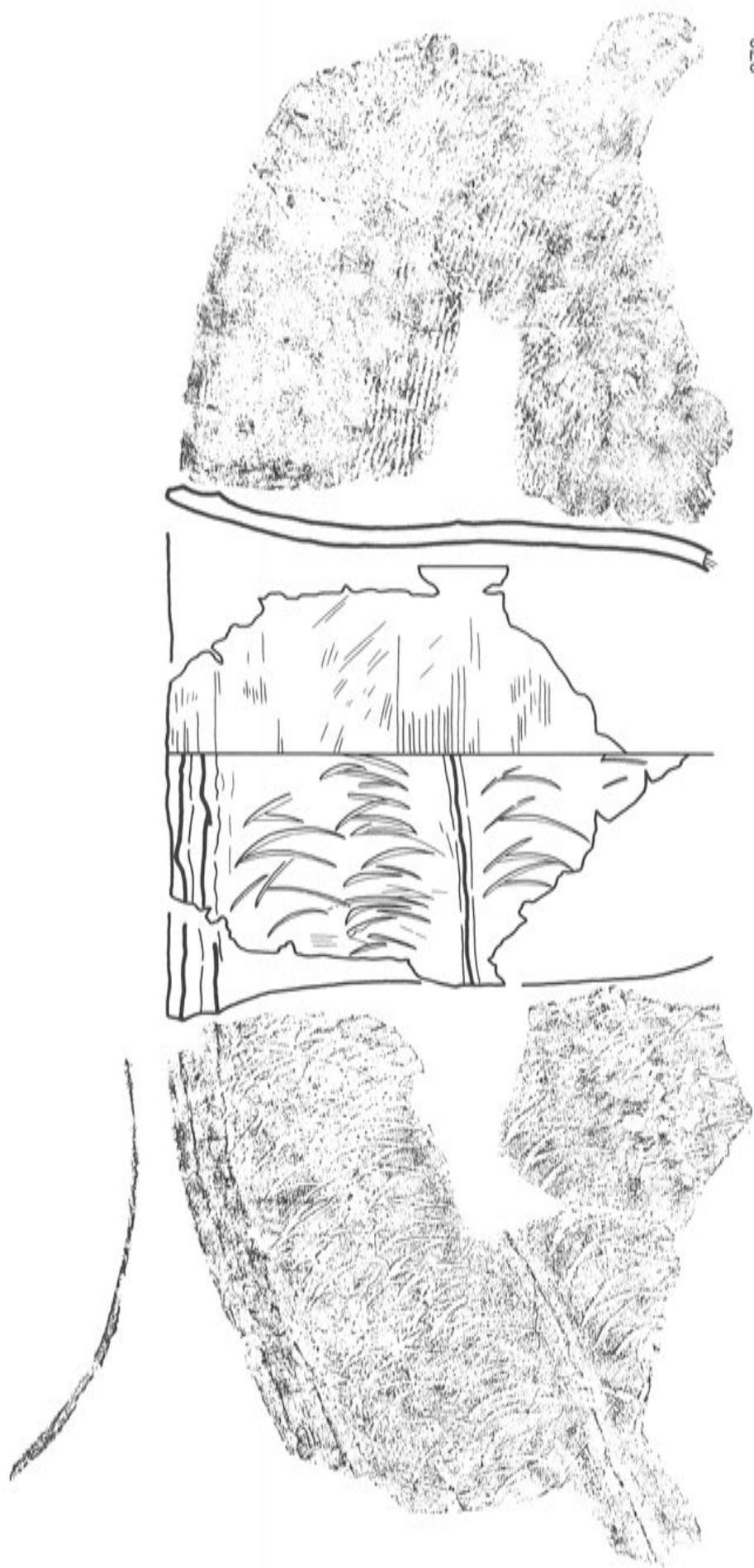
X II b 類土器 (第59図)

379はやや外反する口縁部である。口縁下に横位の刻目突帯文が2条貼付されている。横位の刻目



第57図 縄文土器26 (XI 類)

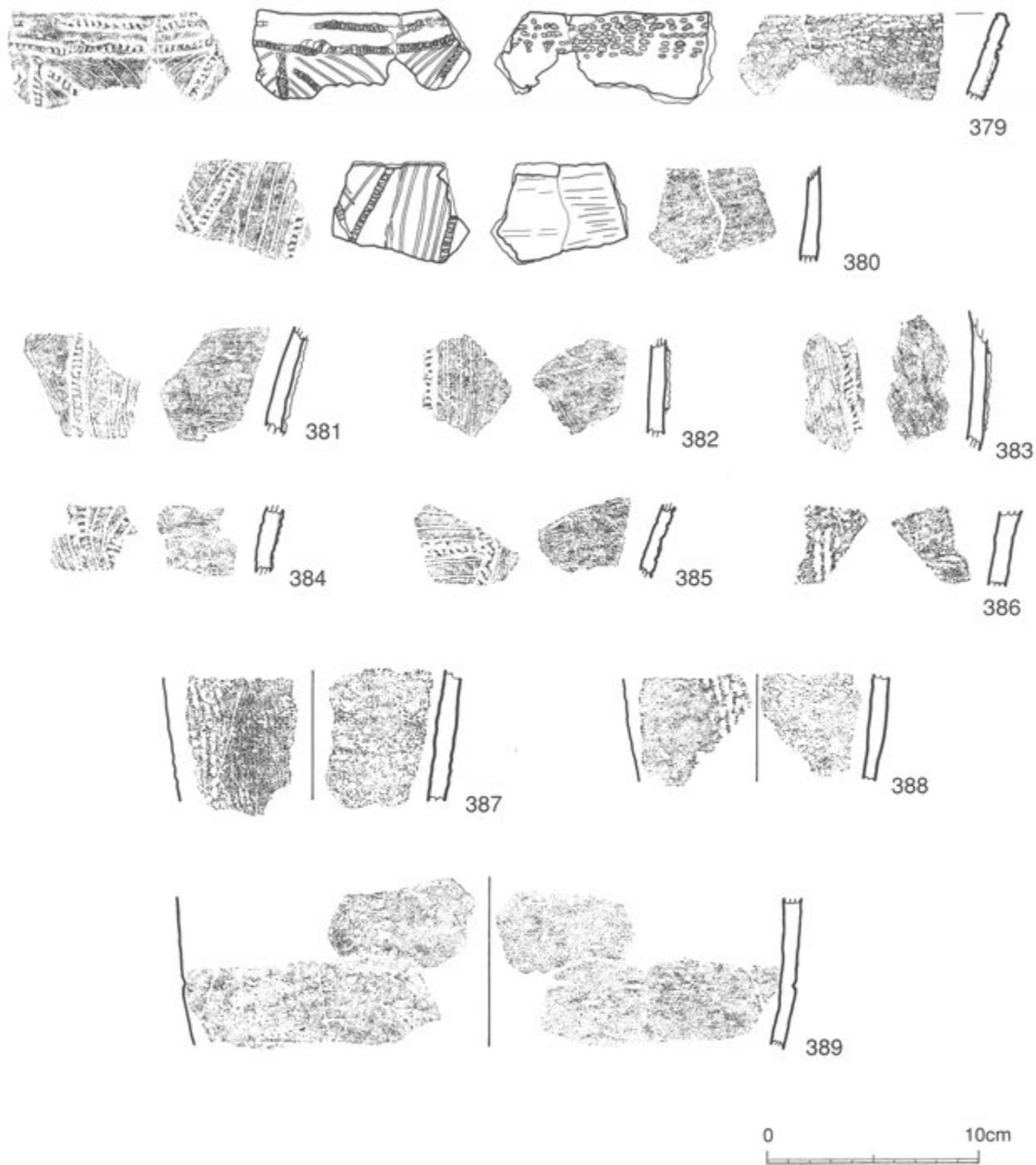
突帯文の下には縦位と斜位の刻目突帯文が貼付され、突帯の間には斜位の沈線文が施される。内面には横位の連点文が施される。380～385は胴部に刻目突帯文と沈線文が施されるものである。380は斜位の刻目突帯文が貼付され、突帯の間には斜位の沈線文が施される。内面はナデ調整である。381は中央部に縦位の刻目突帯文が貼付され、突帯の両側面には縦位と斜位の沈線文が施される。382・383は縦位の刻目突帯文が貼付され、突帯の横には縦位の沈線文が施される。384は縦位と斜位の刻



378

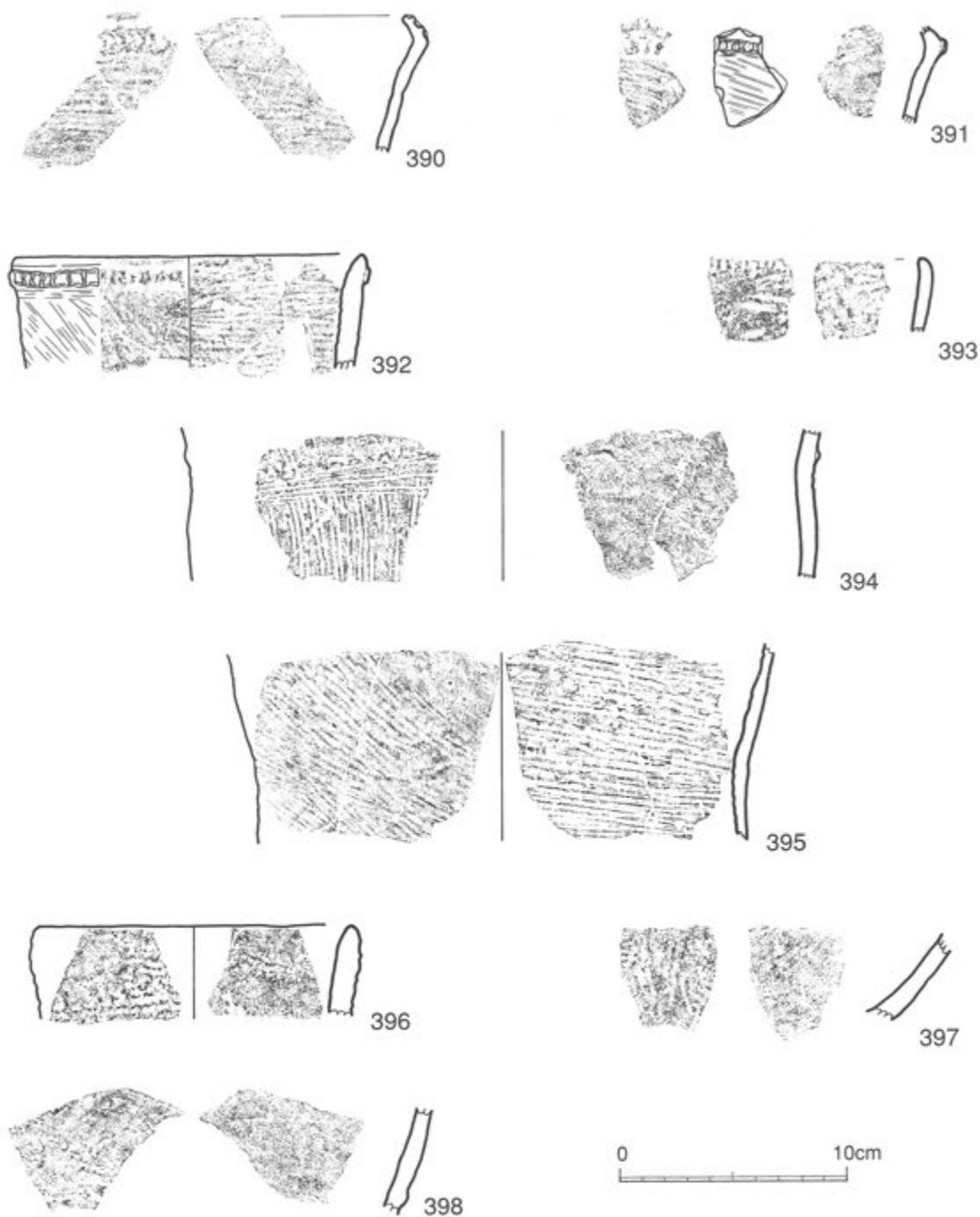


第58図 縄文土器27 (XII a類)



第59図 縄文土器28 (XIIb類)

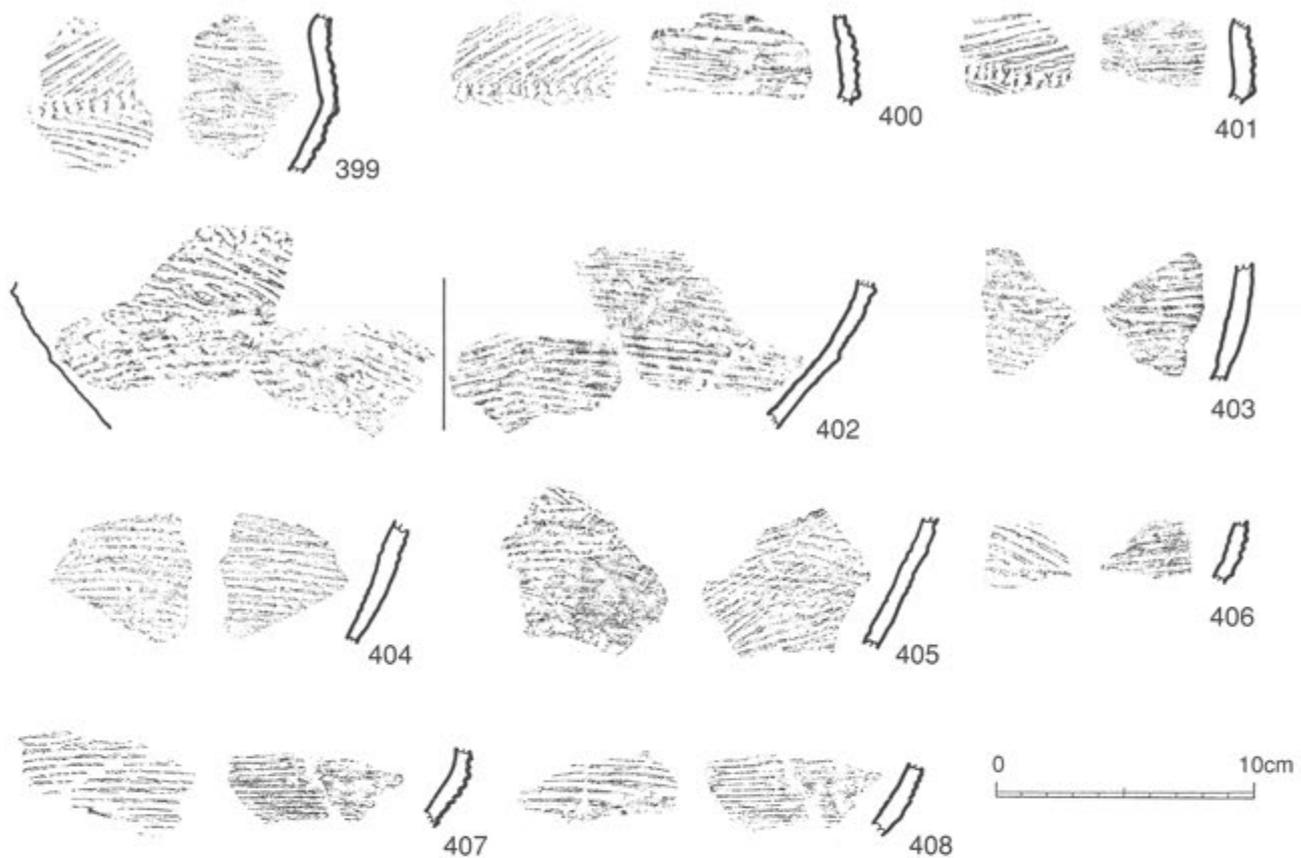
目突帯文が貼付され、突帯の間には縦位と斜位の沈線文が施される。385は縦位と横位の刻目突帯文が貼付され、突帯の間には縦位と横位の沈線文が施される。386～389は胴部片で、胴部に縦位の連点文が施されるものである。



第60図 縄文土器29 (XIII類)

XIII類土器 (第60図)

390～393は口縁部である。390は口縁部が内弯するものである。口縁部外面には横位の連点文が3段に施される。内外面ともに貝殻条痕のちナデ調整である。391も口縁部が内弯するものである。口縁部外面の屈曲部分には1条の刻目突帯文が貼付される。外面は貝殻条痕文、内面はナデ調整であ



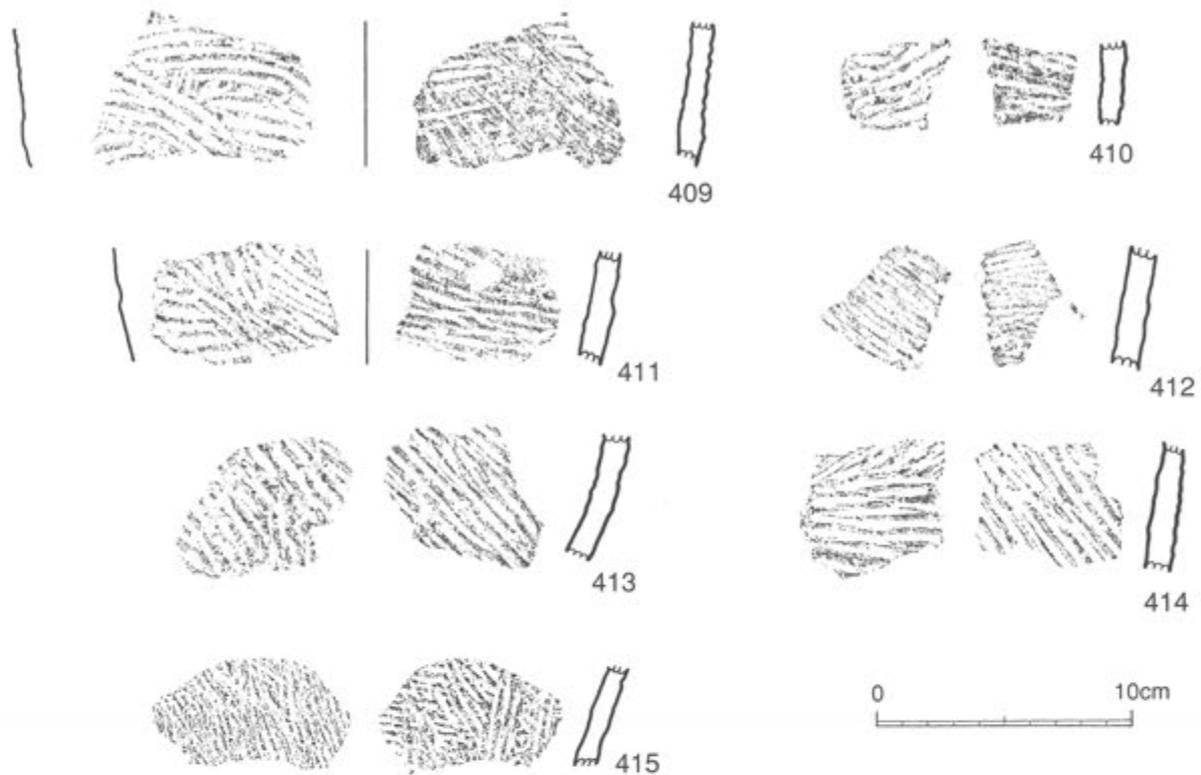
第61図 縄文土器30 (XIV a類)

る。392は口径15.8cmで口縁部がほぼ直立するものである。口縁直下には1条の刻目突帯文が貼付される。外面は条痕のちナデ調整，内面は条痕調整である。393は口縁端部がわずかに内傾するものである。端部には1条のキザミ目が施される。内外面ともにナデ調整である。

394・395は胴部片である。394は胴部が括れるもので，胴部上位に1条の刻目突帯が貼付される。外面は貝殻条痕が施され，内面はナデ調整である。395も胴部が括れるものである。内外面ともに貝殻条痕調整である。

XIV a類土器 (第61図)

399～408は胴部片である。399は胴部最大径で屈曲し，断面が逆「く」字状を呈する。胴部最大径部分には刻目突帯文が貼付される。突帯をはさんで上位は右斜め，下位は左斜めの貝殻条痕が施される。内面は横位の貝殻条痕である。400・401は屈曲部より上位の胴部片で，内傾している。土器片下端部に刻目突帯文が貼付され，外面は斜位の貝殻条痕，内面は横位の貝殻条痕が施されている。402は屈曲部より下位の胴部片で，外傾している。復元胴部最大径は33.8cmである。土器片上端部に刻目突帯文が貼付され，外面は斜位の貝殻条痕，内面は横位の貝殻条痕が施されている。403～406・408は屈曲部より下位の胴部片と思われ，外傾している。403・404・408は内外面ともに横位の貝殻条痕が施される。405は内外面ともに横位と斜位の貝殻条痕である。406は外面が斜位，内面は



第62図 縄文土器31 (XIV b類)

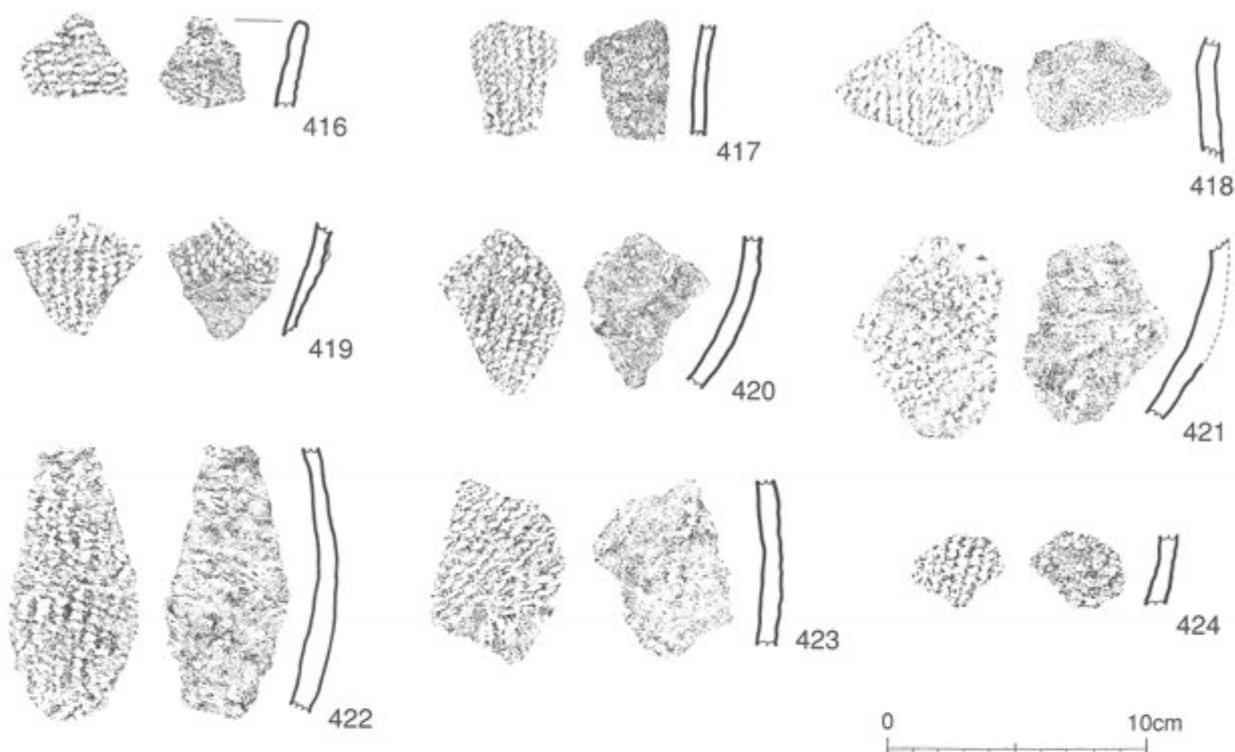
横位の貝殻条痕である。407は屈曲部より上位の胴部片と思われ、内傾している。内外面ともに横位の貝殻条痕が施されている。

XIV b 類土器 (第62図)

409～415は胴部片である。409は残存部分における胴部最大径が27.2cmを測る。外面は横位と斜位の貝殻条痕で、内面は貝殻条痕のちナデ調整が施されている。410は外面が横位の貝殻条痕、内面は貝殻条痕のちナデ調整である。411は残存部分における胴部最大径が19.8cmを測る。外面は横位と斜位の貝殻条痕で、内面は横位の貝殻条痕が施されている。412は外面が斜位、内面が横位の貝殻条痕である。413は外面が斜位と横位、内面が斜位の貝殻条痕である。414は内外面ともに斜位の貝殻条痕が施される。415は他と比べて細めの貝殻条痕が施される。外面はほぼ縦位、内面は横位と斜位の条痕である。

XV 類土器 (第63図)

416は口縁部で、やや外傾する。外面には縄文が施され、内面はナデ調整である。417～424は胴部片である。417・418は胴部がゆるく外反するもので、外面は縦位の縄文、内面はナデ調整が行われている。419は胴部が外傾するもので、外面は縦位の縄文、内面は上位が縦位の縄文、下位はナデ調整が行われている。420は丸く張る胴部で、外面が斜位の縄文、内面はナデ調整である。421も胴部



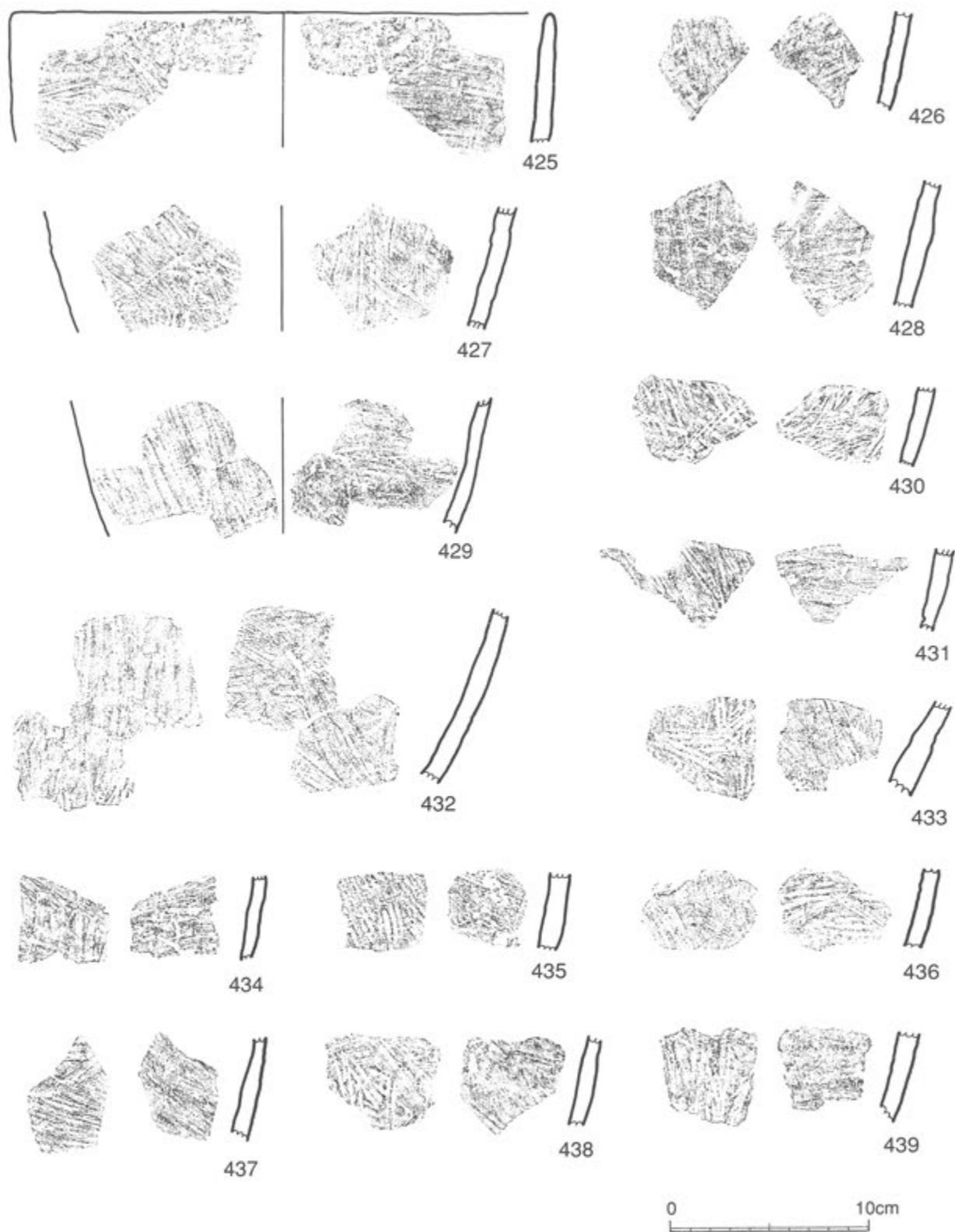
第63図 縄文土器32 (XV類)

が丸く張る。外面は剥落しているものの、縄文が施された痕跡が伺える。内面はナデ調整である。422は胴部が丸く張り、外面が縦位の縄文のちナデ、内面はナデ調整が行われている。423・424は外面が斜位の縄文、内面はナデ調整である。

XVI類土器 (第64図)

425は口縁部で口径27.2cmである。ほぼ直立して立ち上がり、口唇部に向かってやや細くなる。内外面ともに条痕調整がなされるが、内面が横位方向の条痕調整なのに対し、外面は横位と斜位方向から行われており、雑な印象を受ける。426～428は内外面とも条痕調整のち一部にナデが認められる。427は残存部における胴部径は23.8cmである。429は外面が斜位の条痕で、一見ケズリのような印象を受ける。残存部における胴部径は21.2cmである。内面は条痕のちナデ調整である。430は内外面ともに雑な条痕調整である。431・433は内外面ともに条痕調整であるが、外面は太い条線で、内面には細かい条線が認められる。

432は外面が縦位の条痕で、一見ケズリのような印象を受けるものである。内面は横位と斜位の条痕調整で、細かい条線が認められる。433は外面は太い条線が縦横に入り、内面には細かい条線が認められる。434は内外面ともに条痕のちナデ調整である。435は外面が斜位の貝殻条痕、内面は条痕のちナデ調整である。436は外面は細かい条線が入り、内面は太い条線が認められる。437は内外面ともに斜位の条痕調整である。438は外面は太い条線と細かい条線が入り交じり、内面は細かい条線とナデ調整が認められる。439は外面が縦位の条痕調整、内面は横位の条痕のちナデ調整である。



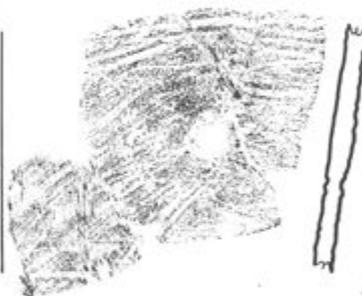
第64図 縄文土器33 (XVI類)



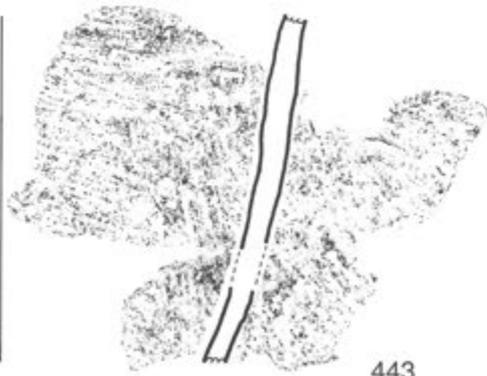
440



441



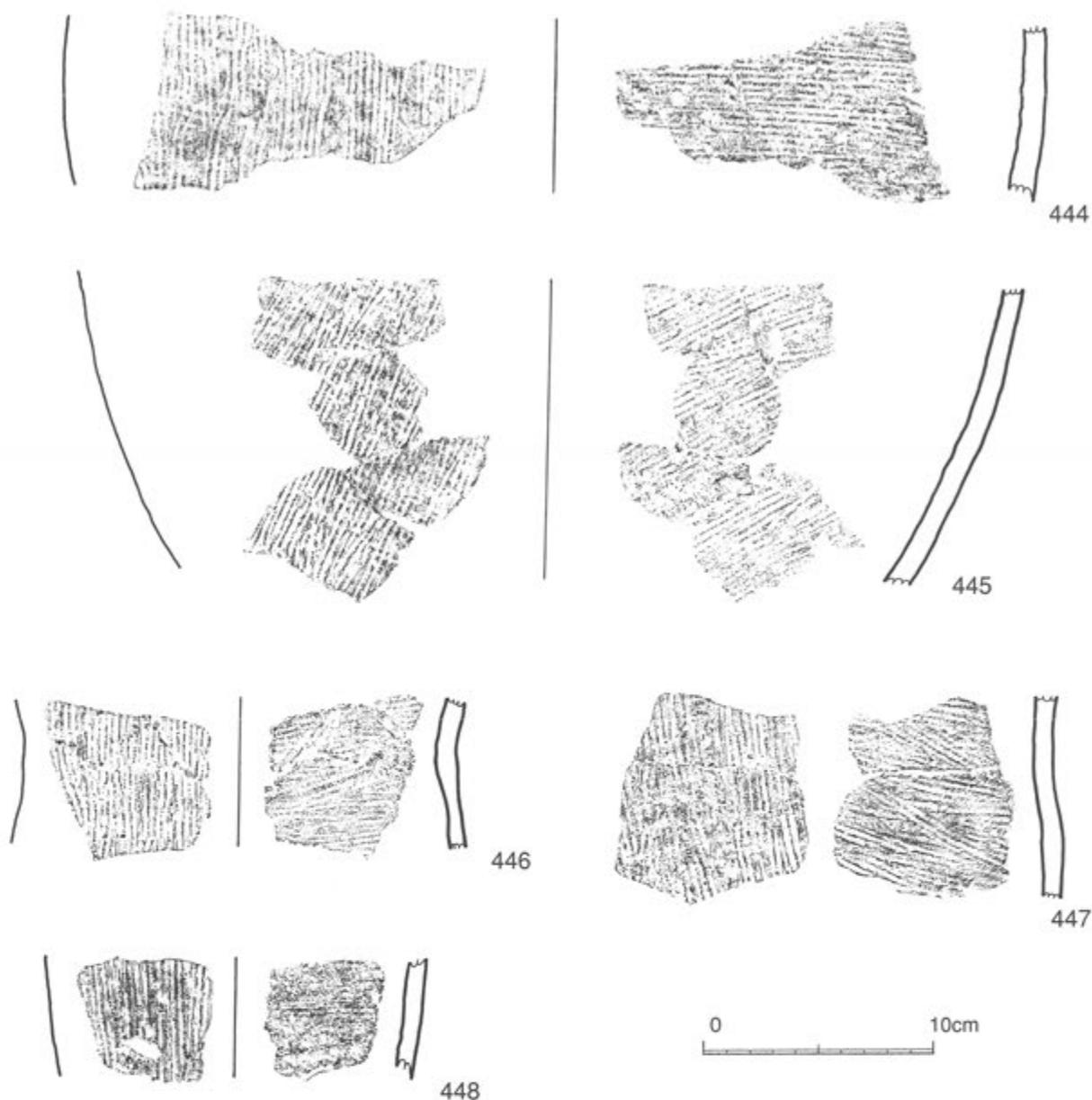
442



443

0 10cm

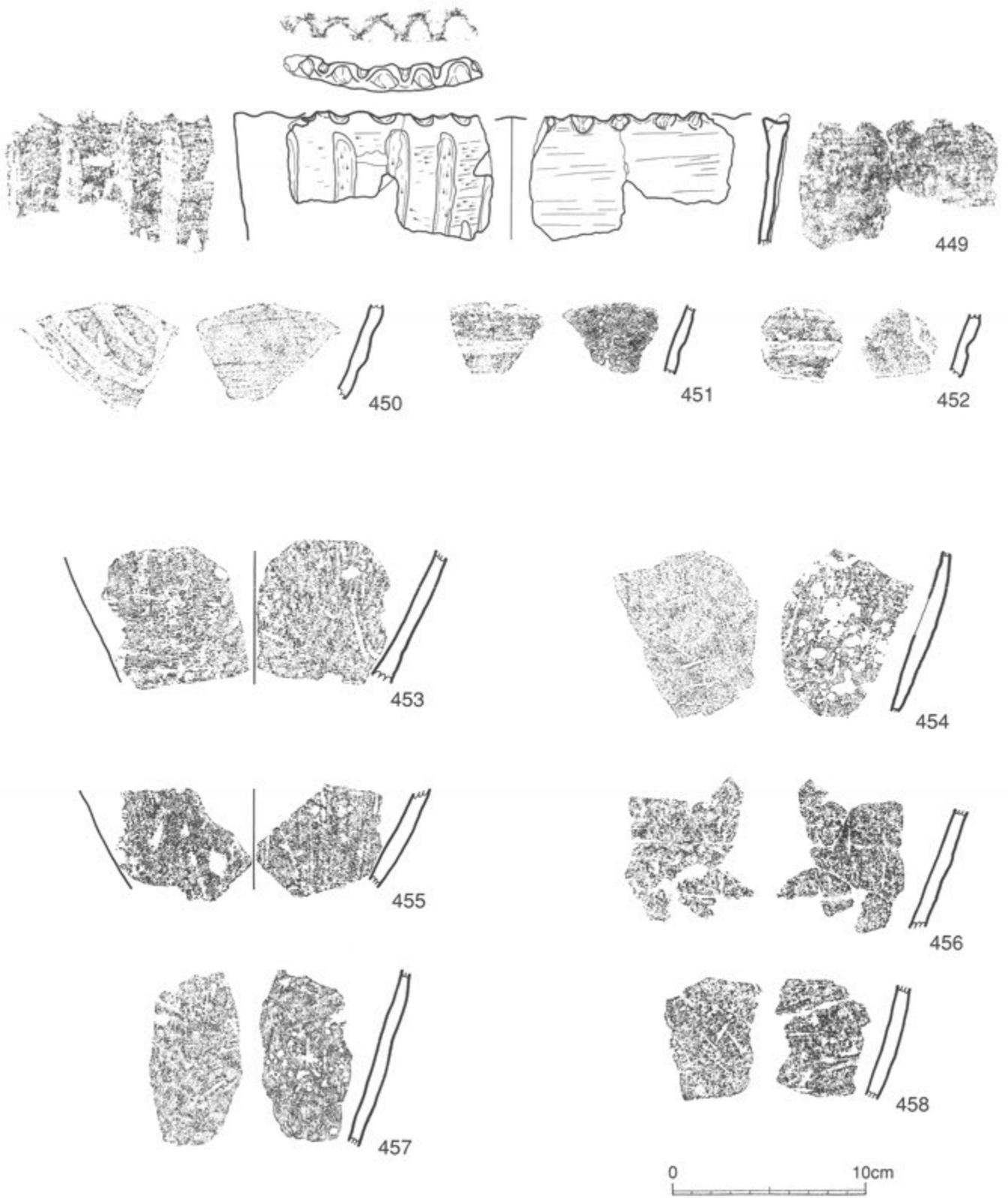
第65図 縄文土器34 (XVII類)



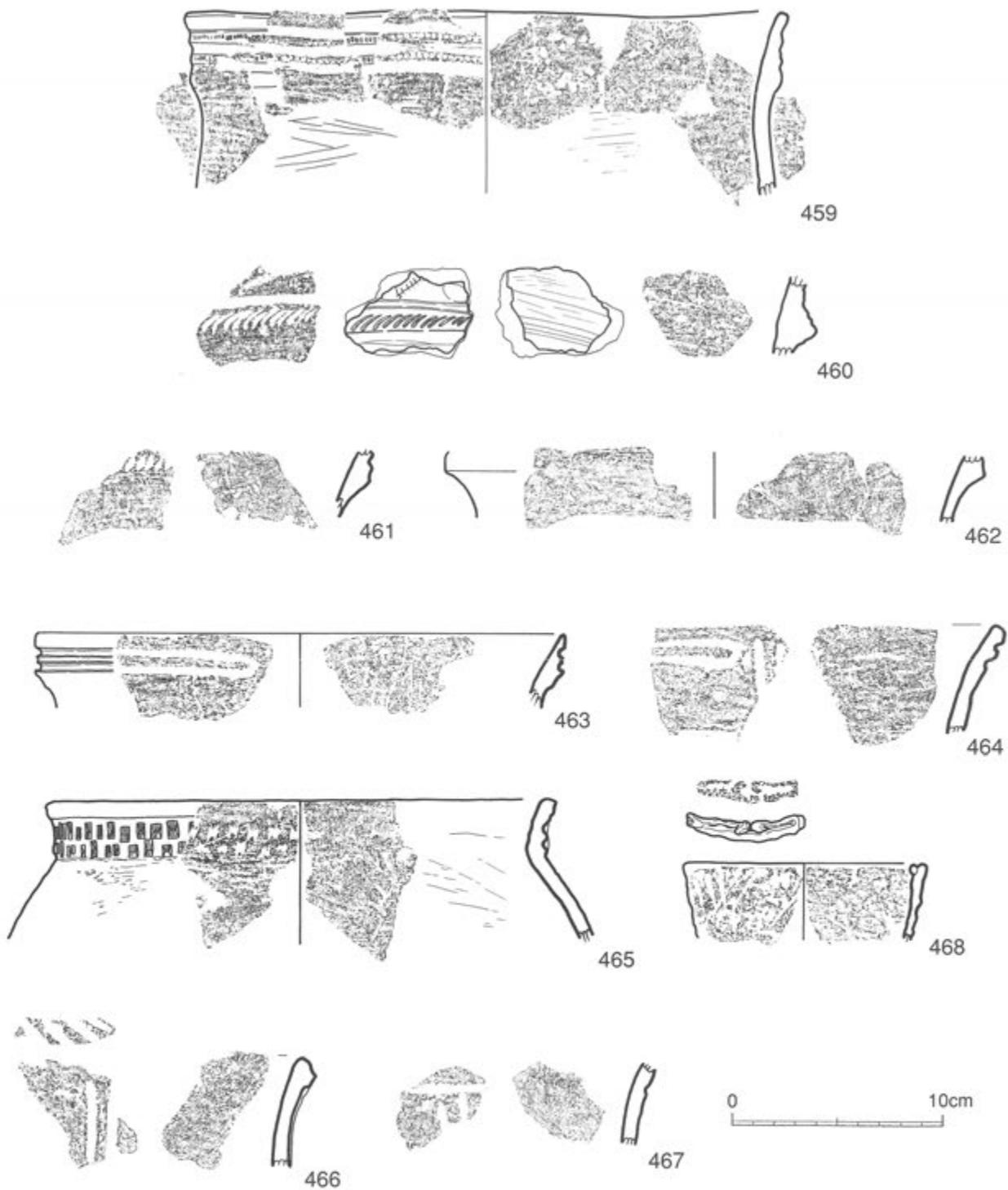
第66図 縄文土器35 (XVII類)

XVII類土器 (第65・66図)

440～448は胴部片である。440は胴部最大径でいったんふくらんだ器形が頸部で括れて再び口縁部へ向かって広がっていく器形を呈する。胴部最大径は29cm、頸部の括れ部分が27cmである。外面には縦位の貝殻条痕文が施される。内面は横位の貝殻条痕とナデ調整である。441は中央部が弱くくびれるものである。括れ部分で25.6cmを測る。外面は縦位の貝殻条痕文、内面は横位の貝殻条痕である。442・443は胴部下位の土器片と思われる。残存部分で28.6cmである。外面は斜位の貝殻条痕文、内面は横位と斜位の貝殻条痕のちナデ調整である。444は丸くふくらんだ胴部片である。残存部分で42.6cmを測る。外面は縦位の貝殻条痕文、内面は横位の貝殻条痕である。445は胴部下位の土器片と思われる。残存部分で41.2cmである。外面は斜位の貝殻条痕文、内面は斜位の貝殻条痕が主で

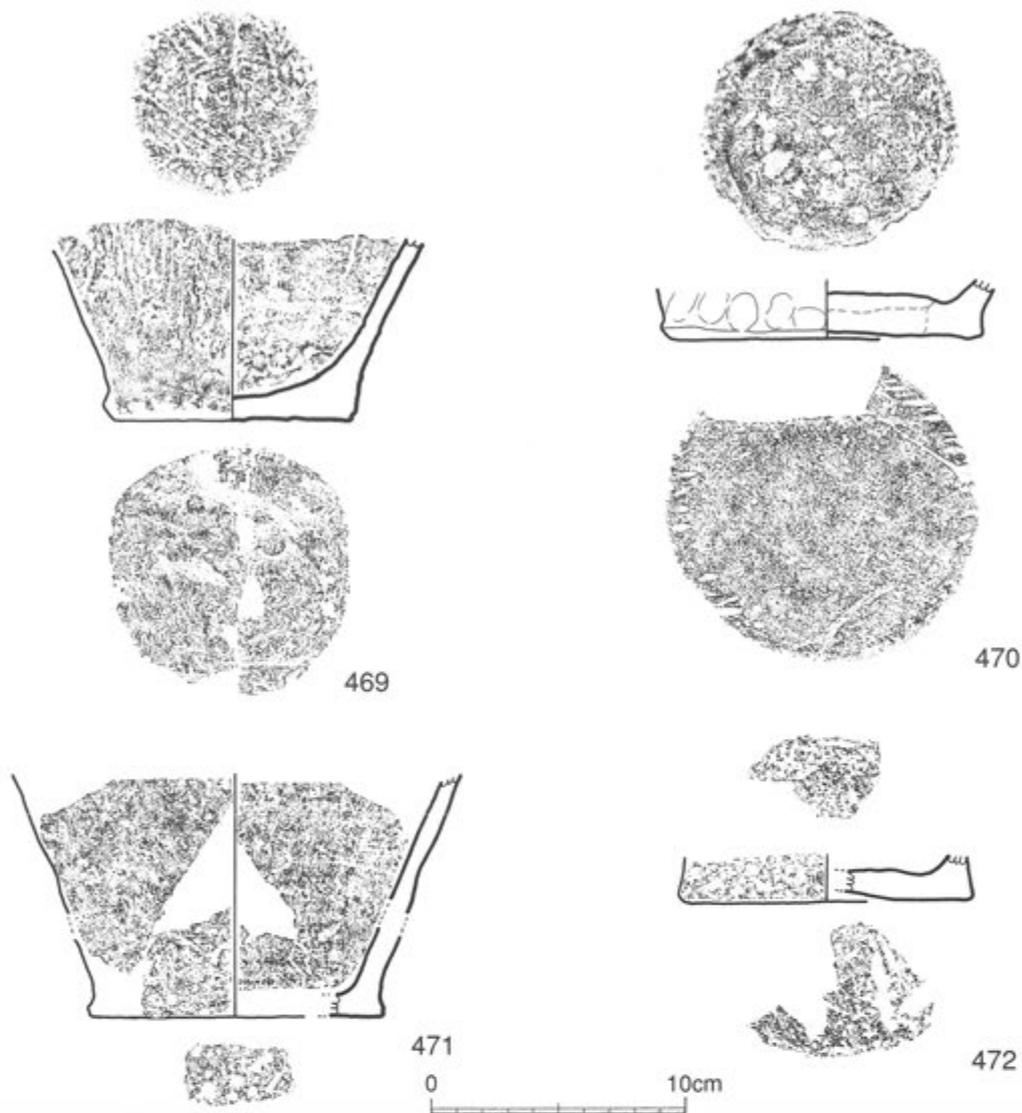


第67図 縄文土器36 (XVIII・XIX類)



第68図 縄文土器37 (XX類)

一部にナデ調整も認められる。446は中央部が弱く括れるものである。括れ部分で13.8cmを測る。外面は縦位の貝殻条痕文、内面は横位の貝殻条痕が主で、くびれ部分にはナデ調整も認められる。447は胴部下位の土器片と思われる。残存部分で16.4cmである。外面は縦位の貝殻条痕文、内面はナデ調整である。448は中央部が弱く括れるものである。外面は縦位の貝殻条痕文、内面は横位の貝殻条



第69図 縄文土器38 (XXI類)

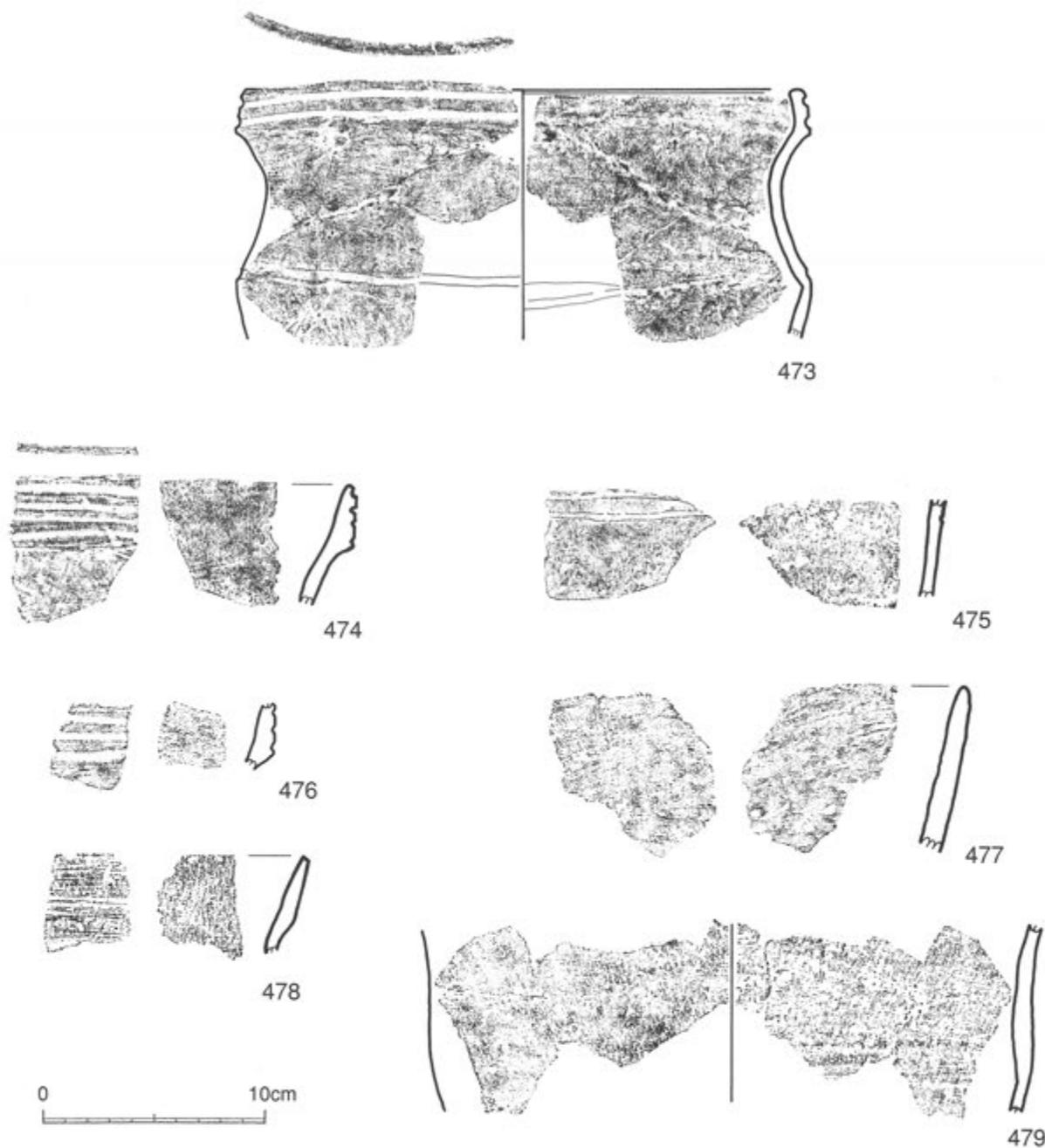
痕が施される。

XVIII類土器 (第67図)

449は口縁部片で、復元口径29cmを測る。口唇部には指頭によって連続したキザミ目が表裏面交互に施されている。外面は横位のヘラケズリののちナデ調整が行われ、その後ヘラ状工具によって縦位のヘラケズリ文が施されている。内面は工具によるナデ調整である。450は胴部片で、外面には斜位の凹線文が施文され、内面は工具によるナデ調整である。451・452はともに胴部片で、外面が横位の凹線文、内面はナデ調整である。

XIX類土器 (第67図)

453～458は胴部片である。いずれも内外面ともにナデ調整が行われる。文様は施されていない。



第70図 縄文土器39 (XXIIa類)

無文であるが色調・胎土ともにXⅧ類に類似しており、XⅧ類と同一型式、もしくは同時期の土器と推定される。453は残存部における胴部径が20cmを測る。同じく455は18cmである。

XX類土器 (第68図)

459は胴部から口縁部へ向かってやや外反して立ち上がる器形で、口縁部は肥厚して口縁部文様帯を形成している。口縁部文様帯には先端の丸い棒状工具、あるいは半截竹管によって3条の凹線文を巡らし、沈線間には連点文が施されている。口径28.4cmで、外面は条痕のちナデ、内面はナデ調整が行われている。460は口縁部文様帯下端の最も肥厚した部分で、口縁部文様帯には貝殻腹縁によ

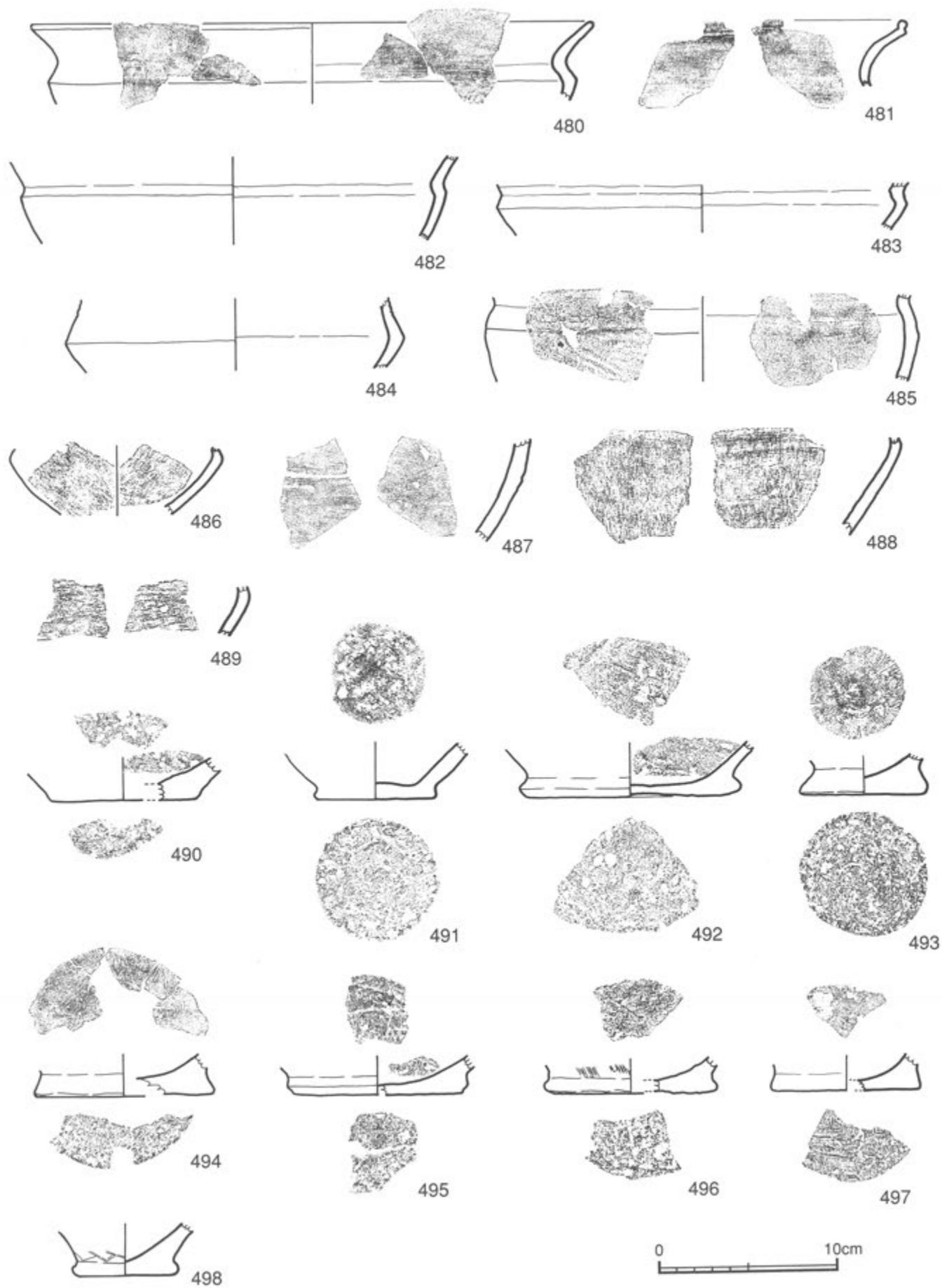
る連続したキザミ目が施され、その上には1条の凹線文が巡っている。内外面ともにナデ調整である。461も口縁部文様帯下端の最も肥厚した部分で、口縁部文様帯には連続したキザミ目が施されている。内外面ともに丁寧なナデ調整である。462も口縁部文様帯下端の最も肥厚した部分で、拓本ではうまく現れていないが、わずかにキザミ目が認められる。463は口縁部が肥厚して外反するものである。口縁部文様帯には先端の丸い棒状工具、あるいは半截竹管によって「コ」字形文が施文される。内外面ともにナデ調整である。464は外反する口縁部で、口唇部は平坦ではなく、やや立ち上がりが見られる。口縁部外面には「コ」字形文と縦位の凹線文が2条施されている。内外面ともにナデ調整である。465は胴張りの浅鉢と思われる。口径24.2cmを測る。張った胴部から頸部へ向かって内傾し、頸部で屈曲して再び外傾する器形を呈する。口縁部外面には角棒状の工具によって四角い連点文が2段にわたって施されている。胴部外面はケズリもしくは逆目板調整ののちナデが施され、内面はナデ調整である。466は外反する口縁部で、口唇部には連続した長いキザミ目が施される。外面には縦位の凹線文が2条施されている。内外面ともにナデ調整である。467は外反する口縁部付近と思われる。外面には横位に1条、縦位に2条の凹線文が施されているが、天地逆の可能性もある。内外面ともにナデ調整である。468は小形の器種で、口径11.6cmである。口縁端部の内面には突帯が貼付され外面には縦位の沈線文が施文される。内面は工具によるナデ調整である。

XX I 類土器 (第69図)

469は平底で、底部の張り出しがあまりなく、やや括れて胴部へ立ち上がるものである。底径10cmを測る。括れ部分には指頭圧痕が明瞭に残る。内面には板状工具による調整痕が認められる。470はやや上げ底の底部である。接地面から直線的に立ち上がり、それから外へひらく器形で、括れ部分には指頭圧痕が明瞭に残る。底径12.6cmを測る。底部外面は丁寧にナデ調整が行われるとともに、接地面周辺には指頭圧痕も認められる。底部内面は、中央部に直径9cmほどの円板状粘土を貼付して底面を形成しており、周囲は指頭によって凹線状に凹んでいる。471は底部の張り出しがあまりなく、やや括れて胴部へと立ち上がる器形である。底径11.6cmを測る。内外面ともに比較的丁寧なナデ調整が施されている。472はやや上げ底になる底部である。底径11.6cmを測る。残存状態が悪く、内外面ともに表面が剥落しているため調整は不明だが、胎土中に細かい滑石粒が含まれているのが観察される。本類で報告したが、時期が異なる可能性も考えられる。

XX II a 類土器 (第70図)

474~476は精製の深鉢である。473は、器形は胴部上位から頸部にかけて外反しながら内傾し、口縁部で再び屈曲して口縁部文様帯をもつものである。口縁部は内側に屈曲する。口縁部文様帯には先端の丸い棒状工具、あるいは半截竹管によって2条の凹線文を巡らしている。胴部最大径部分にも1条の凹線文が巡る。外面はミガキ、内面は丁寧なナデ調整である。口径25cm、胴部最大径26.2cmを測る。474は口縁部が直立し、やや肥厚するものである。口縁部文様帯には4条の凹線文を巡らしている。外面はミガキ、内面は丁寧なナデ調整である。475は胴部片であるが外面に2条の凹線文が施されている。外面はミガキ、内面はナデ調整である。一応本類に含めたが、口縁部文様帯への施文ではないため、時期が異なる可能性も残しておきたい。476は口縁部が直立し、やや肥厚す



第71図 縄文土器40 (XX II b・XX II c類)

るものである。口縁部文様帯には3条の凹線文が施されている。外面はミガキ、内面は丁寧なナデ調整である。477～479は粗製の深鉢である。477はやや外傾した口縁部である。屈曲等はなく直線的に立ち上がる。無文で内外面ナデ調整である。478は頸部にかけて外反した器形が口縁部で屈曲したものである。口縁部文様帯は作出されているが、無文である。調整は内外面ともにナデ調整である。479は胴部片である。胴部最大径でわずかにふくらんだ後、頸部で若干括れて再び外にひらく。胴部最大径は27.4cmである。内外面ともにナデ調整が施される。

XXII b 類土器 (第71図)

480～489は精製の浅鉢である。480は口縁部で、器形は胴部上位から頸部にかけて外反しながら内傾し、口縁部で再び屈曲して断面形がS字状を描くものである。口径31.4cmを測る。胴部最大形は頸部付近と高い位置にあり、30cmを測る。内外面ともにミガキ調整が施される。481も口縁部で、頸部から外反した器形が口縁部で短く屈曲したものである。口縁部文様帯は直立し、1条の細い凹線文が施されている。内外面ともにミガキ調整が行われている。482～489は胴部片で、482は胴部上位から頸部にかけて外反しながら内傾し、口縁部へ向かって再び外傾している。胴部最大径の位置は高くて頸部付近にあり、24cmを測る。内外面ともにミガキが施される。483～485は胴部上位から頸部にかけて外反しながら内傾している。胴部最大径の位置は高くて頸部付近にある。胴部最大径は、483が23.2cm、484が19cm、485が24.6cmを測る。内外面ともにミガキ調整である。486～489は胴部下位部分で、外傾するものである。内外面ともにミガキ調整が行われている。486は胴部最大径が12cmである。

XXII c 類土器 (第71図)

490は底部接地面から外傾して立ち上がるもので、底部と胴部下半部との境が明瞭ではないものである。復元底径8cmを測る。491は底部と胴部下半部との境が明瞭なもので、復元底径7cmを測る。492は底部が台形状に張り出すもので、胴部下半部との境が明瞭なものである。薄底で、若干上げ底となる。底径12.4cmを測る。493・494は厚めの平底で、底部が台形状に張り出すものである。493は底径7.2cmで、底部内面が黒色化している。494は底径10.2cmで、底部内面は丁寧なナデ調整が施されている。495は底部の張り出しがあまり見られない。底径9.6cmで、内面には付着物が残存している。496・497は平底で底部がやや張り出すが、薄底である。底径はそれぞれ9.8cm、8.6cmを測る。498は底部が台形状に張り出すもので、胴部下半部との境が明瞭なものである。底径5.8cmを測る。底部内面は平坦部をもたず立ち上がる。底部と胴部の境目付近には、工具による起点痕が認められる。

(2) 縄文時代の石器

縄文時代の石器は、調査区のほぼ全域で出土した。特にB-25～H-32区あたりにかけて集中性が高い。出土した器種は18種類に及ぶが、器種ごとの出土状況に特徴は見られない。使用石材も多様であるが、特に黒曜石に関しては5つの産地のものが出土している。最も多いのは上牛鼻産系で、これは安茶ヶ原遺跡では最も入手し易い黒曜石と考えられることから、当然のことであろう。三船産は散在的に出土しているものの、針尾産系がD-31～F-32区あたりにかけて、腰岳産系がG・H-30区あたりにかけて集中する傾向が伺える。そのほかに桑ノ木津留産とされる霧島系の黒曜石も少量ながら利用されている。

石器の器種に関しては、以下の基準に基づいて分類した。

【石鏃】

小型の剥片石器の中で、先端が尖頭状を呈し基部を明確に作出したもの。基部の形態には、平基式と抉りの入った凹基式のものがある。なお、未完成品であっても、最終形態として上述の形態を意識していると判断したものについては石鏃に含めてある。

【スクレイパー】

剥片の側縁部、あるいは末端部に二次加工を施して刃部を作り出したもの。搔器と削器を含む。

【石匙】

横長の剥片を用い、片側縁部に刃部を形成したもの。反対側の側縁部には両側から抉りを入れてつまみ部分を作成している。

【石錐】

剥片の鋭端部周辺に二次加工を加えて、錐状の刃部を形成したもの。

【石斧】

短冊形・長楕円形・乳棒状を呈するものを主とし、両刃あるいは片刃の刃部を有するもの。調整方法により磨製石斧・打製石斧・局部磨製石斧に細分する。

【石錘】

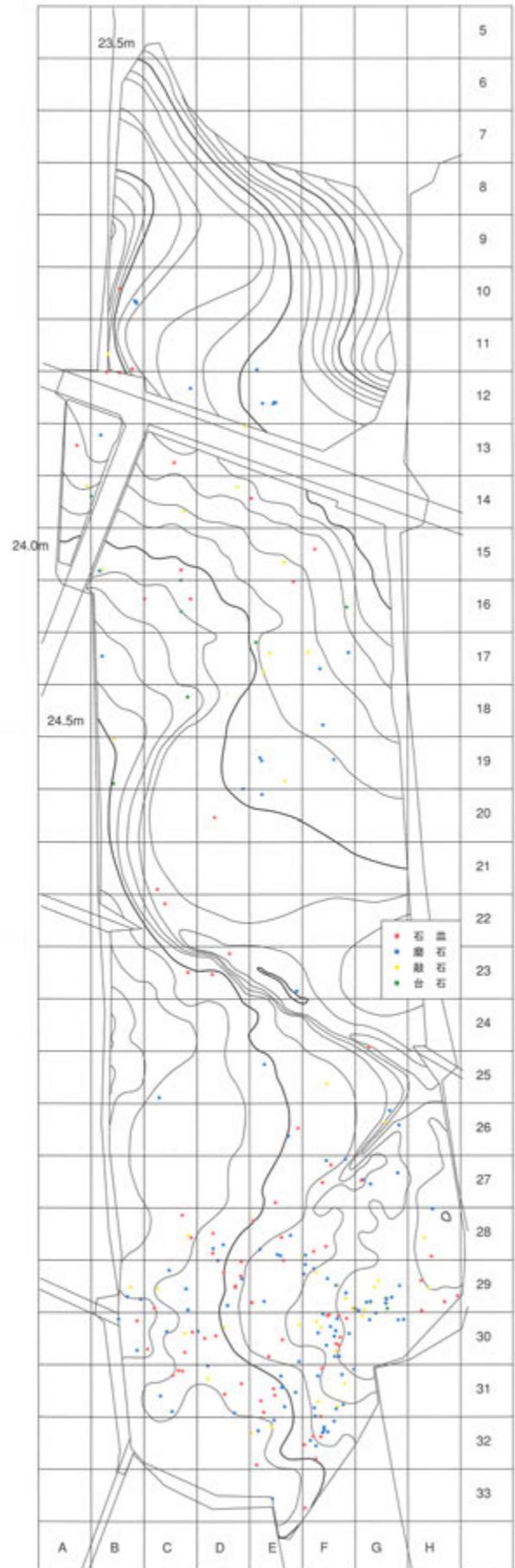
方形の河原石を用い、両端を打ち欠いて紐がかりの凹みを作成したもの。

【磨石】

円礫を素材とし磨耗痕を残すもの。なかには敲打痕を残すものもあり、敲石と明確に区分できないものも多い。敲打痕を残していても、磨面の痕跡の割合の方が大きい場合は、磨石に分類した。



第72図 縄文石器分布図 (1)



第73図 縄文石器分布図 (2)

【凹石】

円礫表裏面の中央部付近への集中的な敲打により断面が凹状を呈するもの。

【敲石・ハンマーストーン】

円礫を素材とし敲打痕を残すもの。なかには磨耗痕を残すものもあり、磨石と明確に区分別できないものも多い。磨耗痕を残していても、敲打痕の割合の方が大きい場合は、敲石に分類した。

【礫器】

自然礫の縁辺に直接調整剥離を加えて刃部としたものや、自然の鋭利な縁辺を刃部として使用し、結果として使用痕が残ったもの。

【軽石製品】

軽石を素材とし、形態的特徴などから人為的な加工が行われたと推測されるもの。

【石核】

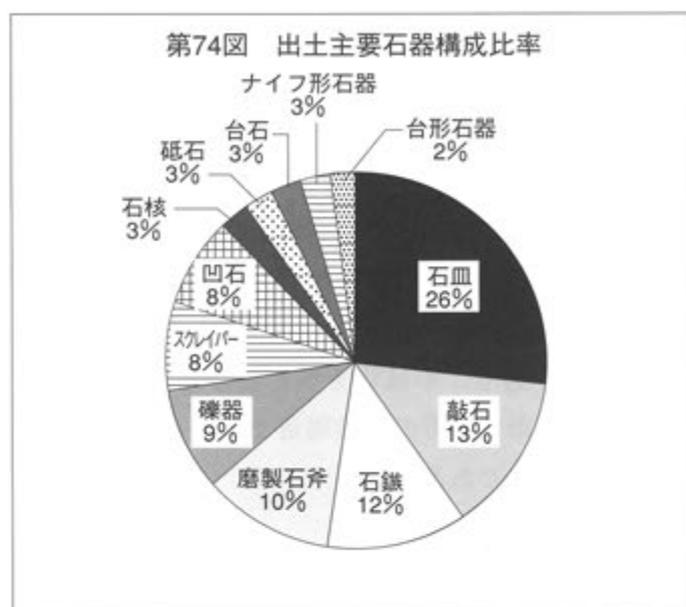
自然礫に凹み状の剥離痕が認められ、剥片を剥がした痕跡が伺えるもの。

【石皿】

大形の円礫や角礫を素材として磨面が見られるもの。縁辺を加工して形状を整えるものや、加工せずそのまま利用するものがある。台石との区別がつきにくいものも多いが、磨面のみを残すものを石皿に分類した。

【台石】

大形の円礫や角礫を素材としたもので、敲打痕を残し作業台として用いられた可能性を想定できるもの。板状のものが多い。なかには敲打と磨面の両方を残し、石皿との区別のつきにくいものもあるが、敲打痕を残すものは台石に含めた。



石材分類

石材の分類に関しては、以下の基準に基づいて分類した。

【黒曜石（上牛鼻系）】

漆黒で透明感がなく、灰白色の不純物を比較的多く含むもの。薩摩川内市樋脇町上牛鼻産やいちき串木野市平木場産に特徴的である。

【黒曜石（三船）】

わずかに光を通し、不純物を多く含むもの。主として鹿児島市吉野町の三船周辺で産出される黒曜石に特徴的である。

【黒曜石（腰岳系）】

黒色で光沢があり不純物がほとんど含まれないもの。主として佐賀県伊万里市の腰岳周辺で産出される黒曜石に特徴的である。

【黒曜石（針尾系）】

灰～暗灰色で不純物をごく少量含むもの。主として長崎県佐世保市の針尾周辺で産出される黒曜石に特徴的である。

【黒曜石（桑ノ木津留）】

飴色で透明感があり不純物が含まれないもの。宮崎県えびの市の桑ノ木津留周辺で産出される黒曜石に特徴的である。

【安山岩】

灰色で石英・輝石・角閃石を多く含み斑晶が発達する。鉄分を含むものは灰褐色を呈する。

【サヌカイト】

無斑晶安山岩で、灰色で不純物が少ないもの。

【頁岩】

灰色～青灰色で摺理が発達したもの。

【石英・鉄石英】

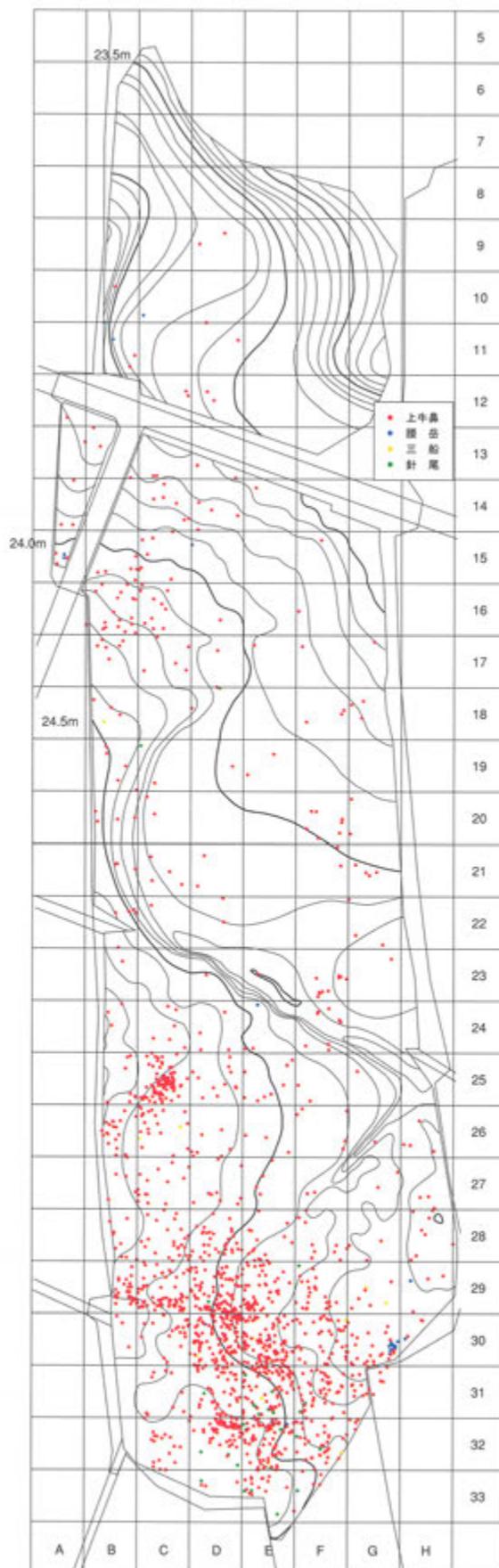
石英は白色、鉄石英は赤褐色を呈するもの。

【凝灰岩】

灰色・緑灰色・赤灰色を呈するもの。溶結凝灰岩を含む。

【軽石】

黄白色で気孔を多く含む。



第75図 黒曜石産地別出土分布図

①石鏃（第79・80図）

石鏃は欠損品や未製品を含め、33点出土した。石材の内訳としては、黒曜石が26点で全体の79%を占めている。そのほかに安山岩が3点、鉄石英が2点、チャート・頁岩が1点ずつある。黒曜石の産地別では、上牛鼻産が12点で全体の47%、針尾産が10点で38%を占め、そのほか腰岳産が4点で15%ある。県内産は上牛鼻産のみで、針尾・腰岳の県外産が半分以上を占めている点が注目される。出土点数33点のうち、27点を図化した。

長幅比・形態・抉りの深さ・サイズを指標に分類を行う。長幅比は①1:1～1:1.33, ②1:1.33～1:1.75の2つに分けることができる。形態はA三角形・B五角形・C砲弾形・D鋸歯状の4つ分けられる。抉りの深さはa平坦・b浅い・c深いの3つに分けられる。サイズは小・中・大・特大・超大の5つに分けることができる。これらの指標をもとにまとめると以下のようになる。

【Ⅰ類：①-A-a】

長幅比が1:1～1:1.33でほぼ正三角形に近い形状を呈し、抉りがなく平坦なもの。

【Ⅱ類：①-A-b】

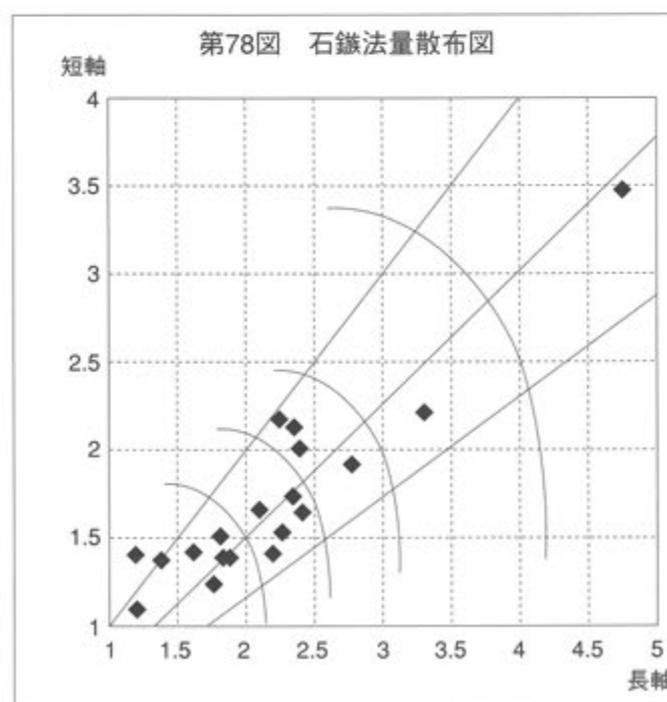
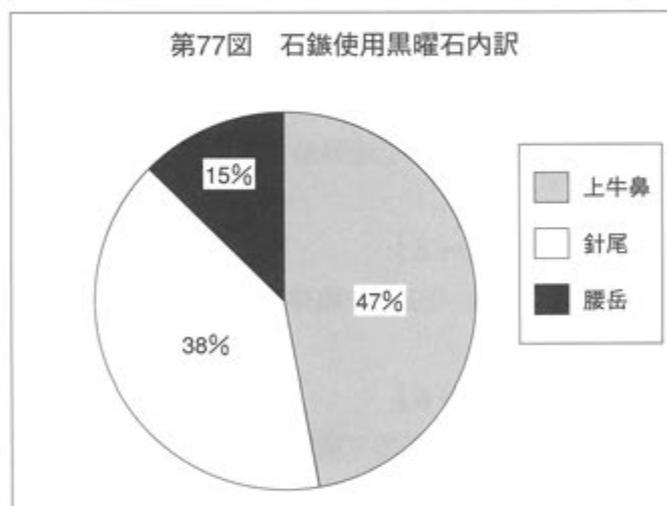
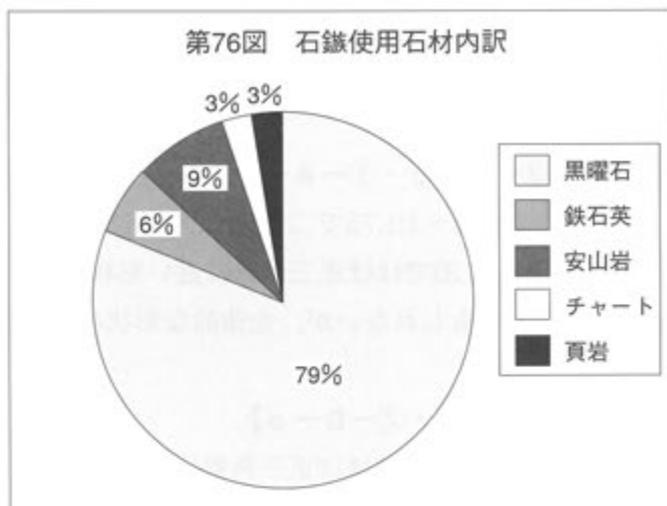
長幅比が1:1～1:1.33でほぼ正三角形に近い形状を呈し、抉りの深さが浅いもの。

【Ⅲ類：②-B-b】

長幅比が1:1～1:1.33で二等辺三角形に近い形状を呈し、抉りの深さが浅いもの。

【Ⅳa類：②-A-b】

長幅比が1:1.33～1:1.75で二等辺三角形に近い形状を呈し、抉りの深さが浅いもの。



【Ⅳb類：②-A-c】

長幅比が1:1.33～1:1.75で二等辺三角形に近い形状を呈し、抉りの深さが深く三角形なもの。

【Ⅳc類：②-A-c・①-A-c】

長幅比が1:1.33～1:1.75で二等辺三角形に近い形状を呈し、抉りの深さが深く三角形なもの、長幅比が1:1～1:1.33でほぼ正三角形に近い形状を呈するもの。長幅比に差異があるため、本来ならば別類にすべきかもしれないが、全体的な形状の類似性を重視し、同類とした。

【Ⅴ類：①-D-c・②-D-c】

長幅比が1:1～1:1.33でほぼ正三角形に近いものと、長幅比が1:1.33～1:1.75で二等辺三角形に近い形状をなすものをまとめた。それぞれ側面が鋸歯状を呈し、抉りは深く三角形である。長幅比に差異があるが、側面が鋸歯状を呈するという全体的な形状の類似性を重視し、同類とした。

【Ⅵa類：①-C-c】

長幅比が1:1～1:1.33で砲弾形に近い形状を呈し、抉りの深さが深く三角形なもの。

【Ⅵb類：②-C-c】

長幅比が1:1.33～1:1.75で砲弾形に近い形状を呈し、抉りの深さが深く三角形なもの。

【Ⅵc類：②-C-b】

長幅比が1:1.33～1:1.75で砲弾形に近い形状を呈し、抉りの深さが浅いもの。

【Ⅶ類】

欠損品・未製品を一括した。

I類（第79図）

499は小形の石鏃である。先端部がやや欠損している。腰岳産の黒曜石製で、基部が平基である。

II類（第79図）

500～504はほぼ正三角形に近い形状である。500～502・504は小形で、503は大形である。500・501・503・504は上牛鼻産の黒曜石で、502は安山岩製である。500・501・503は基部の抉りが特に浅い。504は左右非対称である。

III類（第79図）

505は鉄石英製の剥片族で小形のものである。506は腰岳産黒曜石製の五角族で、中形である。

IV a 類 (第79図)

507・508ともに腰岳産黒曜石製で、形状は縦軸の長い二等辺三角形を呈する。挟りは逆に縦軸の低い二等辺三角形を呈している。サイズはいずれも小形である。

IV b 類 (第79図)

509・510は、全体的な形状がともに縦軸の長い二等辺三角形を呈する。一方、脚は左右非対称である。挟りは深く、脚が非対称なために直角三角形に近い形状をなしている。509は上牛鼻産黒曜石製で中形なものである。510は鉄石英製で大形なものである。

IV c 類 (第79図)

511・512は、全体的な形状がともに縦軸の長い二等辺三角形を呈する。脚は左右非対称で、裾部分が丸みを帯びている。挟りの深さは深く、U字形をなす。511は安山岩製で中形のもの、512は針尾産黒曜石製で大形のものである。

V 類 (第79図)

513はチャート製の中形のもので、先端がドリル状に尖っている。脚部は細かな押圧剥離によって作出されている。左右非対称である。上半部は大きな押圧剥離が行われている。514・515は針尾産黒曜石製で514は中形、515は小形のものである。514は鋸歯が大きく作出されており、515は片側は細かい丁寧な鋸歯が作出されているものの、反対側は鋸歯が見られない。先端部と片脚が欠損している。

VI a 類 (第80図)

518は針尾産黒曜石製で、長幅比は正三角形に近いが、側面が丸みをもっており、結果として砲弾形に近い形状をなしている。挟りは深くほぼ二等辺三角形を呈している。サイズは大形である。

VI b 類 (第80図)

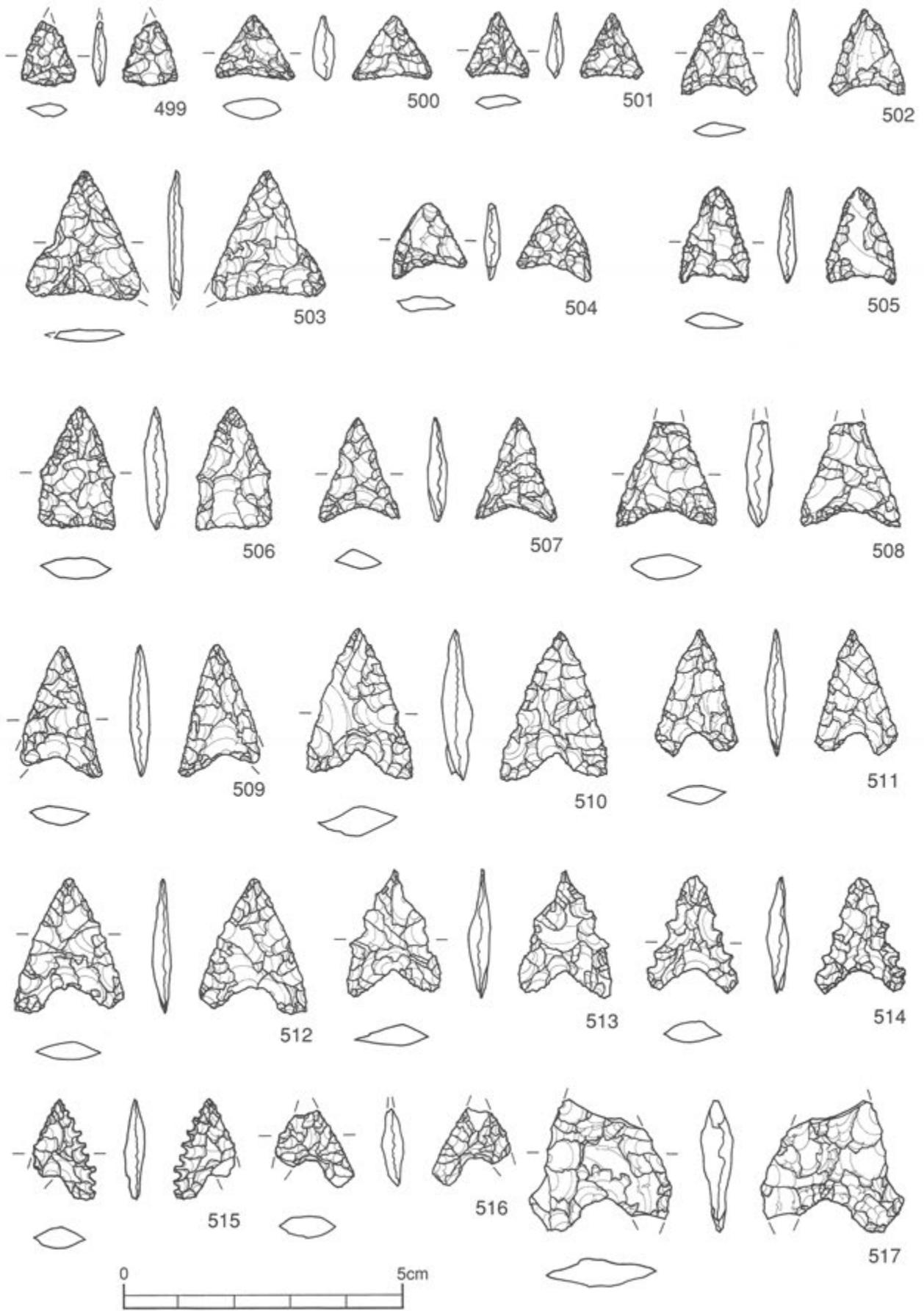
519は安山岩製で、側面が丸みをもち、砲弾形に近い形状をなしている。片脚が欠損しているが、挟りは深くほぼ正三角形を呈するものと思われる。サイズは大きく、特大である。

VI c 類 (第80図)

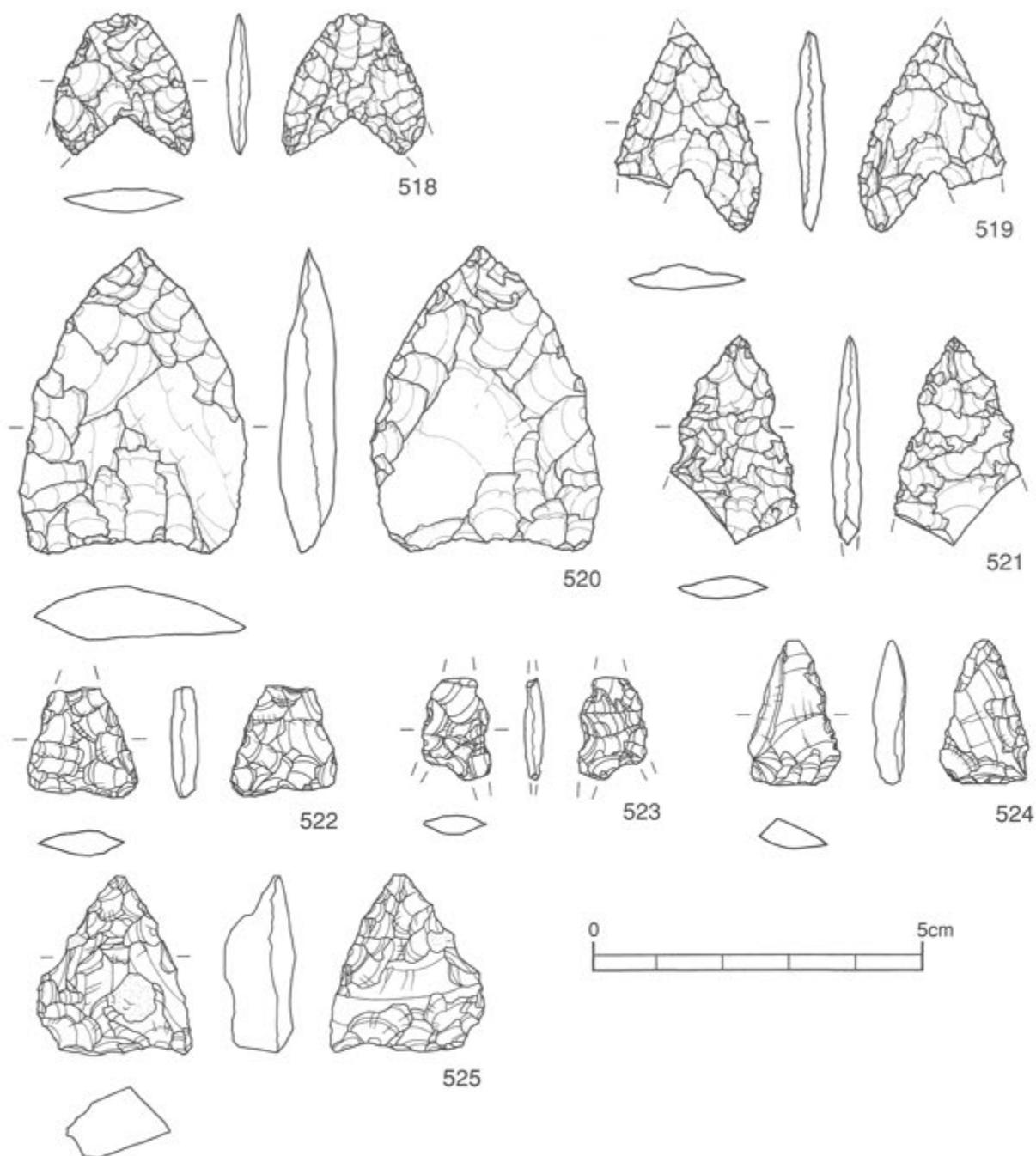
520は頁岩製の超大な石鏃で、側面が丸みをもち砲弾形に近い形状をなす。挟りは非常に浅い。

VII 類 (第79・80図)

516は針尾産黒曜石製で、先端部と片脚が欠損しているが、本来は小形で正三角形に近い形状を呈していたものと思われる。挟りは深くU字形である。517は上牛鼻産黒曜石製で、先端部と脚の端部が欠損している。欠損部分が多いが、本来は特大サイズであったと推定される。挟りは深くU字形である。521は針尾産黒曜石製で、縦軸の長い二等辺三角形を呈する。脚部が両方とも欠損してい



第79図 石鏃 1



第80図 石鏃2

るが、抉りの浅い形状であったと推察される。残存部分だけでも特大サイズであるが、仮に抉りの深い形状であった場合は、超大サイズになるものと思われる。522は針尾産黒曜石製の未製品石鏃である。脚は左右非対称で、先端部は欠損している。523は上牛鼻産製の未製品石鏃である。先端部と脚部が欠損している。脚は左右非対称である。524は上牛鼻産黒曜石製の未製品石鏃である。サイズは中形である。脚部などはまだ作出されていない。525も上牛鼻産黒曜石製の未製品石鏃である。サイズは大形である。製作途中のため、同サイズのものとは比べて断面が非常に厚い。

②スクレイパー（第83・84図）

スクレイパーは23点出土した。石材の内訳としては、黒曜石が12点で52%と半数を占め、その他にサヌカイト4点、鉄石英3点、安山岩と瑪瑙が2点ずつである。

素材剥片の形状と刃部形成の位置を考慮し、2つに分類した。

【I類】（第83図）

剥片の側縁部に二次加工を施して刃部を作り出したもので、いわゆる削器である。剥片の形状は横長のものが多い。

【II類】（第84図）

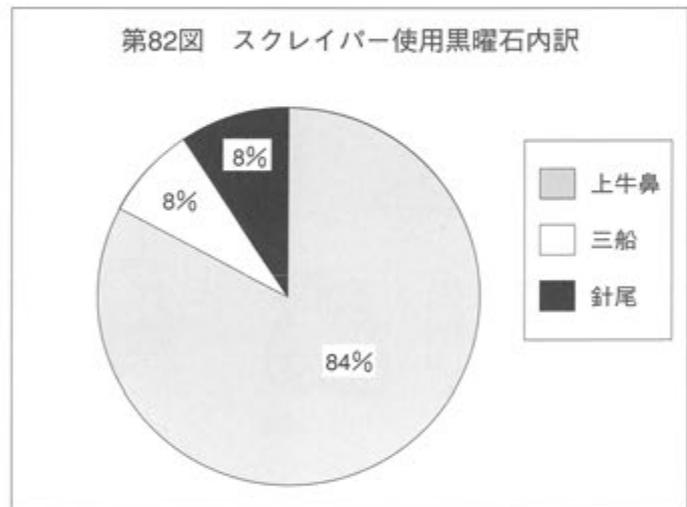
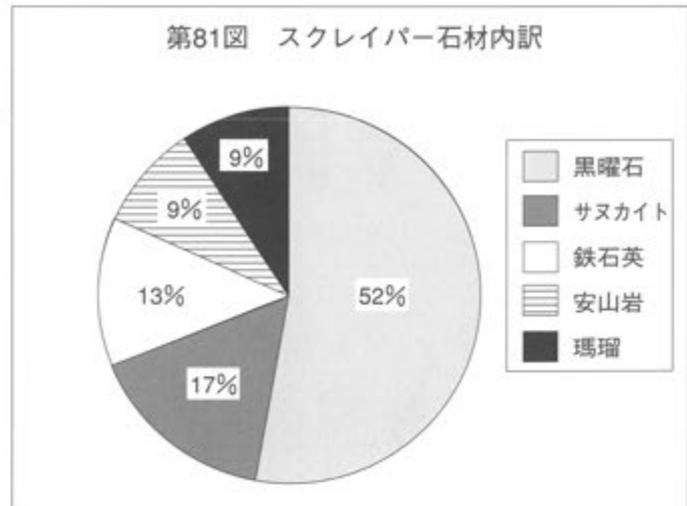
剥片の末端部に二次加工を施して刃部を作り出したもので、いわゆる搔器である。剥片の形状は縦長のものが多い。

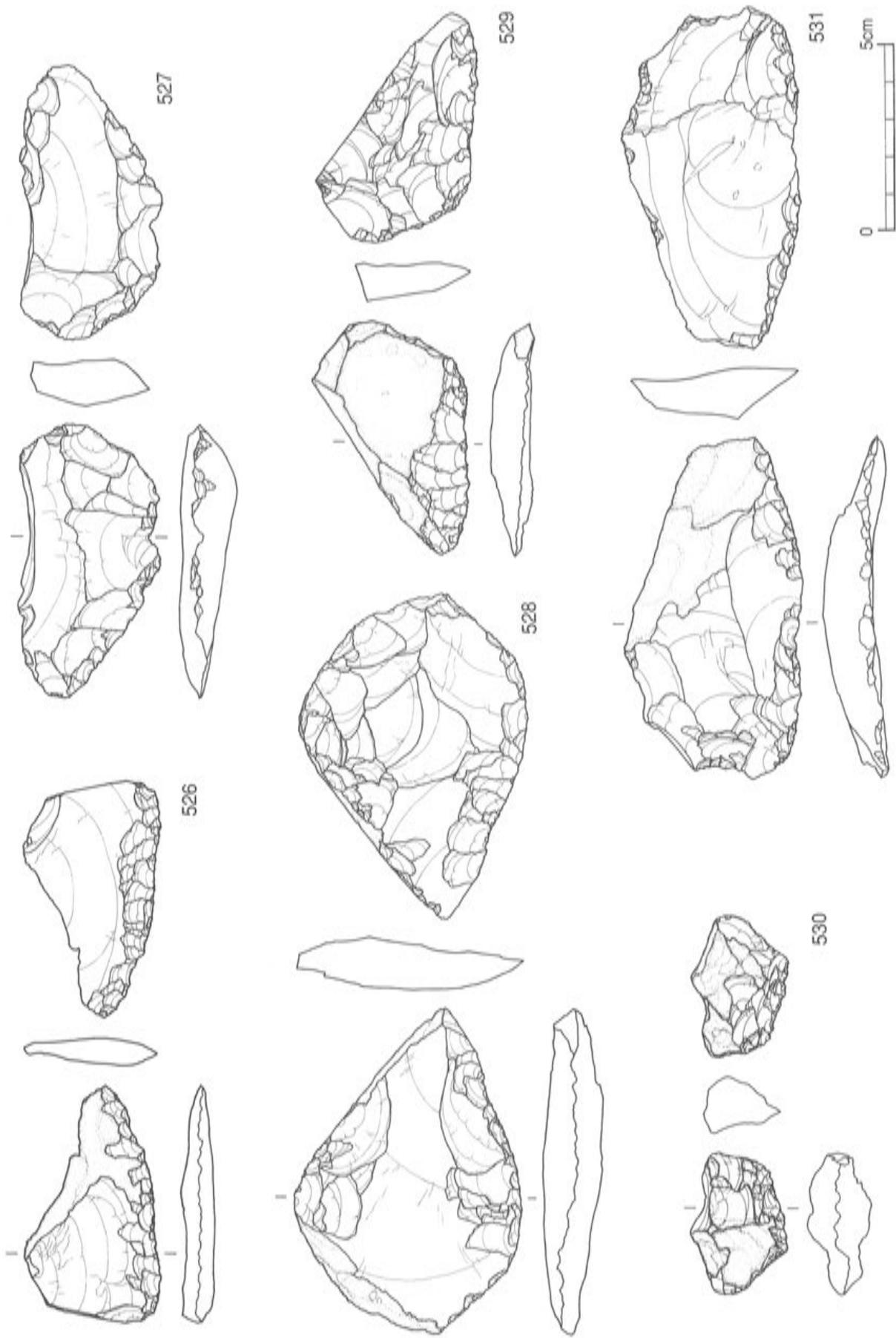
I類（第83・84図）

526はサヌカイト製である。三角形に近い横長剥片の側縁部に刃部形成を行ったもので、刃部はほぼ直線になる。表面には自然面を残す。527もサヌカイト製で、横長剥片の側縁部に刃部形成を行っている。刃部は半月形である。528もサヌカイト製である。横長で大きめの剥片を用い、片側縁部に刃部形成が行われている。刃部は半月形である。反対側の側縁部には自然面を残している。529はハリ質安山岩製で、三角形に近い横長剥片の側縁部に刃部形成を行っている。表面には自然面を多く残している。530は鉄石英製である。自然面を利用したもので、刃部形成を行った片側縁部あたりを中心に剥離調整が行われている。小形の割に厚みがある。531はサヌカイト製である。横長剥片の両側縁部に刃部形成が行われている。538・539は、本来I類に掲載すべきものを実測・レイアウト上の不手際でII類に掲載してしまったものである。538は黒曜石製で三船産のものである。横長剥片の側縁部の一部に二次加工を施して刃部を形成している。厚みがあり、上側縁部には自然面を残している。539も黒曜石製で、上牛鼻系のものである。三角形状の横長剥片の両側縁部に刃部が形成されている。小形で薄いものである。

II類（第84図）

532はハリ質安山岩製で、縦長剥片の下側縁部と両横側縁部の3ヶ所に二次加工を施して刃部を作り出している。533は瑪瑙製で、532と同様、縦長剥片の下側縁部と両横側縁部の3ヶ所に二次加工を施して刃部を作り出している。534は瑪瑙製で、縦長剥片の下側縁部にわずかに二次加工がされて





第83図 スクレイパー-1



第84図 スクレイパー 2

いる。横側縁部には自然面が残る。535は鉄石英製で、丸みをもった剥片の末端部に刃部を形成している。536は黒曜石製で、上牛鼻系のものである。三角形に近い剥片の末端部に刃部を形成している。537も黒曜石製で、上牛鼻系のものである。小形の四角形の剥片の末端部と縦の側縁部に刃部を形成している。540は黒曜石製で、針尾系のものである。微細剥片の末端部に刃部が形成されている。541は黒曜石製で、上牛鼻系のものである。540と同じく微細剥片の末端部に刃部が形成されている。表面には自然面を残している。

③石匙（第85図）

543・546は石匙である。543は頁岩製で、薄く剥ぎ取った横長剥片の片側縁部に刃部を形成している。刃部は両面から押圧剥離が行われており、直線状を呈している。反対側の側縁部には両側から抉りを入れてつまみ部分を作成している。546は瑪瑙製である。三角形の横長剥片で、最も長い側縁部には両面から押圧剥離が行われ、刃部を形成している。

④石錐（第85図）

544は黒曜石製で、針尾系のものである。側縁部に剥離を加えて錐部を作成しており、平面形・断面形ともに三角形を呈する。つまみ部と錐部との境は不明瞭である。

⑤剥片（第85図）

545はチャート製の剥片である。両面とも剥離調整を施して三角形を形成しており、石鏃製作を意図したものと思われる。547は黒曜石製の折断剥片で、上牛鼻系のものである。側縁部の一部に二次加工の痕跡のようなものが伺える。548も上牛鼻系黒曜石製の剥片である。上方向からの剥離が行われており、背面には自然面を残す。549は粘板岩製で、使用痕のある剥片である。翼状の横長剥片で、半月状の側縁部に使用痕が認められる。550は腰岳産黒曜石製の剥片である。薄く剥ぎ取った横長剥片の片側縁部につまみのようなものを作成しようとした様子が伺える。石匙の製作を意図していた可能性が考えられる。反対側の側縁部には使用痕のような痕跡が残る。551は上牛鼻系黒曜石製の剥片である。縦長で三角形に近い形状を呈する。表面の一部には自然面を残す。552は安山岩製の剥片である。縦長の薄い剥片で、表面は上方向、背面は下方向からの剥離が伺える。

⑥磨製石斧（第87～93図）

磨製石斧は27点出土した。石材の内訳としては、頁岩が23点で全体の85%を占め、残りは砂岩が4点で15%を占める。出土点数27点のうち、24点を図化した。

出土した磨製石斧は、全体的な形状、調整方法、サイズなどにより7類に分類した。各分類の特徴は以下のようである。

【I類】

撥形の形状を呈し、刃部は両刃である。研磨が全体的に不十分で、剥離面や自然面を残すもの。



第85圖 石匙・石錐・剝片

【Ⅱ類】

短冊形の形状を呈し、刃部が両刃のもの。研磨は不十分で自然面や敲打痕を残す。

【Ⅲ類】

刃部のみしか残存していないため、全体の形状は不明だが、刃部幅が広くて薄いもの。刃部全面に研磨が及ぶ。

【Ⅳ類】

短冊形の形状を呈するもの。刃部は両刃で、厚みを増し断面が楕円形となる。研磨は全面に及ぶものが多いが、一部に剥離面や敲打痕、自然面を残すものもある。

【Ⅴ類】

基部のみで全体の形状が不明なものや、ノミ形と推定されるもの等を一括した。

【Ⅵ類】

基端部が一方の側縁に偏る形態で、いわゆる北古賀タイプと呼ばれる形態のもの。研磨は不十分で自然面や敲打痕を残す。

【Ⅶ類】

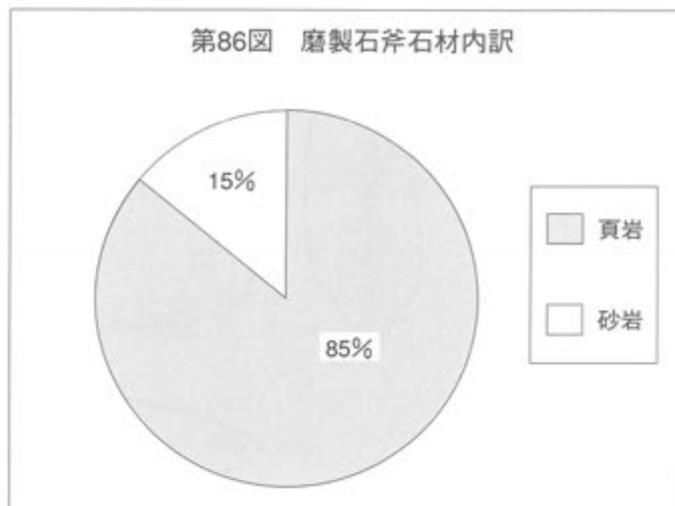
平面形は刃部に最大幅をもち、基部が半分以下に細くなる乳棒状を呈するもの。

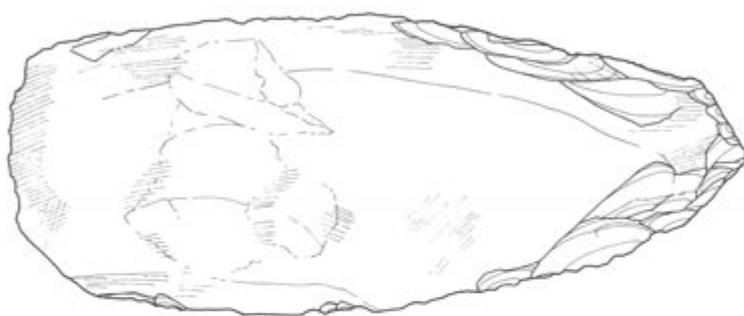
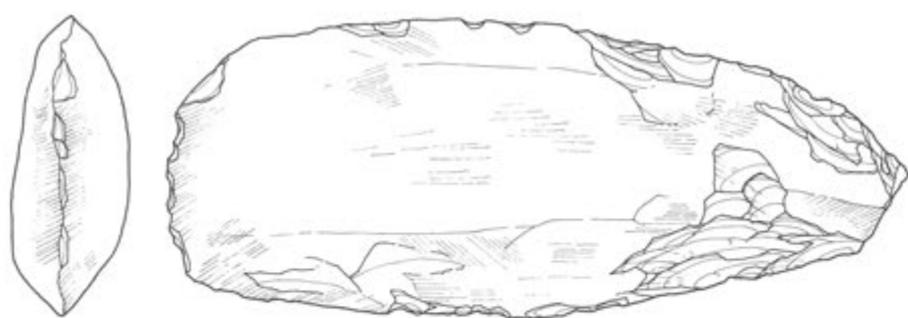
I類 (第87図)

553は頁岩製である。平面形は刃部に最大幅をもち、基部が細くなる撥形を呈する。表面が剥離しているため、全体の調整は不明だが、部分的に研磨の痕跡が伺える。刃部は刃こぼれしている。554も頁岩製である。基部周辺が欠損しているため全体の形状は不明だが、撥形を呈すると思われる。表面は剥離しており、調整は不明である。裏面は剥離面を残す。

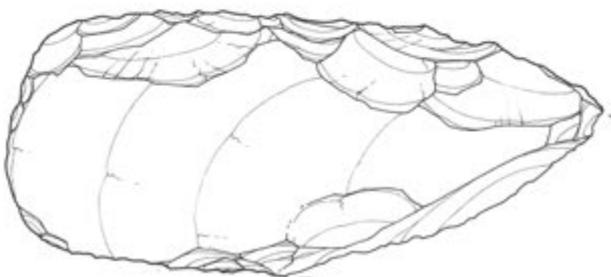
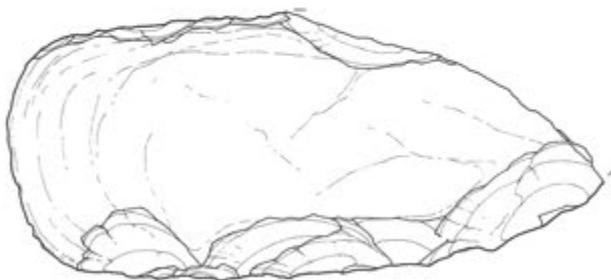
II類 (第88・89図)

555は頁岩製である。両側縁がほぼ平行し、刃部と基端部が若干すぼまる短冊形の平面形を呈する。側縁部周辺は剥離整形がなされているが、表裏面は自然面をそのまま残している。研磨は刃部周辺に集中している。556は頁岩製である。表面は側縁部及び基部周辺に整形の際の敲打痕がそのまま残り、刃部周辺に研磨が施されている。裏面は敲打痕が主である。全長10cm程と小形で、再加工品と思われる。557は側縁部が剥離整形されている。側縁部を除き、比較的全面に研磨が施されている。刃部は一部研磨されているものの、剥離痕が残り明確な刃を形成していない。全長11cmと小形であ





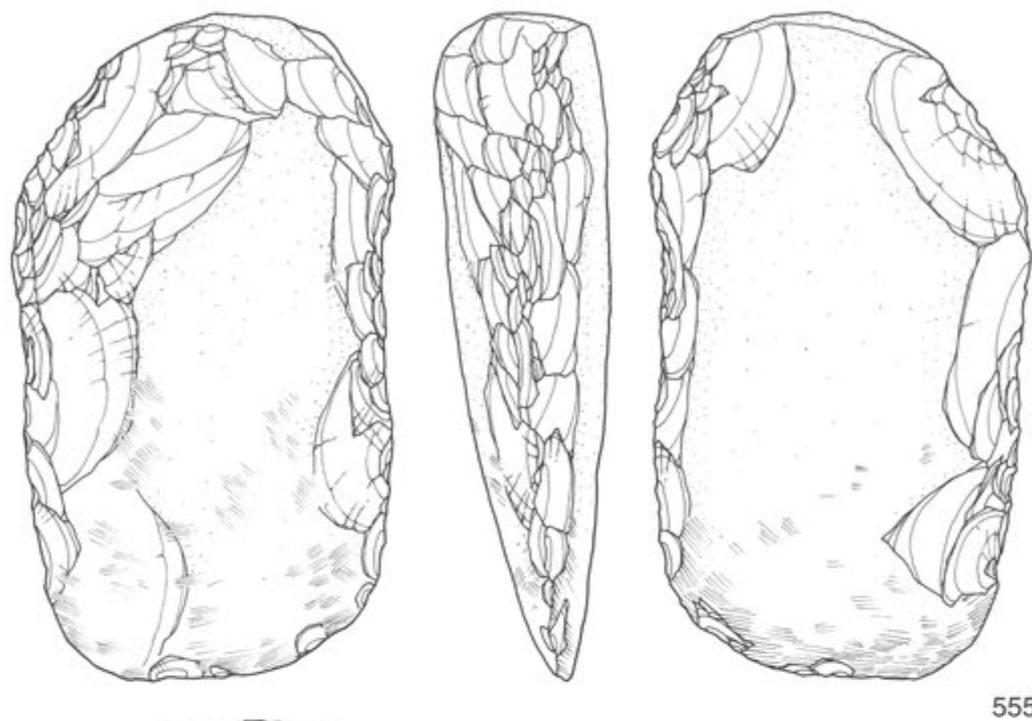
553



554



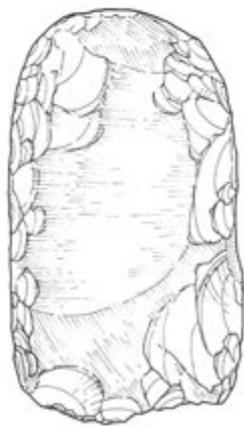
第87図 磨製石斧 1



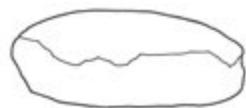
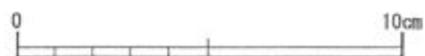
555



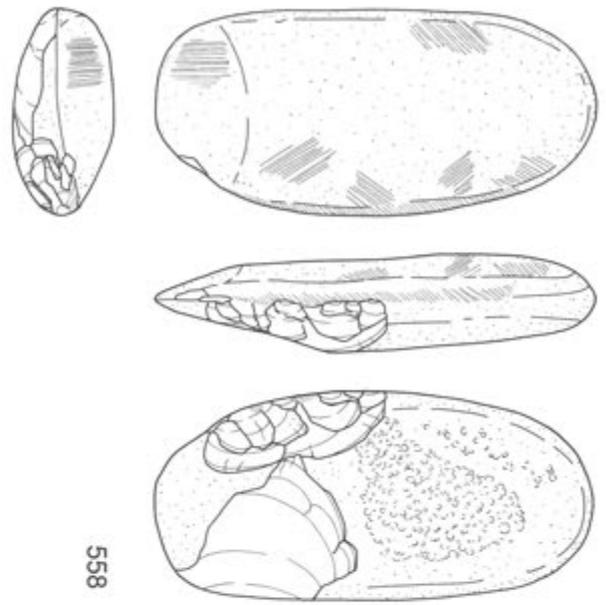
556



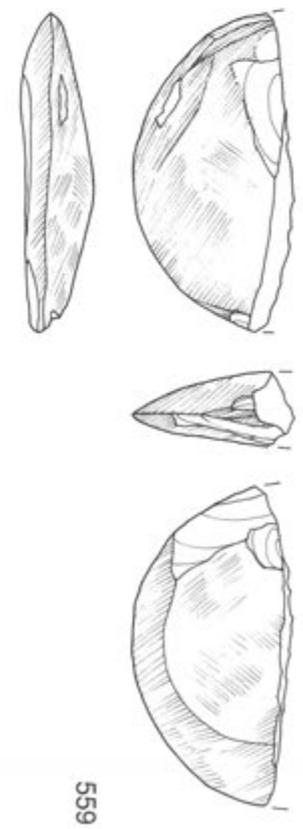
557



第88図 磨製石斧 2



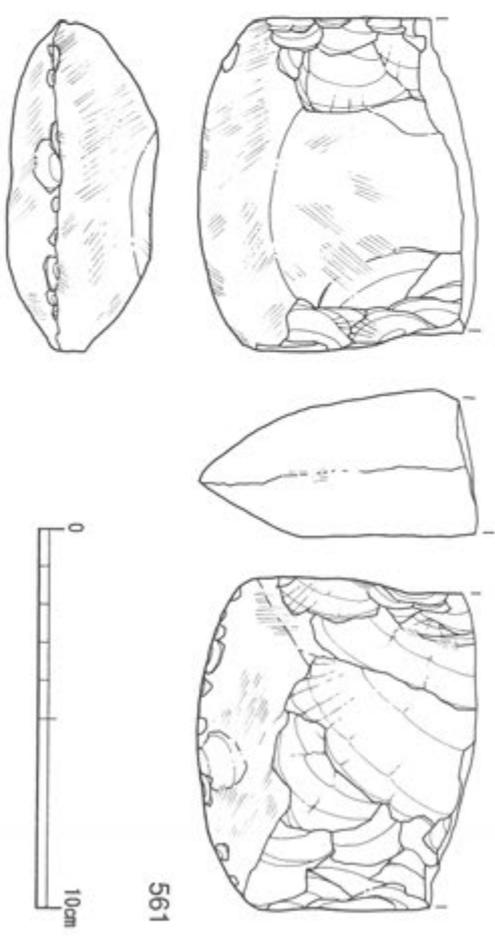
558



559



560



561



第89图 磨製石斧 3

る。558は頁岩製である。整形の手間を省くために、短冊形を呈する河原石をそのまま利用している。表面は側縁部と刃部のあたりに若干研磨が認められる。裏面は中央部のあたりに敲打痕が残る。

Ⅲ類（第89図）

559・560は刃部のみしか残存していないため、全体の形状は不明である。刃部は薄くて幅が広く丸みをもった刃を形成する。表裏面とも全面に研磨がなされている。

Ⅳ類（第89・90図）

561は頁岩製で、両側縁がほぼ平行し、刃部は直線的で幅が広く厚みをもった刃を形成する。刃部を中心に研磨が施されているが、側縁部及び背面に剥離面を残している。562・563は両側縁がほぼ平行し、刃部は丸く厚みをもった刃を形成する。基部を欠損しているが、残存部全面に研磨が施されている。562は砂岩製、563は頁岩製のやや小形なもので、両方とも側面が面取りされている。564は頁岩製で、基部へ向かってやや細くなる形状を呈すると思われる。側面は面取りされており、刃部はやや丸く厚みをもった刃を形成する。敲打による器面調整のあと、ほぼ全面に研磨が施されている。565は頁岩製で、両側縁がほぼ平行し、刃部は直線的でやや厚みをもった刃を形成する。側面は面取りされている。敲打による器面調整のあと、刃部を中心に研磨が施されている。

Ⅴ類（第91図）

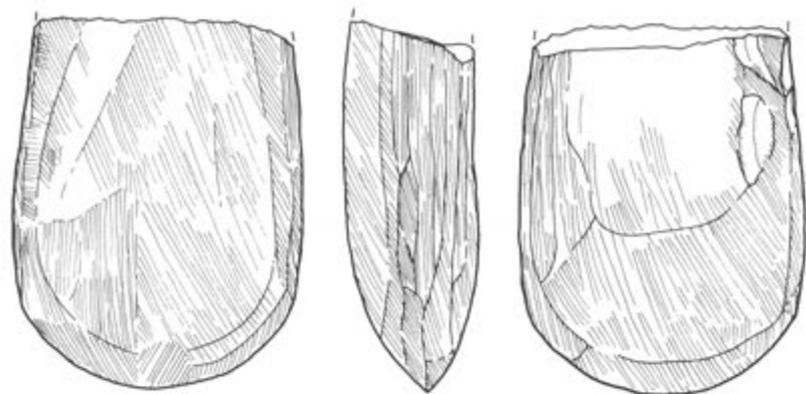
566は頁岩製で、石斧の基部部分である。両側縁は面取りされ、敲打による器面調整のあとほぼ全面に研磨が施されている。567は頁岩製で、小形の丸ノミである。刃部は丸く片刃である。全面に研磨が施されている。568は頁岩製で、石斧の基部部分である。表裏面ともに剥離面と研磨部分が認められる。569は砂岩製で、河原石を利用して刃だけ加工したものである。両側縁は面取りされている。全面的に研磨が行われているが、縁辺部を中心に自然面が認められる。570は頁岩製である。本来は大きな石斧だったものを小さく作り直したものである。剥離面・敲打痕・研磨が認められる。側縁部は一部面取りされている。571は頁岩製で小形のものである。567と同様に丸ノミの可能性が高い。刃部はほぼ直線で薄めのものである。全面に研磨が施されている。

Ⅵ類（第92図）

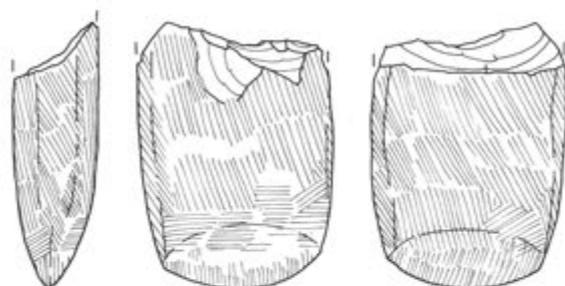
572は頁岩製で、基端部が一方の側縁に偏る北古賀タイプと呼ばれる形態を呈する。未完成品で剥離面を多く残し、細かい敲打による器面調整が行われている。573は頁岩製で、572と同じく北古賀タイプである。側縁と背面には敲打による器面調整痕を多く残し、表面は刃部を中心に研磨が施されている。

Ⅶ類（第92・93図）

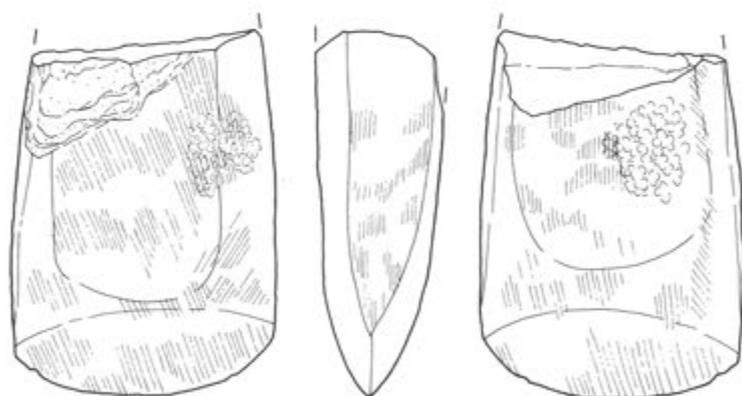
574は砂岩製で、乳棒状の石斧の基部である。側面は面取りのやや調整され、全面に研磨が施されているが、背面を中心に一部敲打痕を残す。575も砂岩製で乳棒状を呈する。上半部は敲打による器面調整が行われ、下半部は研磨が施されている。刃部部分は欠損している。敲打と研磨によって



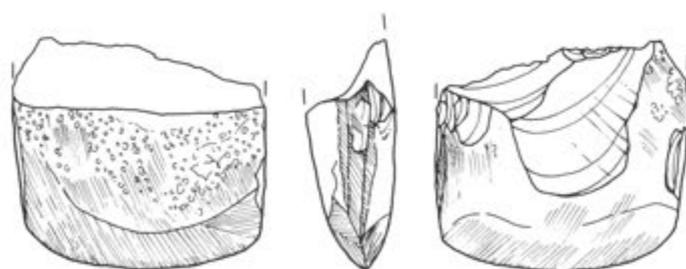
562



563



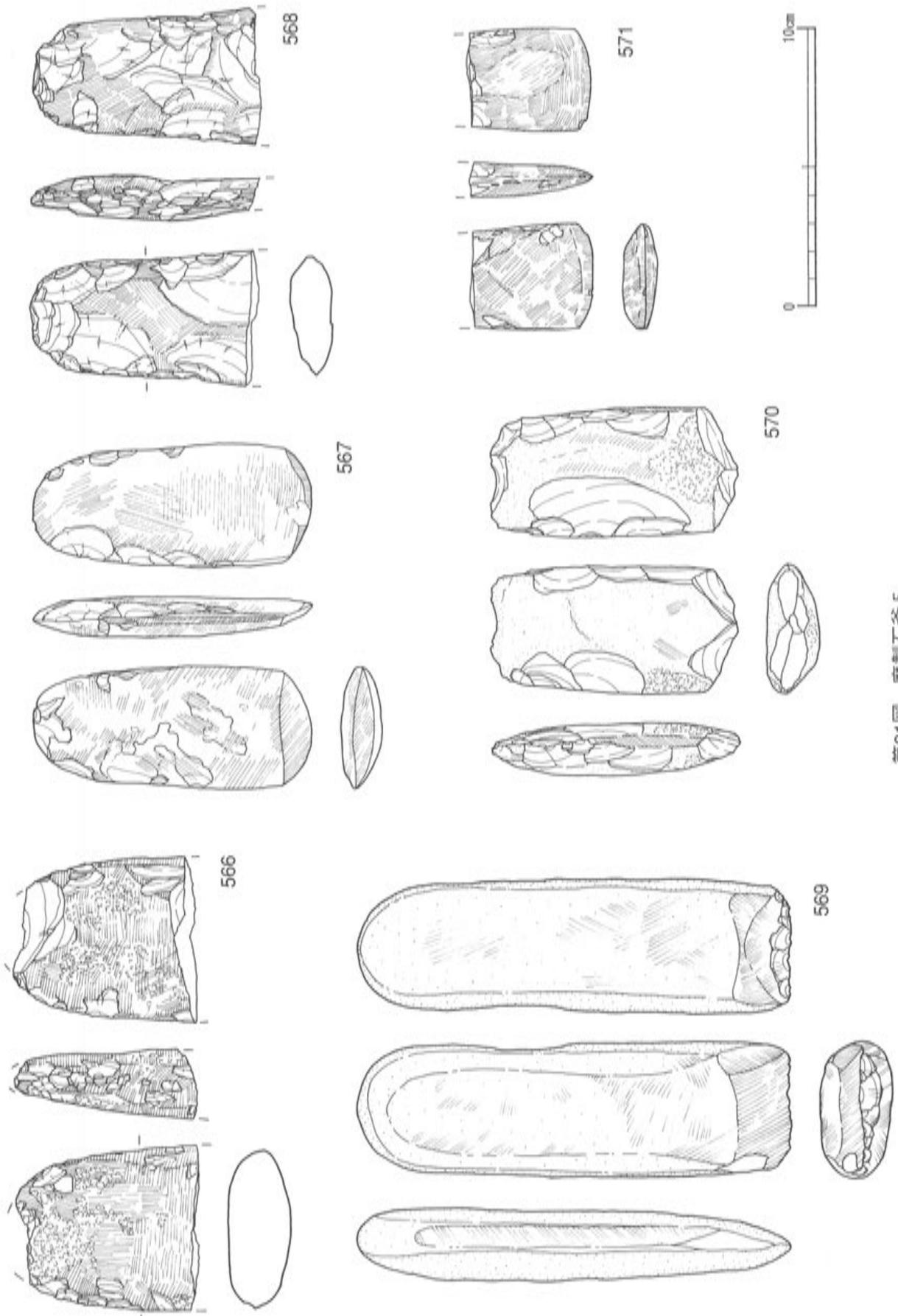
564



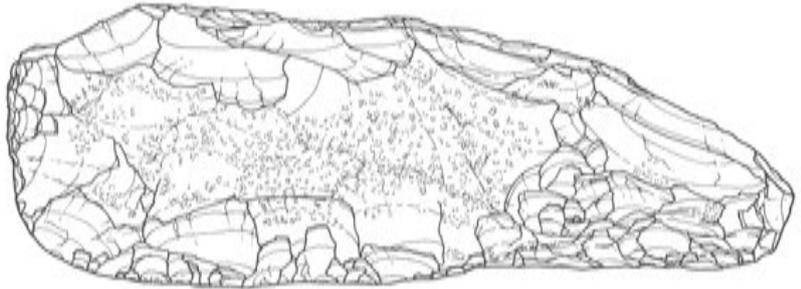
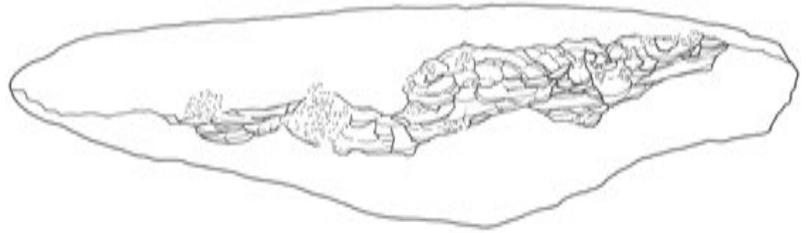
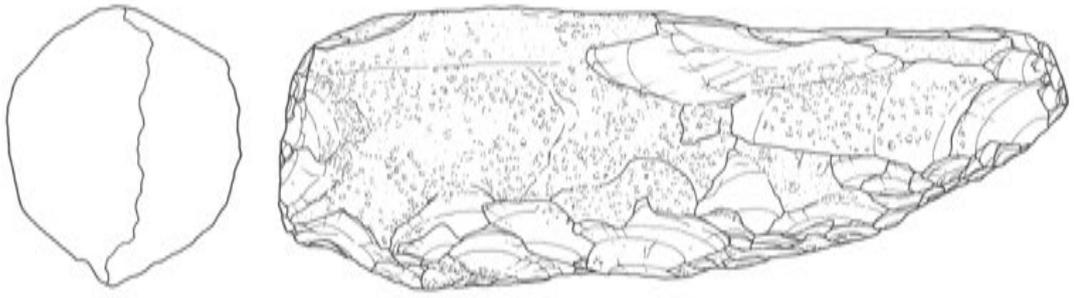
565



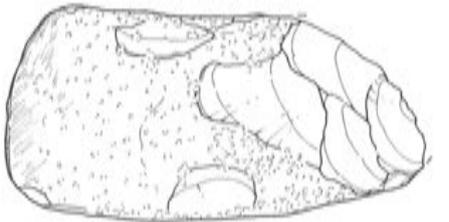
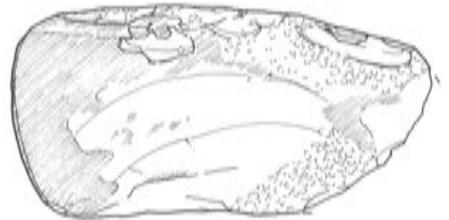
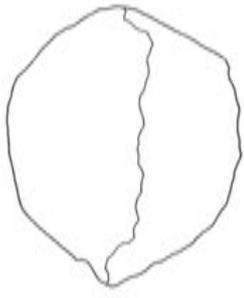
第90図 磨製石斧 4



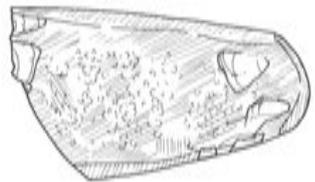
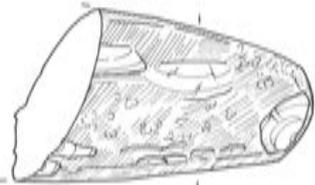
第91図 磨製石斧 5



572



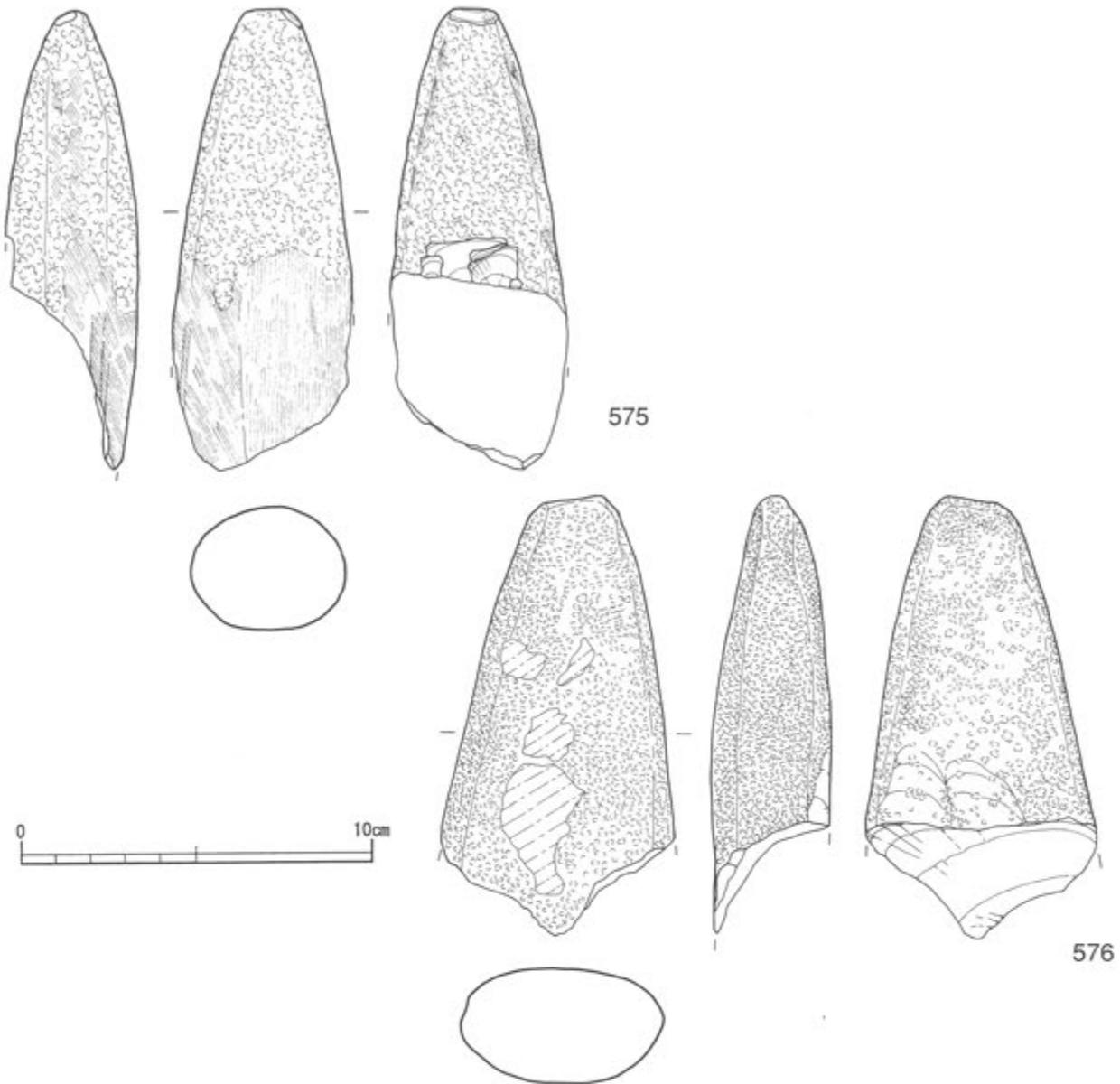
573



574



第92図 磨製石斧 6

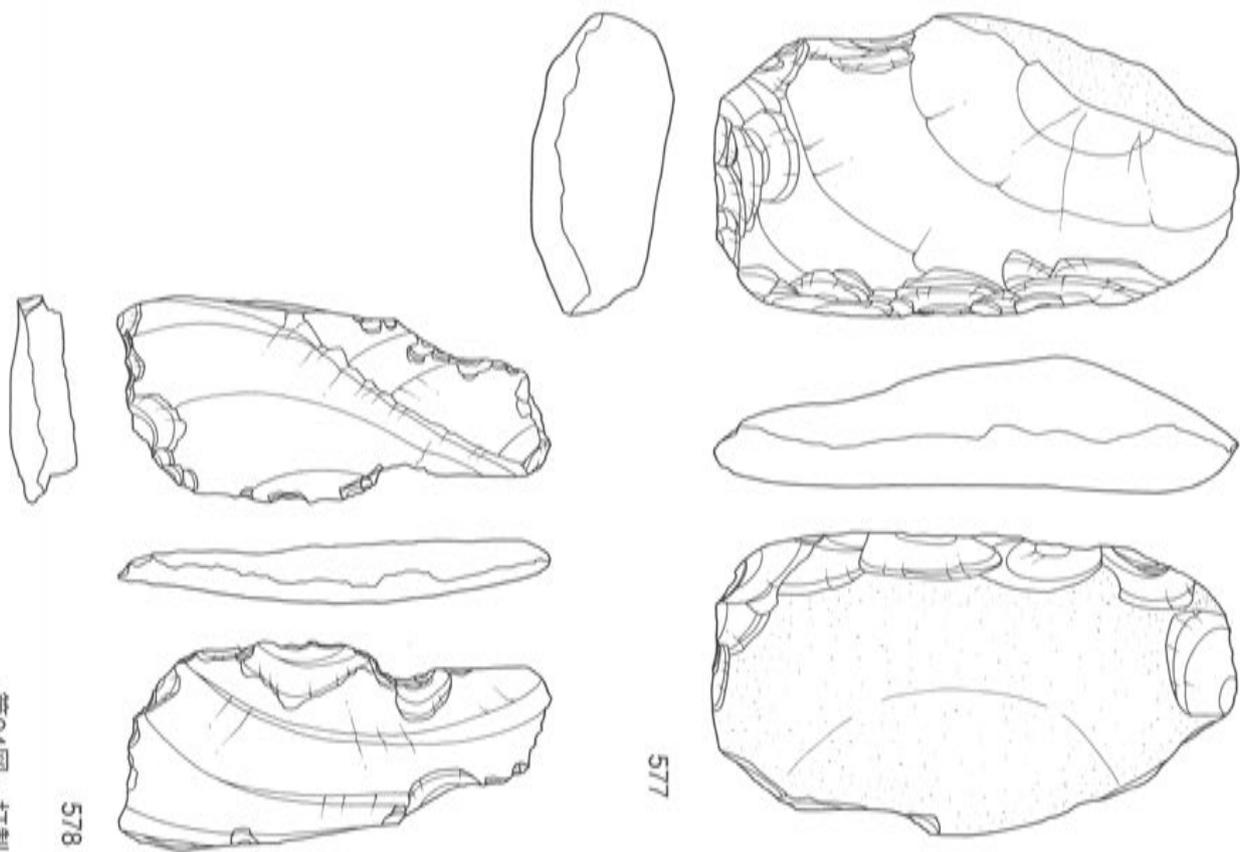


第93図 磨製石斧 7

側面調整もなされている。576は頁岩製で同じく乳棒状を呈する。刃部部分は欠損している。細かい敲打が全面に施され、器面・側面調整が行われている。

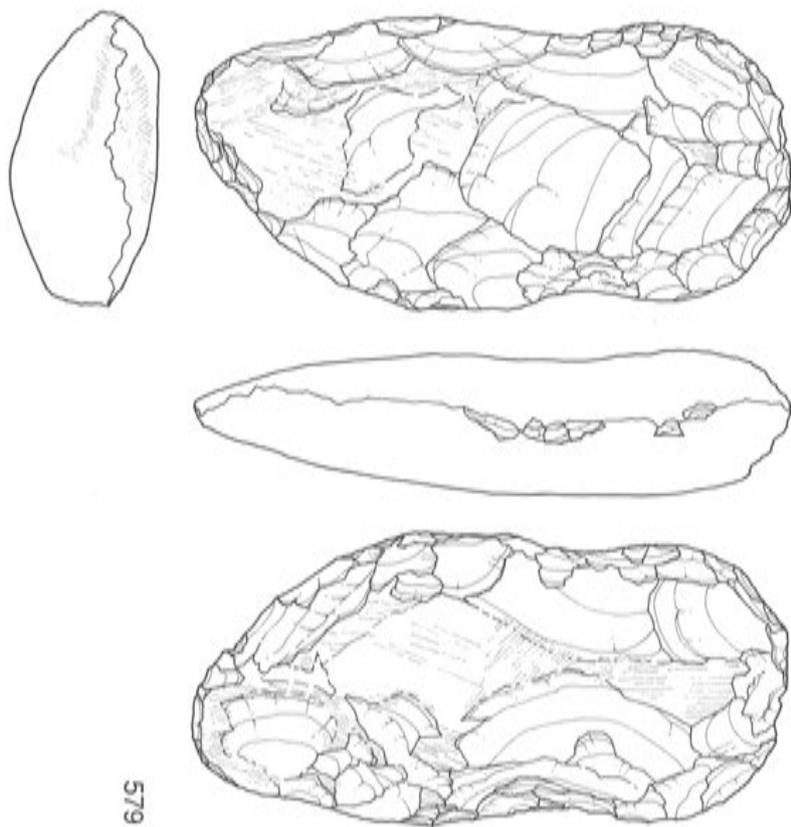
⑦打製・局部磨製石斧（第94図）

577は打製石斧である。安山岩製で自然面を使用しており、左斜め上方向から剥離を行って素材剥片を得ている。その後両側縁部と刃部に剥離を行って器面調整が行われている。背面は自然面をそのまま残す。刃部は厚みがある。578は頁岩製の打製石斧である。縦長剥片を使用しており、石斧としては薄めである。579は頁岩製の局部磨製石斧である。両面とも剥離調整が行われており、全体的



577

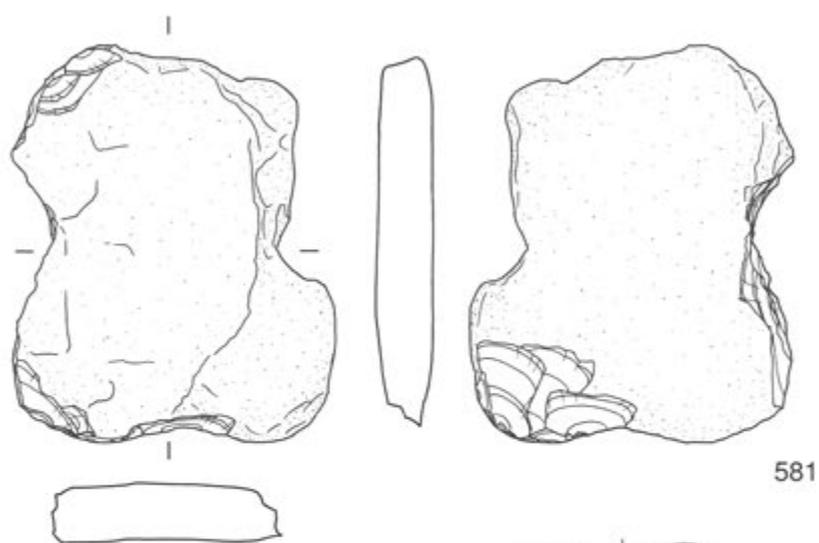
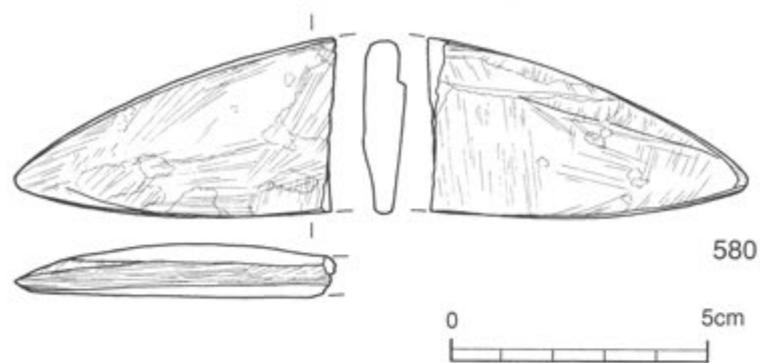
578



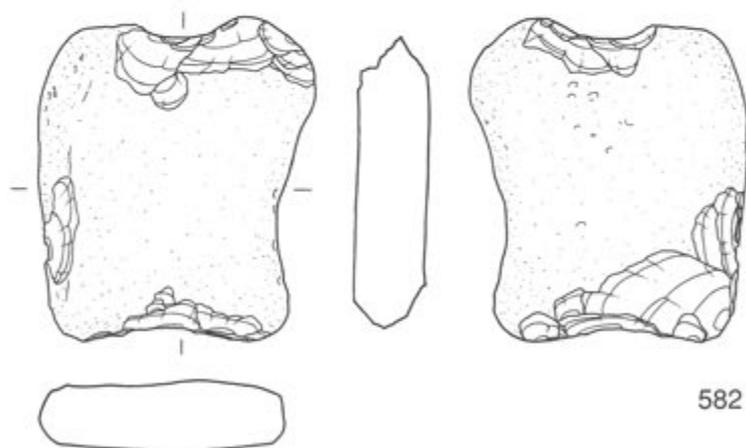
579



第94圖 打製石斧・局部磨製石斧



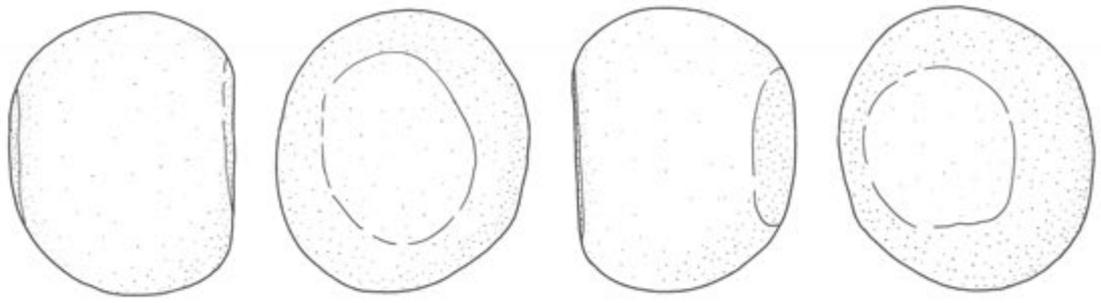
581



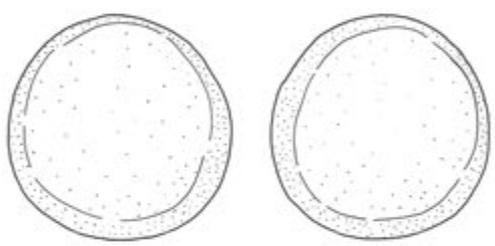
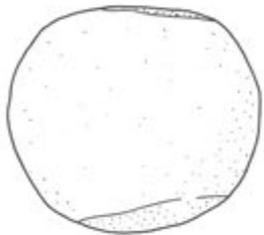
582

第95図 独鈷状石器・石錘

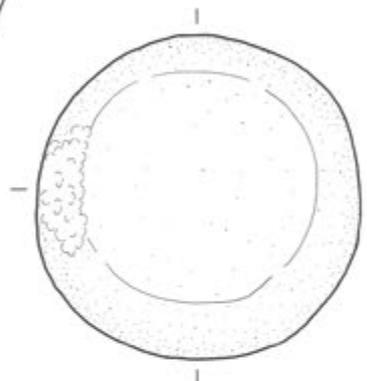
な形状は短冊形に近いが刃部は軸に対して斜めの刃となる。刃部は厚みがあり、楕円形に近い。刃部周辺を中心に研磨が行われている。



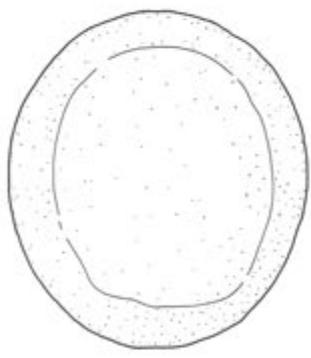
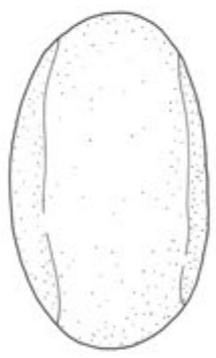
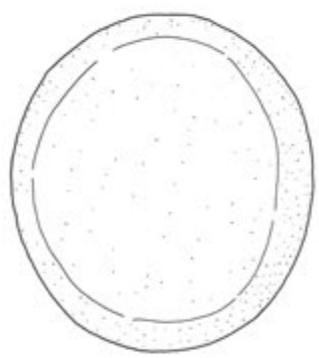
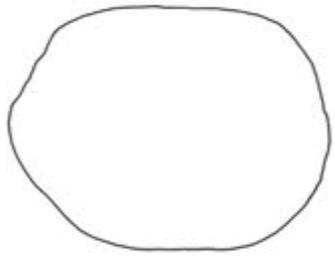
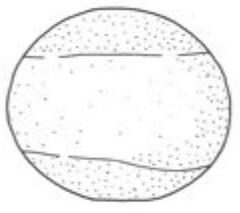
583



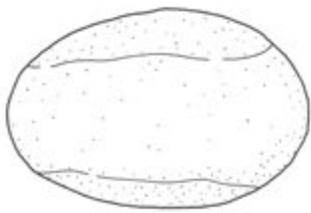
584



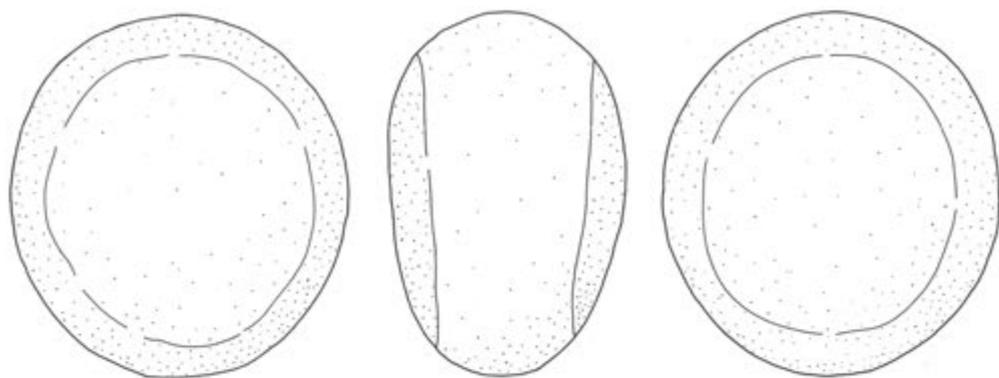
585



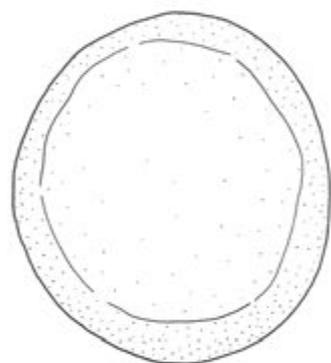
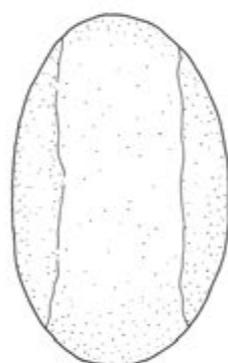
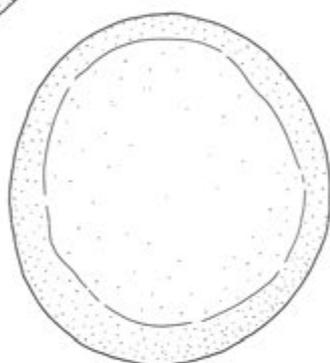
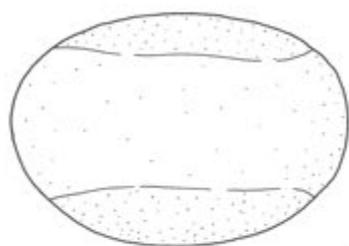
586



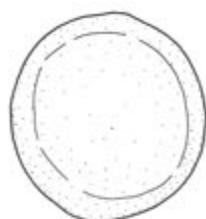
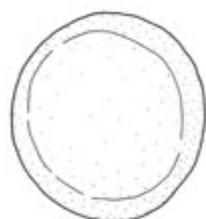
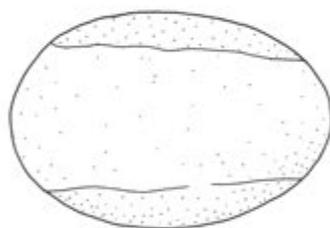
第97図 磨石 1



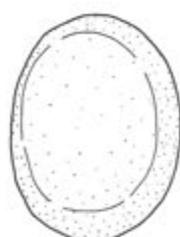
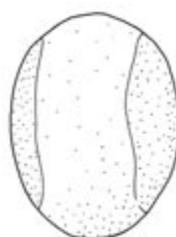
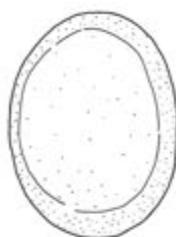
587



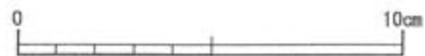
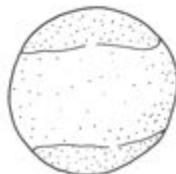
588



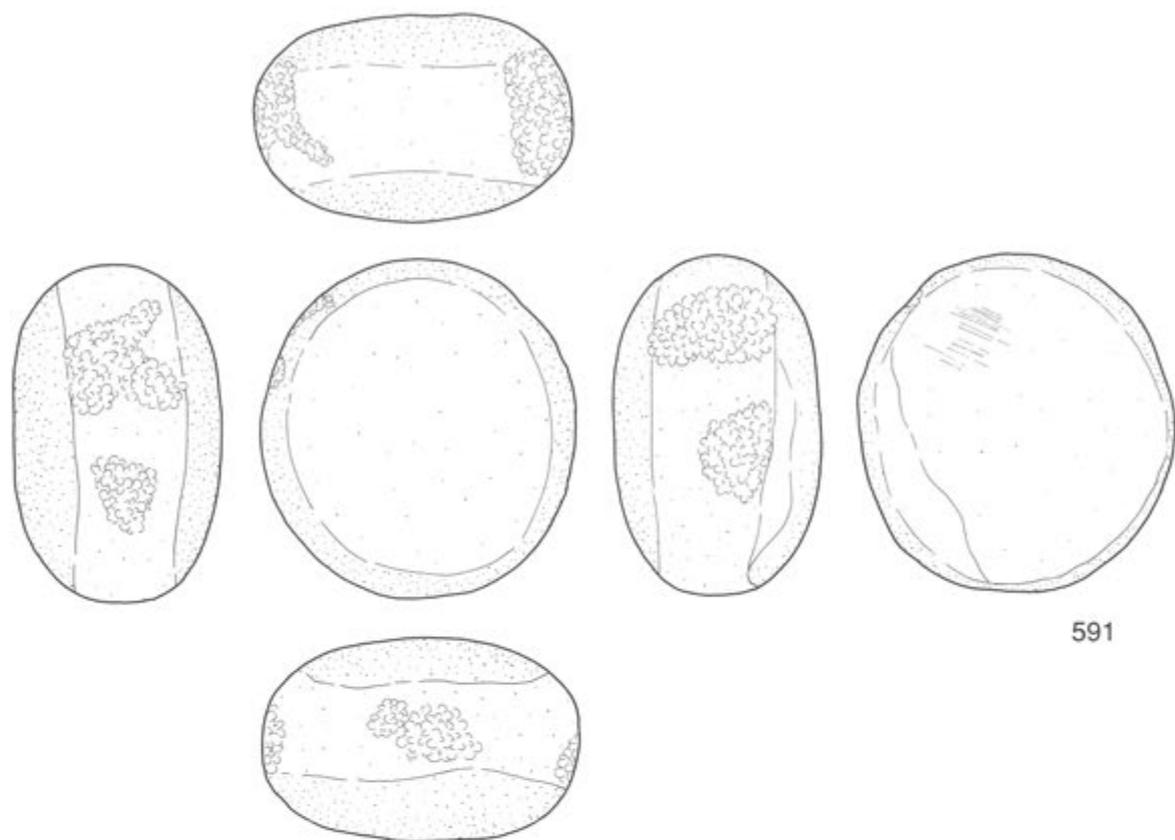
589



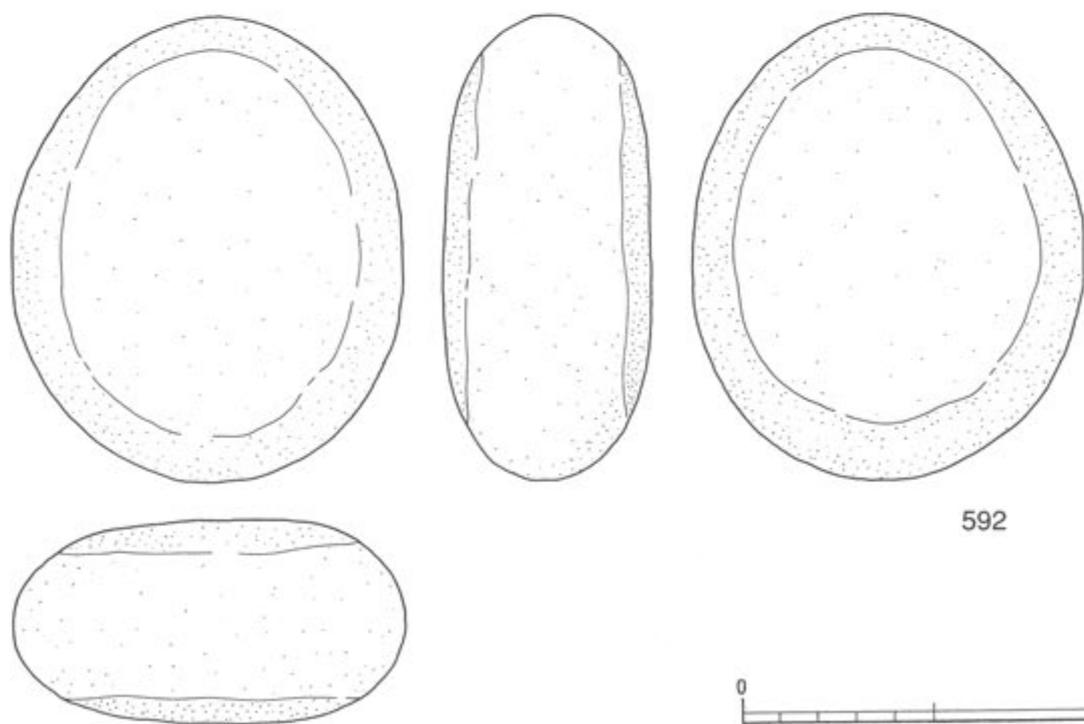
590



第98図 磨石 2



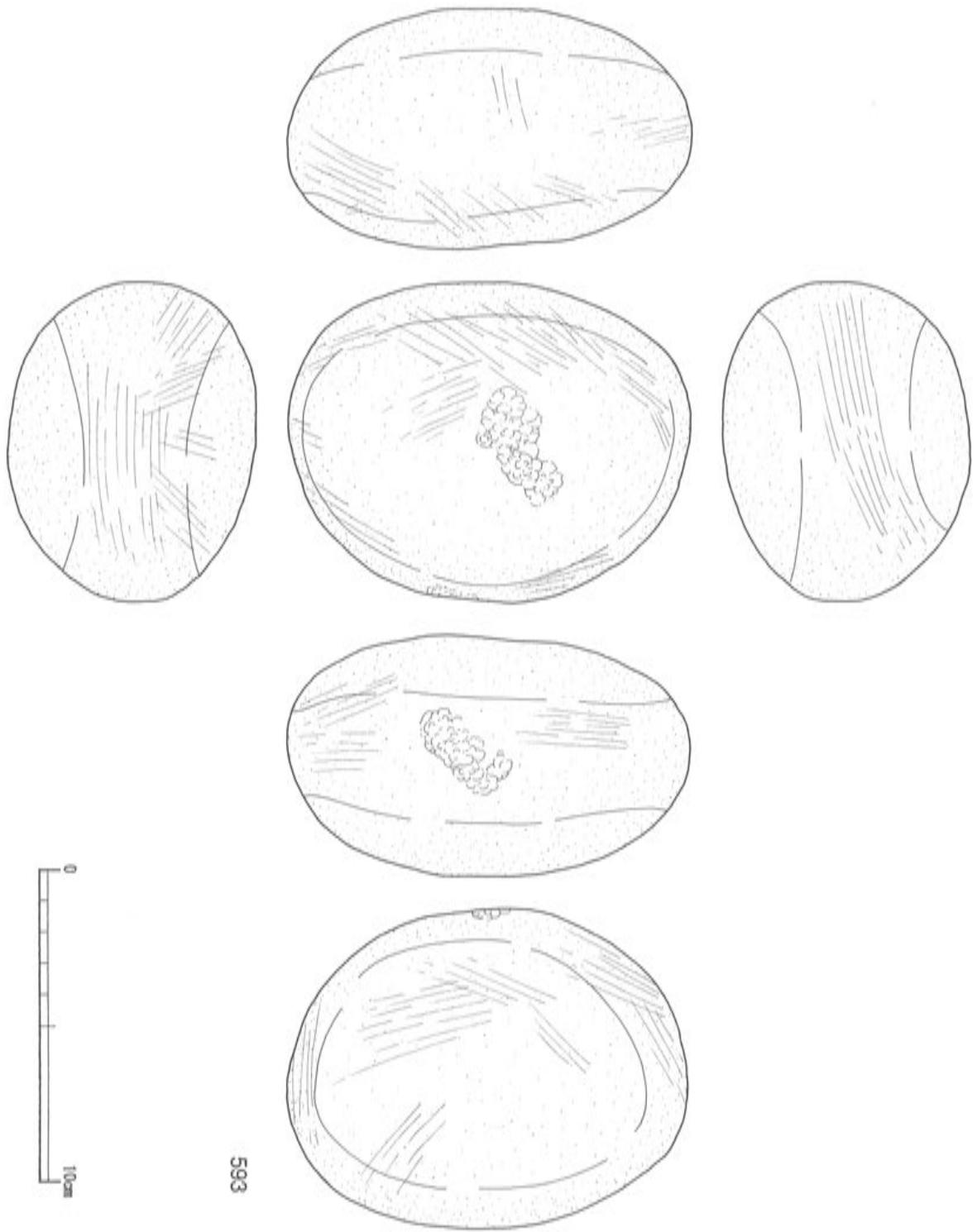
591



592



第99図 磨石 3



593

第100図 磨石 4

【Ⅲ類：B-A-A， B-B-A】

正面形態は楕円形を呈し，断面が球形あるいは楕円形のもの。両面に磨面が見られる。

【Ⅳ類：C-C-A， C-C-B】

正面形態・断面形態ともに方形を呈するもの。いずれも磨面が見られるが，敲打が認められるものもある。

I類（第97図）

583は凝灰岩製である。丸形で断面は球状を呈する。両面に磨面が見られるが，表面は磨りが強く平坦となる。584は安山岩製である。丸形で断面は球状を呈し，両面に磨面が見られる。585も安山岩製である。表面には磨面があり，左側縁部に敲打痕も認められる。

Ⅱ類（第97・98・99図）

586～589は安山岩製である。丸形で断面は楕円形を呈し，両面に磨面が見られる。589は全長5.5cmと小形のものである。591は両面が磨面となっているが，背面には一部に擦痕が認められる。側面には敲打痕が残る。

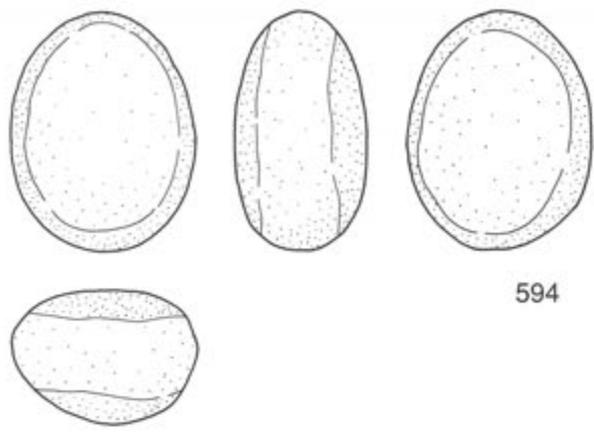
Ⅲ類（第98～101図）

590は安山岩製である。正面形態は楕円形で断面は球形を呈する。両面に磨面が見られる。全長5.9cmと小形のものである。592・599は安山岩製で，正面・断面形態とも楕円形を呈する。両面に磨面が認められる。593は安山岩製である。正面形態・断面形態とも楕円形を呈する。全面に磨面が認められ，擦痕も明瞭に認められる。正面および右側面中央部には敲打痕による凹みを有する。594～598は安山岩製である。いずれも正面形態は楕円形を呈し，断面形態は不整な楕円形となる。両面に磨面が見られる。594～596は，それぞれ6.3cm・5.7cm・5.5cmと小形である。

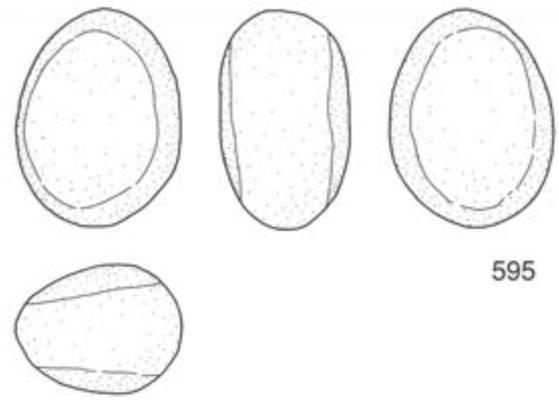
Ⅳ類（第102・103図）

600は安山岩製で，正面形態は方形を呈する。断面形態は方形に分類したが，不整形で楕円形とも分類できそうな形態である。表面に磨面が認められる。

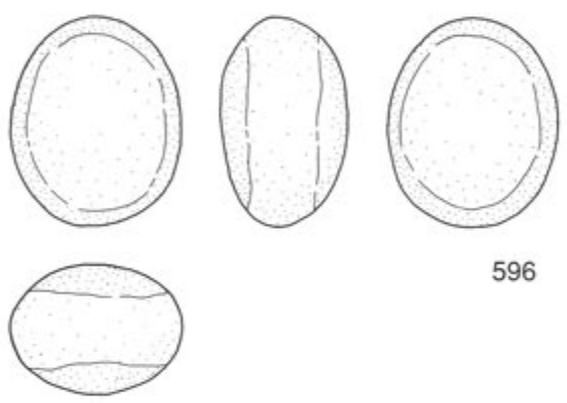
601・603・604は正面形態・断面形態ともに方形で石鹸状を呈するものである。601は凝灰岩製で両面に磨面が見られるが，背面には擦痕が認められるとともに，中央部には敲打痕を残す。603・604は安山岩製で，603は厚さが4.7cmと厚いものである。602は安山岩製でやや歪な方形を呈する。両面に磨面が見られる。



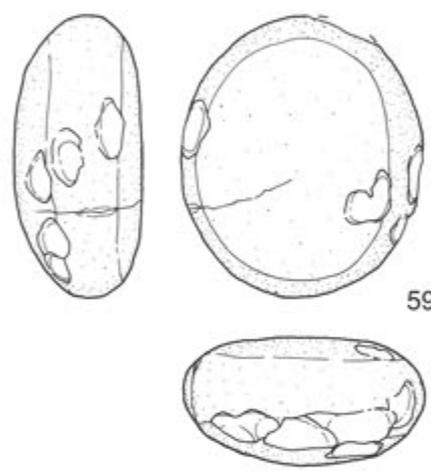
594



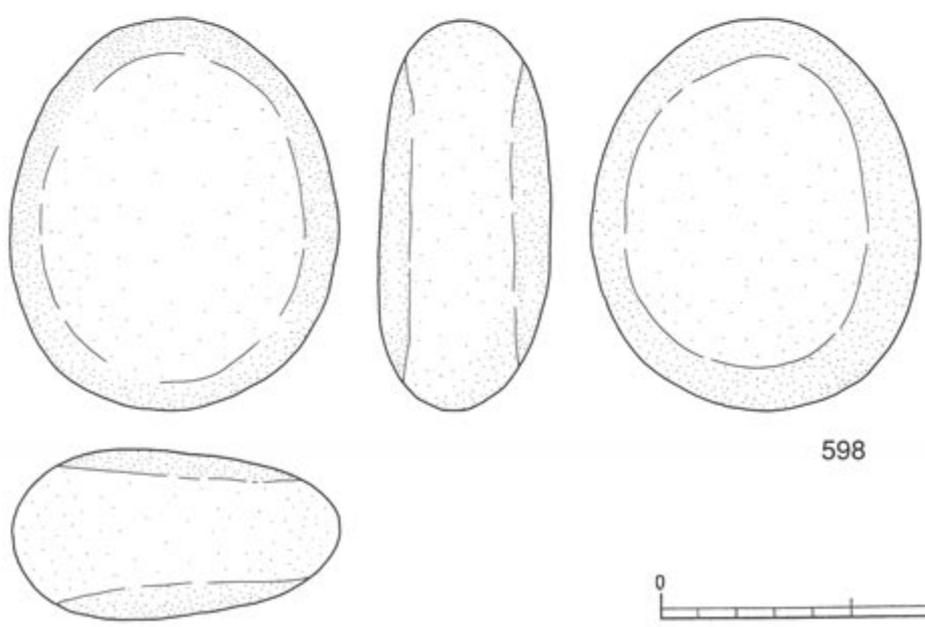
595



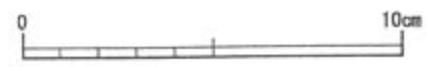
596



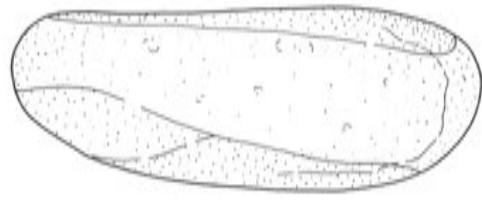
597



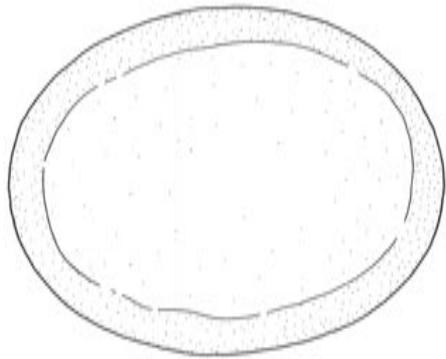
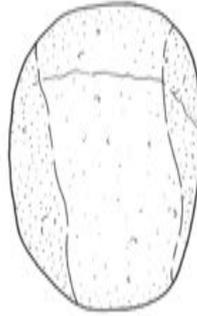
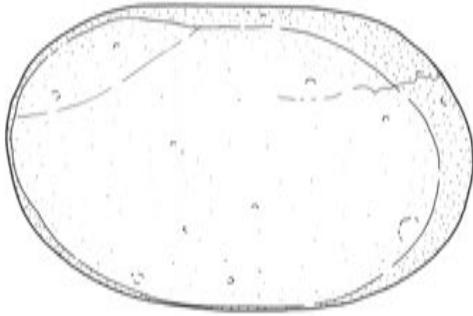
598



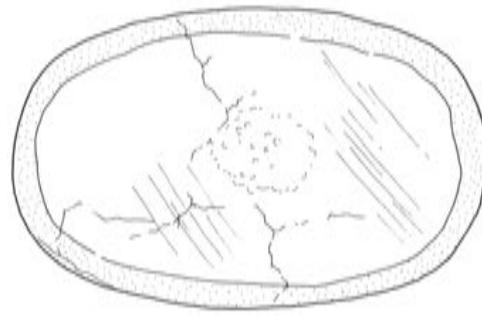
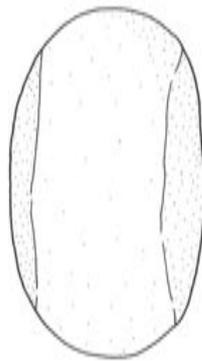
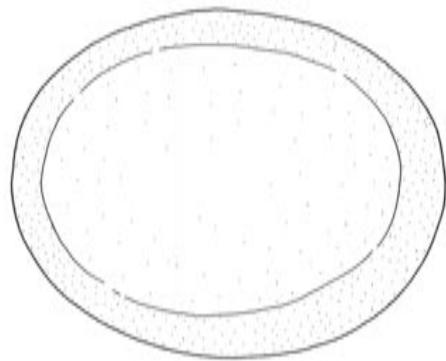
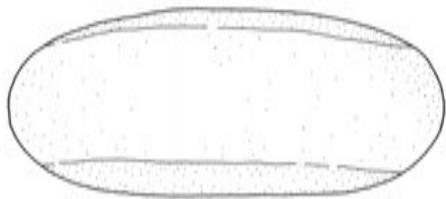
第101図 磨石 5



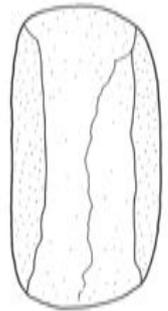
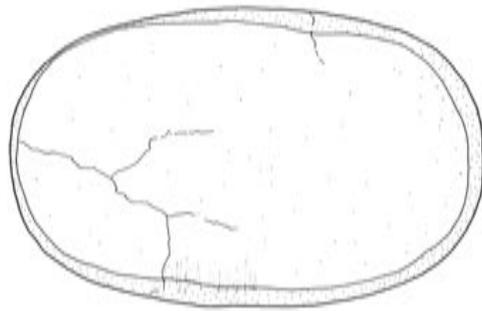
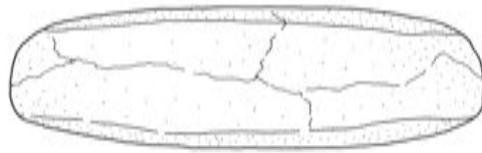
600



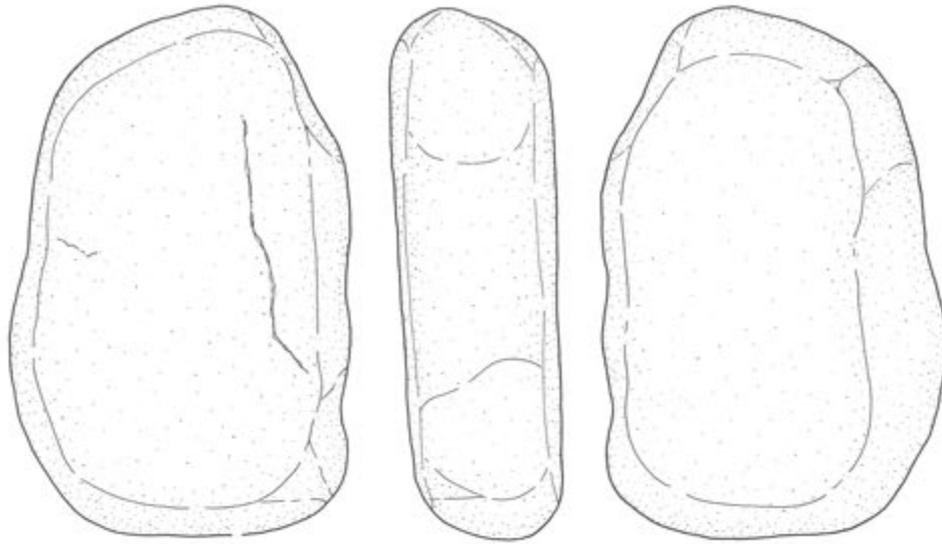
599



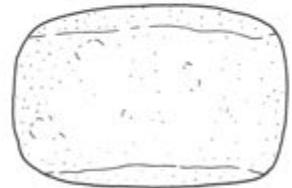
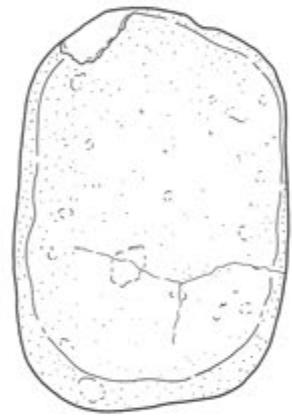
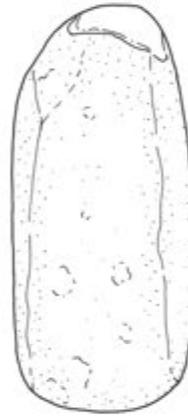
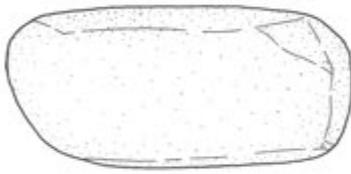
601



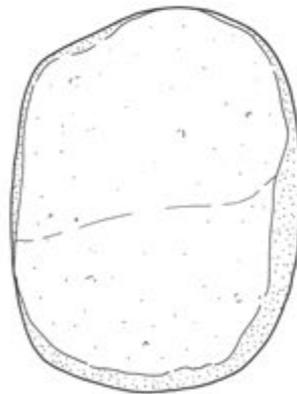
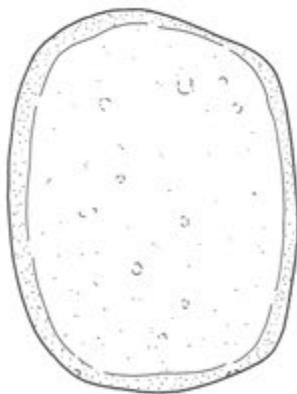
第102図 磨石 6



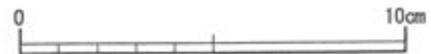
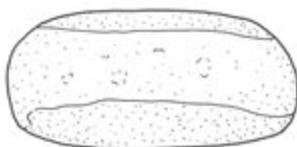
602



603



604



第103図 磨石 7

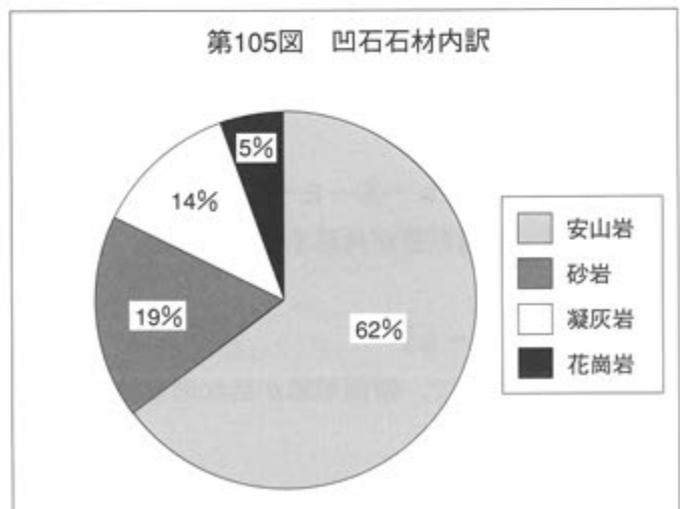


第104図 凹石 1

⑪凹石 (第104~110図)

凹石は欠損品を含め、21点出土した。石材の内訳としては、安山岩製が13点で全体の62%を占めている。そのほかに砂岩製が4点、凝灰岩製が3点、花崗岩製が1点ある。出土点数21点のうち、15点を図化した。

出土した凹石は、正面形態・断面形態・使用痕跡によって大別6類に分類した。



1. 正面形態

①. 隅丸方形 ②. 楕円形 ③. 不正円形 ④. 円形 ⑤. 棒状 ⑥. 角形

2. 断面形態

A. 方形 B. 隅丸方形 C. 長楕円形 D. くびれ形 E. 角形

3. 使用痕跡

a. 全面敲打 b. 表裏面敲打 c. 側面敲打 d. 表裏側面敲打 e. 敲打+磨面

【I類：①-B-a】

正面形態・断面形態とも隅丸方形を呈し、使用痕跡が全面に見られるもの。

【II類：②-C-a e・②-C-d】

正面形態は楕円形で、断面形態は長楕円形を呈するもの。使用痕跡は様々である。また小形のものもある。

【III a類：③-D-b】

正面形態は不正円形、断面形態は括れ形を呈するもの。

【III b類：③-E-a】

正面形態は不正円形、断面形態は角形を呈するもの。

【IV類：④-C-d e】

正面形態は円形、断面形態は長楕円形で、敲打のほかに磨面も有するもの。

【V類：⑤-C-d】

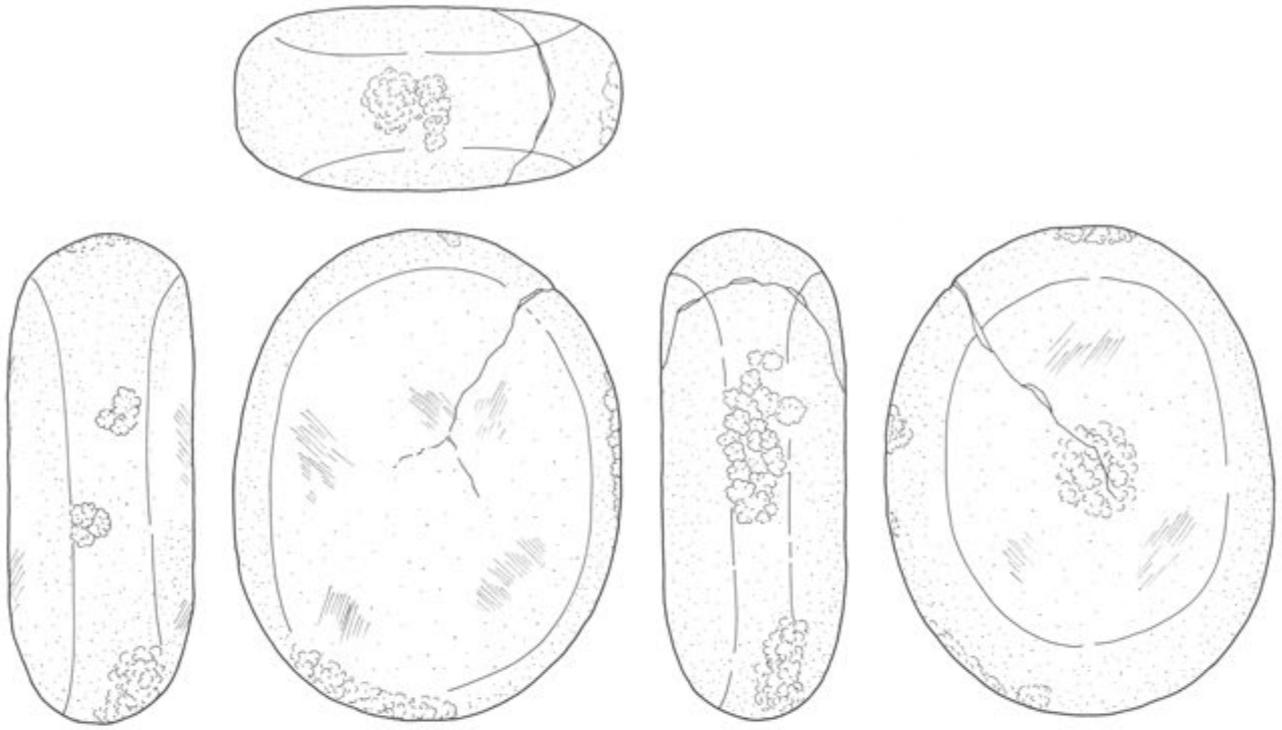
正面形態は棒状、断面形態は長楕円形を呈するもの。

【VI a類：⑥-E-b・⑥-E-d】

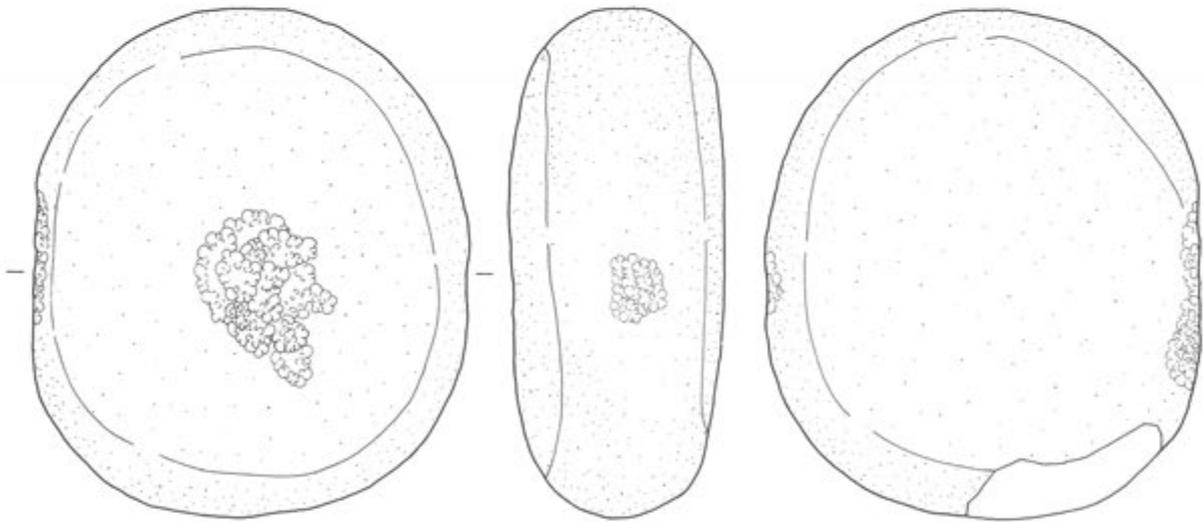
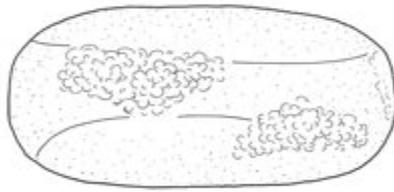
正面形態・断面形態が角形を呈するもの。

【VI b類：⑥-D-b】

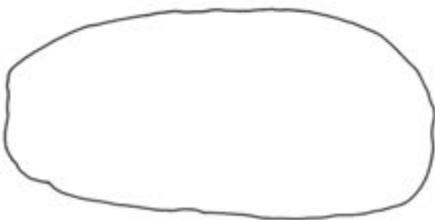
正面形態が角形で、断面形態が括れ形を呈するもの。



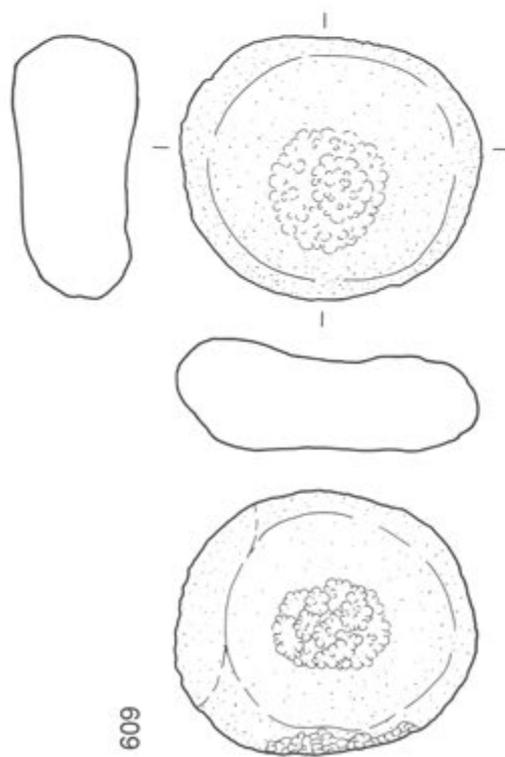
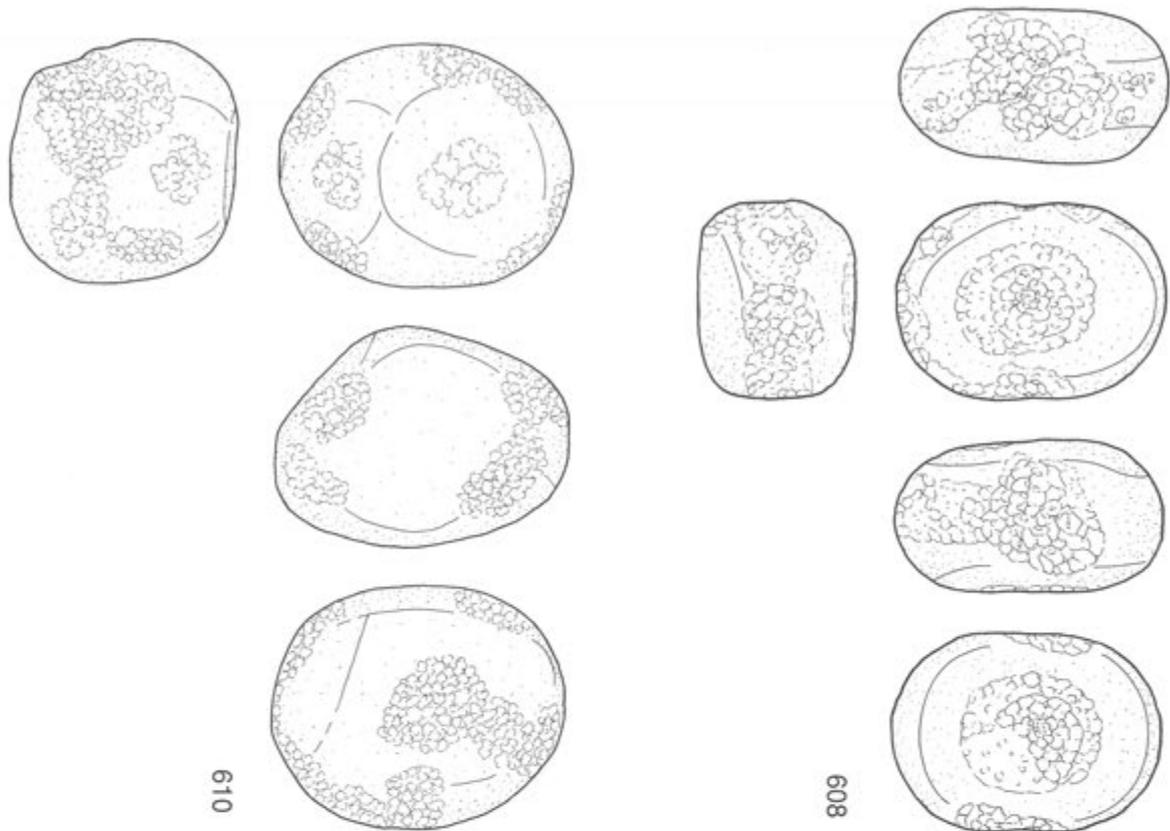
606



607



第106図 凹石 2



611

609

I 類 (第104図)

605は凝灰岩製である。表裏面の中央部付近に集中的な敲打による凹みを有する。側面は四面とも敲打痕が大きく残り、頻繁に使用されていたことが伺える。

II 類 (第106・107図)

606は砂岩製である。正面の中央部付近に敲打による凹みを有し、側面も四面とも敲打痕が認められる。また表裏面とも磨面が見られ、磨石としても使用されている。607・608は安山岩製で、607は正面の中央部付近に敲打による凹みを有し、側面は二面に敲打痕が認められる。608は表裏面とも中央部付近に集中的な敲打による凹みを有する。側面は三面に敲打痕が大きく残り、頻繁に使用されていたことが伺える。

III a 類 (第107図)

609は安山岩製で、表裏面の中央部付近に敲打による凹みを有する。表面は特に集中的な敲打によって深く凹み、断面形態が括れ状を呈している。右側面にも敲打痕が認められる。

III b 類 (第107図)

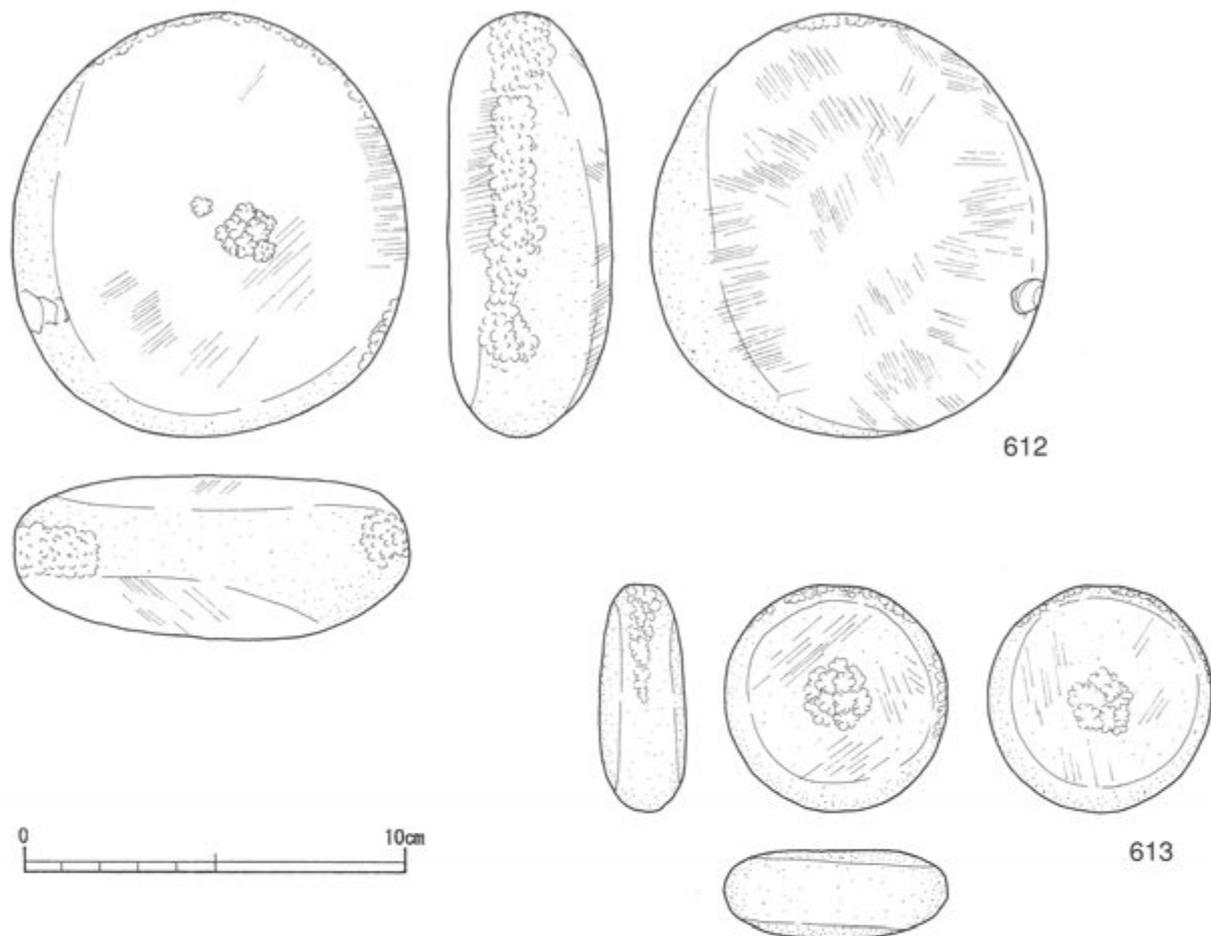
610は安山岩製である。形状が不正形を呈する。表裏面の中央部付近に集中的な敲打痕が認められるが、形状の特徴からか、あらゆる面の縁辺部周辺に敲打痕が確認される。611も安山岩製である。表面の中央部付近に集中的な敲打による凹みを有する。また側面の縁辺部周囲にも敲打痕が認められる。

IV 類 (第108図)

612は花崗岩製である。表面の中央部付近に集中的な敲打痕が認められる。また縦側面にも縦位に敲打痕が認められる。表裏面には磨面が認められ、特に背面は磨りの痕跡が顕著である。表面の敲打による凹みがあまり顕著ではないことから、磨石との区別が難しい個体である。613は砂岩製である。表裏面の中央部付近に集中的な敲打による凹みがあるほか、磨面も認められる。縦側面にも縦位に敲打痕が認められる。サイズは小形である。

V 類 (第109図)

614は安山岩製である。表裏・側面ともに敲打痕が認められる。特に表面は中央部付近の集中的な敲打によって凹みを有する。615は砂岩製である下部が欠損している。表面・側面に敲打痕が認められるが、表面・側面とも集中的な敲打による凹みを有している。一般的に円形などの場合は中央部付近に凹みが認められるが、615は形状が棒状であり、凹みの位置も端に近い位置に認められることから、トンカチのような感じで握って使用したと推測される。



第108図 凹石 4

Ⅵa類 (第109・110図)

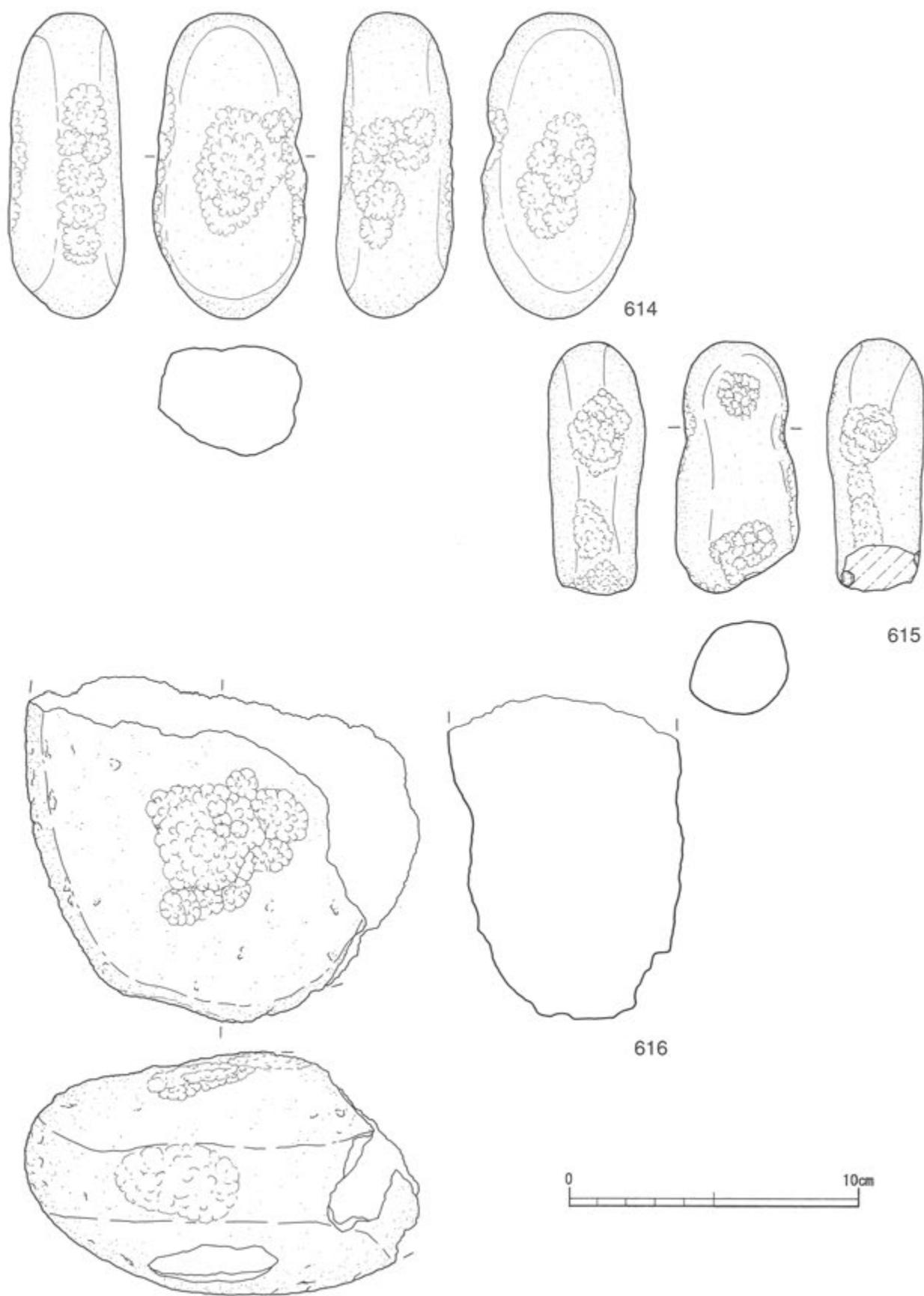
616・617ともに安山岩製である。またともに欠損している。616は表面の中央部付近に集中的な敲打によって凹みが認められる。また側面も集中的に敲打している。617は表面に2ヶ所の集中的な敲打が認められ、深い凹みが認められる。裏面は欠損している。

Ⅵb類 (第110図)

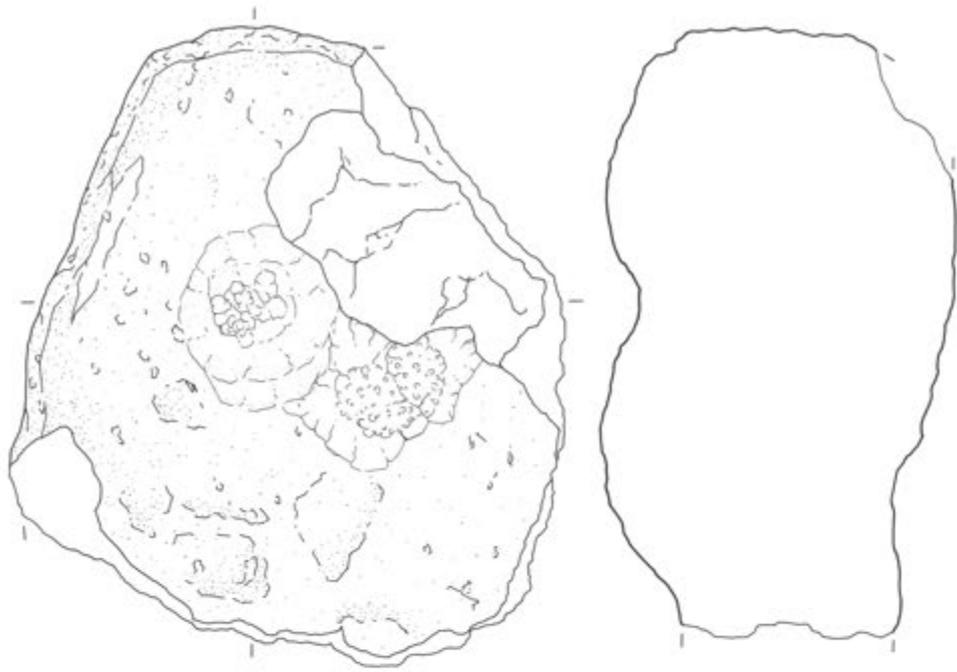
618は砂岩製である。表面の中央部付近に集中的な敲打によって凹みが認められる。619は凝灰岩製で、表裏面の中央部付近に敲打が認められる。敲打は集中的で、表裏面ともに深い凹みを有し、断面が括れ形を呈している。

⑫敲石

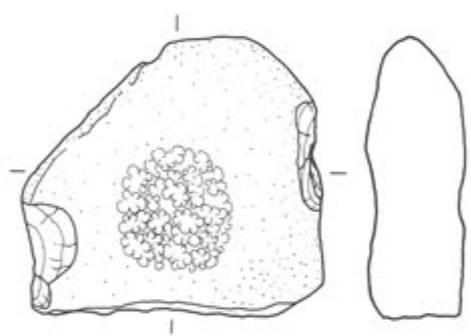
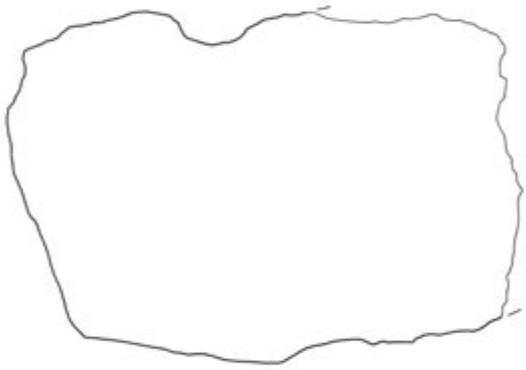
敲石は35点出土した。敲石としたものの中には磨面が認められるものがあり、磨石と明確に区分できないものもある。磨面があっても、敲打痕の割合の方が大きい場合は、敲石と判断した。石材の内訳としては、安山岩製が25点で全体の71%を占め、次に砂岩製が8点で23%、その他に凝灰岩製・頁岩製が1点ずつで1%となっている。出土点数35点のうち14点を図化した。



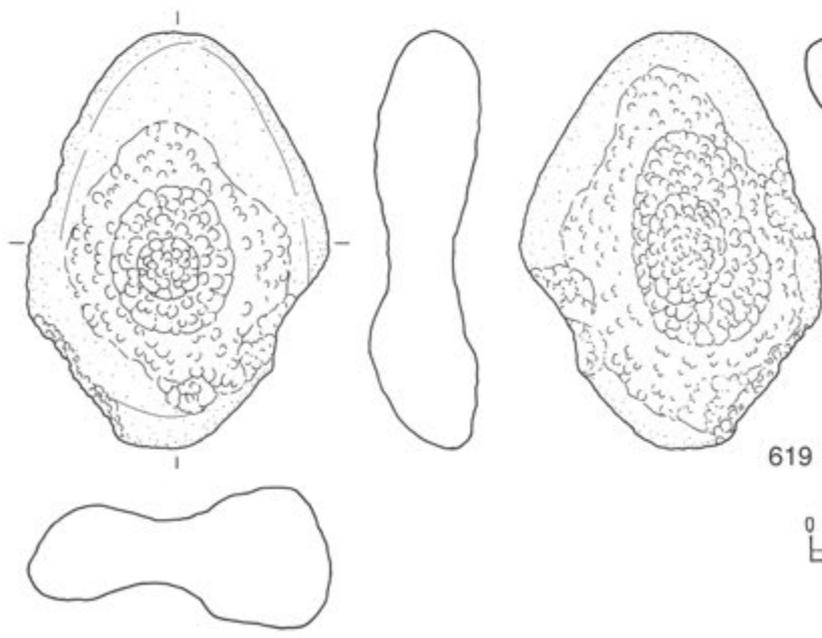
第109図 凹石 5



617



618



619



第110図 凹石 6

出土した敲石は、正面形態・断面形態・使用痕跡ヶ所等によって6類に分類した。各分類の特徴は以下のとおりである。

【敲石分類】

1. 正面形態

- ①. 円形 ②. 楕円形 ③. 長楕円形
- ④. 方形

2. 断面形態

- A. 楕円 B. 球形 C. 長楕円形
- D. 不定形

3. 使用痕跡

- a. 側面敲打 b. 表裏面敲打 c. 表裏側面敲打 d. 全面敲打 e. 敲打+磨面

【I類：①-A-a e, ①-A-d e】

正面形態は円形，断面形態は楕円形で，側面に敲打痕が認められるもの。

【II類：①-B-b e】

正面形態は円形，断面形態は球形で，表面に敲打痕が認められるもの。

【III類：②-A-a e】

正面形態・断面形態とも楕円形を呈し，側面に敲打痕が認められるもの。

【IV類：②-C-a e】

正面形態は楕円形，断面形態は長楕円形で，側面に敲打痕が認められるもの。

【V類：③-C-a e, ③-C-c】

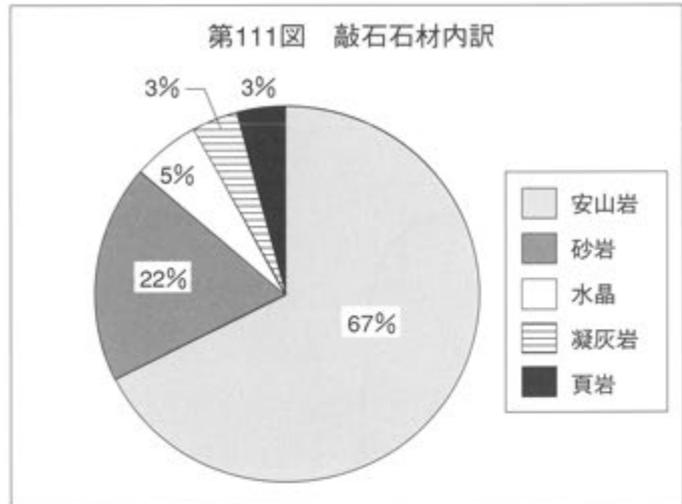
正面形態・断面形態とも長楕円形を呈し，側面に敲打痕が認められるもの。

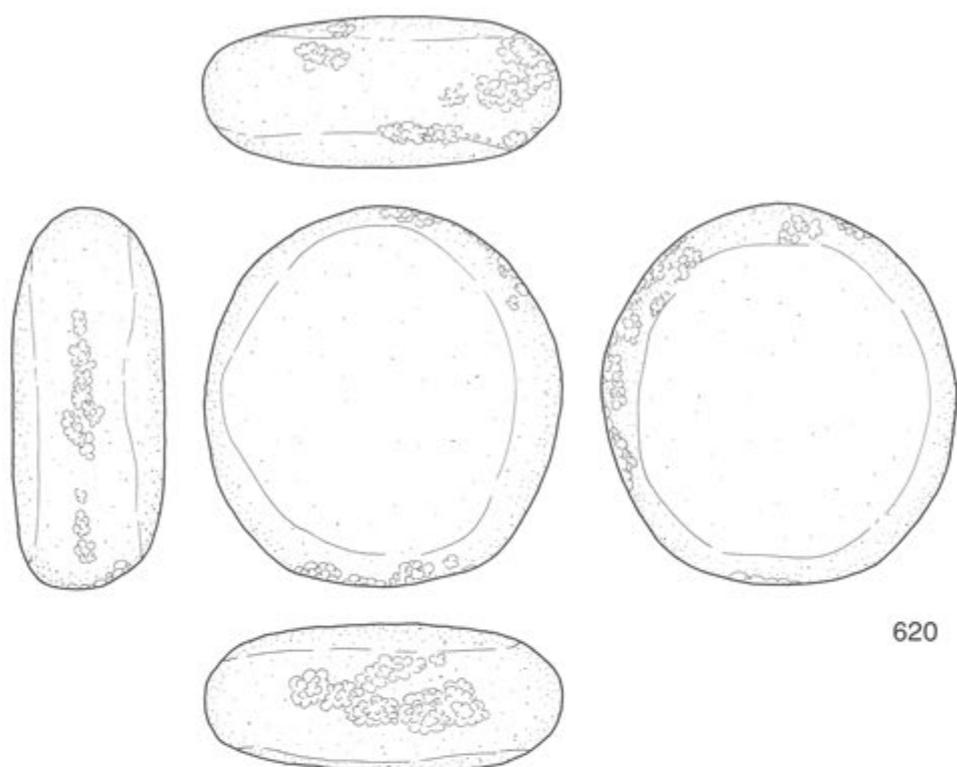
【VI類：④-D-a e】

正面形態は方形，断面形態は不定形を呈し，側面に敲打痕が認められるもの。

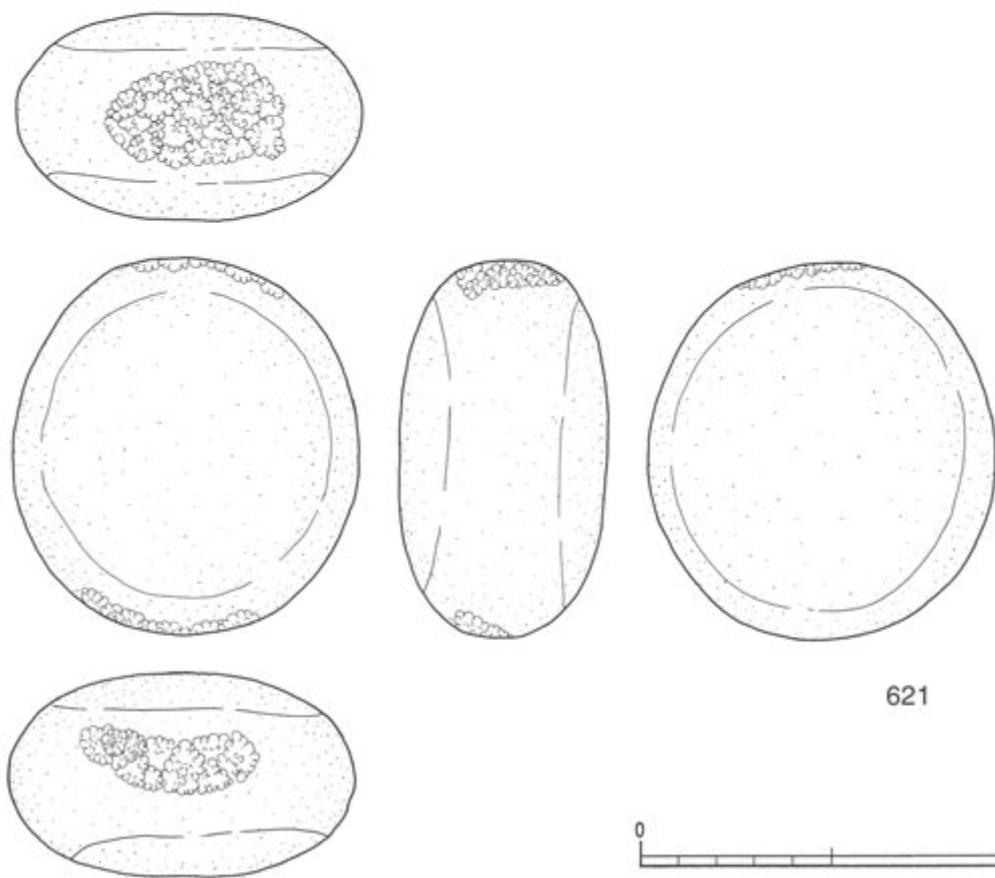
I類（第112・113図）

620は安山岩製である。正面形態は円形，断面形態は楕円形を呈し，4側面とも敲打が認められる。621・622も安山岩製であるが，621は上下両側面に，622は全面に敲打痕が認められる。3点いずれとも，表裏面には磨面が認められる。

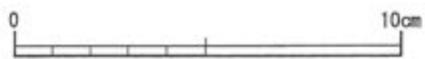




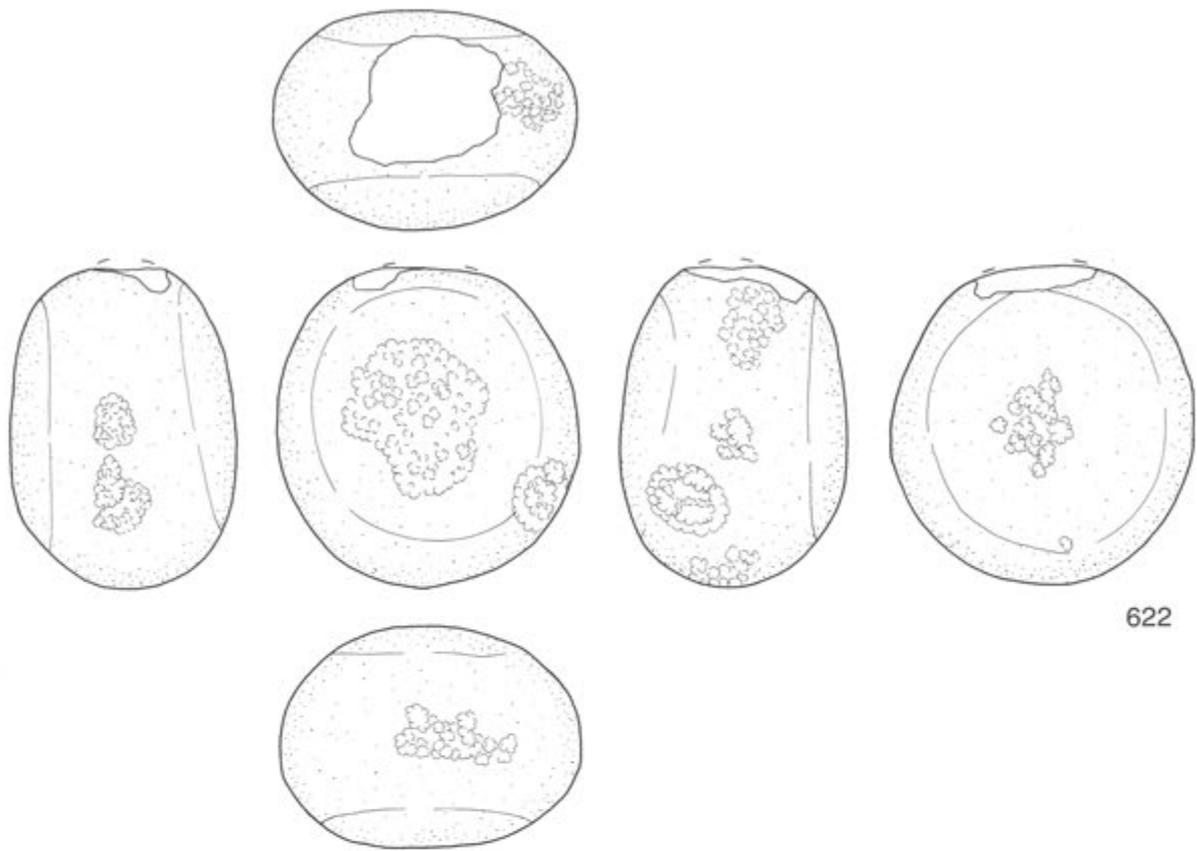
620



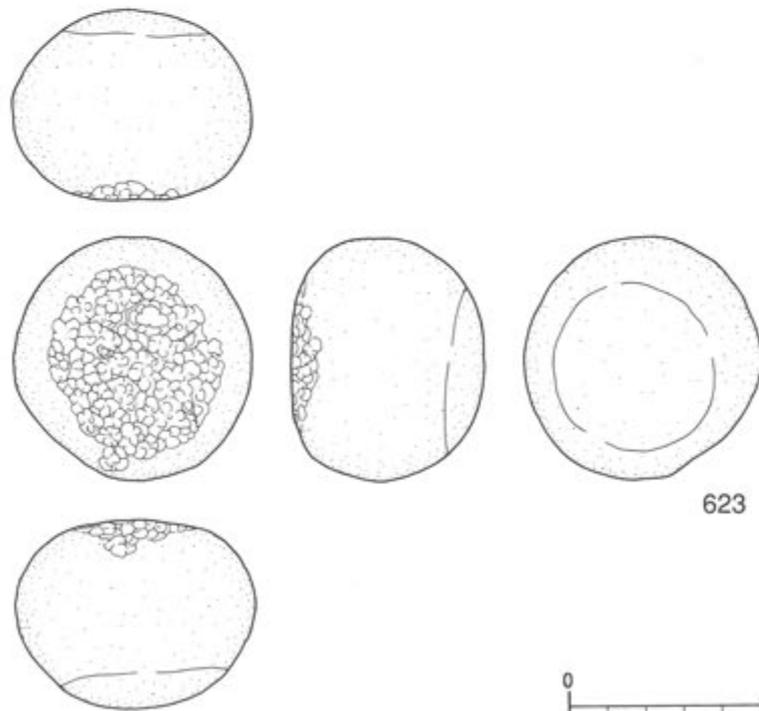
621



第112図 敲石 1



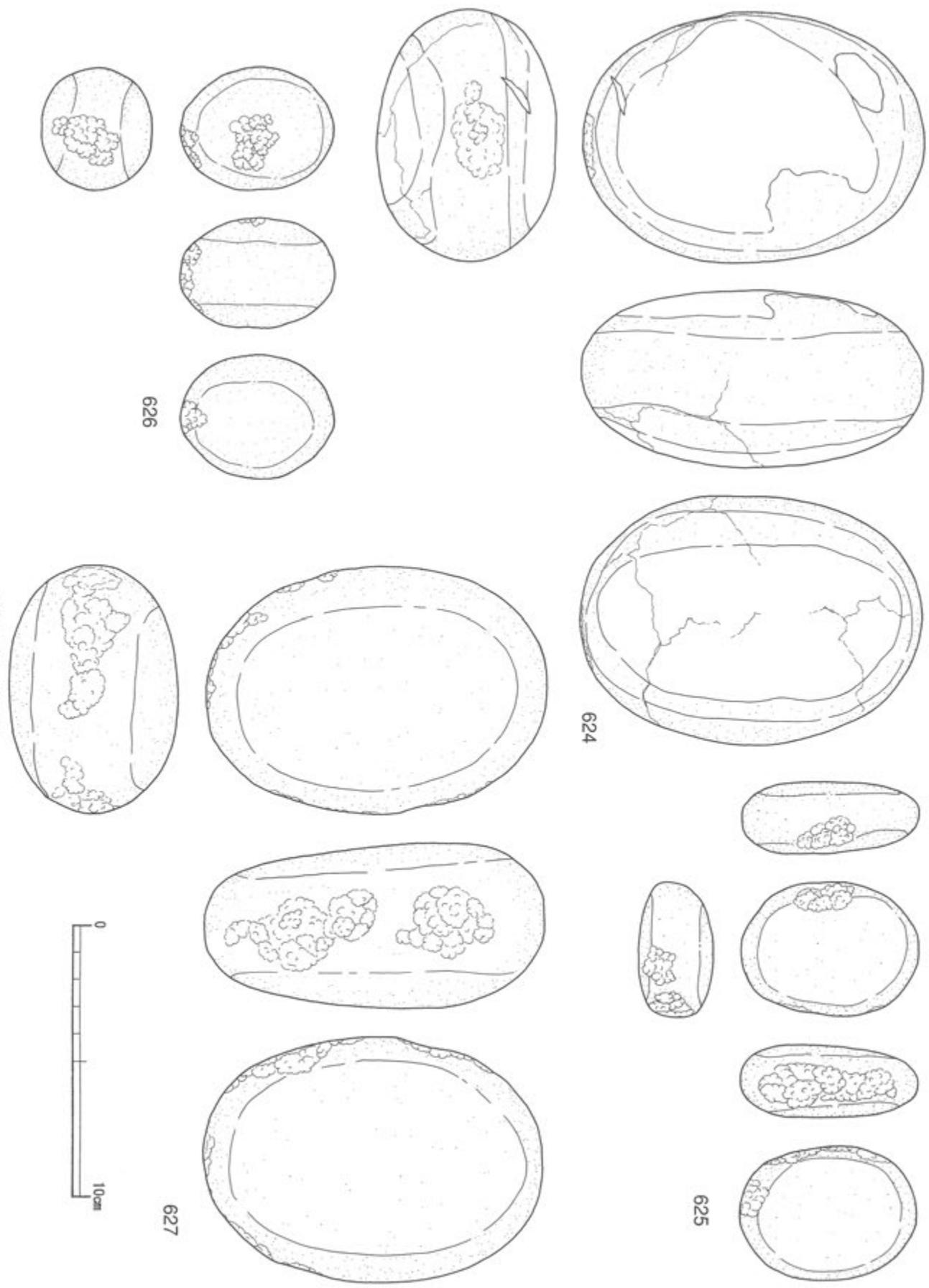
622



623



第113図 敲石 2



第114図 敲石 3

Ⅱ類（第113図）

623は安山岩製である。正面形態は円形、断面形態は球形を呈し、表面全体に敲打痕が認められる。背面には磨面が認められる。

Ⅲ類（第114・115図）

624は安山岩製である。正面形態・断面形態とも楕円形を呈し、下側面に敲打痕が認められる。625は安山岩製であるが、全長6.3cmと小形のものである。左右の側面と下側面に敲打痕が認められる。626も同じく安山岩製で5.4cmと小形のものである。表面及び下側面に敲打痕が認められる。また、表裏面には磨面も認められる。627は砂岩製である。右側面と下側面に敲打痕が認められる。628は安山岩製である。下側面に敲打痕が認められる。624～628いずれも表裏面には磨面が認められる。

Ⅳ類（第115図）

629は砂岩製である。正面形態は楕円形、断面形態は長楕円形を呈し、左右の側面と下側面に敲打痕が認められる。全長6.2cmと小形のものである。表裏面には磨面が認められる。

Ⅴ類（第115・116図）

630は砂岩製である。正面形態・断面形態とも長楕円形を呈し、左右の側面と下側面に敲打痕が認められる。敲打痕はそれぞれ小規模で、集中的である。表裏面に磨面は認められない。631も砂岩製である。左右の側面に敲打痕が認められる。表面には磨面も認められる。632は安山岩製である。表裏面の中央部周辺、右側面に敲打痕が認められる。本来は凹石に分類すべきものかもしれない。

Ⅵ類（第116図）

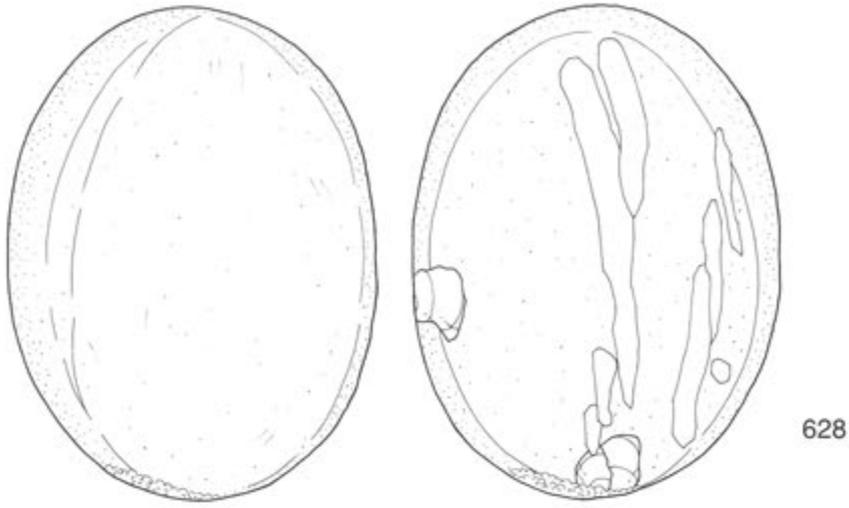
633は砂岩製である。正面形態は方形、断面形態は不定形を呈し、上側面に敲打痕が認められる。裏面には磨面が認められる。

⑬ハンマーストーン（第117図）

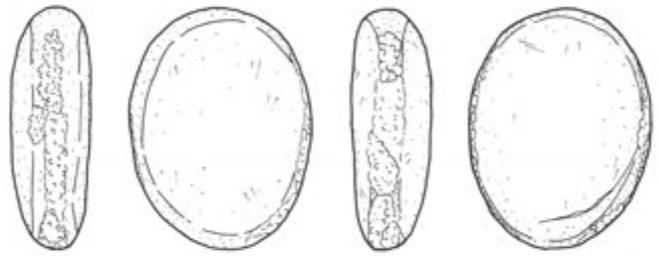
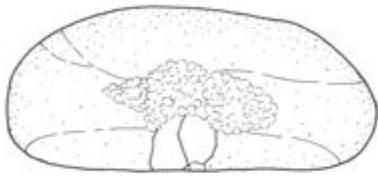
ハンマーストーンは2点出土している。634・635はいずれも水晶製で、正面形態・断面形態ともに不定形を呈する。左右両側面と下側面の広範囲に敲打痕が認められる。634が3.35cm、635は2.8cmといずれも小形のものである。

⑭礫器（第118～120図）

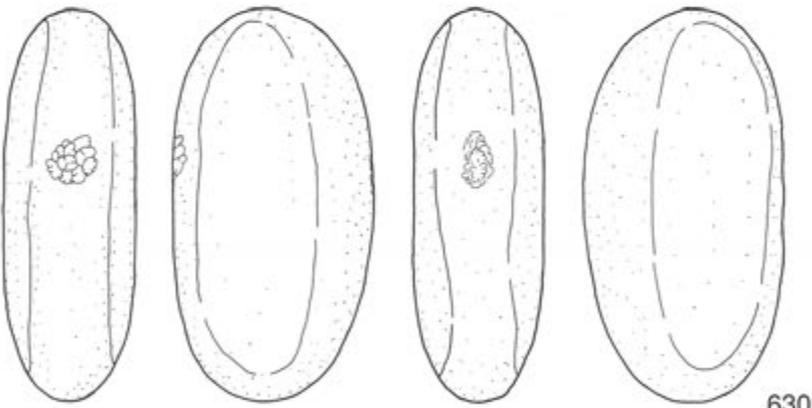
礫器は26点出土し、うち6点を図化した。636は比較的薄めの円礫を用い、両側面と下側面部分に押圧剥離による刃部調整が行われている。637も円礫を用い、下側面に押圧剥離を行って刃部を形成している。638は方形の自然礫を用い、下側面と上側面端部に押圧剥離が認められる。639も方形の自然礫を用い、下側面に押圧剥離を行って刃部を作出している。640は三角形に近い河原石を用い、下側面に押圧剥離を行って刃部を作出している。刃部は直線状である。641は剥片素材を用いており、



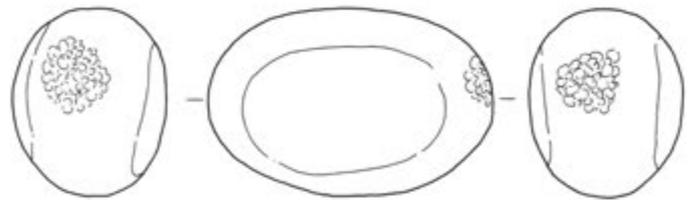
628



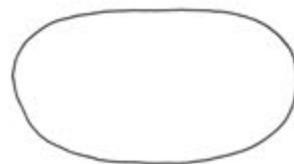
629



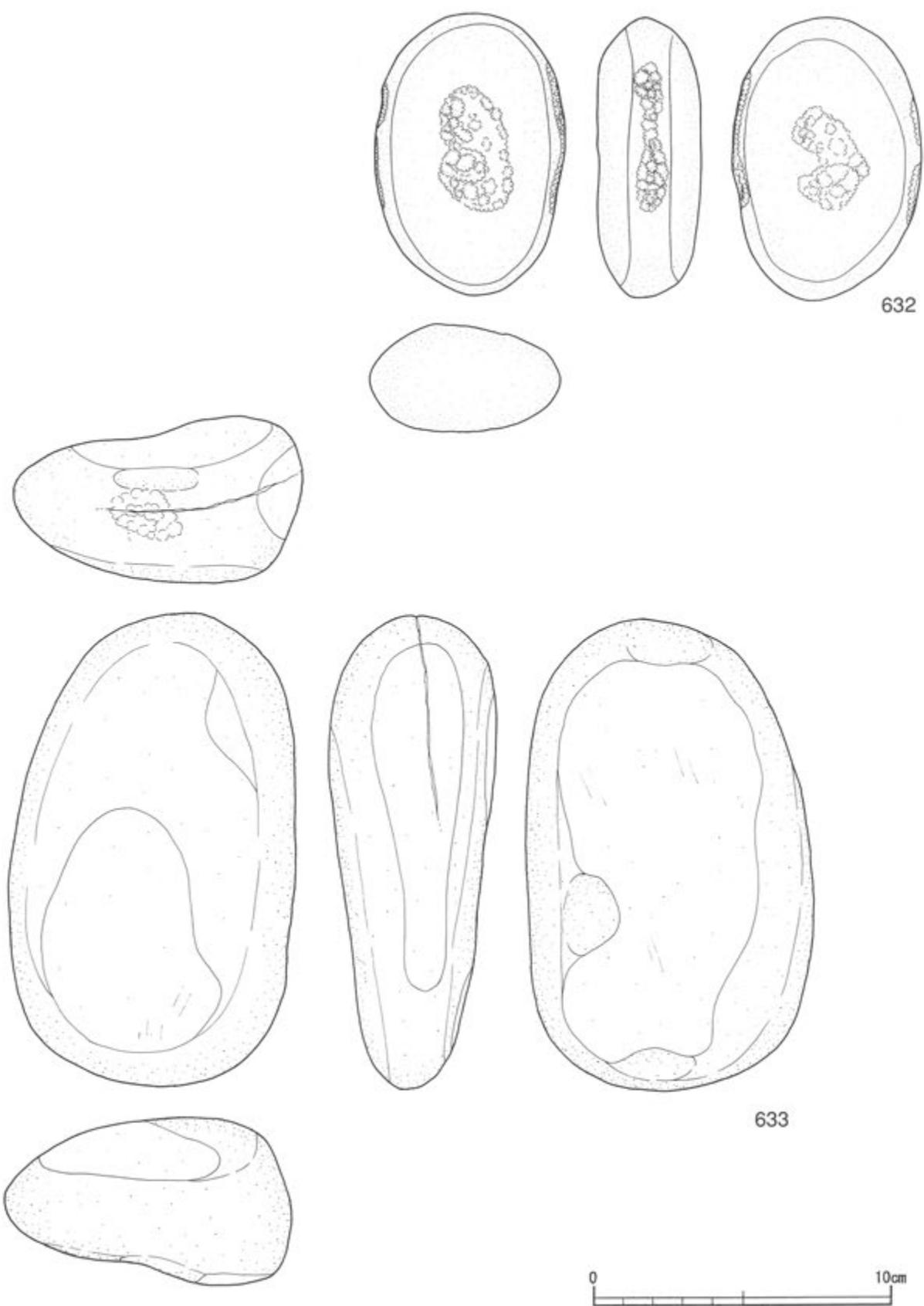
630



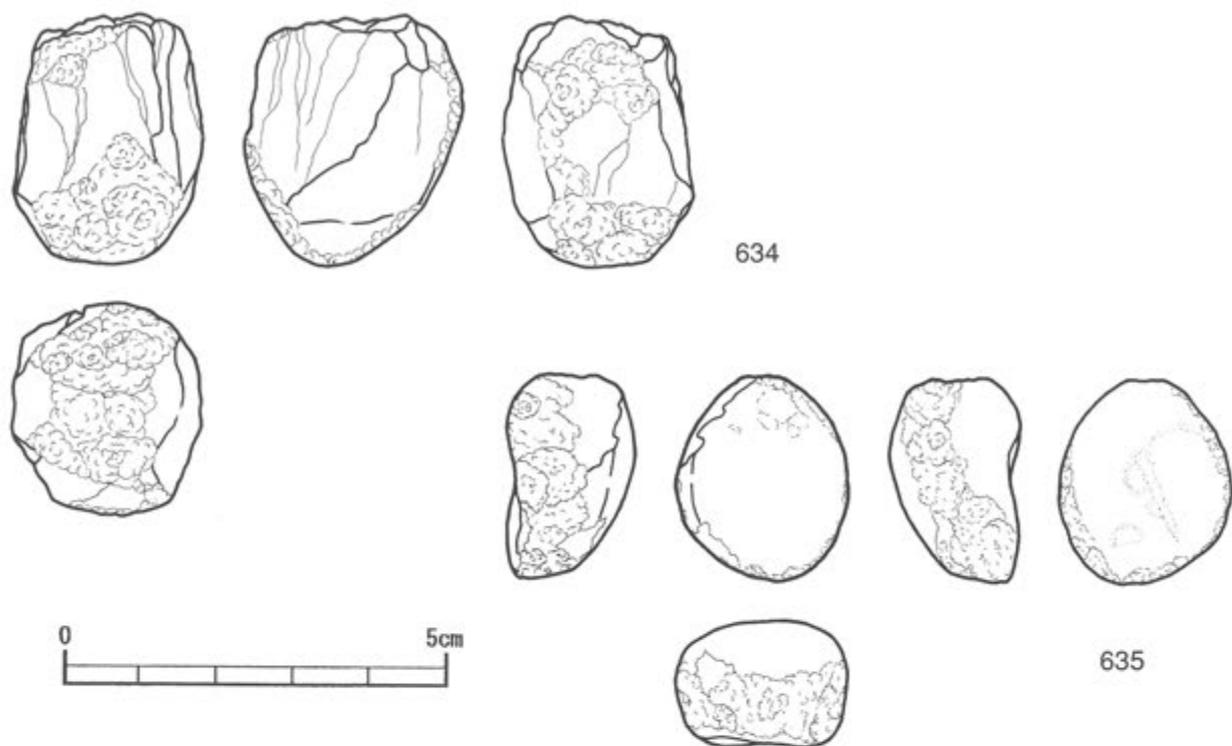
631



第115図 敲石 4



第116図 敲石 5



第117図 ハンマーストーン

断面は三角形状である。縁辺部に両側から剥離調整を行って刃部を形成している。636～641の6点すべて安山岩製である。

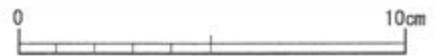
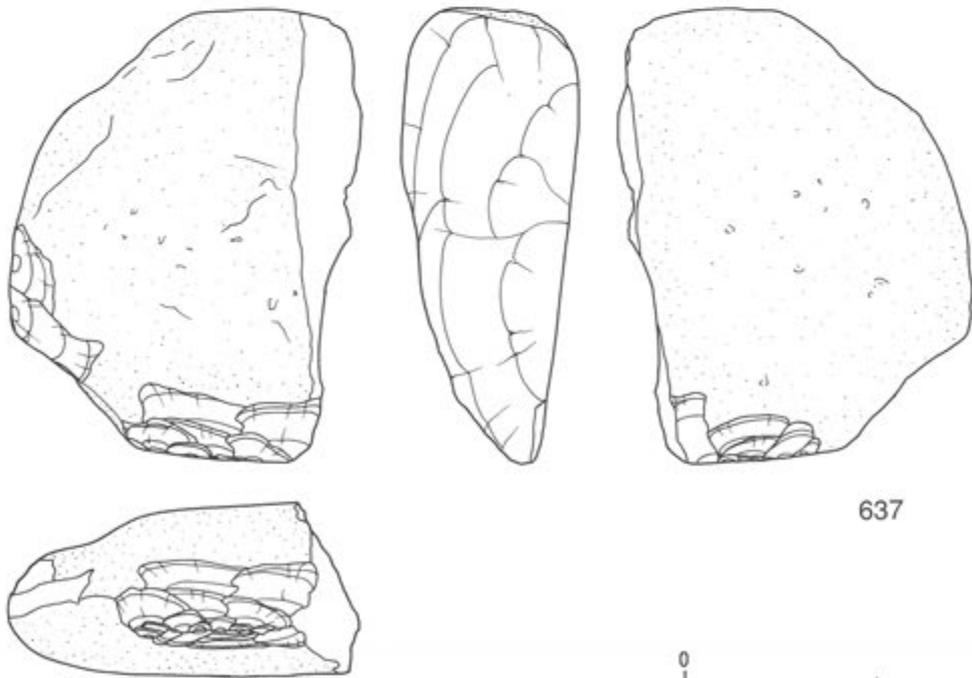
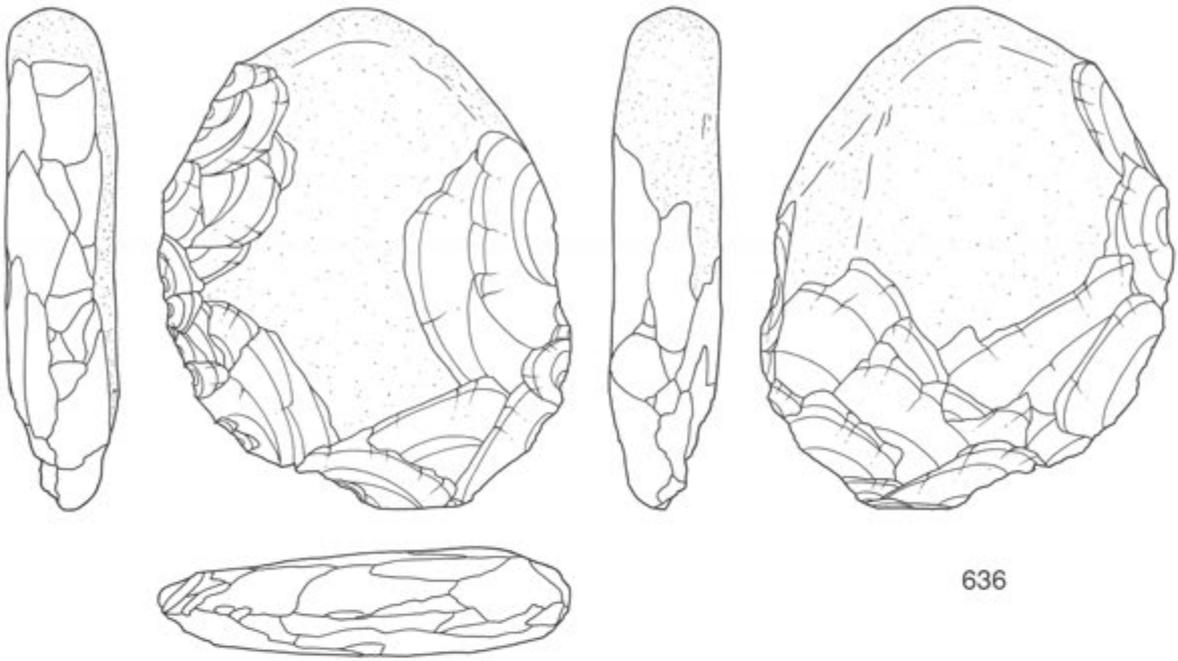
⑮軽石製品（第121・122図）

軽石はパンケース3箱分ほど取り上げてあるが、人工的なものの可能性が考えられたのは5点のみであった。これら5点すべてを図化した。

642は正面形態が楕円形を呈するもので、全長8.3cmである。表面中央部には凹みが見られる。643も正面形態が楕円形を呈するもので、全長8.2cmである。644は欠損しているが、円形状を呈すると思われる。縦断面は楕円形で厚みがある。645は三角柱状を呈するもので、全長13.4cmである。断面はきれいな三角形を呈する。646は楕円形を呈する。

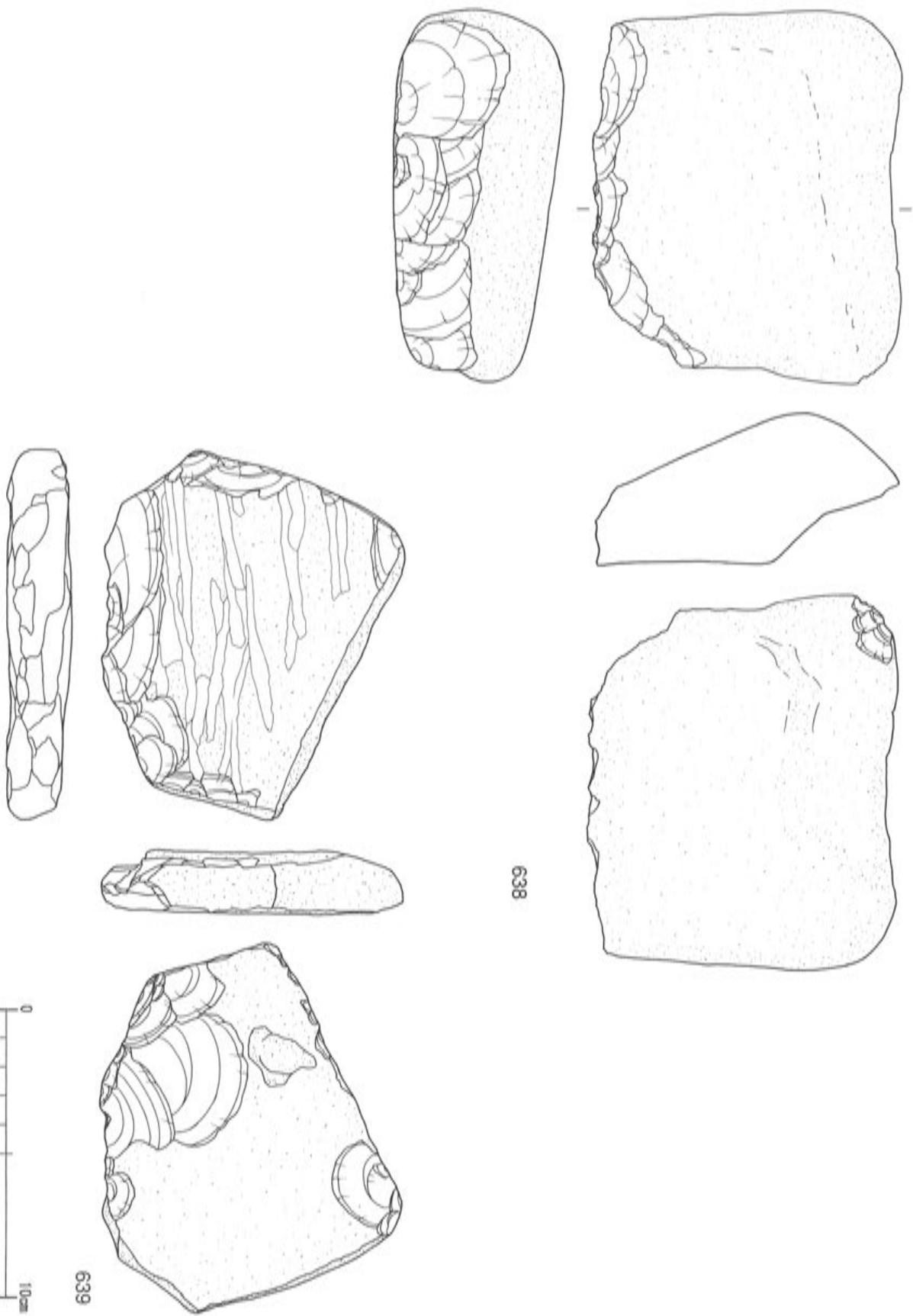
⑯石核（第123図）

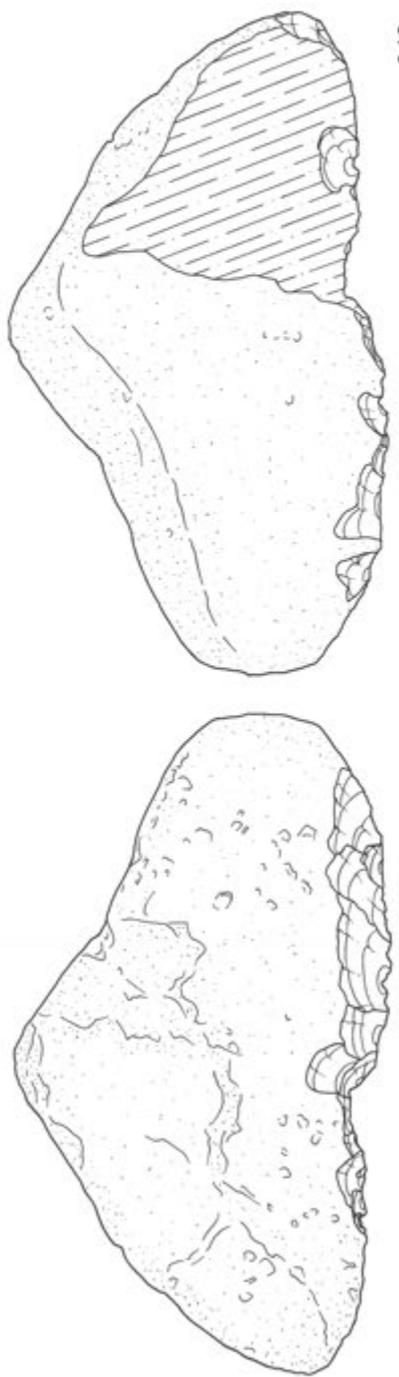
石核は3点を図化した。647は腰岳産黒曜石である。自然面を打面とし、打点転移を行いながら剥離を行っている。648は上牛鼻系黒曜石である。647と同様、自然面を打面とし、打点転移を行いながら剥離を行っている。649は安山岩製である。円磔を利用し、単一方向から打面を作り出しながら剥離を行っている。



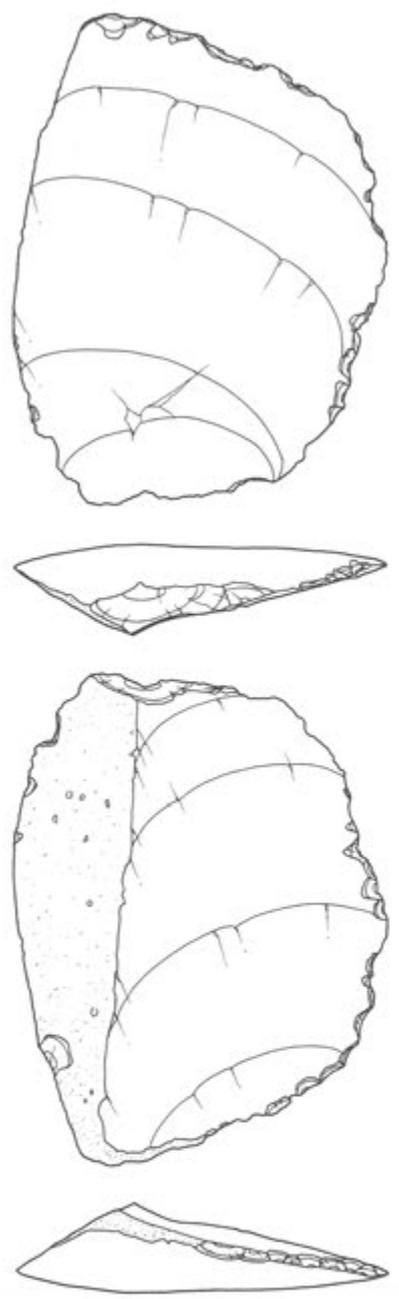
第118図 礫器 1

第119図 樂器 2





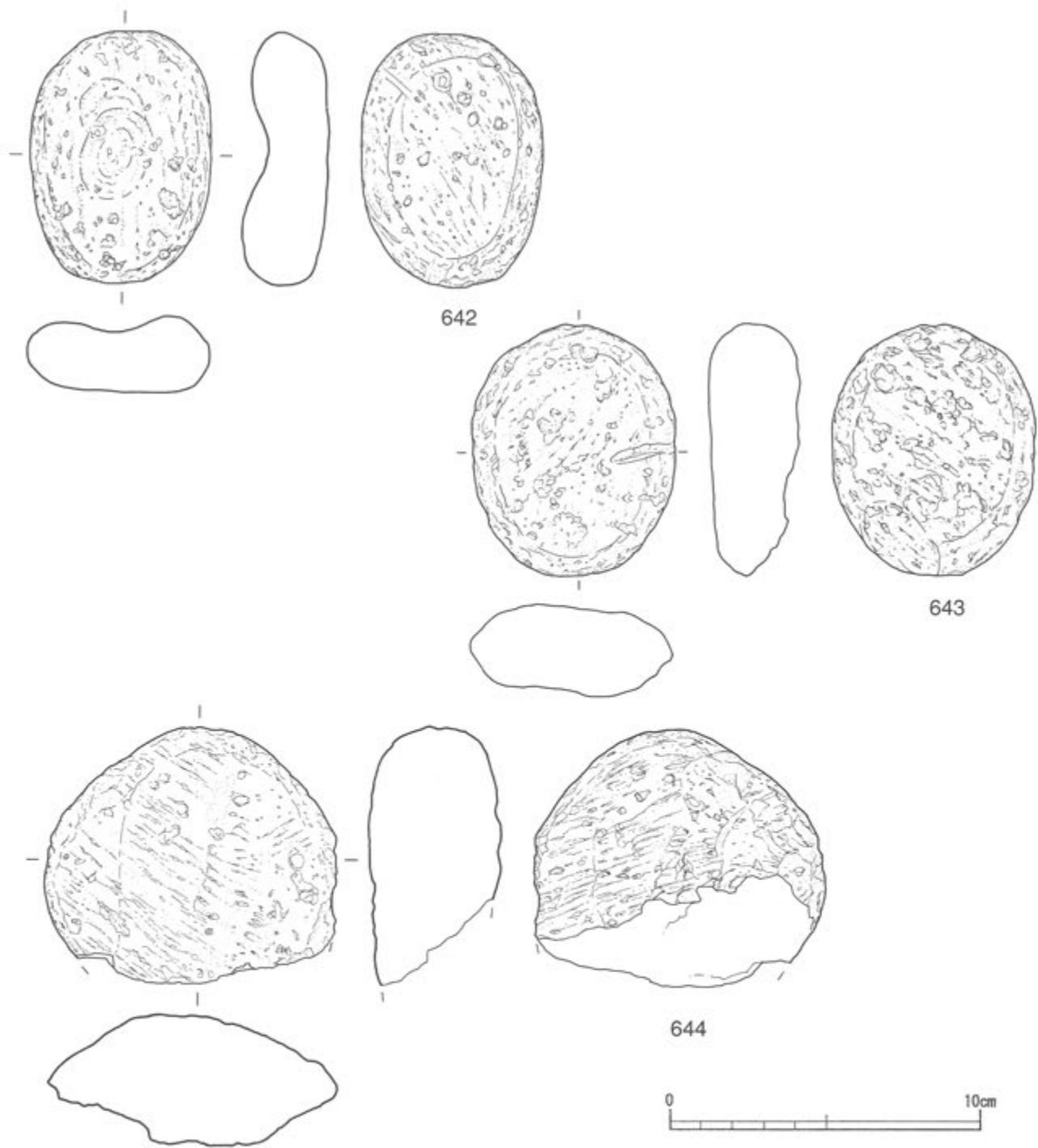
640



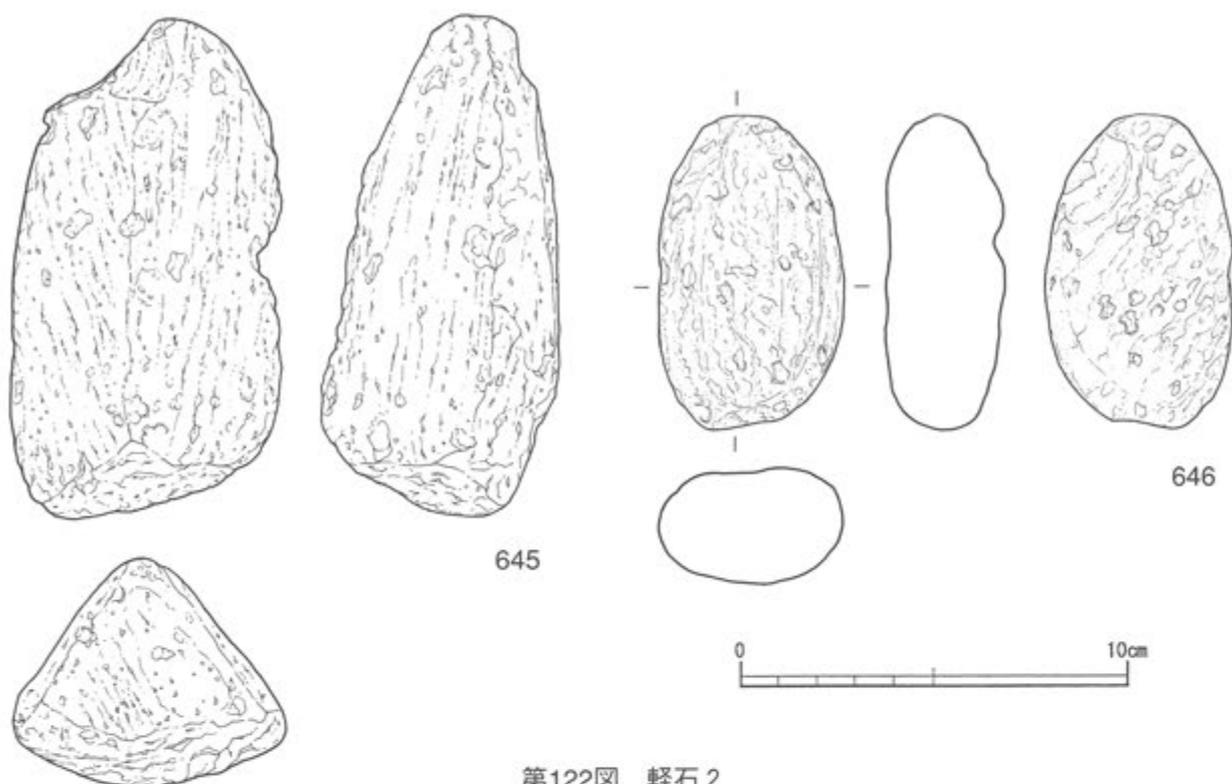
641



第120図 礫器 3



第121図 軽石 1

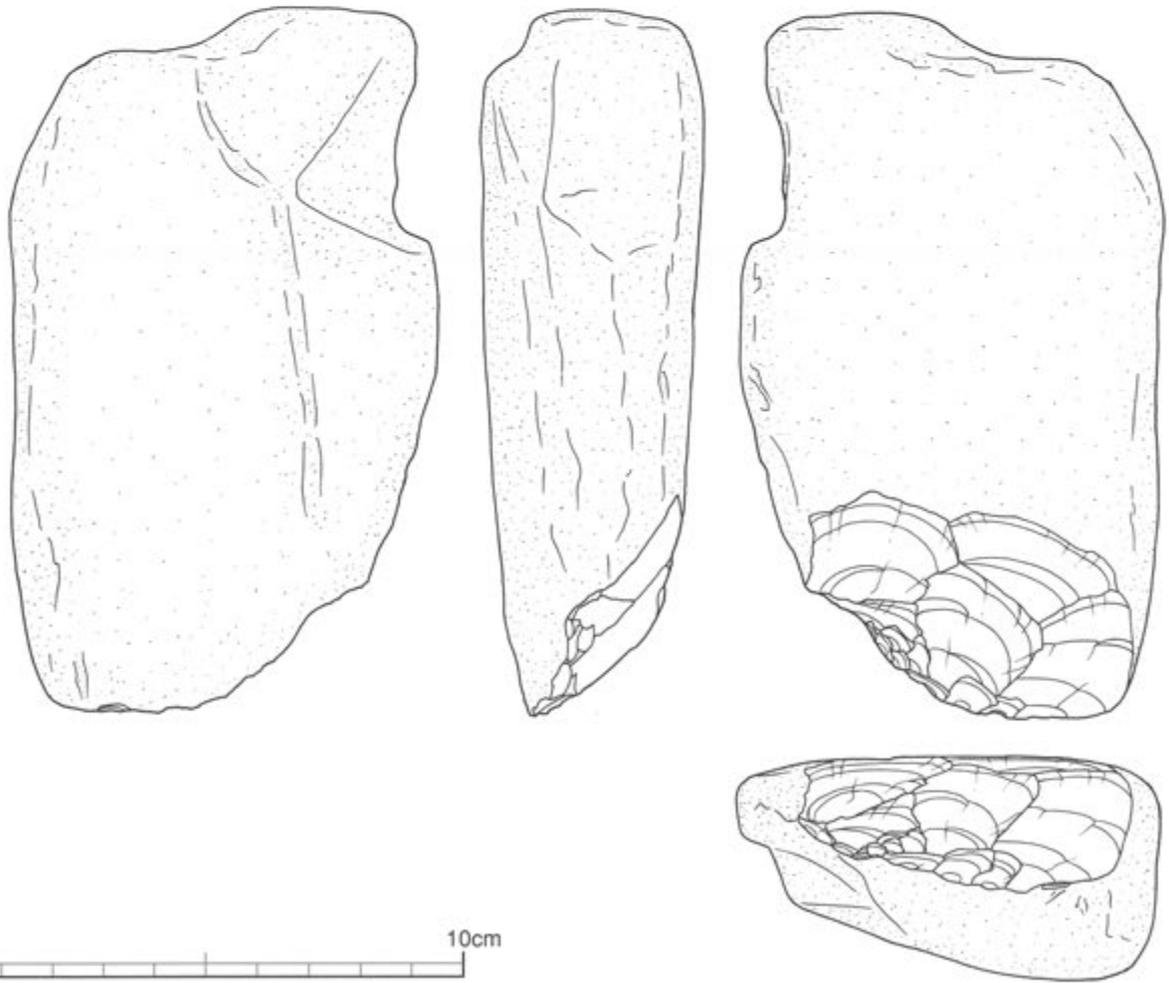
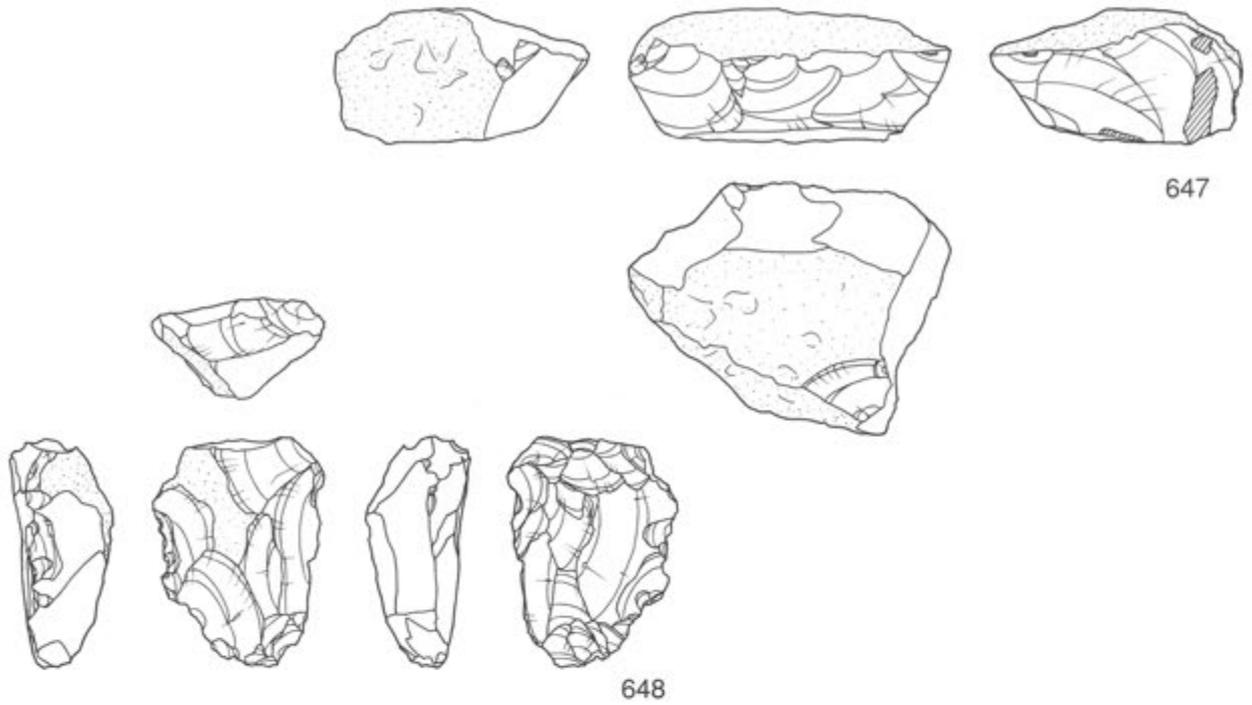


第122図 軽石 2

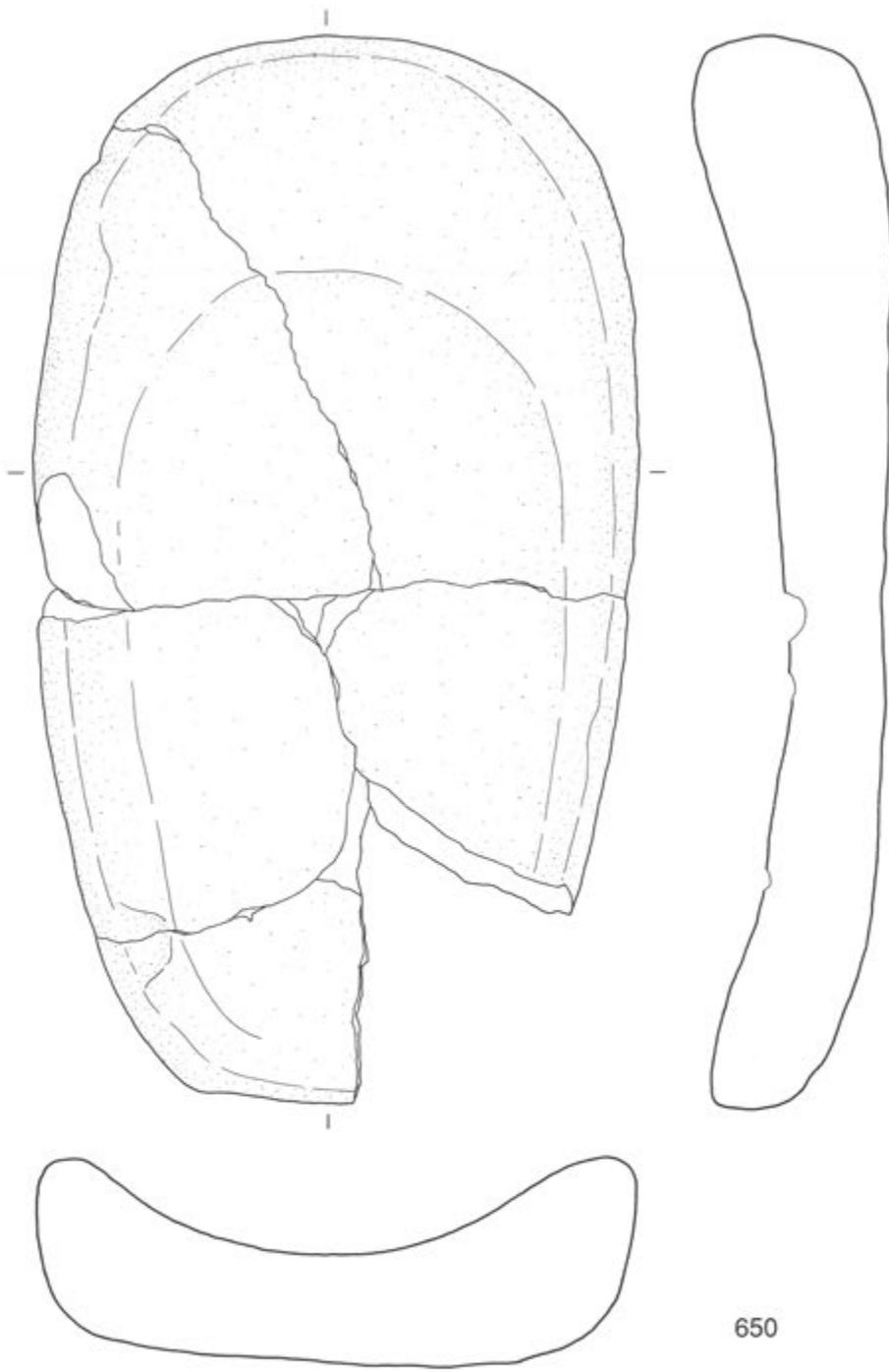
⑪石皿（第124～133図）

石皿は71点出土した。石材は安山岩製が68点で96%を占め、残りは砂岩製が3点で4%であった。これらは全長40cm近い大形のものから、破損した小片まで様々である。出土した71点中19点を図化した。

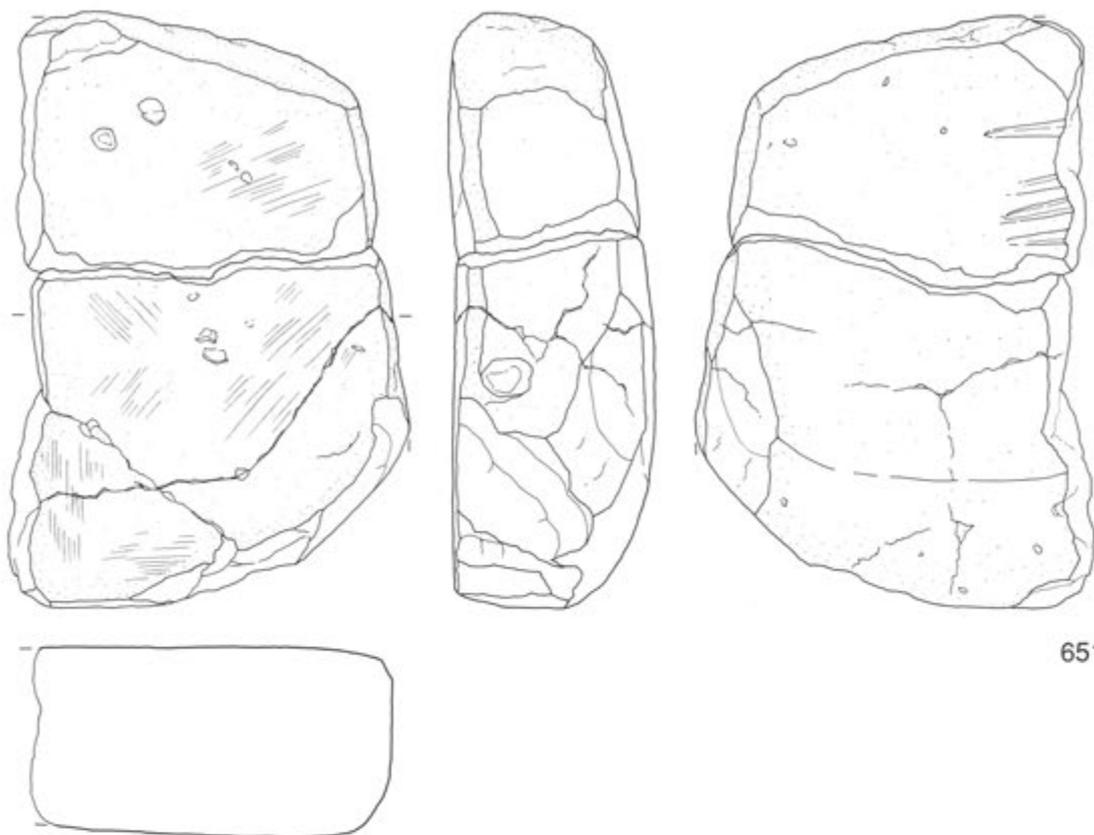
650は安山岩製である。5つの破片が接合したもので、1ヶ所欠損しているがほぼ完形となる。楕円形を呈し、全長17.3cmである。使用頻度が激しく、中央部は深く凹む。651も細かく破損したものであるが、2点が接合した。磨面は平坦である。652は表面が強く磨られており、断面形態が台形状となる。653・654は磨面が平坦なもので、654は2点が接合している。655は両面に磨面が認められる。656は両面に磨面が認められ、中央部がやや凹む。657は全長31.8cmの完形品である。磨面はやや凹む。658も完形品で、全長31.5cmである。表面を磨面にしており、磨りによって平坦面が形成されている。659は表面に弱い磨りが認められる。660・661は破損により小片となっているが、表面に強い磨りが行われており、磨面が傾斜している。661も表面に磨りが認められ、磨面が傾斜している。662・663は磨面が平坦である。664は砂岩製で円礫を利用しており、表面の磨面には敲打痕も認められる。665は表面に平坦な磨面が形成されている。666は破損しているが、残存部の磨面の範囲が狭い。667は砂岩製で、表面のみでなく、側面にも磨りが認められる。668も砂岩製で、表裏側面のあらゆるところに磨りと敲打痕が認められ、石皿としてだけでなく、台石としても利用されていたことが伺える。



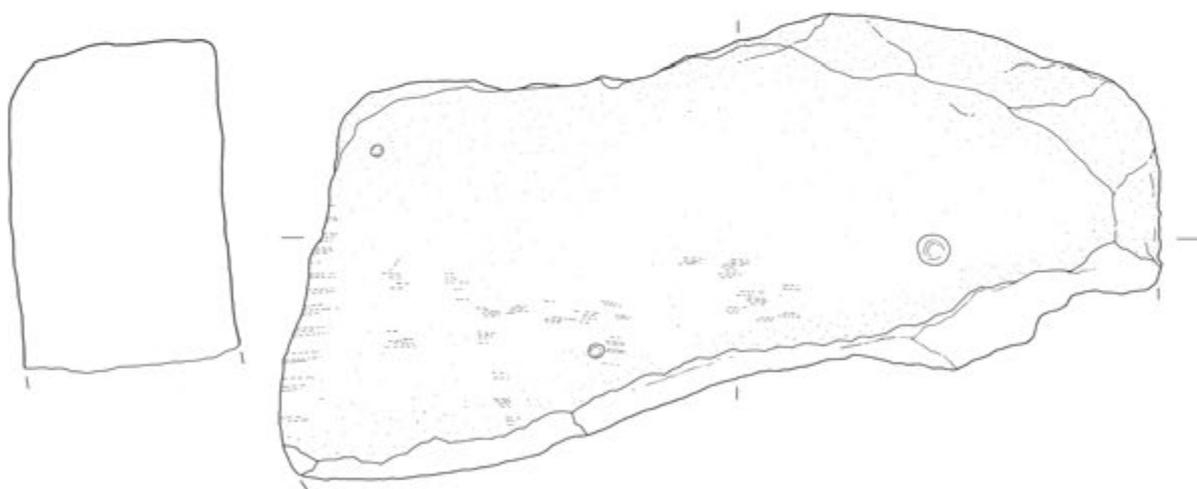
第123图 石核



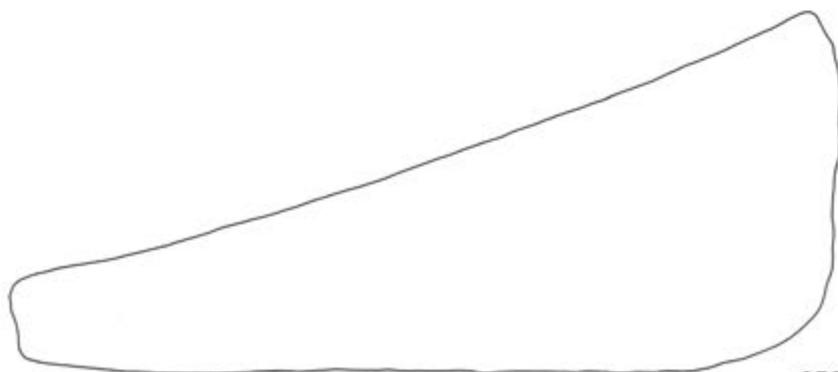
第124図 石皿 1



651

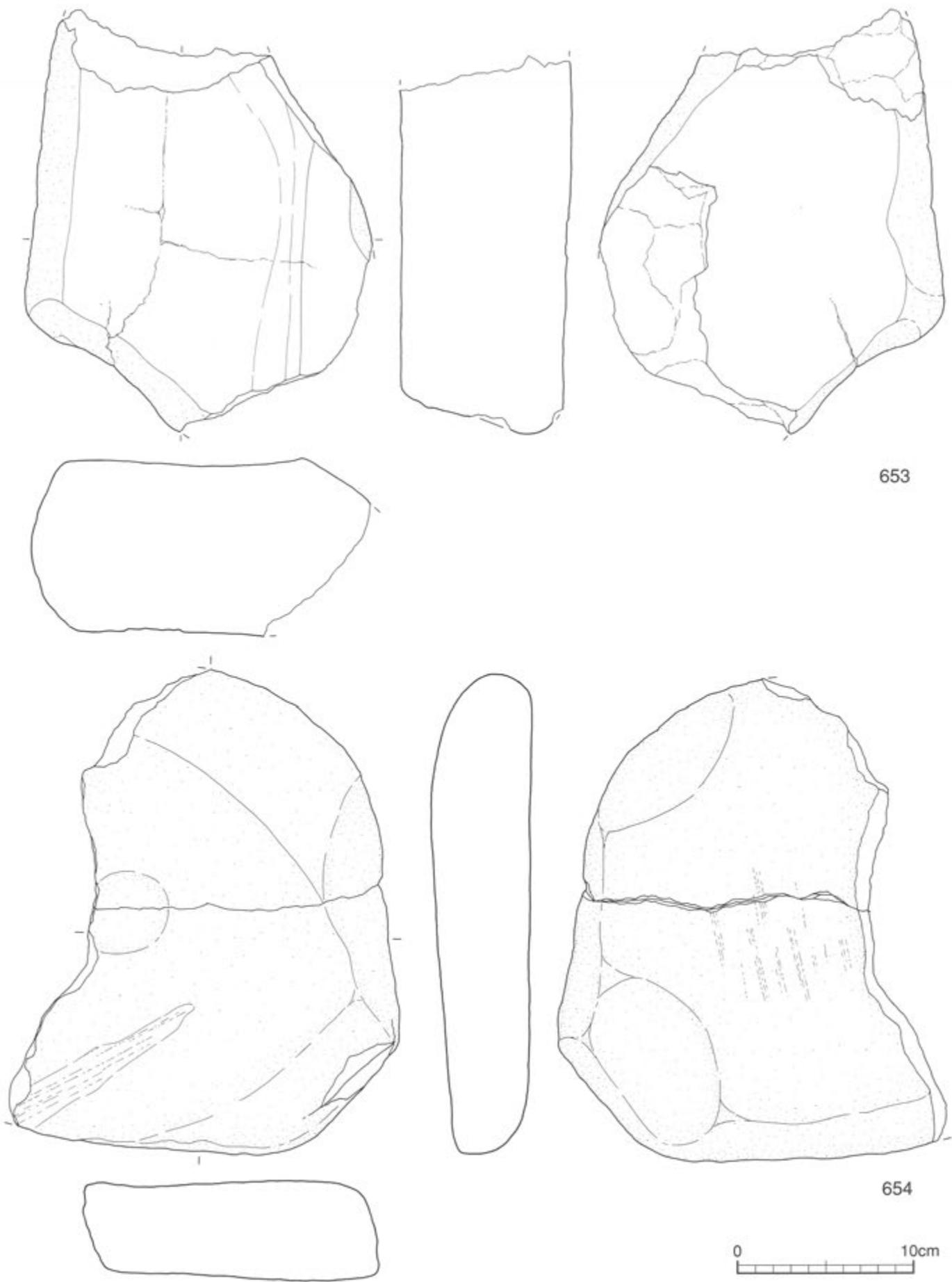


0 10cm

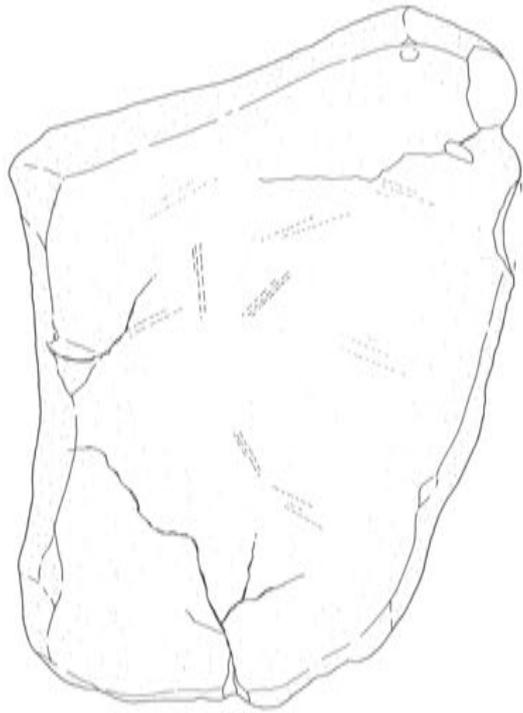
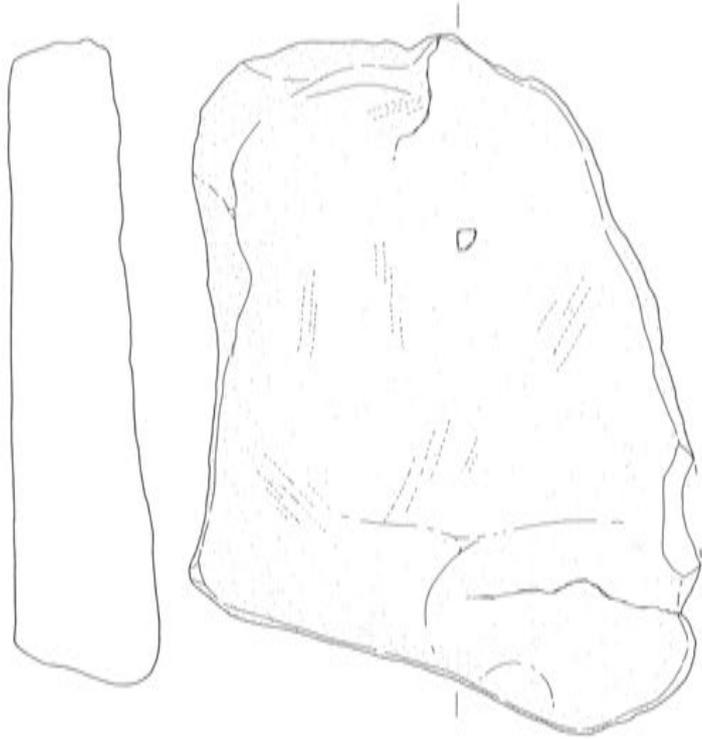


652

第125図 石皿 2



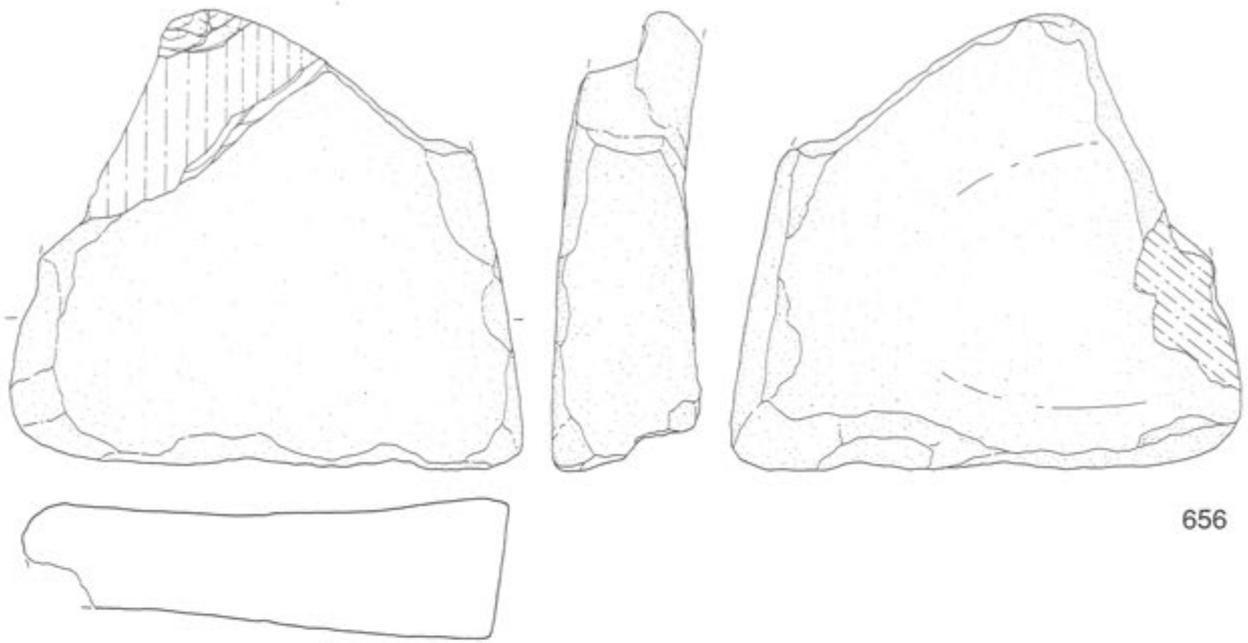
第126図 石皿 3



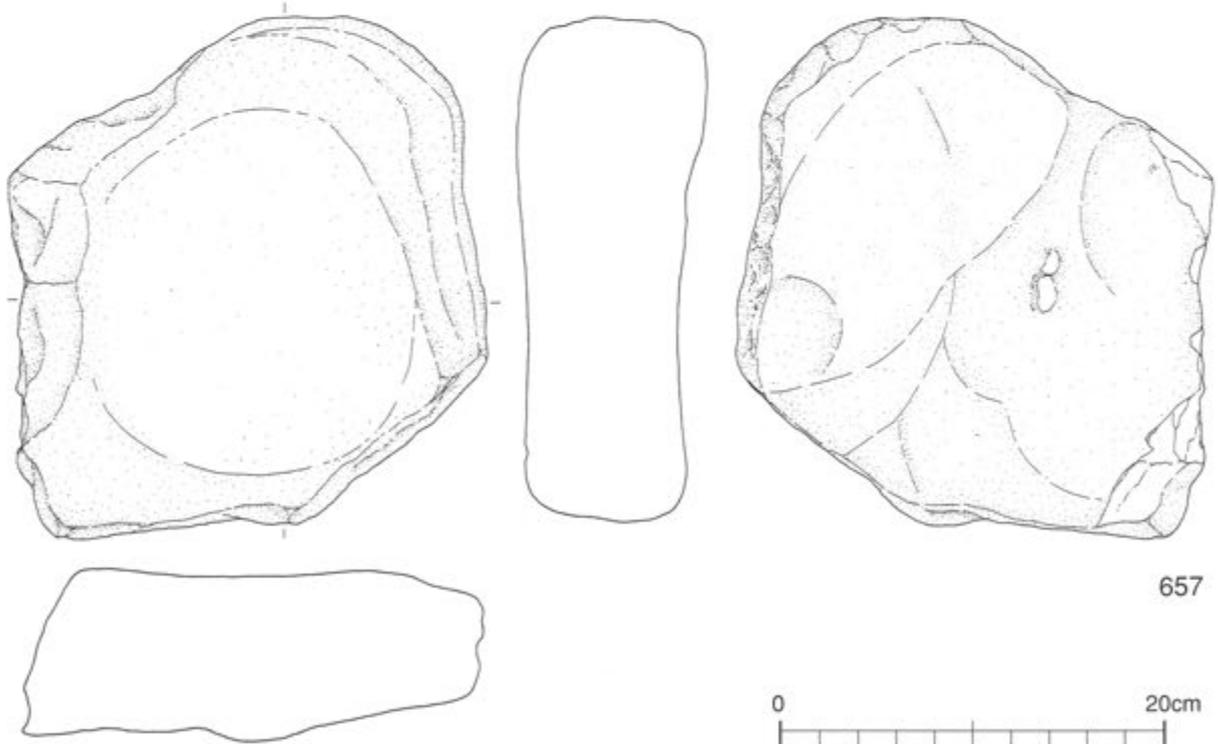
655



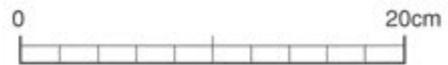
第127图 石■4



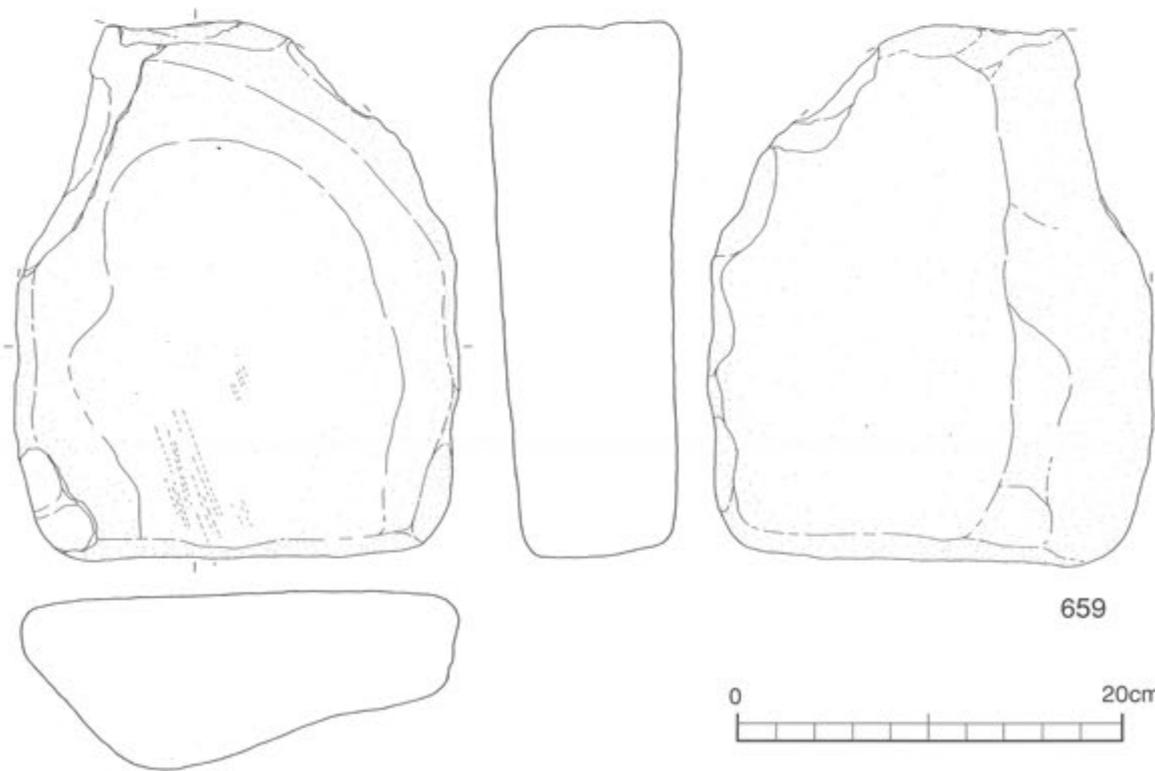
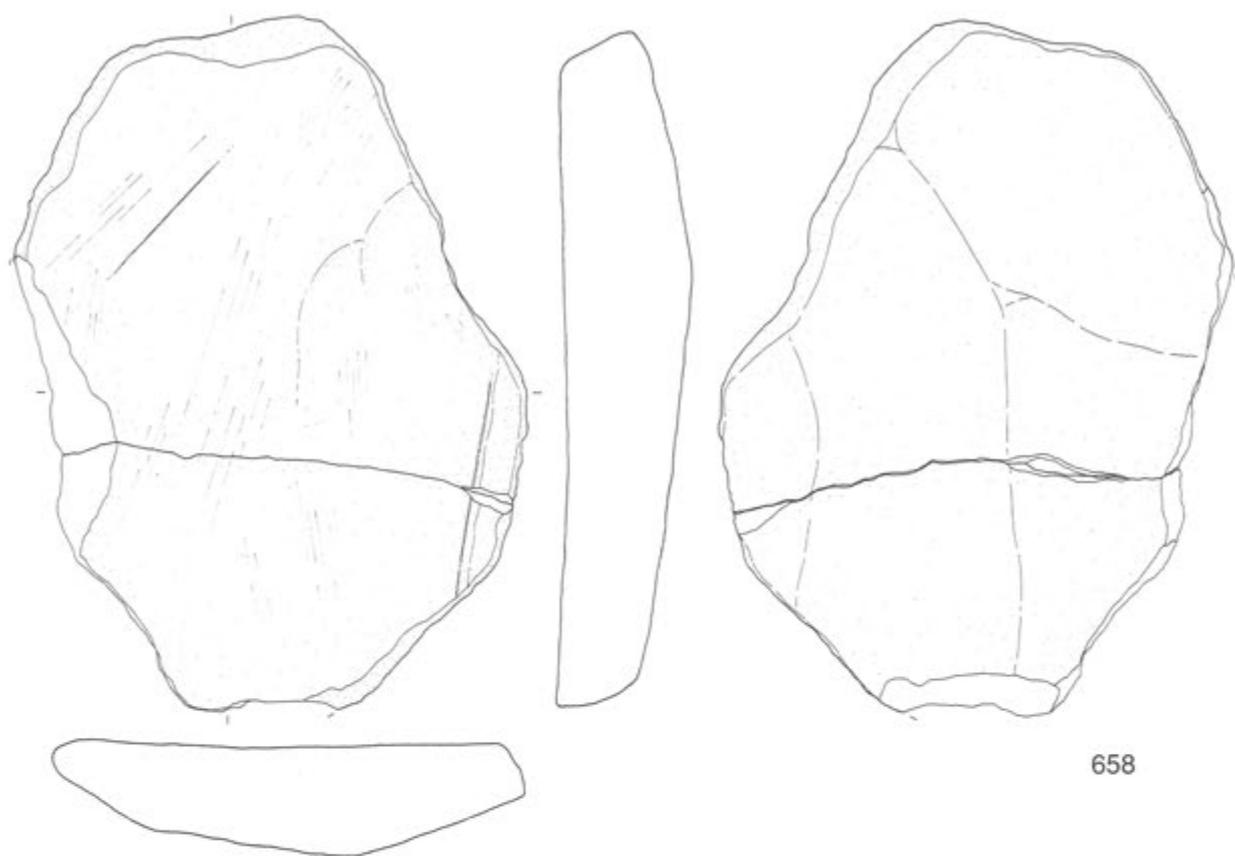
656



657



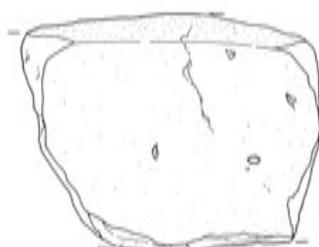
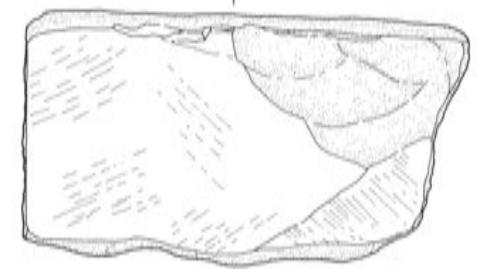
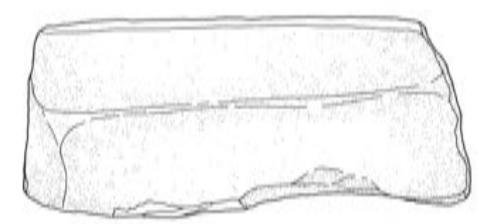
第128図 石皿 5



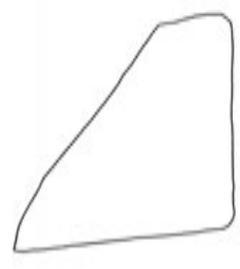
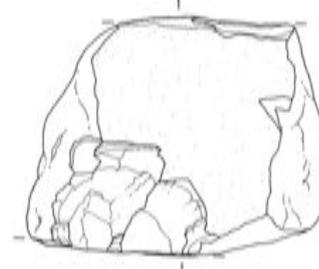
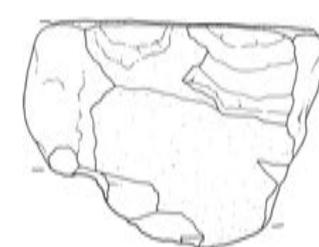
第129図 石皿 6



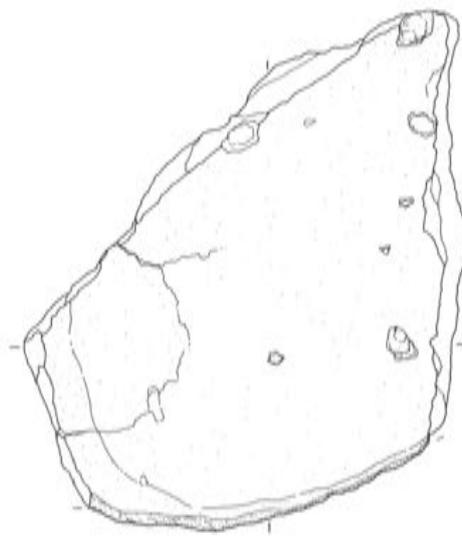
661



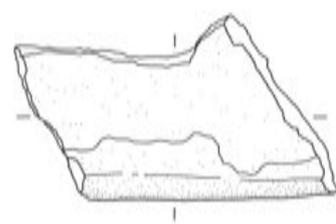
660



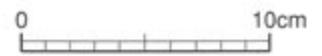
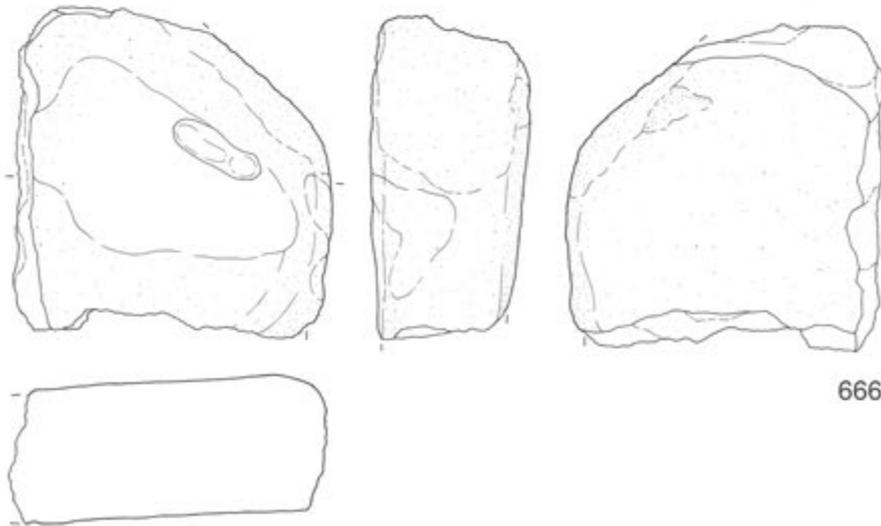
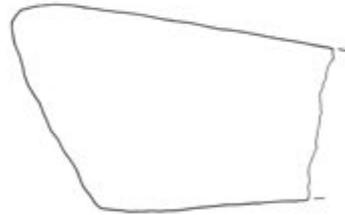
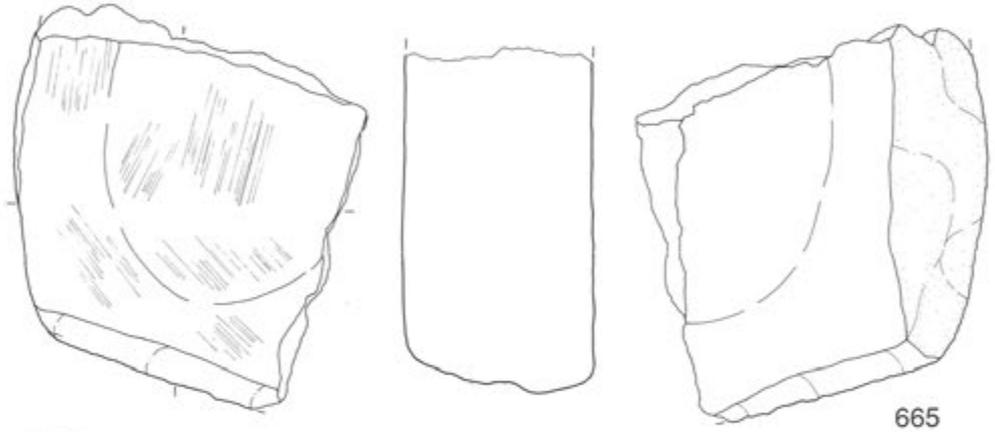
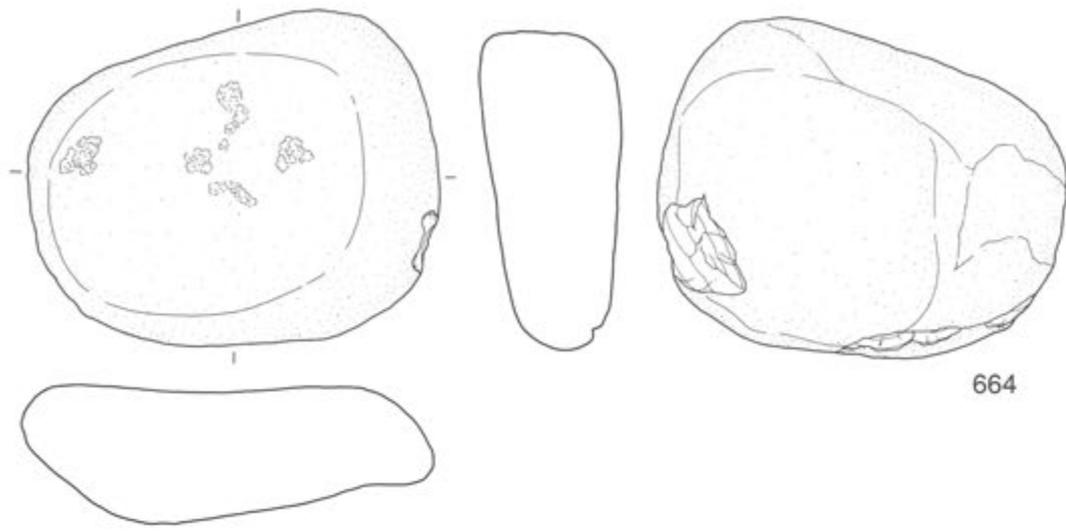
662



663



第130图 石皿7



第131図 石皿 8



第132図 石皿9



668



第133図 石皿10

⑱台皿（第134・135図）

台石は8点出土した。石材の内訳は安山岩製が6点で全体の74%を占める。その他に凝灰岩製と頁岩製が各1点ずつある。8点中5点を図化した。

669は安山岩製である。破損のため大部分が欠損しているが、表面に敲打痕が認められる。670は凝灰岩製で、丸い河原石を利用したものである。表面側縁部と背面に敲打痕が認められる。671は安山岩製で表裏面に敲打痕が認められる。表面は特に中央部に敲打が集中している。672は表裏面及び左側面に敲打痕が認められる。673は安山岩製で不定形の河原石を利用したものである。平坦部分を作業面としており、中央部あたりに数カ所の敲打痕が認められるほか、側面にも小さな敲打痕が認められる。

第2節 弥生時代

本遺跡からは、弥生時代の遺構は確認できなかった。遺物も出土点数18点とわずかである。器種的には突帯文土器と弥生前期の土器が出土している。しかし、いちき串木野市と日置市にまたがる市ノ原遺跡でも、突帯文土器や弥生前期の壺形土器など同様の遺物が出土しており、このあたりに弥生早期～前期にかけての遺跡が点在している可能性がある。

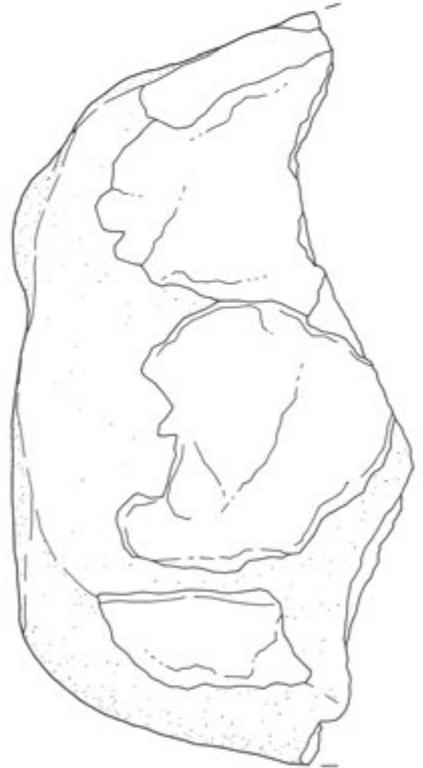
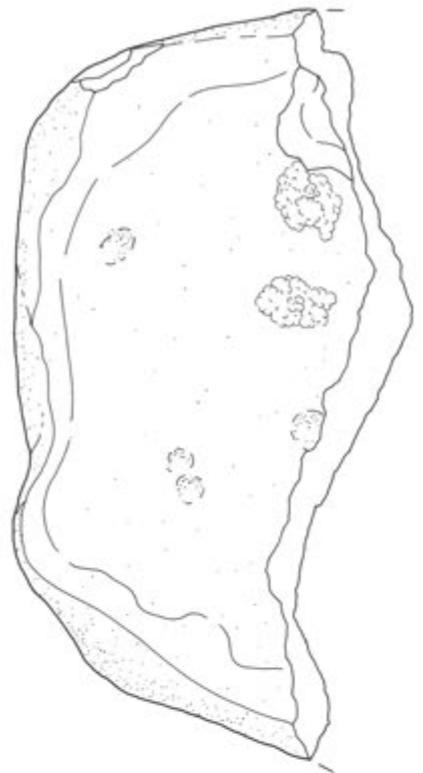
2-1：弥生時代の出土遺物

①弥生時代の土器（第136・137図）

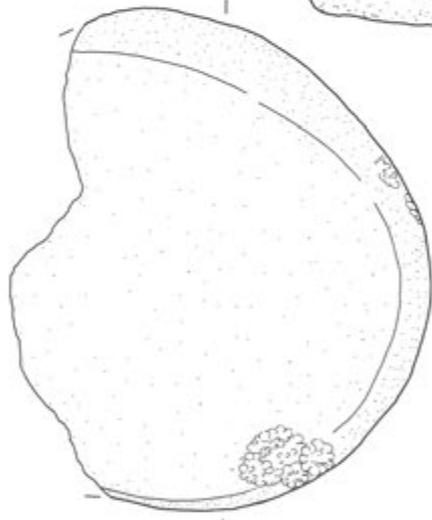
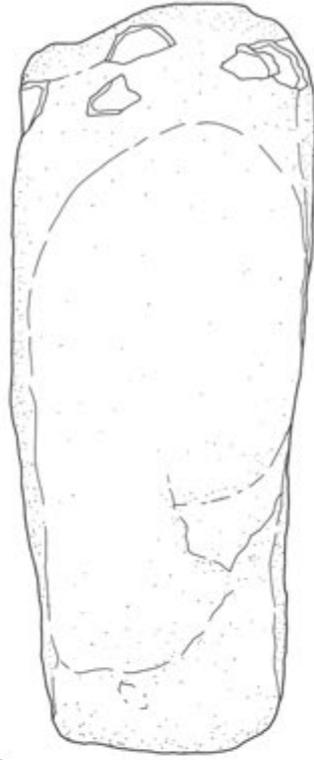
出土した土器18点のうち、11点を図化した。674～684は突帯文土器の甕の口縁部である。674～676は甕の口縁部で、674・676は口縁端部からやや下がったところに突帯を張り巡らせる。675は口縁端部に接して突帯が貼付されたものである。674は外面が板状工具による調整が施されており、内面は貝殻条痕と思われる調整のうえから丁寧なナデが行われている。また突帯を貼り付ける際についてと思われる指頭圧痕が認められる。675・676は状態があまり良くないものの、基本的にはナデ調整と思われる。675の内面はヘラナデと思われる工具幅の痕跡が弱く認められる。677は甕の口縁部付近と思われる。内外面ともナデ調整で、内面には突帯を貼り付ける際についてと思われる指頭圧痕が認められる。

678～680は甕の胴部屈曲部付近と思われる。678・679は、外面は板状工具による調整が行われており、678は内面にも板状工具によるものと思われる条線が見られる。679の内面はナデ調整であり、突帯を貼り付ける際についてと思われる指頭圧痕が認められる。680は欠損状況から678・679と同様に胴部屈曲部付近と考えられるが、内面の剥落が著しく、断定できない。681は入来I式土器である。口縁部は短く、ほぼ平坦で逆L字状を呈する。端部が凹む。胴部はわずかに張りをもつ。外面は細かなハケ目調整のあと丁寧なナデが行われており、全体的にススが付着している。内面はナデ調整である。内外面ともに、成形の際についてと思われる指頭圧痕が認められる。

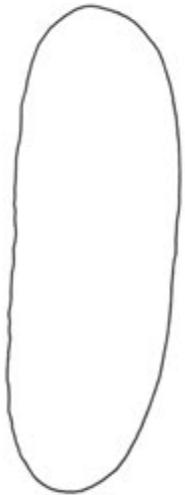
682～684は壺形土器である。682は壺の頸部～胴部で、大きく張った胴部からやや内傾して頸部が立ち上がる形態をしている。外面は丹塗りのあと頸部は斜位のミガキ、胴部は横位のミガキが施されている。内面はナデ調整である。弥生前期の壺である。683・684は壺の底部で、683は底径が5cm弱と小さく、微妙に凹んでいる。底部から胴部に向けて立ち上がらずに開いて行く形態をしている。



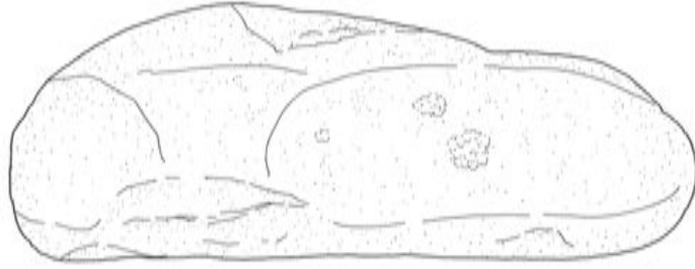
669



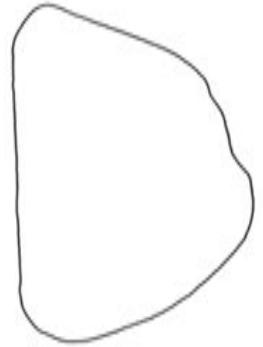
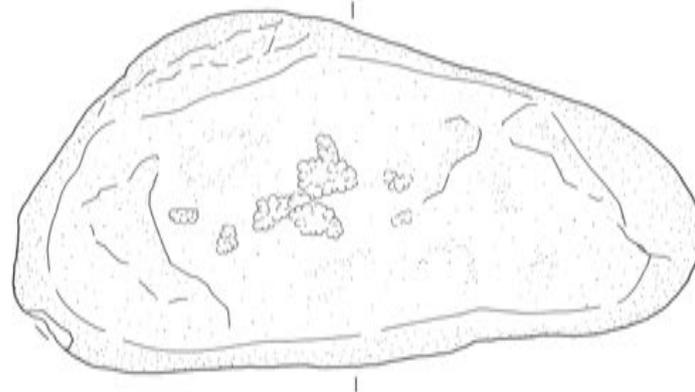
670



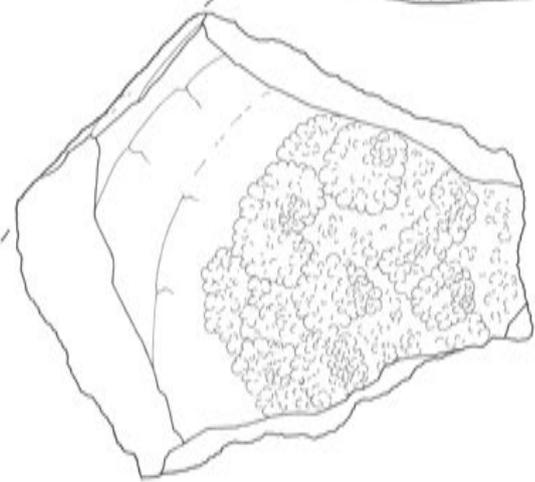
第134図 台石1



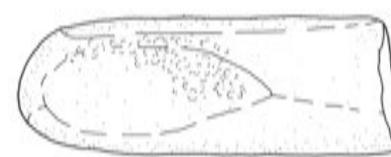
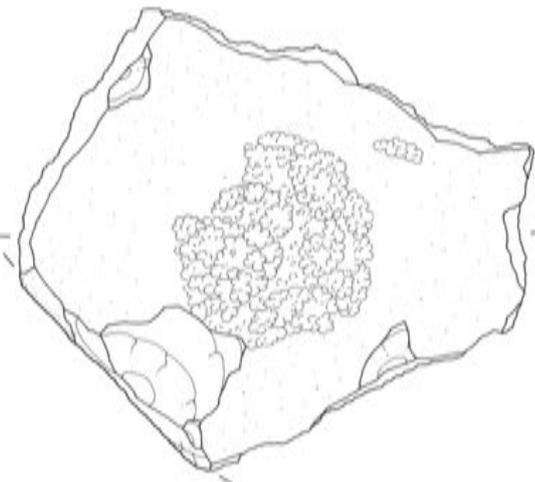
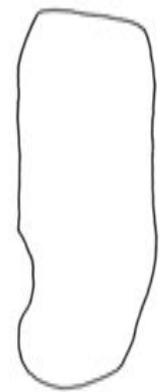
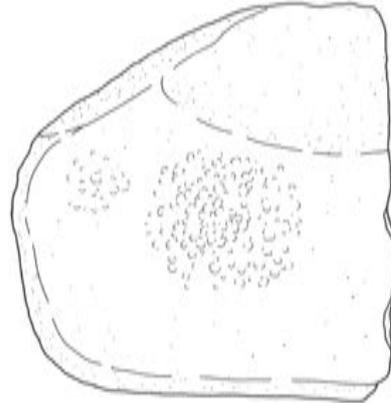
673



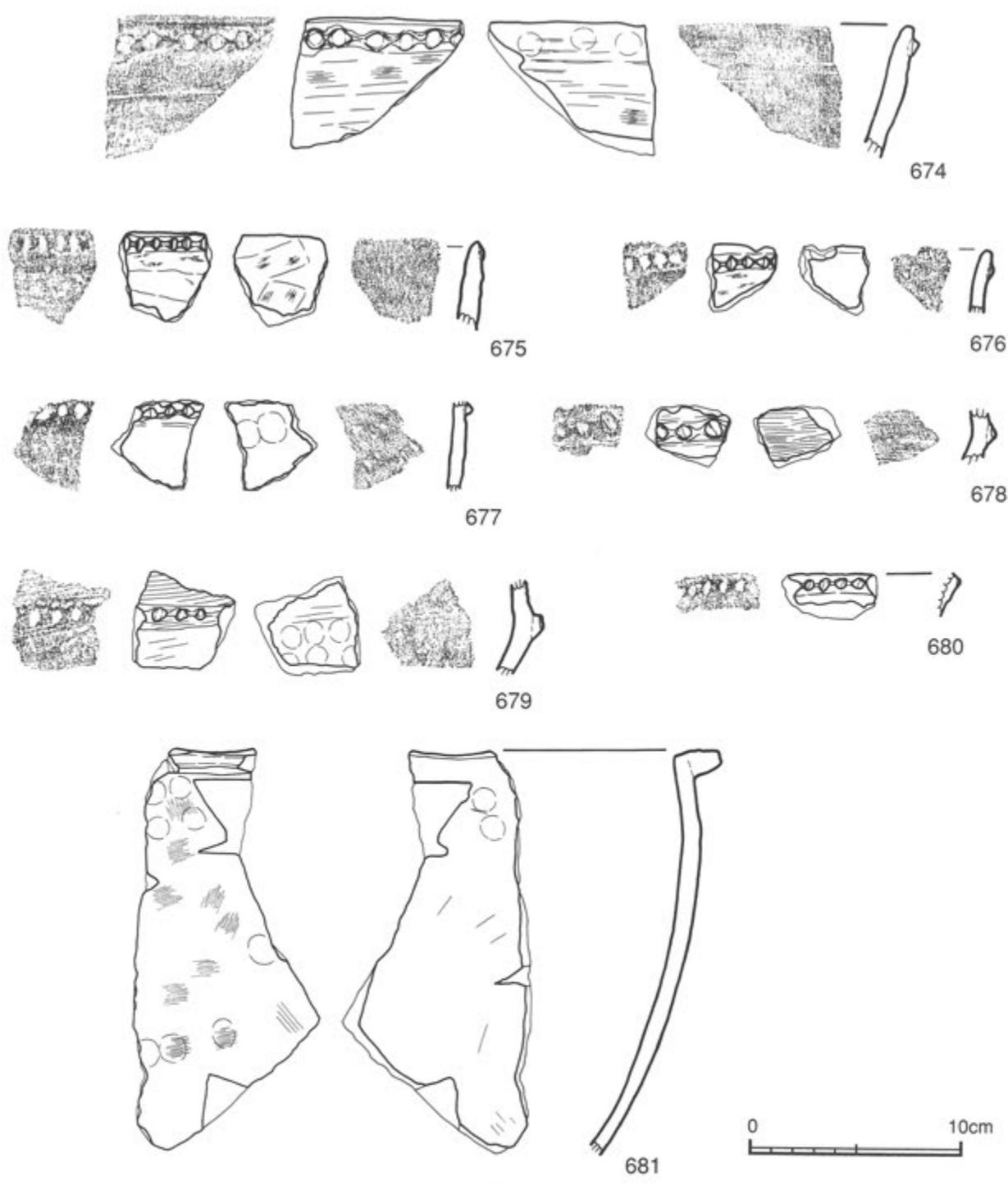
672



671

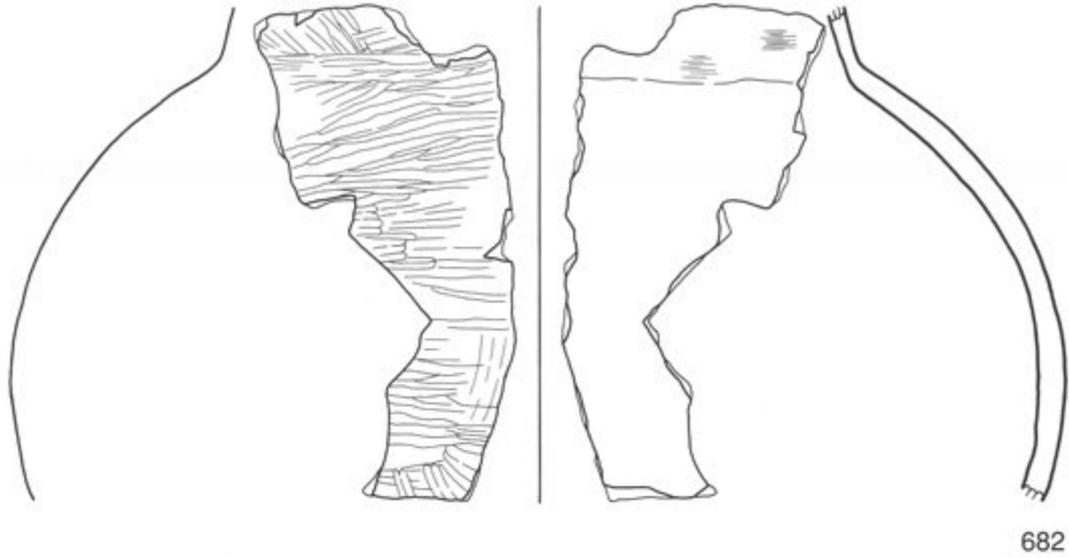


第135図 台石2



第136図 弥生土器1

684は底部が直線的に立ち上がったあと開くもので、高台状を呈している。683は外面が丁寧なナデ調整で、内面もナデ調整である。底部からやや立ち上がったあたりに指頭圧痕が認められる。684は外面調整は不明であるが、内面はナデ調整と思われる。



第137図 弥生土器 2

表 4 縄文土器観察表 1

種別	報告	出土	分類	部位	器型	器型	構成	色調	色調	取上	石	石	石	石	石
番号	番号	地区			(外蓋)	(内蓋)		(外蓋)	(内蓋)	番号	表	裏	口	底	
22	C-22-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	赤	1828	○					
23	D-21-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	7134	○					
24	C-21-75	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	灰胎	陶-灰胎	12873	○					
25	C-21-1	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶	陶-灰胎	4733	○					
26	C-21-1	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶	陶-灰胎	4733	○					
27	C-21-1	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶	陶-灰胎	4733	○					
28	B-29-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶	陶-灰胎	4791	○					
29	B-29-1	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶	陶-灰胎	4791	○					
30	B-29-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶	陶-灰胎	4791	○					
31	C-21-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶	陶-灰胎	10177	○					
32	C-25-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	9282	○					
33	C-25-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	9282	○					
34	B-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12761	○					
35	D-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	灰胎	4093	○					
36	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	1428	○					
37	C-21-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	4734	○					
38	C-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	4282	○					
39	C-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	4103	○					
40	C-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	3635	○					
41	C-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	灰胎	陶-灰胎	3291	○					
42	C-21-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶	陶-灰胎	12912	○					
43	B-29-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	4319	○					
44	C-21-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶	陶-灰胎	12796	○					
45	C-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶	陶-灰胎	13284	○					
46	B-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	4312	○					
47	B-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	4396	○					
48	D-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	13998	○					
49	D-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	4641	○					
50	C-21-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	4175	○					
51	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	13297	○					
52	D-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	4175	○					
53	D-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	4175	○					
54	C-21-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	13888	○					
55	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	12744	○					
56	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	13298	○					
57	D-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶-灰胎	4175	○					
58	C-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13302	○					
59	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
60	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
61	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
62	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
63	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
64	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
65	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
66	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
67	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
68	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
69	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
70	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
71	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
72	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
73	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
74	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
75	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
76	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
77	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
78	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
79	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
80	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
81	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
82	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
83	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
84	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
85	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
86	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
87	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
88	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
89	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
90	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
91	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
92	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
93	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
94	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
95	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
96	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
97	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
98	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					
99	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	12744	○					
100	F-26-9	縄文	118	口縁部	975/97	赤紅	陶-灰胎	陶	13298	○					

付編1 旧石器時代の調査

本編は、旧石器時代の調査成果をまとめたものである。通常ならば一番最初に掲載すべきであるが、以下の理由から本報告という形を採用せず、付編という形で掲載することにしたものである。

第1節 調査時における旧石器時代遺物の出土状況

V層の調査は、IV層調査終了時点で地域全体を対象として行った。調査は、10数本の長いトレンチを設定して順次行い、B～H-22～33区から遺物の出土がみられた。しかし、層の状態は明確なチョコ層（V層）の範疇に含めることが躊躇されるほど不安定で不明瞭なものであり、確実に“生き”ている層とはとても言えない状況であった。このV層出土の遺物は、B～H-22～33区はほぼ全体に散布している状況が見て取れるものの、C-25区に割合に集中する箇所が見られるほか、B～G-29～32区に緩やかなまとまりが見られる。遺物はフレイクやチップ、摩耗した小さめの原石が出土している。さらに下層からも黒曜石等が出土しており、これらは現場での取り上げでVI～VIII層とした。VI層はF-32区あたりにややまとまりが見られる。VIII層はF・G-20・21区に集中性が見られ、VIII層はF・G-18～23区で出土が見られた。しかし、VI・VIII層は砂礫層であり、八房川が暴れたことによる層の堆積であると考えられることから、この中に含まれる遺物も生産・使用・遺棄という意味での原位置とは考えられなかった。また旧石器時代該当の遺物である三稜尖頭器がIII層から出土するなど、地形の特徴からか、層位的に安定した出土状況を示さないものもあった。

このような理由から、調査段階においては確実な旧石器時代の包含層は存在しないとの認識であった。しかし、整理・報告書作成作業を行う段階で確実に旧石器時代の遺物が出土していることが判明したことから、参考資料との位置づけではあるものの掲載することとした。

第2節 旧石器時代該当の出土遺物

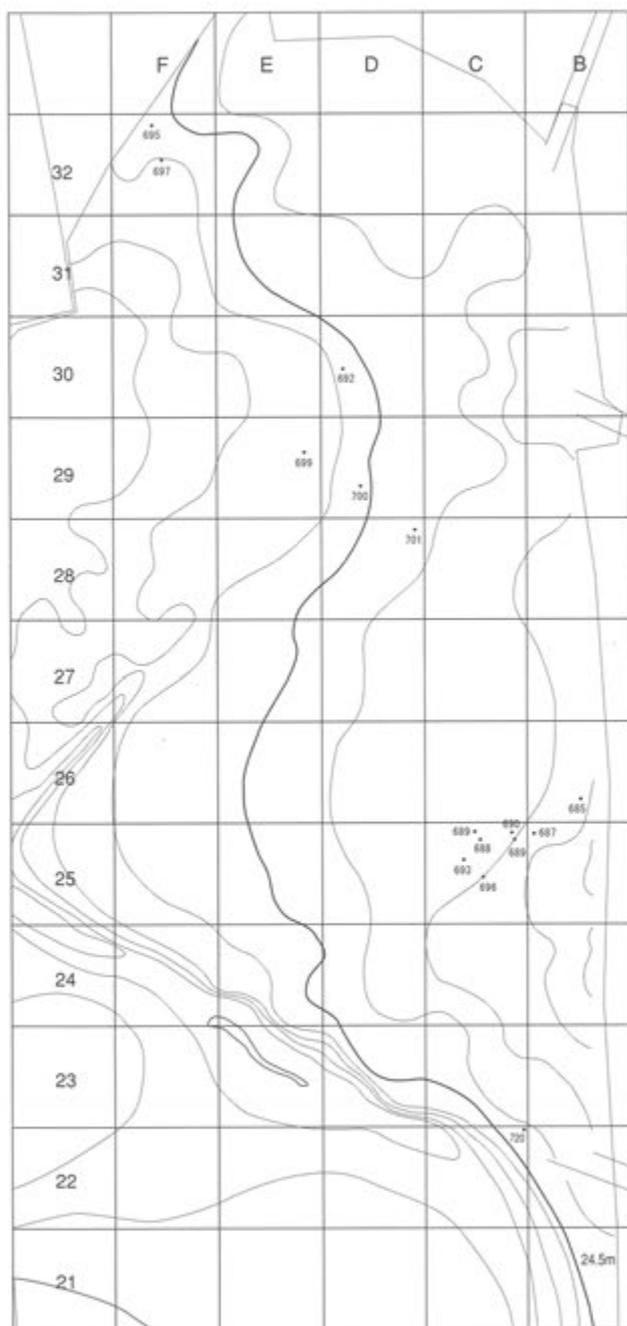
旧石器時代に該当すると思われる遺物のうち、18点を図化した。内訳はナイフ形石器8点、台形石器6点、楔形石器1点、石槍1点、三稜尖頭器2点である。

①ナイフ形石器（第140図）

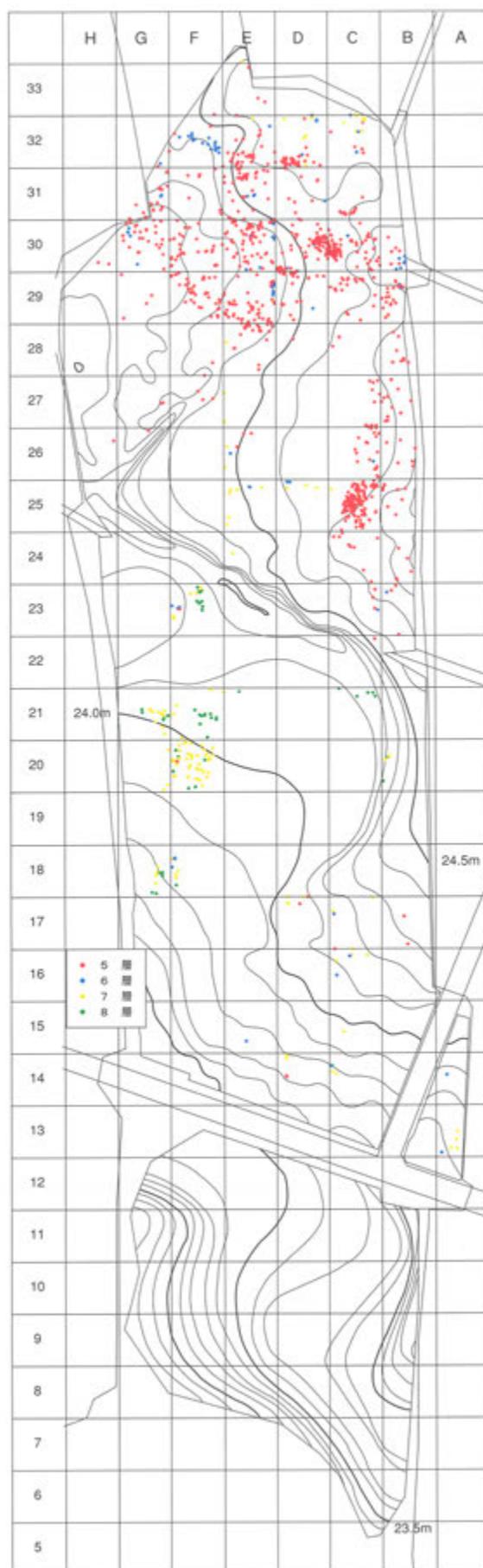
685～692はナイフ形石器である。8点のうちIII層から1点、IV層から2点、V層から5点出土している。692を除き、いずれも上牛鼻産系の黒曜石を用いている。685～691はいわゆる狸谷型と呼ばれるタイプと思われる。いずれも比較的厚みのある幅広の剥片を素材にしている。側縁部にはブラントイングを施して二次加工を行っている。剥片の鋭利な側縁を刃部として利用している。692は切出し形のナイフ形石器と思われる。霧島系の桑ノ木津留産である。剥片の末端部を刃部として、切出し型を呈している。

②台形石器（第141図）

693～698は台形石器である。6点のうちI層から1点、III層から3点、IV層から1点、V層から1点出土している。6点すべて上牛鼻産系の黒曜石を用いている。693・695・697は幅広で厚みのあ



138図 旧石器遺物分布図



第139図 層別フレーク・チップ分布図

る剥片を用いており、側縁の鋭利な部分を刃部としている。694・666・698は縦長で比較的薄い剥片を用いている。

③楔形石器 (第141図)

699は楔形石器である。上牛鼻産系産黒曜石製で、Ⅲ層から出土している。

④石槍 (第141図)

701は石槍である。安山岩製で、Ⅳ層から出土した。基部を欠損している。

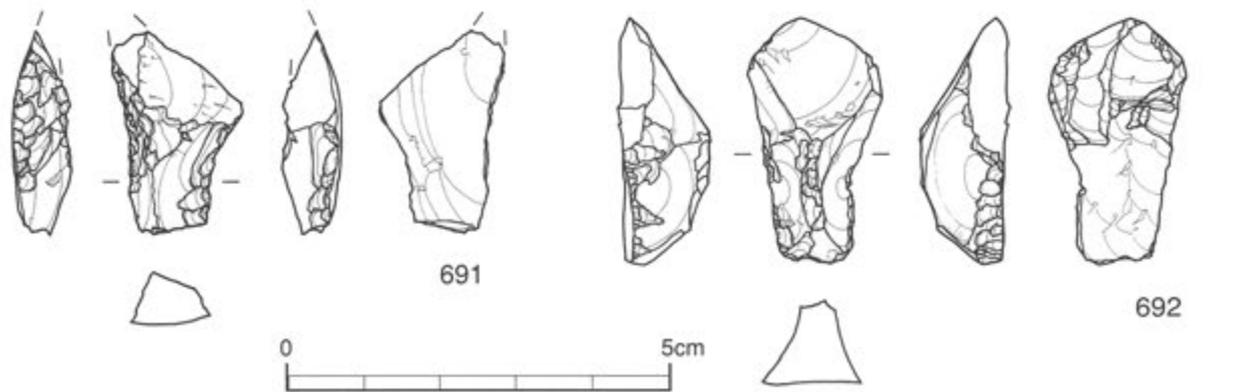
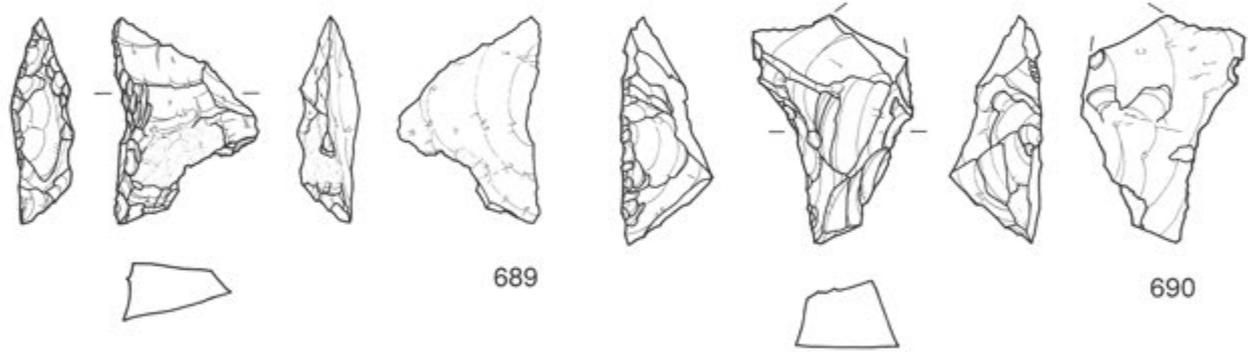
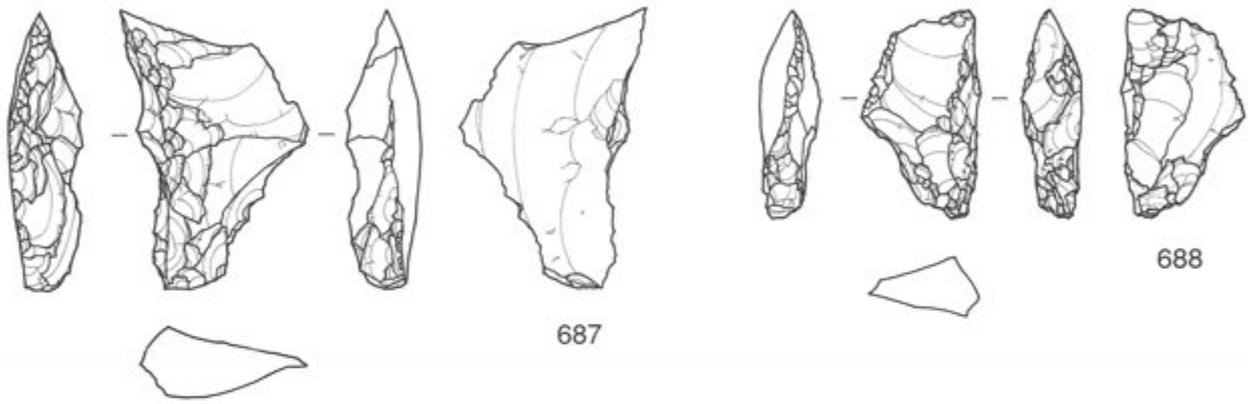
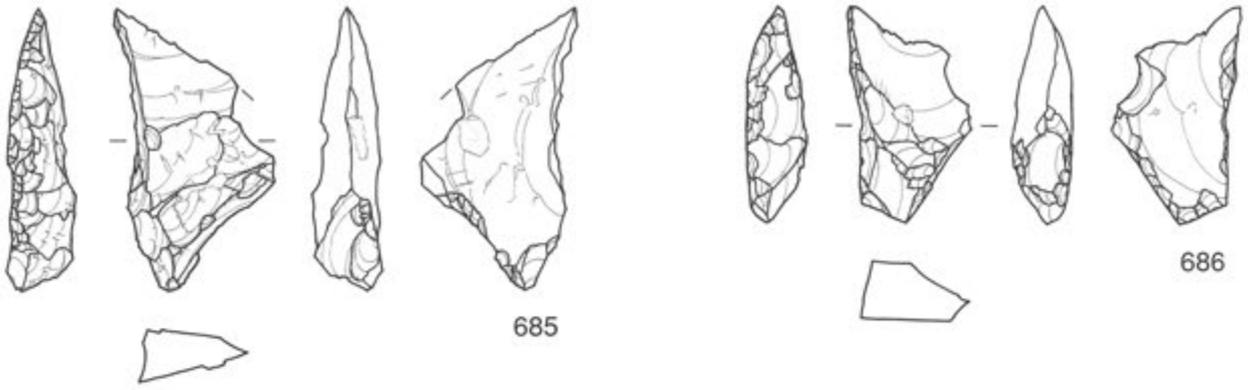
⑤三稜尖頭器 (第141図)

700・702は三稜尖頭器である。700は安山岩製でⅣ層から、702は三船産黒曜石製でⅢ層から出土した。700・702とも側縁に二次加工が認められる。702は刃部を欠損している。

表5 縄文石器観察表

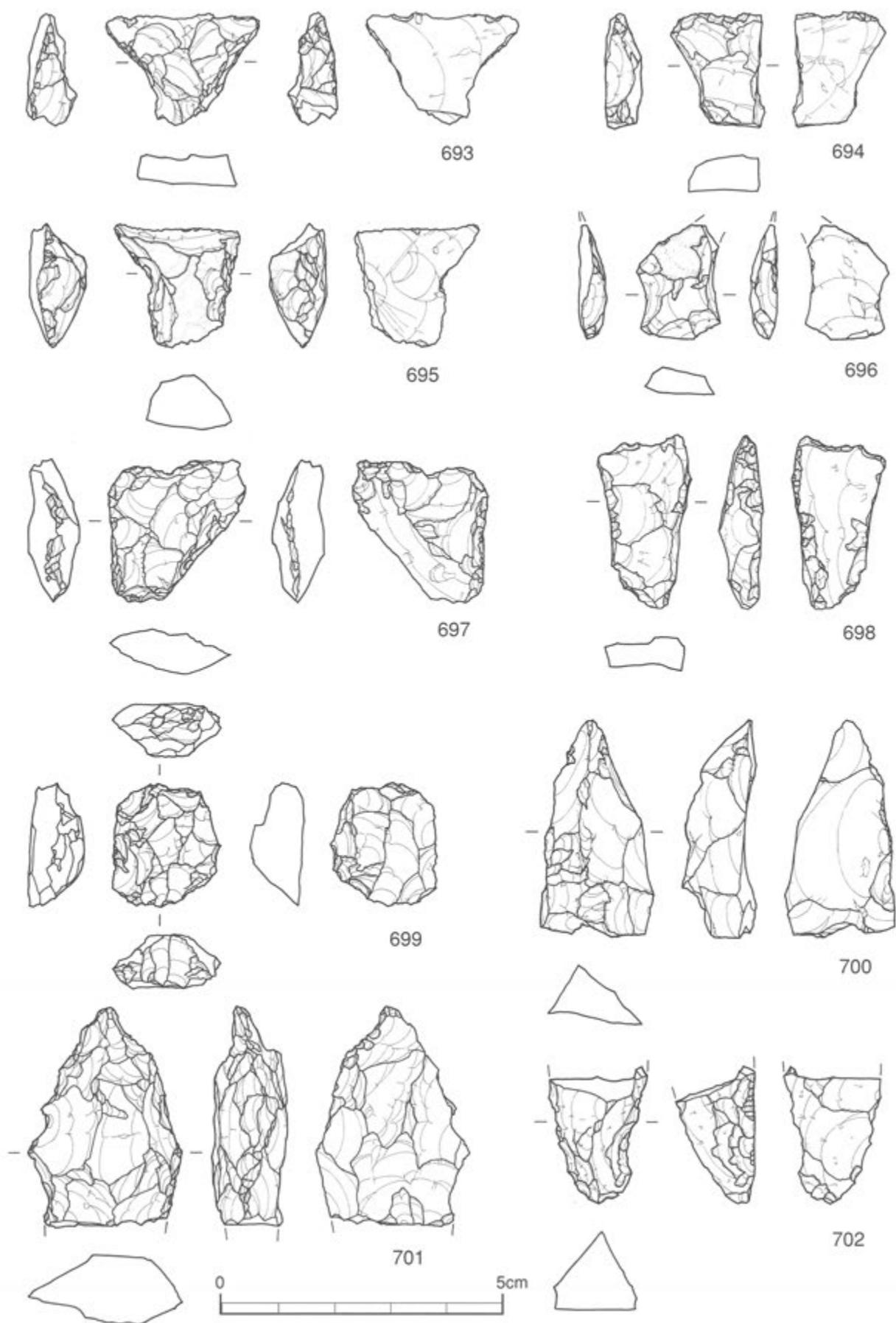
種別番号	報告番号	取上番号	器種	石材	出土区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
79	499	11576	石鏃	黒曜(燐)	G-30	Ⅱ	1.20	0.95	0.25	0.20
	500	4882	石鏃	黒曜(上)	G-29	Ⅲ	1.20	1.40	0.40	0.50
	501	4883	石鏃	黒曜(上)	G-29	Ⅰ	1.20	1.20	0.30	0.10
	502	3783	石鏃	安山岩	E-30	Ⅱ	1.60	1.40	0.20	0.30
	503	—	石鏃	黒曜(上)	C-15	—	2.30	2.10	0.20	0.80
	504	5347	石鏃	黒曜(上)	F-30	Ⅲ	1.35	1.25	0.20	0.40
	505	—	石鏃	安山岩	G-27	Ⅲ	1.90	1.30	0.20	0.50
	506	59	石鏃	黒曜(燐)	B-11	Ⅲ	2.20	1.35	0.40	1.10
	507	—	石鏃	黒曜(燐)	B-15	—	1.90	1.50	0.40	0.40
	508	—	石鏃	黒曜(燐)	B-24	Ⅰ	1.80	1.80	0.50	1.00
	509	2833	石鏃	黒曜(上)	G-18	Ⅱ	2.40	1.50	0.40	0.80
	510	9245	石鏃	流石英	G-24	Ⅳ	2.60	1.90	0.50	1.40
	511	—	石鏃	安山岩	F-23	Ⅲ	2.30	1.50	0.40	0.70
	512	6152	石鏃	黒曜(燐)	E-31	Ⅳ	2.40	1.95	0.35	1.00
	513	13987	石鏃	珩ト	E-33	Ⅲ	2.30	1.65	0.40	0.80
514	—	石鏃	黒曜(射)	G-9	攪乱	2.10	1.70	0.50	0.60	
515	37	石鏃	黒曜(射)	B-16	—	1.85	1.15	0.40	0.50	
517	9012	石鏃	黒曜(上)	G-24	Ⅲ	2.40	2.55	0.60	2.30	
518	6257	石鏃	黒曜(射)	E-31	Ⅳ	2.15	2.15	0.35	1.30	
519	3	石鏃	安山岩	3169	Ⅲ	3.20	2.30	0.40	2.10	
520	—	石鏃	頁岩	E-32	—	4.70	3.50	0.90	13.40	
521	14099	石鏃	黒曜(射)	G-22	Ⅲ	3.20	1.90	0.40	1.90	
522	—	石鏃	黒曜(射)	B-22	Ⅰ	(1.70)	(1.60)	(0.40)	1.10	
523	5886	石鏃(未)	黒曜(上)	F-30	Ⅳ	2.90	2.20	0.70	3.80	
524	6812	石鏃(未)	黒曜(上)	E-30	Ⅳ	2.30	1.40	0.50	1.20	
525	9013	石鏃(未)	黒曜(上)	G-24	Ⅲ	2.90	2.40	1.10	5.40	
526	—	石鏃	頁岩	G-33	Ⅲ	6.50	3.70	0.90	18.60	
527	3165	石鏃	珩ト	B-20	Ⅲ	7.35	3.75	1.50	37.10	
528	3579	石鏃	珩ト	E-31	Ⅲ	8.70	6.05	1.55	70.70	
529	14091	石鏃	安山岩	D-32	Ⅲ	6.25	4.20	1.15	20.50	
530	13432	石鏃	流石英	D-30	Ⅳ	3.80	2.80	1.70	10.40	
531	6625	石鏃	珩ト	E-32	Ⅳ	9.20	4.70	1.70	46.00	
532	12188	石鏃	安山岩	B-13	Ⅲ	4.40	4.45	1.85	54.30	
533	441	石鏃	珩ト	G-11	Ⅲ	5.00	3.90	1.50	25.80	
534	443	石鏃	珩ト	D-11	Ⅲ	4.10	2.85	1.25	14.80	
535	11090	石鏃	流石英	D-17	Ⅳ	3.20	3.30	1.20	12.30	
536	894	石鏃	黒曜(上)	F-16	Ⅲ	3.10	2.70	0.70	5.90	
537	665	石鏃	黒曜(射)	F-16	Ⅲ	3.00	2.70	1.00	5.70	
538	8907	石鏃	黒曜(上)	B-26	Ⅲ	4.80	4.10	1.90	30.10	
539	—	石鏃	黒曜(上)	—	—	(2.70)	(1.60)	(0.60)	1.70	
540	14263	石鏃	黒曜(射)	F-33	Ⅲ	2.70	2.50	0.80	3.80	
541	13989	石鏃	黒曜(上)	E-33	Ⅳ	2.40	2.10	0.60	4.70	
542	9022	石鏃	黒曜(上)	G-29	Ⅲ	2.60	2.00	0.60	1.50	
543	5951	石鏃	頁岩	F-32	Ⅳ	7.10	4.70	1.20	31.80	
544	—	石鏃	黒曜(射)	D-32	Ⅲ	2.70	2.00	0.70	2.50	
545	13882	射片(燐)	珩ト	E-32	Ⅲ	(2.50)	(2.20)	(0.80)	3.50	
546	1808	石鏃	珩ト	C-19	Ⅲ	3.20	2.65	0.95	6.00	
547	4994	折断剥片	黒曜(上)	E-28	Ⅲ	(3.10)	(2.30)	(1.10)	5.40	
548	13883	射片(燐)	黒曜(上)	E-32	Ⅲ	(5.00)	(4.50)	(1.50)	30.30	
549	11171	射片(燐)	珩ト	D-14	Ⅲ	8.60	3.60	7.50	20.20	
550	12143	射片(燐)	珩ト	G-30	Ⅲ	(2.50)	(2.10)	(1.00)	6.40	
551	7941	射片(燐)	黒曜(上)	G-29	Ⅲ	(12.20)	(2.60)	(1.20)	7.00	
552	13894	射片(燐)	安山岩	E-32	Ⅲ	6.00	3.50	0.90	11.50	
553	12350	磨製石斧	頁岩	B-16	Ⅲ	19.20	7.60	3.00	589.50	
554	11073	磨製石斧	頁岩	C-17	Ⅳ	15.60	6.90	2.50	375.50	
555	14341	磨製石斧	頁岩	E-32	Ⅳ	17.70	10.00	4.50	989.20	
556	7563	磨製石斧	頁岩	F-30	Ⅳ	10.40	5.70	3.20	291.80	
557	13883	磨製石斧	頁岩	E-32	Ⅲ	19.80	5.90	2.50	259.60	
558	—	磨製石斧	頁岩	—	—	11.20	5.50	2.50	230.00	
559	5291	磨製石斧	頁岩	G-30	Ⅳ	9.00	7.00	3.80	338.20	
560	11086	磨製石斧	頁岩	D-17	Ⅳ	8.50	5.90	2.20	83.60	
561	10521	磨製石斧	頁岩	E-16	Ⅲ	(8.60)	(4.20)	1.80	73.20	
562	379	磨製石斧	砂岩	B-9	Ⅲ	9.80	7.50	3.50	427.50	
563	263	磨製石斧	砂岩	C-26	Ⅲ	15.50	4.60	2.30	118.40	
564	3714	磨製石斧	頁岩	G-30	Ⅲ	9.60	7.00	3.30	385.20	
565	10488	磨製石斧	頁岩	B-18	Ⅲ	6.80	6.00	2.20	123.70	
566	3415	磨製石斧	頁岩	3	Ⅲ	(6.70)	5.90	2.50	136.80	
567	7566	磨製石斧	頁岩	D-31	Ⅳ	9.70	4.50	1.40	81.20	
568	11128	磨製石斧	頁岩	D-14	Ⅳ	(8.00)	(4.90)	1.50	79.00	
569	15439	磨製石斧	頁岩	C-26	Ⅲ	15.50	4.60	2.30	205.50	
570	—	磨製石斧	頁岩	G-29	—	8.20	4.60	1.90	107.90	
571	2777	磨製石斧	頁岩	B-19	Ⅲ	4.40	3.60	1.50	30.30	
572	—	磨製石斧	頁岩	—	—	20.40	7.40	6.10	1088.90	
573	309	磨製石斧	頁岩	D-12	Ⅲ	10.70	5.50	2.90	245.70	
574	—	磨製石斧	砂岩	E-24	—	(7.60)	4.70	2.90	135.80	

種別番号	報告番号	取上番号	器種	石材	出土区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
93	575	14125	磨製石斧	砂岩	D-32	Ⅲ	13.40	5.90	3.80	263.40
	576	—	磨製石斧	頁岩	F-27	Ⅲ	(12.80)	(6.70)	3.60	327.20
	577	15284	打製石斧	安山岩	D-28	Ⅲ	13.80	8.10	3.60	450.40
94	578	—	打製石斧	頁岩	H-24	—	11.80	5.50	1.70	106.30
	579	7579	磨製石斧	頁岩	E-30	Ⅳ	15.30	7.70	3.70	553.10
	580	9947	棒状石鏃	頁岩	E-15	Ⅲ	6.20	3.60	1.10	28.80
95	581	5426	石鏃	頁岩	F-31	Ⅳ	11.50	10.40	1.70	160.20
	582	—	石鏃	安山岩	E-24	—	8.60	6.20	2.40	169.90
	583	—	磨石	流石英	E-33	—	7.60	6.40	5.70	409.40
97	584	—	磨石	安山岩	E-16	—	5.90	5.70	5.00	234.40
	585	15960	磨石	安山岩	G-27	Ⅳ	8.70	8.50	6.80	665.20
	586	181	磨石	安山岩	B-10	Ⅲ	8.60	7.70	5.20	488.70
98	587	214	磨石	安山岩	E-12	Ⅲ	8.30	8.10	6.10	721.90
	588	183	磨石	安山岩	B-10	Ⅲ	9.20	8.30	5.60	622.70
	589	323	磨石	安山岩	D-12	Ⅲ	5.50	5.00	3.30	124.80
99	590	218	磨石	安山岩	E-12	Ⅲ	5.90	4.90	4.50	164.60
	591	—	磨石	安山岩	C-11	Ⅲ	8.80	8.10	5.30	557.10
	592	—	磨石	安山岩	E-22	Ⅲ	12.10	10.50	5.20	985.50
100	593	6412	磨石	安山岩	E-29	Ⅳ	12.30	10.00	7.50	1407.80
	594	200	磨石	安山岩	E-14	Ⅲ	6.30	4.80	3.50	149.20
	595	221	磨石	安山岩	E-12	Ⅲ	5.70	4.20	3.40	116.00
101	596	222	磨石	安山岩	E-12	Ⅲ	5.50	4.40	3.40	117.10
	598	13900	磨石	安山岩	E-32	Ⅲ	10.10	8.40	4.60	582.10
	599	5803	磨石	安山岩	G-29	Ⅳ	11.00	9.10	4.90	772.70
102	600	—	磨石	安山岩	H-29	Ⅳ	12.10	8.00	4.80	686.70
	601	5604	磨石	流石英	G-29	Ⅳ	12.10	7.80	4.60	514.60
	602	8458	磨石	安山岩	E-32	Ⅳ	14.10	10.00	4.10	823.30
103	603	5813	磨石	安山岩	G-29	Ⅳ	10.50	7.20	4.70	547.40
	604	8126	磨石	安山岩	D-31	Ⅳ	10.00	7.40	3.70	426.80
	605	—	凹石	流石英	E-11	攪乱	11.60	8.60	6.70	754.90
104	606	11570	凹石	砂岩	D-18	Ⅳ	13.00	10.10	4.70	993.60
	607	11114	凹石	安山岩	C-15	Ⅳ	13.40	11.40	5.50	726.50
	608	10133	凹石	安山岩	D-14	Ⅲ	6.90	5.20	4.00	229.90
107	609	15986	凹石	安山岩	H-26	Ⅳ	7.80	7.00	3.40	231.00
	610	10344	凹石	安山岩	C-13	Ⅲ	7.70	6.50	5.70	400.80
	611	—	凹石	安山岩	A-14	Ⅰ	(6.80)	7.00	4.60	271.70
108	612	11117	凹石	花崗岩	D-13	Ⅲ	11.20	10.20	4.20	764.30
	613	8872	凹石	砂岩	B-23	Ⅲ	6.00	5.80	2.30	123.60
	614	—	凹石	安山岩	—	—	10.70	5.20	4.10	297.90
109	615	—	凹石	砂岩	E-11	攪乱	(8.90)	4.20	3.40	184.70
	616	10498	凹石	安山岩	E-17	Ⅲ	13.70	11.60	7.20	1472.00
	617	—	凹石	安山岩	—	—	17.40	(14.80)	9.70	2194.90
110	618	1253	凹石	砂岩	E-18	Ⅲ	8.00	7.40	2.60	225.30
	619	—	凹石	流石英	—	—	11.00	7.90	3.90	290.80
	620	—	凹石	安山岩	F-16	Ⅰ	10.00	9.10	3.90	483.50
112	621	3758	磨石	安山岩	F-30	Ⅲ	9.90	8.90	5.30	696.70
	622	1424	磨石	安山岩	E-19	Ⅲ	8.30	7.90	5.80	572.30
	623	784	磨石	安山岩	E-17	Ⅲ	6.30	6.10	5.00	294.20
114	624	15740	磨石	安山岩	G-29	Ⅳ	12.10	9.10	6.90	1047.70
	625	—	磨石	砂岩	F-17	—	6.30	(4.90)	2.70	122.30
	626	764	磨石	安山岩	E-17	Ⅲ	5.40	4.40	3.90	158.80
115	627	13922	磨石	砂岩	E-32	Ⅲ	12.1			



0 5cm

第140図 旧石器時代遺物 1



第141図 旧石器時代遺物 2

表6 縄文土器観察表2

探出番号	報告番号	出土区	分類	部位	調整		焼成	色調		取上番号	石灰	角石	角石	その他
					(外面)	(内面)		(外面)	(内面)					
35	86	B-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	黒	—	○	○	○	○
	87	D-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	7140	○	○	○	○
	88	D-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	7771	○	○	○	○
	89	F-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	灰黄緑	鈍い黄緑	6751	○	○	○	○
	90	E-30/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	8832	○	○	○	○
	91	D-30/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	6834	○	○	○	○
	92	D-31/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	3625	○	○	○	○
	93	D-30/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	灰黄緑	3639	○	○	○	○
	94	C-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	14478	○	○	○	○
	95	E-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	14129	○	○	○	○
36	96	C-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	14611	○	○	○	○
	97	E-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	7292	○	○	○	○
	98	E-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	6831	○	○	○	○
	99	E-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	7287	○	○	○	○
	96	C-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	灰黄緑	14672	○	○	○	○
	97	E-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	明赤緑	鈍い黄緑	4144	○	○	○	○
	98	E-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	明赤緑	暗緑	6836	○	○	○	○
	99	E-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	明赤緑	暗緑	6838	○	○	○	○
	100	F-33/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	13996	○	○	○	○
	101	D-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	明赤緑	明緑	14074	○	○	○	○
37	102	E-31/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗緑	6913	○	○	○	○
	103	D-29/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	7174	○	○	○	○
	104	B-29/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	良好	明赤緑	暗緑	7988	○	○	○	○
	105	C-29/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	不良	鈍い黄緑	鈍い黄緑	5837	○	○	○	○
	106	D-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	15562	○	○	○	○
	107	G-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	12793	○	○	○	○
	108	E-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	暗緑	13635	○	○	○	○
	109	C-28/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗緑	15914	○	○	○	○
	110	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	暗赤緑	8965	○	○	○	○
	111	B-28/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	不良	鈍い黄緑	鈍い黄緑	—	○	○	○	○
38	112	C-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	12933	○	○	○	○
	113	D-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	灰黄緑	9018	○	○	○	○
	114	D-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗緑	14603	○	○	○	○
	115	D-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	3629	○	○	○	○
	116	D-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗緑	8221	○	○	○	○
	117	B-26/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	淡黄緑	8919	○	○	○	○
	118	G-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	灰黄緑	12790	○	○	○	○
	119	G-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	12791	○	○	○	○
	120	D-26/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	15428	○	○	○	○
	121	D-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗緑	14073	○	○	○	○
39	122	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗緑	9065	○	○	○	○
	123	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	8987	○	○	○	○
	124	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	9006	○	○	○	○
	125	D-27/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	8524	○	○	○	○
	126	F-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	3677	○	○	○	○
	127	D-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗緑	8261	○	○	○	○
	128	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	鈍い黄緑	8942	○	○	○	○
	129	D-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	鈍い黄緑	7844	○	○	○	○
	130	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	鈍い黄緑	8989	○	○	○	○
	131	C-24/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	9166	○	○	○	○
40	132	C-25/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	不良	鈍い黄緑	鈍い黄緑	8995	○	○	○	○
	133	D-29/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	不良	暗赤緑	暗赤緑	8369	○	○	○	○
	134	D-29/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗赤緑	8244	○	○	○	○
	135	C-27/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	灰黄緑	暗赤緑	15668	○	○	○	○
	136	C-26/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	良好	灰黄緑	鈍い黄緑	15628	○	○	○	○
	137	F-27/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	16067	○	○	○	○
	138	F-27/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	8203	○	○	○	○
	139	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	8416	○	○	○	○
	140	C-29/V	縄文	口縁	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	3875	○	○	○	○
	141	D-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	7198	○	○	○	○
41	142	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗緑	9001	○	○	○	○
	143	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	15418	○	○	○	○
	144	D-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	6871	○	○	○	○
	145	E-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	6241	○	○	○	○
	146	D-26/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	—	○	○	○	○
	147	F-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗緑	6121	○	○	○	○
	148	G-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	5315	○	○	○	○
	149	D-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	明赤緑	鈍い黄緑	7237	○	○	○	○
	150	D-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	暗赤緑	15914	○	○	○	○
	151	D-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	15489	○	○	○	○
42	152	D-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	鈍い黄緑	7829	○	○	○	○
	153	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	鈍い黄緑	9004	○	○	○	○
	154	E-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	6950	○	○	○	○
	155	D-28/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	灰黄緑	暗緑	8508	○	○	○	○
	156	D-28/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗赤緑	15628	○	○	○	○
	157	E-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	8287	○	○	○	○
	158	B-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	13062	○	○	○	○
	159	F-32/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗赤緑	5944	○	○	○	○
	160	B-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	13343	○	○	○	○
	161	D-26/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	15429	○	○	○	○
43	162	B-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	13371	○	○	○	○
	163	C-28/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	15641	○	○	○	○
	164	C-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	15923	○	○	○	○
	165	C-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	8054	○	○	○	○
	166	C-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	13405	○	○	○	○
	167	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	鈍い黄緑	9054	○	○	○	○
	168	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗赤緑	9067	○	○	○	○
	169	D-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗赤緑	灰黄緑	5798	○	○	○	○
	170	C-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	明赤緑	灰黄緑	13186	○	○	○	○
	171	E-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	3989	○	○	○	○
44	172	C-27/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	15564	○	○	○	○
	173	C-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	灰黄緑	7181	○	○	○	○
	174	F-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗赤緑	6927	○	○	○	○
	175	D-26/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗赤緑	4999	○	○	○	○
	176	C-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	明赤緑	13190	○	○	○	○
	177	B-26/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	15640	○	○	○	○
	178	C-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	9055	○	○	○	○
	179	D-28/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	灰黄緑	鈍い黄緑	7375	○	○	○	○
	180	C-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	不良	鈍い黄緑	鈍い黄緑	8116	○	○	○	○
	181	C-29/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗赤緑	7940	○	○	○	○
45	182	B-28/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	灰黄緑	鈍い黄緑	8592	○	○	○	○
	183	C-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	12887	○	○	○	○
	184	D-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	灰黄	7169	○	○	○	○
	185	B-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗緑	8606	○	○	○	○
	186	E-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	明赤緑	6229	○	○	○	○
	187	C-27/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	暗赤緑	15389	○	○	○	○
	188	E-25/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	9139	○	○	○	○
	189	C-24/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	鈍い黄緑	9066	○	○	○	○
	190	D-31/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	灰白	暗緑	7189	○	○	○	○
	191	D-30/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	暗緑	4294	○	○	○	○
46	192	C-26/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	鈍い黄緑	淡黄緑	8753	○	○	○	○
	193	D-28/V	縄文	胴部	貝殻系灰	灰	良好	暗緑	暗赤緑	8410	○			

表7 縄文土器観察表3

編年番号	報告番号	出土区	分類	部位	調整		焼成	色調		取上番号	石	長	角	石	その他	
					(外面)	(内面)		(外面)	(内面)							
51	F-29/V	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	6365	○	○	○	○	○	
	F-29/IV	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	6078	○	○	○	○	○	
	F-32/IV	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	明黄褐色	5485	○	○	○	○	○	
	—	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	15833	○	○	○	○	○	
52	322	D-30/IV	縄文	胴部	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	7054	○	○	○	○	○	
	323	E-29/IV	縄文	胴部	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	明褐色	6389	○	○	○	○	○	
	324	C-29/IV	縄文	胴部	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	明褐色	15920	○	○	○	○	○	
	325	E-31/IV	縄文	胴部	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	明褐色	6529	○	○	○	○	○	
	326	D-31/IV	縄文	胴部	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	7225	○	○	○	○	○	
	327	F-32/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	5489	○	○	○	○	○
	328	C-26/V	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	9218	○	○	○	○	○
	329	F-30/III	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	121933	○	○	○	○	○
	330	D-28/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	4937	○	○	○	○	○
	331	F-31/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	14255	○	○	○	○	○
	332	E-27/III	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	15015	○	○	○	○	○
	53	333	F-31/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	6972	○	○	○	○
334		D-31/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	7188	○	○	○	○	○
335		B-25/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	8899	○	○	○	○	○
336		C-32/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	14827	○	○	○	○	○
337		F-32/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	14255	○	○	○	○	○
338		C-31/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	8118	○	○	○	○	○
339		C-32/III	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	14613	○	○	○	○	○
340		D-33/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	14757	○	○	○	○	○
341		F-33/III	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	14025	○	○	○	○	○
342		F-26/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	8769	○	○	○	○	○
343		F-32/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	3501	○	○	○	○	○
54		344	D-29/III	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	5180	○	○	○	○
	345	C-29/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	9582	○	○	○	○	○
	346	E-30/—	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	不良	明赤褐色	鈍い黄褐色	—	○	○	○	○	○
	347	F-30/V	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	4727	○	○	○	○	○
	348	D-32/V	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	14730	○	○	○	○	○
	349	F-25/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	16059	○	○	○	○	○
	350	C-26/IV	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	淡黄褐色	鈍い黄褐色	15454	○	○	○	○	○
	351	E-33/V	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	不良	明赤褐色	鈍い黄褐色	14271	○	○	○	○	○
	352	F-30/V	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	4727	○	○	○	○	○
	353	E-31/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	6515	○	○	○	○	○
	354	D-17/III	縄文	胴部	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	11687	○	○	○	○	○
	55	355	D-20/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	14546	○	○	○	○
356		C-32/IV	縄文	胴部	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	14692	○	○	○	○	○
357		B-31/III	縄文	胴部	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	明黄褐色	暗褐色	—	○	○	○	○	○
358		C-14/III	縄文	胴部	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	16103	○	○	○	○	○
359		B-15/III	縄文	胴部	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	12456	○	○	○	○	○
360		E-32/IV	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	14449	○	○	○	○	○
361		F-15/IV	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	14053	○	○	○	○	○
362		D-14/III	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	11166	○	○	○	○	○
363		C-16/II	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	10926	○	○	○	○	○
364		D-31/IV	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	7246	○	○	○	○	○
365		D-30/IV	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	7647	○	○	○	○	○
56		366	C-29/III	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	15065	○	○	○	○
	367	H-29/III	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	淡黄褐色	暗褐色	7577	○	○	○	○	○
	368	D-32/IV	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	14706	○	○	○	○	○
	369	F-33/III	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	13994	○	○	○	○	○
	370	D-32/IV	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	14503	○	○	○	○	○
	371	D-32/IV	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	14513	○	○	○	○	○
	372	E-33/IV	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	12121	○	○	○	○	○
	373	F-32/III	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	3954	○	○	○	○	○
	374	D-33/III	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	14606	○	○	○	○	○
	375	F-33/—	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	—	○	○	○	○	○
	376	B-19/II	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	2738	○	○	○	○	○
	57	377	377/III	縄文	胴部	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	3863	○	○	○	○
378		E-18/III	縄文	胴部	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	12121	○	○	○	○	○
379		D-18/—	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	11514	○	○	○	○	○
380		D-18/—	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	11511	○	○	○	○	○
381		D-18/—	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	11513	○	○	○	○	○
382		D-18/—	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	11513	○	○	○	○	○
383		D-18/—	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	11512	○	○	○	○	○
384		D-18/—	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	2409	○	○	○	○	○
385		D-18/—	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	10493	○	○	○	○	○
386		D-18/—	縄文	口縁	貝殻糸痕	貝殻糸痕	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	10493	○	○	○	○	○
387		B/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	12476	○	○	○	○	○
58		388	B/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	12543	○	○	○	○
	389	B/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	12349	○	○	○	○	○
	390	B/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	12544	○	○	○	○	○
	391	B/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	12545	○	○	○	○	○
	392	B-12/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	11	○	○	○	○	○
	393	B-12/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	13	○	○	○	○	○
	394	B-12/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	25	○	○	○	○	○
	395	B-12/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	明黄褐色	暗褐色	16	○	○	○	○	○
	396	B-12/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	20	○	○	○	○	○
	397	B-12/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	20	○	○	○	○	○
	398	B-12/III	縄文	口縁	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	11	○	○	○	○	○
	59	399	B-11/III	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐色	暗褐色	38	○	○	○	○
400		B-12/III	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	18	○	○	○	○	○
401		B-12/III	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	130	○	○	○	○	○
402		C-12/III	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	452	○	○	○	○	○
403		B-12/III	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	447	○	○	○	○	○
404		—/I	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好	暗褐色	暗褐色	—	○	○	○	○	○
405		B-26/III	縄文	胴部	ナデ	ナデ	ナデ	良好								



第142図 遺跡残存範囲

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (118)

安茶ヶ原遺跡

発行日 2007年3月31日

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森1番1号
TEL (0995) 48-5811

印刷 淵上印刷株式会社
〒892-0845 鹿児島県鹿児島市樋之口町6番6号
TEL (099) 225-2727

